

ようこそ愉悦至上主義
者のいる教室へ

凡人なアセロラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある愉快神父によって育てられた愉快部新入部員が実力主義の学校へ行く話。

リメイク版 <https://syosetu.org/novel/324281/>

目次

プロローグ（原作1〜2巻）

綾小路清隆の友人	1
綾小路清隆の友人（2）	14
綾小路清隆の友人（3）	28
榊田桔梗の級友	42
榊田桔梗の級友（2）	57
榊田桔梗の級友（3）	71
佐倉愛里の恩人	85
佐倉愛里の恩人（2）	102
佐倉愛里の恩人（3）	119
佐藤麻耶の■	137
躍動する愉悦至上主義者（原作三巻）	

綾小路清隆の親友	151
綾小路清隆の親友（2）	167
綾小路清隆の親友（3）	181
堀北鈴音の憧憬	197
転機×強襲×逃走	215
転機×強襲×逃走（2）	233
敗北・勝利、そして	249
I want a taste you	
r content	265
人を喰らわば神まで（原作四巻）	
軽井沢恵の天敵	279
軽井沢恵の天敵（2）	297
軽井沢恵の天敵（3）	316

	胎動	334
	共同戦線 (1)	355
	言峰士郎の独白 (1/2)	372
	共同戦線 (2)	389
	共同戦線 (3)	403
	カーストルーム (原作四・五卷)	
	坂柳有栖の ■	420
	坂柳有栖の ■ (2)	439
	坂柳有栖の ■ (3)	457
	?√? A 支配の悪魔	479
	お詫びと今後について	494
	?√? A 支配の悪魔 (2)	497

プロローグ（原作1〜2巻）

綾小路清隆の友人

——オレがアイツを初めて認識したのは4月の入学式の日に行われた自己紹介の時だった。

平田洋介と名乗った好青年の提案により行われた親睦を深めるための自己紹介。他人と関わるのを嫌っている堀北鈴音や如何にも不良そうな須藤健といった生徒が、参加を拒否し教室を後にし、決して浅くない溝を作った。

そんな中、友好的な生徒たちによる自己アピールが行われていき、そしてアイツの番は回ってきたのだ。

「次、君にお願ひしてもいいかな」

「俺の番か?！」

平田が優しくお願ひすると、その男はゆつくりと席を立った。教室に残った全員の視線が突き刺さる。注目を集めることに慣れていいのか、その一つ一つの動作が綺麗で、目を惹き付ける。値踏みをするかのような不躡な視線をもともせず、微笑みを持って穏やかに言葉を紡いだ。

「俺の名前は言峰士郎ことみねしろう。中学校では冬木市にある教会で神父見習いをしてた。まあ見習

いって言っても大したことはしてないけどね。後は、スポーツ全般は得意かな。身体を動かすことは好きだし、勉強するのも嫌いじゃないよ。教えて欲しいとこがあったら存分に頼って欲しい。皆とも仲良くしたいしね。最後になったけど、趣味は読書やボードゲーム、スポーツとか。みんな、三年間よろしく」

スラスラと聞き取りやすい声音で挨拶が終わった。堂々とした振る舞いに端麗な容姿、背丈こそやや低いものの、十分にスタイルが良いと言える。その証拠に何人かの女子がその顔を見て頬を赤らめている。

それよりも興味を引いたのは教会で神父見習いをやっていたという事実だ。オレが疎いのかも知れないが、実際にそういった人間を見る機会はほとんどなかった。もしかすると、この教室内にいる生徒のほとんどがその実態を知ることには無いのかもしれない。そうだとすれば、言峰の自己紹介は十分に興味を引くものであったと言えるだろう。

「神父？ スゴいね、僕、本物の神父さんに出会ったの初めてかもしれないよ。普段どんなことしてたの？」

珍しい、と特異なものを見る目線が言峰へと向けられる。オレの予想通り、この場にいる人間が神父と言ったものを深く理解してないのだろう。

「正式なものじゃないし、あくまで見習いだからね。暇な時はせいぜい門前で箒をはいてただけだよ」

「へえ、スポーツもやってたならサッカーとか興味ない？ 僕も一緒にサッカー部に入ったりとか」

「ありがたい誘いだけでも部活動に所属するつもりは無いよ。ここにも教会があるみたいだし、そこで雑用でもするつもりなんだ。それに、自己紹介を次に回さないかね」

言峰が苦笑しつつ視線を後ろの席の生徒へと向けた。その席の女子は緊張しているのか、目が合うと俯いてしまう。

そんな一連の様子を見た平田は「あつ」と声を漏らすと申し訳なきように謝罪の言葉を述べた。言峰の特異な経歴に好奇心を掻かれたのだろう。他の生徒も忘れていたのを誤魔化すように平田へとヤジを飛ばした。

「もー、しつかりしてよ平田君っ」

「言峰のこと大好きかよっ」

「あはは、ごめんごめん。じゃあ次お願いできるかな？」

「あ、うんっ」

女子生徒の自己紹介が始まった。佐藤というらしい。

ぼんやりと次々に行われる自己紹介を聞き流していく。そんな中、ちらりと言峰の視

線がオレの方を向いた。

数秒、時が止まる。互いに何か感情を抱いたわけじゃない。だが、その瞳の中にオレは何かを見た。

それから、椅子を引く音が聞こえて意識が浮上する。気が付くと、言峰は既に視線を他の生徒へと向けていた。

この後、ほどなくして回ってきたオレの自己紹介が失敗したのは言うまでもないだろう。

1

言峰は授業中も騒ぐことなく静かに授業を受けていた。周りが教師から注意されることをいいことに騒いでるのに対し、堀北や幸村のように私語をせずに黒板の文字をノートに写す珍しい生徒だ。

あの自己紹介から時間が経ったが、オレと言峰とに何らかの接触があるわけでもなく、彼は平田や女子グループと仲良くしているのを見掛ける。

オレは友達作りに失敗し、親しい友達というものが存在しない。池や須藤たちは声を掛けてくれるものの、そこに確かな友情があるかと聞かれれば、否と答えるだろう。い

やオレは友達と思いたいのだが。

それにたまに声を掛けてくる平田でさえ、友達と呼べるか分からない。放課後、彼らに混じって遊びたい気持ちもあるが、男子二人に女子多数というのはさすがに精神的に参ってしまう。それ以前に、周りの女子が原因で平田と接触できないしな。近付いたら睨まれるし。

「哀れね」

隣人からはそのような同情を向けられた。??彼女の瞳に憐れみがないことから罵倒や呆れのようなものだ。余計に傷ついた。

「そういうえば寮の近くにある教会には行ったのか?」

「教会? 私は別に宗教に興味はないわ」

「行つてないのか」

「別に悪いことではないでしょう。それでその質問になんの意味があるのかしら?」

オレがわざと深く溜め息を吐いてみれば、案の定堀北は乗つかつてきた。日々、罵倒や暴力に苦しめられてはいるが、負けず嫌いなところやプライドが高いところなど、かなり扱いやすいと思つている。

だから基本的に挑発的な行為には乗つかつてくるケースが多いのだ。こうして、会話をすることによつて堀北との友好度を上げ、あわよくば友達になろうと思つている。

喜べ堀北、お前をオレの友達第一号にしてやろう。

「言峰がそこで神父をしてるらしいんだ。元々学校側は宗教に属する者のために設置していたらしいから、自由に使つてるとか何とか」

「それと私が教会に行つてないのと何の関連性が？」

「いやないけど」

「??腹立たしいわねあなた」

猛禽類のような鋭い眼光がオレを射抜く。とても怖い。

少しからかっただけでこの反応だ。冗談を言おうものなら肅清脇腹チヨップを喰らうだろう。相変わらず恐ろしい少女だ。

だから友達ができないんだよ。オレも人のこと言えないが。

「むしろ物事すべてに関連性を求めること自体が間違つていないか？ オレはお前との会話の話題を作ろうとしただけだ」

「なぜ私があなたと会話しなければならぬのか理解に苦しむのだけれど。話題云々の前に私と友達になろうとするのやめてくれないかしら？」

「まあでも高校生活を送るにあたって一人くらい友達がいても良くないか？ それに、隣の席の生徒と仲良くなりたいたいのには当然のことだと思うが」

「嫌よ。あなたと友達になる気は無いわ。今後、あなたから声をかけるのはやめて」

オレからはダメなのか。ていうか、即答速攻大否定はさすがにきついな。勇気を振り絞って告白したというのに、こんなことあるのか？

泣きそうになりながらもオレは堀北の命令を受諾した。仕方ない、彼女から声を掛けてくれるまで気長に待とう。

「??声をかけるなどは言ったけど、だからといってずっと視線を向けてくるのもやめてくれない？ 鬱陶しいわ」

「お前から話しかけてくれるのを待っていた」

「あなた変わってるって言われないかしら？」

「孤高（笑）の堀北よりは普通だ——ぐはっ」

侮蔑の視線、ありがとうございます。なんて言えるような人種ではない。

さすが煽り耐性ゼロの堀北だ、煽れば速攻で肅清脇腹チョップが行われた。しかも、目にも止まらぬ早さで行われる手刀は内臓すら抉ろうとしていた。

確実に内出血してそうだ。

「次は容赦しないわよ」

今も十分容赦してないだろ。

そんな言葉を吐こうとして、呑み込んだ。この場合、言い返すと更に酷い一撃を堀北は放ってくる。多少なりではあるが、オレも学んでいるのだ。

「そういえば、オレも行ったことないな。よし、今日の放課——」

「嫌よ」

早いよね。言い切る前に遮られてしまった。

まずい。このままでは堀北を友人第一号にする計画がご破算になってしまう。そうすれば、特段と会話する相手のいないオレは三年間ぼっちになってしまふ可能性が益々高くなってしまふ。

「そんなに友達が欲しいのなら、あなた一人で教会に行けばいいじゃない。上手くいけば言峰君と仲良くなれるかもよ」

「お前。堀北おまえ、天才か？」

「貴方って馬鹿よね」

何やら罵倒された気がするがそんなことどうでも良くなった。どうしてオレは今まで気がつけなかったんだ。友人が欲しい、教会に行ってみたい。なら、教会に行つて言峰に会えばいいだけじゃないか。

まるで天啓を得たような気分だ。今のオレは殊勝な信者にもなれそうである。

オレは放課後、言峰がいるという教会に足を運んでみようと決意したのだった。

教会は特別棟の隣に存在していた。遠目で確認したことはあったが、実際にここを訪れるのは初めてとなる。

真新しい、と呼べるのかは分からないがオレの目から見たところ、汚れなどはない。石造りの建物にしては苔なども生えていないし、周囲の庭の芝生が綺麗に生え揃っているのを見ると誰かが手入れをしているようだ。

黒く塗り潰された柵格子を見送りながら、オレは教会の敷地内へと足を踏み入れた。放課後から少し、図書室で野暮用を終わらせて来たので既に言峰はこの中にいるはずだ。いつものように平田たちの遊びの誘いを丁寧に断っていたのを見たからな。

「??来客とは珍しい。神へのお祈りか? 己の罪の懺悔か? この教会に一体何の用だ?」

中へ入ると祭壇の手前に言峰は立っていた。その隣にはおそらく同じクラスの女子生徒と思わしき姿がある。確か、佐藤と言っていたな。軽井沢たちと共に行動していたのを何度も見かけていたので、平田と仲の良い言峰と接点があってもおかしくは無い。佐藤はちらりオレを見ると、言峰に何事かを告げるとそのまま教会の裏へと行ってしまった。

「邪魔したみたいだな?」

「気にするな。むしろ神聖な教会で級友と逢瀬を重ねる俺の方が怒られてしまうだろう」

「それならいいが」

言峰は制服ではなく、真っ黒なキャソックと思わしきものを纏っていた。長い黒髪も相まって確かに神父っぽい。本物を見た事がないので分からないが、左手に握られている聖書らしき書物や首に架かっている十字架のネックレスでオレは神父としか思えなかった。

じつとその姿を見ていたオレに言峰は不思議そうに首を傾げながら問掛ける。

「ふふ、気になるか？ おそらくだが、綾小路は興味本位でここを訪れたのだろうか？」

「すごいな。オレは教会とか来たことがなかったから、ただ見てみたかっただけだ」

「確かに日本人は宗教に疎いものが多いからな。むしろいずれかの宗派に属している人間の方が珍しい方だ。俺も育ての男が熱心なキリスト教徒でなければ、関わることもしなかっただろう」

「確かにな、言峰以外で教会に立ち寄っている人間をあんまり見ない。というか、言峰以外に人はいないのか？」

「いないよ。俺が来る前まではほぼもぬけの殻だったらしくてね。俺はこの掃除や片付けをする代わりにこうして、ひとつの施設をまるごと自由に扱っていいと言われている

んだ。要するに学校側と取引をしたんだよ。清潔に保っている限り、それなりのプライベートポイントが貰えるみたいだしね」

言峰が優しく説明してくれた。いつも堀北の当たりの強い言葉を聞いているせいとか、こうも穏やかな声で話しかけられると感動しそうになる。オレは今猛烈に人間の温かみを感じているのだ。

ふと、教会内部には校舎のように監視カメラがないことに気がついた。これは言峰の意向か、学校側の決定なのか。まあ、教会内に監視カメラって信者からすれば不愉快な話だろうが。

「それより、学校には馴染めたか？ 綾小路」
突然だった。

自己紹介の時のように言峰と目が合う。そこにあるのは無機質な目。まるで興味のないかのような、浅い暗闇を映す瞳だ。

オレはその質問の意図を理解しきれずに、さらに質問を返してしまった。
「どういう意味だ？」

「ああ、いやそんな難しく考えなくていい。あくまで世間話のつもりだったんだ。君がスパーで物珍しそうに商品を眺めているのを見たことがあってね。あまりそういったものを知らないんじゃないかと思ったんだ。学校生活で不慣れなことがあるかどうか

か、それを知りたかっただけさ」

「??まあ、新しいことばかりで楽しいな」

「知らないことが増えると、それだけで楽しくなる。知識は素晴らしいね。知ることというのは、人間的成長をするということだ。そう考えると、勉強だつて苦にならない。これは日常生活でも言えることだな」

そう言いながら言峰はオレから手元にある分厚い聖書へと視線を落とした。ペラペラと捲りながら、しかし身体だけはしっかりとこちらを向いている。

「不躰な質問だが、友人はできたか？」

「あー、残念だが胸を張つてそうだとと言える相手はいない」

「そうか。それは失礼なことを聞いたな」

堀北は友人に入るのだろうか。いや彼女なら軽蔑の瞳とともにオレをこれでもかか罵るだけだろう。

つまりオレには友達がいらない。悲しくなつてくるなこれ。夢のハイスクールライフは俺のことを嫌っているらしい。

ふと、聖書から顔を上げた言峰と目が合った。その瞳に宿る感情を推察することは出来ない。だが、何故か相手が親近感のようなものを抱いていると感じた。理由は分からない。目の前の男はオレに対し、仲間意識を抱いている。

「では、俺が友人となろう。君がより良き学校生活を送れるように、親愛を、友愛を、隣人愛を委ねよう」

「??いいのか?」

「なんだ、俺が友人では不服か?」

苦笑しながら言峰が言う。不服なぞ無い。むしろこちらから願ったかかったほどだ。なるほど、もしかすると言峰はオレと同じタイプの人間だったのだろう。平田たちと親しくしてはいるが、実は大人しいタイプで、根暗なのだ。だから、オレと友達になりたがっていたのだ。

??かなり無理がある話だがそうに違いない。憐れみからの提案ならオレは発狂して校内を駆け回ることだろう。

「是非お願いしたい。いやお願いします」

「そうか。では、改めて自己紹介をしよう。俺は言峰士郎。今日から君の友人だ。なんでも相談してくれ」

この日、オレはDクラスの2大イケメンにして、良心とも呼ばれる男と友人となったのだった。

??これで堀北に勝ったな。

綾小路清隆の友人（2）

クラス間の格差が周知になった。

オレたちDクラスはCPを全て吐き出し、Op tという評価を下される。担任である茶柱は不敵な笑みを浮かべながら、興味深そうにクラスの反応を楽しんでいる。そして、ホームルームが終わると同時に、動揺したまま生徒たちが各々に抱いた感情を吐露していく。

「Aクラスに上がるために必要な差が大きすぎる??」

隣の席で堀北は苦虫を嘔み潰したように顔を顰め、これから先について考えているようだった。

オレは唯一の友人である言峰へと視線を向けてみる。言峰は平田と一緒に大勢に囲まれ、その問答の対応に追われているようだ。苦笑しながら皆を宥めている姿は、平田同様Dクラスの良心たる証拠だろう。

「堀北、これからどうするつもりなんだ？」

「??私がDクラスに配属されるはずが無いわ。それについて放課後茶柱先生に問い詰めるつもりよ」

「それなら平田や言峰、櫛田辺りもDクラスというのはおかしいな。あの三人は成績も悪くなかったし欠点があるようには思えない」

事実、彼ら三人は小テストの平均点を大幅に上回っていたし、言峰は全教科満点という隔絶した学力を発揮していた。

明らかに中学を卒業したばかりの生徒が回答できるはずのない問題をミスひとつなく解いて見せたのだ。堀北が結果を見て悔しそうにしていたのをオレは横目で確認している。

「そうね。??平田君や櫛田さんはともかく、学力でトップだった言峰君がDクラスなのは不自然だわ」

「もしかしたら学校側は学力だけで生徒を見ていないんじゃないか?」

「そんなことあるはずない。学生にとって一番大切なのは勉強よ。それさえあれば、他に何も?」

何となく見えてきた気がする。

学校側は確実に学力だけでなく、その他様々な点で生徒の実力を測り、評価している。勉強が出来ても社会性や協調性が皆無な堀北がDクラスに配属されたのはそれが理由な筈だ。

学校側は社会に出るにあたり必要な能力で格差をつけている。

「それじゃあやっぱり、高円寺もDクラスなのはおかしくないか？」

「彼は？高慢な態度が原因じゃないかしら」

それは堀北も同じだと思うが。

とはいえ、態々堀北に教える必要は無い。オレは事なかれ主義者だ。自分から問題ごとと踏み入ることはしないつもりだ。

「とにかく、放課後を待つしかなさそうね」

そう呟いたきり、堀北は口を開かなくなつた。考え込んでいる様子だ。下手に話しかけて藪蛇をつつくのは得策じゃない。また断罪チヨップの餌食になりたくなければ、触らないことだ。

3

「俺がDクラスに配属された心当たり？」

「ああ。あまり聞くべきことじゃないんだろうが、気になつてな」

「ふむ、綾小路とは友人だ。別に気にする必要は無いよ。友人関係というのはこんなふうに気軽に踏み入れる間柄であるべきだ」

昼休み。オレは言峰と平田の三人で中庭へと来ていた。

言峰から誘いがあり、オレはそれに便乗する形になった訳だが、昼食まで奢ってもらい申し訳なく感じる。友人なら当たり前なのか？

三人並んでベンチへと腰をかけている為、多少狭いがこの距離感の方が友人らしさを感じられる。

すまんな堀北。お前がぼっちの時間を過ごししているというのに、オレは最高の友人と食事を取っている。

「そうだね、僕も不思議に思ってたんだ。士郎は成績も良いし運動も出来る、何より人気者だから、Dクラスは不自然だよ」

「それは洋介にも当てはまるだろう？ 同じことさ」

「僕はある小テストで満点なんて取れなかったよ。自己紹介で言ってた通り勉強が得意なんだね」

「日頃の積み重ねの結果だよ。誰にもできることだ」

「それが凄いな。地道に継続して何かをやるのって、好きでもない限り難しいと思うから」

「そうか。ありがとう、そう言って貰えて報われた気分だ。まあ俺は勉強するのが好きな人間だからね、好きでもないのに高得点の人と比べたら凄くはないよ」

言峰と平田が何やら人気者トークをしていた。こんな感じで会話すると友達が増え

るのか？ 一応参考にしてみよう。

それより、聞き流せないセリフがあった。この二人普段から名前呼びなのだろうか。オレだけ疎外感があるんだが、もしかして平田はオレより言峰と仲が良かったりするのだろうか。

「それで、俺がDクラスに配属された理由だったか。?? 思いつく限りでは面接でしつかり受け答えができていなかったか、筆記の方で点数が低かったか、それぐらいだな」

「言峰でも面接試験で緊張したりするの？」

「するさ、俺も人間なんだ。自己紹介の時だって本当は心臓が張り裂けそうなほどだった」

「あはは、僕も面接試験は緊張したかな。妙に圧迫感があるから」

流石にすぐに理由は分からないか。言峰や平田は裏表のなさそうな人間だし、他人の陰口を言ったりするタイプじゃない。

まだ浅い付き合いだが、この二人の為人は何となく分かってきた。だからこそ、何故Dクラスなのかという謎が残るわけだが。

「それより、無理に誘ってしまったか？ いつもは軽井沢たちと昼食を取っていただろう？」

「別に構わないよ。彼女もそこまで言わないし、何より女子に囲まれて食事をするのは

ちよつと窮屈だったんだ。士郎がいないなら尚更僕一人だから」

「確かにあの空間は居づらさがあるな。基本的に王や佐藤たちとしか話してない気がするが」

「僕たち二人だけで会話してると怒られるもんね」

あはは、と平田は苦笑しながら零した。Dクラス2大イケメンにも悩みはあつたようだ。何不自由ない生活を送つてそうだったが、人気者には人気者の悩みがあるらしい。

「二人はこれからどうするつもりなんだ？ やはりAクラスを目指すのか？」

「そうだね。僕はAクラスを目指そうと思つてる。それに、皆がそれを望んでいるんだ。協力し合つて、Dクラスが一丸とならないと困難だと思ふし」

「クラスの一丸は前提条件だろう。そこからクラス毎に各々の得意分野を活かし、戦うべきだな。俺は卒業したら教会に戻るつもりだからAクラスに皆ほどの望みはないが、それでも手伝いたいと思つてる。同じクラス、仲間だしな」

流石、Dクラスの良心たちだ。堀北とは違う。堀北はまず自分の評価に不満を抱いていたが、彼らはそれを受け入れた上でチームの力で戦おうとしている。

本当に見習うべきだと思うぞ堀北。

それに、本気でAクラスを目指すなら男子を纏められるこの二人は統率者として必要不可欠な存在だ。それに彼女が早く気付けばいいが。

「??無理そうだな。」

「放課後、皆で今後について話し合うつもりなんだ。士郎と綾小路くんも参加してくれないかな?」

「申し訳ないが洋介、放課後は私用があつてな。会いたい人がいるんだ」

「オレも誘つてくれたのは嬉しいが茶柱先生に呼び出されてる」

「そつか。無理に誘つちやつてごめんね」

「気にするな。埋め合わせはする。明日なら用事はないから必要なら声を掛けてくれ」

「うん! お願いするよ!」

それからは少しだけ今後のクラスの方針について話し合い、中間試験をどうやって乗り越えるか対策を講じていた。

終始オレは相槌を打つただけだったが、この二人と対等に話せるスキルが欲しい。

堀北、どうやらクラスの人気者を友人に持つとそれなりのぼっち感は味わうようだ。今この瞬間はオレたちは同じひとりぼっちだな。

4

「言峰君、ですか?」

「ああ、言峰士郎は平田同様統率者としても駒としても長けた存在だ。それに、唯一高円寺を御する生徒でもある。お前がAクラスを目指すなら必ず必要になってくるだろう。個人の力では限界がある。まだ高校一年生とはいえ、社会に片足を踏み入れているんだ、子供のように癩癩を起こしてばかりでは前には進めない」

生徒指導室。オレの入試結果や小テストの点数が茶柱の手によって堀北にバラされた。プライベートとかどうなってますか教師なのに。

堀北は茶柱に諭されていた。普段の言動はまるでオレたちDクラスを見放していたかのようなだったが、この瞬間だけは真に教育者として指導しているように見える。

「お前が目指すべきAクラスの完成系が言峰士郎だ。学力、知性、身体能力、判断力、協調性、その全てが秀でた存在。そしてカリスマ性も持ち込んでいる、正に完全無欠と言っている生徒だな。本当に高校生なのか疑うレベルだ」

「では、何故彼はAクラスではなくDクラスに配属されたのでしょうか」

「それは答えられない。生徒のプライベートに関わるし、お前たちに知る権利はない。唯一知る方法は本人に直接尋ねるしかないだろう」

生徒のプライベートを尊重するならオレのテストの点数もプライベートなんだから尊重して欲しい。

だが、茶柱の言うことは事実だ。実際、言峰はDクラス内で一切の響感を買っていない

い。むしろ須藤含め、クラス全体が好意的だ。誰とでも気軽に接することが出来、堀北でさえ、ここ数日は少なからず会話をする仲にはなっていた。

社会に出て、彼を欲する企業は多いだろう。言峰は必ず成功する、と確信を抱けるような風格を纏っている。

「そうだな、もう一つだけ助言をしておこう」

「??お願いします」

「先程話題に出した言峰だが、扱いにだけは気をつけろ。あれは薬にもなれば毒にもなる。あいつは必須だが、あまり頼りすぎるなよ」

「それは??彼に敵意を持たれたら、クラス全体から敵とみなされる、ということでしょうか」

「??ふん、まあそんな感じだ。分かったなら行け、私はこれから忙しい」

茶柱はオレたちに退室を促した。堀北と共に職員室から出ると、先程の会話について考える。

薬にもなれば、毒にもなる。どんな意味がその言葉に内包されていたのか、今は分からないが、堀北の解釈は間違っていると確信できた。

「これから言峰君に会いに行くわ。貴方も付いてきなさい綾小路君」

「別にいいが、連絡すればいいのか?」

「??どうして貴方が彼の連絡先を知っているのかしら。ストーカーは犯罪よ?」

「失礼すぎる。普通に友人になったからに決まってるだろ」

「驚いた。貴方本当に友達が出来たのね。それも言峰君なんて」

心底意外そうに堀北は瞠目した。確かにそう言われても仕方ないのかもしれないが、流石に傷つくぞオレも。

心の傷を癒すためにオレは友人、いや親友の言峰へとメッセージを送る。すると、一分もしないうちに返信が来た。

「特別棟の方にいるらしい」

「特別棟? ??一体何をしてるのかしら」

「さあ、でも会うなら教会に来て欲しいそうだ」

「仕方ないわね。要求したのはこっちだから、相手の提示した条件に従う他ないわ」

まあ言峰と言えば教会だろう。友人となるきっかけが教会だった為にそういった印象を抱いてしまう。

それに放課後会う時は決まって教会だった。言峰は普段から教会にいるのだろうか。平田たちと遊びに行くこともあるようだが、基本的に佐藤などの女子と二人きりでいるのを見掛ける。

プレイボーイなのだろう。友人として鼻が高いな。

教会は寮の近くだ。それほど離れた距離じゃないし、苦勞にもならない。オレと堀北は教会へと足を伸ばした。

ガチャリ、と木製の扉が音を立てた。金具をするような音が響き、ゆつくりと扉は開かれる。

中を見渡せばいつも通りの景色。ステンドグラスから差し込む光がどこか神秘的だった。なるほど、神に見守られているような感覚とはこんな感じなのか。数回訪れたが、その度に安心感が増している気がする。

いやこれは言峰がいるからなのかもしれない。

「ようこそ、態々足を運んでもらってすまない。少し野暮用があつてね、基本的にここにいるのだが鍵を開けるのが遅れてしまった」

既に神父服に着替えていた言峰がオレたちを歓迎するかのようになつていた。祭壇を背に、逆光を浴びながら立つその姿は敬虔な信仰者を思わせる。

堀北も心なしか、たじろいで見えた。

「それで、話というのは？」

「??貴方にAクラスに上がる協力をして欲しいの」

「ふむ、何故そのような要求をするのか聞いてもいいかな？」

「私は、Dクラスに配属されたことに不満を抱いているわ。でも、それは貴方もそうでしょう？ 学力の高い貴方が、Dクラスなんてプライドが許さないはず」

「??なるほど。俺がDクラスに協力するのは構わないよ。だけど、君に協力するつもりは無い」

「なっ！ どうして——」

「それは君が本題を理解してないからだよ。そもそもその話、下された評価に不満を抱くことが間違っている。人は生きている限り、必ず他者に評価される。そして、その評価に不満を抱いてはならない。何故ならその評価は己の行動の結果だからだ」

言峰は穏やかな笑みを浮かべていた。対称的に堀北の顔は強ばっている。真正面から協力しない、と言われその上自分の考えの否定。反感を抱かない方が不自然な状況だ。

「君は他者との協調を拒んだ。拒絶した。個人で全てやっていけると思い込んでいた。その時点でアウトなんだよ。日本社会が真に必要なとするのは有能な個人じゃない。円滑に物事を進められる集団だ。確かに有能な社員は出世出来るだろう。だが、その有能を君は履き違えている」

「??」

「社会が求める有能な人間は協調性がある集団を引っ張れる存在だ。後方から指示する

だけのボスはいらない。先頭に立つて集団を率いることが出来る人間を有能な人間というんだよ。君は当てはまらない。この学校は学力だけが高い生徒ではなく、周りに溶け込め、協調することができ、それでいて頭の良い人間を排出したがっている」

「私は?！」

「君は孤高を目指しているようだが、それでは人はついていけないし、何より君を異物として排除しようとするだろう。君は嫌われ者の部下を出世させようと思うかい?」

堀北は黙りこくったまま言峰の言葉に耳を傾けている。だが、悔しそうに肩を震わせていた。

「君はこのままじゃ就職なんて出来ない。出来たとしてもやっていけない。個人業なら大丈夫だろうが、大手企業なんかだと受け入れられない。有能な個人というのは周りに認められて初めて存在を許される。今の君はきつと許されないだろう。排他されていくだけだ」

「それでも、私は」

「君の行動の結果が今の評価、Dクラスという評価。君は孤高なんかじゃなく、ただ独り善がりな異端者。例えば、俺が君に協力したとして、Dクラス全体は君の意見を受け入れない。つまり、俺や平田を経由する指示になるだろう。それは果たして君の実力と言えるだろうか?」

「——ッ！」

「結局、一人では何も出来ない。その時点で君は孤高なんかじゃなく孤独なんだ。だから俺は君に協力はしないよ。でもDクラスには協力するさ。仲間だからね。君は何もせずにただ孤独でいればいい。それが君の評価なんだから」

心が折れた音を聞いた。

言峰にしてはかなり毒舌だと思つたが、彼は堀北の成長を促しているのだろう。それでもなければ、Dクラスの良心と呼ばれる言峰がここまで人格否定をするはずがない。

ここで折れれば、堀北は妥当な評価を下されたことになる。だが、もし先に進むことが出来たのなら、きつと言峰も堀北に協力するだろう。

——震えて涙を流す堀北を、慈悲深い瞳で見つめる言峰の顔が歪んでいたように見えた。それはおぞましいほどに恍惚としたもののように感じたが、逆光により歪んで見えただけだろう。

この時、オレか堀北、どちらかが言峰の本性に気付いていれば、結果は変わっていたのだろうか。

綾小路清隆の友人（3）

堀北は暫く肩を震わせ嗚咽を漏らしていた。

Dクラスという評価、茶柱の指導、言峰との問答。短い期間で積み重なった感情が爆発したようだ。追い討ちをかけるように続けられた在り方の否定。彼女が目指していた孤高の履き違え。

仕方の無いことだが、プライドの高い堀北にとって最も屈辱的だったと思う。何より、その言峰の言葉や下された評価に納得してしまったが為に抑えられなかったのだから。

「堀北、孤高と孤独は似て非なるものだよ。何も仲間を頼れ、と言っているのではない。君の感情が許さないことを無理強いするのは酷な事だ。利用すればいい、信頼なんて二の次だ。君が孤高を目指すのなら、先導者ではなく、支配者として在るべきだ。思考を把握し誘導する、他者からの信頼を勝ち取る、カリスマ性が君には足りない。他者から下された評価に不満を抱く前に、覆そうとする意志が今の君にはない。この程度で挫折するようでは社会に出たところで何も出来やしないんだ。なら、堀北鈴音はこのまま孤独な少女として何もしない方が身のためだよ」

「その言葉を最後に堀北は弾かれたように教会を飛び出した。

教会内に敷かれた扉から祭壇へと伸びる赤い絨毯を零れた涙が濡らしている。残されたオレと言峰の間に静寂が訪れた。

ふと、先の言葉を思い返してみれば言峰は堀北へと激励と叱咤を混ぜた言葉を送っていた。やはり、彼女を更正へと導いている。

流石はオレの親友だ。友人として誇らしく思う。

「それで、綾小路はなんの用だったのかな？」

「オレは堀北の付き添いで来ただけだ。特に用があつたわけじゃない」

「そうか。では少し付き合つて欲しいことがあるんだが頼めるか？」

「別に構わないが?」

「良かった」そう言うと言峰は微笑んだ。言峰がオレに頼み事とは珍しいな。二つ返事で了承してしまつたが、内容くらい聞くべきだつたらうか。いや、友人の頼みだ、断る理由がないな。

言峰は少し待つていてくれ、とだけ告げると教会の裏の方へと歩いていった。オレはそれを待つことにしたので、座席へと腰を下ろす。

傷一つなく、ほこりもついてない。言峰の管理が行き届いている証拠だ。見た通り敬

虔な信仰者だったらしい。

5

かぼーん。

そんな擬音が聞こえてきそうな密室。男三人で裸の付き合い。誤解されそうな状態だが、オレは生まれて初めて銭湯に来ていた。

メンバーはオレと言峰、平田だ。しかし男子だけで来た訳ではなく、しつかり女子も女湯の方にいる。

そして、オレたち三人はサウナと呼ばれる高温の密閉空間で並んで腰を下ろしていた。

「で、どうしてオレを誘ったんだ？」

「君は俺以外とあまり親しくしている姿を見ていないし、何より異性との交流も少ないだろう？ 友人として交流の輪を広げて欲しかったんだ」

「それは、助かるな」

どうやら言峰はオレの為に動いてくれたらしい。今日の放課後は元々いつものメンバーで銭湯に行く予定だったらしく、そこにオレを加えてくれた。

「洋介、そつちはどうだったんだ？」

「うん、大体の方針は固まってきたよ。今のところ、中間試験対策としてクラス全体で勉強会を開く予定なんだ。成績の良かった人に頼んで講師役をもらうつもり」

「堅実だな。君らしい案だ。俺も是非手伝わせてくれ」

「こちらからお願いとところだったんだ。ありがとう」

「そういえば綾小路は人に勉強を教えられるのか？」

「いや、オレはあまり成績の良い方じゃないな。それにオレに教えてもらうのは他の人も嫌だろう？」

「そう卑下するものじゃない。同じクラス、同じ船に乗った仲間だ。クラスの為、みんなの為となれば邪険に扱うものはいないよ」

「そうだよ綾小路君。もつと自信を持っていいと思う」

二人に励まされるとなんだか出来るような気がしてくる。今のオレならば同じく人気者になれそうだった。流石にこれは妄想だな。

しかし、サウナというのは良いな。同じ空間で汗を流していると何故か一体感というものが生まれてくる。まるで部活でお互いに切磋琢磨してきた仲間のように。存在しない記憶が溢れてきた。

「だが、やはり断らせてくれ。今のオレでは力不足だ」

「そっか。そこまで言うなら無理強いはしないよ」

「ではテストは一人で乗り切れそうか？ 不安があるのなら俺たちが鞭撻するのも吝かではないが」

「そうだな、是非お願いする」

何かと言峰はオレを優遇してくれる。友人としては当然なのかもしれないが、こうやってオレが他者と関わる機会を増やす手伝いを積極的にしてくれるのだ。もはやオレたちは親友どころか竹馬の友なのかもしれない。

「講師役は俺、洋介、榎田辺りかな。幸村はあまり集団行動を得意としてないし自分の方に集中したい筈だ。誘わない方が良さそうだな。高円寺も同様クラスに興味を持ってないから無理として、後は堀北はどうだろうか？」

「堀北さんなら大丈夫だと思っけど協力してくれるかな？」

「彼女はあまり協調性のない生徒だ。頼み込んでも難しいかもしれない、がやってみるだけ無駄ではないだろう。今日辺り俺から直接連絡をとってみる」

「じゃあお願いしようかな。グループ分けはどうしようか」

「それは堀北次第だね。彼女からの返答の後、あらためて君に連絡するからそれまで待つて欲しい」

「わかったよ。一応綾小路君は希望の人とかあるかな？」

微妙に答えにくい質問がきた。どう答えても角が立ちそうだな。言峰と答えれば、平田は嫌だと言っているようなもんだし、平田と答えれば言峰との友情を蔑ろにする気がする。一番の悪手は櫛田を選ぶことだろう。オレが女好きという評価を下されそうだ。「特に希望はないが、人数合わせ程度に思ってくれ。空いたところに入れるぐらいが丁度いいかもしれない」

「答えにくい質問しちゃつてごめんね」

「洋介は思いやりはあるが配慮に欠けるところがあるな。その方が人間として俺は好ましいけど」

「あはは、自己紹介の時もそうだったね」

「なに、過ぎた事を気にするよりこれからどう改善するかが肝だよ。君は人格者だ。普段の行いから見て、有り余るほどの善行を積み重ねている。多少の失敗も皆許してくれるや」

「そうかな？ 士郎みたいに出来ればいいんだろうけど」

「俺も完璧ではないよ。洋介と同じだね。実は俺、恋人が出来たことがないんだ。ちなみにこれはオフレコで頼む」

「そうなの!? 女子の扱いに手馴れてたからつきり！」

「意外と奥手だったりするんだよ。教会の人間として他人と関わるのは得意なんだが、

恋愛は苦手だね、上手くいった試しがない」

「オレも恋人ができたことは無いな。平田を羨ましく思うよ」

生まれて初めて恋愛トーク、恋バナみたいなやつを行った。ここがサウナでなければそれなりに雰囲気はあつたのだろうが、流石に友情は深められても恋の悩みを打ち明けようとはならない。

ふと、言峰が思いついたように紡いだ。

「綾小路、君も名前で呼び合わないか？ 同じクラスメイト、仲間なんだ。それにこうして裸の付き合いまでしている。信頼関係を結ぶにしても名前で呼び合うのは連帯感を呼び起こす。どうだ？」

「いいのか？」

「僕は全然構わないよ！むしろこうして男子と仲良くなれるのは嬉しいんだ。普段、女の子と一緒にいるのが多いから男子にいい感情を抱かれなくてね。同性の友達は僕が望むところだよ」

「それじゃ、土郎、洋介これからよろしくな」

「ああ、清隆。今後も仲良くしていこう」

「うん、清隆くん。よろしくね！」

こうしてオレは土郎だけでなく、洋介という新たな友人が出来た。人気者に挟まれる

オレの腰巾着感が凄そうだが、友人が出来て舞い上がっていたオレには関係の無いことだった。

程なくして根を上げた洋介に合わせてオレたちもサウナを出ると暫く湯船に浸かって脱衣場へと戻った。

そこで身体を拭き上げる土郎を見て洋介が感嘆の声を洩らす。

「やっぱり土郎は体つきが凄いね。僕なんかじゃ比べ物にならないよ」

「筋トレが好きなんだ。ただの見せ筋さ。それより清隆の筋肉のつき方は実用性のありそうなものだな。何か武道をやっていたのか？」

「いや、習い事はピアノと茶道だけだな」

洋介は高校生の中では鍛えられた肉体をしていた。が、それ以上に土郎の筋肉は凄かった。制服やキャソックでは分からなかったが、改めて見るとボディビルダーのような体つきをしている。隆起した肉体を見れば、ひと目で強いと理解できるレベルだ。

流石にオレでも身体能力では勝てそうにない。

「さて、女子も待つてることだろうしさっさと出ようか」

「そうだね。待たせちゃってるみたいだし怒られそうだ」

「違うない。清隆も叱責される覚悟をしておくといい」

脱衣場から出て大広間に向かうと洋介の言ったようにオレたち三人は遅いと叱責をもらうのだった。

6

その後、オレは堀北と会っていた。これから皆で勉強会をするという士郎たちと別れ、堀北の連絡先を教えた。

士郎とどんな会話をしたのかは分からないが、呼び出され寮近くの自販機に向かうと堀北は既にベンチに腰を下ろしオレを待っていたようだ。心なしか決意に溢れた表情をしている。

「珍しいな堀北の方から会いたいなんて」

「誤解を招くような言い方はやめてほしいのだけど。ただ、私も覚悟を決めたから貴方にも協力をお願いしたいって話をしたかったの」

「協力と言ってもオレに出来ることは特にないぞ」

「全教科50点なんて狙ってできる貴方が冗談はやめて」

オレは堀北の隣に腰を下ろす。

相変わらず疑っているようだ。そもそも頼るのならオレではなく洋介や櫛田、士郎辺

りにするべきだ。

「言峰君に言われたことについて考えてたの。確かに私は間違っていたわ。でも孤高を目指すのはやめるつもりはない。彼が言っていたように私にはカリスマ性が欠けているわ。でも、能力が不足しているからって諦めるのも私のプライドに反する」

「言峰の言うようにプライドを折ってでも頼った方が堅実ではあるぞう」

「そうね。彼のように出来れば、それで良かったんでしよう。でも、私は彼のようにはなれない。目指している人がいるの」

「じゃあ、勉強会のお願いは断ったのか？」

堀北は首を横に振った。

「寧ろ私から参加を希望させてもらったわ」

「随分吹っ切れたんだな」

「吹っ切れてなんかないわよ。今でも悔しく思うし、Dクラスに配属されたことに不満を抱いている。だから、考え方を変えたの」

星を見上げながら堀北は零す。街灯に照らされて、泣きじやくり赤く腫れた瞼が目に入った。

しかし、瞳に弱々しきはなく、寧ろ決意に満ち溢れた凛々しさを孕んでいた。どうやら士郎の激励と叱咤に気付いたようだ。

「抗議するのではなく、私自身の力で評価を覆す。その為に、彼の言葉通り、まずはクラスから信頼を勝ち取ることにしたの」

「身を張らない統率者には誰もついて行かないからな」

「ええ、私が率先して泥を被る。どんなに泥に塗れても、それで勝ち取った結果が汚れることなんてないから」

晴れやかだな。

前に進むことが出来たようだ。以前の堀北とは全くの別人のように思える。

「だから、須藤君たちの勉強を見ることにしたの。彼らはきつと平田君が主催した勉強会には参加しない」

「だろうな。そんなことで参加するならそもそもあそこまで女子に煙たがられてない」

「そう、彼らを赤点からすくい上げて信頼関係を結ぶ。私が頼るかなんてのはまだ考えなくていい。まずは彼らから頼られる存在にならなくちゃ話にならないわ」

「だが、堀北が誘っても池や山内たちは協力しないと思うが」

「でしようね、だから貴方をお願いするの。——彼らが勉強会に参加するよう協力してください」

ベンチから立つとオレの前まで来て、堀北は頭を下げた。彼女のプライドが本来許さないはずの行為。自分の限界を理解したが為に、湧き上がる屈辱感を押さえつけてまで

こうしてオレに頭を下げている。

士郎はこうなることを見越していたのだろうか。いつものオレなら断つただろうが、流石に士郎が関わっているんだ。無下には出来なかった。

「分かった。だがオレは何をすればいい？」

「きつと貴方でも彼ら三人を参加させることは無理でしょうね。言峰君なら可能なのでしょうけど、まだ今の私には彼は協力してくれないわ。だから、貴方経由で櫛田さんにお願ひして欲しいの。??私から直接はプライドが邪魔して出来ないわ」

「そういうことか。明日の昼休みにでも櫛田に協力を依頼してみる」
「ありがとう」

堀北は俯いていた。頬が熱を帯びて紅潮していることから恥ずかしかったのだろう。今まで誰かに頼るといふことをしてこなかった彼女にとって、これは初めての経験であり新たな一歩でもある。

櫛田でも無理そうだったら、オレ経由で士郎に相談してみるか。

「私はいずれ言峰君にも認めさせてみせる。その上で、Aクラスに上がるわ。どん底から這い上がるだけだもの。言峰君の協力があれば不可能ではないはずよ」

「だろうな。茶柱先生も言峰のことはAクラスの完成系と言っていたし、きつと全クラスにおいて言峰より優れた生徒はいないんじゃないか？」

「そうね。兄さんと類する彼ならきつと??。茶柱先生の言葉が本当ならあの高円寺君も制御出来ると思つていいはず」

「それは真実だと思つて。高円寺が教会に足を運んでいるのを見た事がある。実際教室内での会話を聞く限り、かなり親しい間柄みたいだ」

「綾小路君、盗み聞きはいい趣味とは言えないわよ」

確かにそうだな。これからはやめておこう。士郎にもいい顔はされないだろうからな。

再びオレにお礼を告げると堀北は寮へと戻つていった。一人取り残されたオレはベソで星を見上げ黄昏ながら、今日新たな友人が増えたことに思いを馳せるのだった。

結論から言うと、Dクラスは全員が赤点を免れていた。堀北の助力もあり、池、山内、須藤の三人が赤点ではなかった為に、クラス内でも堀北を見直す声がちらほら聞こえる。

彼女も満更でも無い様子だった。だが、堀北曰く、まだこの程度ではいけないらしい。士郎はクラスでの協力はするが個人の協力を得るのは難しいのだという。洋介の頼み事を聞いているから、今の堀北の方針ならば士郎も協力してくれると思うのだが。

「これで、第一関門は突破したわ。後は継続してDクラスから赤点を出さないようにし

ないと」

「そうだな。流石にクラスから赤点が出そうだったら言峰も何かしらの対策はしそうだが」

「私の手でやることに意味があるのよ。言峰君を認めさせなければ、きっと兄さんにも認めて貰えないでしょうから」

そう言い切ると堀北は黙ってしまった。クラス全体の平均点がそれなりに高かったようで勉強を教えていた士郎たちが褒め称えられている。

須藤たち三人も堀北に賛辞を飛ばしていた。勿論、櫛田への賛辞が一番凄かったが。

それにしても、佐藤たちが士郎の腕に引っ付いているが彼らは結構親密な仲なのか？

彼らの距離感を見る限り、士郎は恋愛下手なようには見えないうし、明らかに異性の扱いに手馴れている。

何かしらの理由があるのだろうか。

櫛田桔梗の級友

Dクラスから退学者が一人も出なくて良かった。折角、私や言峰君、平田君が手を貸したのに赤点を取った、なんて逆に私たちの評価が下がってしまう。

それにしてもあの堀北がまさか須藤君たちに勉強を教えるなんて。私がいくら接近しても全く相手にしなかつたくせに、腹立たしい女だ。思い出す度にふつつつと苛立ちが沸き立ってくる。

激情を抑えながら、私は彼へと声を掛けた。

「言峰君っ」

「??櫛田か。どうかしたのか？」

「今から帰るの？ もし良ければ私も一緒に帰っていいかな？」

「構わないよ。一人より友人といた方が心が安らぐ時もある」

昇降口で傘を手を取っていた言峰君の隣に立つ。言峰士郎君、彼はDクラスを中心にある生徒の一人だ。基本的に私、平田君、軽井沢さん、言峰君の四人で方針なんかを討論したりする。他の生徒たちも参加はするが、大体がろくな案も出さずに相槌だけを打っている。

彼は女子と男子から好意的に見られている。性差の壁を超えた好意をクラス全体から向けられているのだ。それは須藤君や堀北、高円寺君も例外ではない。他クラスとの関わりこそあまりないようだけど、それでもDクラス内では私以上の人気を誇っている。少しだけ嫉妬してしまう優等生が言峰君だった。

「あれ？ 傘はどうした」

「今日は忘れちゃったんだ。天気予報では晴れだったから必要ないかと思ったの」

「そうか。まあ急な雨だからな、仕方のないことだ。良ければ一緒に入るか？」

「いいの？ ありがと、ご一緒させてもらうねっ」

今日はわざと傘を持ってこなかった。雨が降りそうなのはわかっていたが、放課後に言峰君と一緒に帰る口実を作るためだ。

私は言峰君についていくように昇降口から外に出る。外はかなり雨が降っていて、傘がなければ濡れるのを免れない程だ。これで相合傘をしてもらうことでもつと言峰君と親しくなれるし、ほかの女子にも牽制、アピールが可能になる。一石二鳥の策だった。「こうして二人で歩くのは初めてだな」

「そうだね。いつも話す時は平田君やほかの女の子がいたから」

「大体がDクラスについての話ばかりだったか。ではプライベートな話も初めてになるのかな」

「ふふ、私のプライベートが気になっちゃう？」

「君の私生活の話はあまり耳にしなかった。そういう風に言われると興味が湧いてきてしまう」

「言峰君にならないよつ。私の秘密教えちゃう」

言峰君は私に歩調を合わせゆつくりと歩いてくれていた。それに心なしか傘が私の方に向けられている。こんな風に相手に意識させずに紳士的に振る舞うのだから、人気が出るのも納得だ。

確か、クラスでも相談事の受付は彼がやっていて。女の子は私を頼ることが多いけど、それでも言峰君に持ちかける子も少なからずいる。クラスメイトの秘密を集めたい私からすれば、非常に迷惑な話なのだが、それ以上に彼という存在は大きな利益を生んでいた。

「何から話そうかなー」

「では勉強会の際、堀北や綾小路たちを手伝っていたようだったがどうだった？」

「堀北さん、教え方にトゲはあったけどそれでも相手に伝わるまで根気強く話してたよ」

「ふふ、そうか。??上手くいったようだな」

「うんつ。言峰君は？」

「俺は七人ぐらいしか受け持ってなかったからな。平田はもつと大変だったろうし、櫛

田も二つのグループを掛け持ちしていたんだろう?」

「確かに大変だったけどもう一つの須藤君たちのグループはほとんどが堀北さんが担当してたからそれ程じゃないよ」

「それでもだ、櫛田のおかげでDクラスから、仲間内から脱落者を出さずに済んだんだ。労わせてくれ」

「お気持ちだけで充分嬉しいよっ」

堀北を褒めるのは少しだけ癪だったけど、言峰君にアピールする為だから必要経費だ。

言峰君は私や平田君を褒め称えていたが彼のグループが一番平均点が高かった。やっぱり満点を取れるほどに勉強が出来れば教え方も上手くなるのかな。そう言えば満点が他のクラスにもいたらしく、過去問を使つたと言つていたのを聞いた。それを聞いた平田君たちもその手があつたか、と愕然としたほどだ。

「中間テストを乗り越えたのならCPの変動がありそうなものだが」

「どうだろうね、増えるといいけど」

「ptの方は心許ないのか?」

「そこまで困つてはないけどこのままだったら何処にも遊びに行けなくなっちゃうかも」

「早めにCPシステムについて気付ければ良かったんだけどな」

「仕方ないよ。まさかこんなことになるなんて誰も分からなかったみたいだし」

「過ぎたことを考えても仕方ないが、心残りは出来てしまうな。このまま何事もなければいいが」

「怖いこと言わないでっ」

私は結構Ptを温存していたが、クラスの八割近くが散財してしまっている。そのせいで遊びに行くとは必然的に節約していた人が割を食ってしまうから嫌になる。これも私の目標の為の必要経費と割り切れればいいんだけど、やはり遺恨は残る。

言峰君は教会関係でPtを配布されているらしいが、あまり興味本位で聞くべきことじゃないかな。知りたいけどそれはもっと親密になつてからだ。

「??あれは、六助か?」

「ホントだ。何してるんだろう高円寺君」

寮の玄関に立っていたのは高円寺君だった。立っただけで気品を感じる堂々とした立ち振舞い、間違いなく彼しかいない。

高円寺君はこちらに気付くと口角を上げた。私たち、というよりも言峰君に視線を向けているようだ。

「待っていたよシエロ。今日はいつもより遅かったようだが?」

「私用で生徒会室に向向いていた」

「そうか。教会が施錠されていたからこつちで待つていたんだが、寮に來たのはプリティガールを送るためだったようだな」

「えつ、そうなのっ!？」

「まあ、そうだな。俺は放課後はいつも教会の方へ足を運んでいる。寮に帰るのはその後だ」

「あ、ありがとう」

どうやら私を送るためだけに寮まで一緒に歩いてくれたらしい。不意をつかれた形になつた為、嬉しさから思わず感情を抑えきれず、頬に熱が帯びた。こういう所が本当にずるい。こんなの嬉しく思わない子はいないよ。

女子からの人気は平田君以上なのが当然だったことを理解した。平田君は平等に扱つてくれるけど、個人に特別扱いはしない。そこが美点でもあるけど、言峰君はこういつた感じで特別扱いしてくれる。実際は皆にこうなんだろうけど、何だか私だけが特別扱いを受けているような気持ちになる。

女子の多くが惹かれるわけだ。

「気にするな。俺が勝手に心配しただけだ」

「それでも助かったよ。本当にありがとっ」

「ああ、どういたしました。これからは傘を忘れないようにな。風邪でも引いたら大変だ」

「ふふ、そうだね。その時はまた言峰君に頼んじやおつかな」

「俺に頼り過ぎると利子が大変なことになるぞ」

「それは大変だつ。??またね、言峰君」

「またな、体調には気をつけなよ」

別れを済ませて寮に入る。ふと振り返れば、並んで歩く高円寺君と言峰君の姿があった。言峰君は傘をさして歩いてしたが、高円寺君は傘もささずに堂々と雨の中に歩いていった。

私は二人の姿が見えなくなるまで見送ると、そのまま自分の部屋へと戻るのだった。

1

後日、私と王美雨ちゃんと井の頭心ちゃんの三人で放課後に教会へと足を踏み入れてみた。

迷惑かな、とも思っただけで綾小路君や高円寺君、佐藤さんなんかはよく出入りしているらしく大丈夫だと判断した。心ちゃんは言峰君に嫌われたくないらしく若干挙動不

審だった。みーちゃんの方は普段から仲良くしてる分、余裕を持っていらっしゃるらしい。

こんな風だが、私も意外と緊張しているようだ。心臓の鼓動がいつもより早いです。初めて入るからかな。

木製の大扉を開くと西日に照らされ、逆光で視界が塞がれる。辛うじて見えたのはこちらに背を向けて祭壇に膝を突く言峰くんだった。

普段からじゃ分からないけど、こうやって見ると熱心に信仰してるんだな、と改めて言峰君が神父見習いをしていたことを思い出す。

扉が開く音に気付いたのか、言峰君はゆっくりと立ち上がり、私たちへと振り返った。「ようこそ、神のお膝元へ。もつと奥に来て構わないよ」

穏やかな笑みを浮かべ、言峰君は手招きする。私たちはそれに従い、奥へと進んでいった。

教会に、ただ友達に会うために来た、なんてバチが当たるだろうか。なんて内心怯えつつも言峰君と対面する。彼はキャソックを身にまとい、右手で聖書のように分厚い本を持っている。

「君たちがここを訪れるのは初めてだな。神へのお祈りか？ 己の罪の懺悔か？ それとも、私個人に用があつたのかな？」

「ごめんね、ただ言峰君に会いたくてきちゃった」

「謝る必要は無い。級友と仲を深めるだけで主は癩癩を起こすほど短気ではないし、寛容な方だ」

「あ、あの、お邪魔します」

「お邪魔するね言峰君」

「ああ、どうぞ寛ぎたまえ、井の頭、みーちゃん」

「私もお邪魔しますっ」

「君もよく来てくれた榎田。生憎、応接室では無いのでお茶は出せないが、寛いで欲しい」

私たちは座席へと案内された。横並びに座ると祭壇の前で立つ言峰君へと視線を向ける。が、言峰君はちらりと私たちの反対の方へと視線を向けた。それに誘導され見れば、逆側の座席に高円寺君が足を組んで座っていた。

普段あんなに存在感を放っていた高円寺君に気付けないほど、私たちは緊張していたのだろう。驚いた様子でみーちゃんが声を上げた。

「こ、高円寺くんっ!?!」

「ははは、ガールたちもここに来るとはね。私のことは気にせず寛ぎ給えよ」

「お前はくつろぎすぎすぎだ六助。少しは遠慮を覚えたらどうかね?」

「実にナンセンスだシェロ。私の前では神も等しく畏まるに相当しない。長年の付き合い合

いだから、その辺は理解していたと思うが？」

「君は変わらないな」

「それはこちらのセリフさ。君は一步も前に進んでいない」

あまりに仲が良かったので疑ってはいしたが、やはり入学前から親交があつたらしい。高円寺君も言峰君も互いに遠慮なく言葉を交わしている。前に腐れ縁、と言つていたのはこういうことだったのだろうか。

とは言え、いつまでも黙っているわけにはいかない。私たちは二人の掛け合いを見に来たのではなく、言峰君と会話しに来たのだ。

「言峰君は普段ここで何してるの？」

「普段、か。そうだな??お祈り、聖書の黙読、相談盛りだな。暇な時は掃除をしている。基本的に暇なことが多いが、それは悩める人間がいないということ。まあ喜ばしい事だな」

「くく、それ以外にもあるだろう? 君の趣味が」

「黙っている六助。今は来客の相手をしているんだ。静かに出来ないなら裏で待つてろ」

「君に嫌われるのは嫌だねえ。仕方ない、黙つてることにしよう」

「え、えっと何時ぐらいまでいるの?」

二人の間に何やら険悪なムードが漂っていた。しかし表情を見る限り、互いに悪感情は持っていないらしく、これも日常会話のようなものなのだろうか。しかしそれにしても気まずいかな。

「21時までここにいますよ。他者に相談しているところを見られたくない者もいるからね。学校の方にも許可は取つてあるし、鍵は俺が管理している。あと、休日は用がなければ一日中ここにいますと思つてくれていい。偶に席を外して外出している場合もあるが」

「そうなんだ。これからも時間があれば来ればいいかな?」

「構わない。教会は皆に等しく門を開いている。もし来ても俺がいないようならば、裏にいるか外出しているか、だ。連絡さえしてくれば直ぐに戻る」

「良かった。でも一人で管理するの大変じゃないのかな?」

「大した労力ではないよ。相談者が手伝ってくれる場合もあるし、学校側が業者を手配してくれる時もある。強いて言うなら来客の少なさだな。君たちも気軽に足を運んで欲しい」

「わかったつ。みんなにも声を掛けておくれね! 勿論、他のクラスの人にもつ」

「ああ、感謝する櫛田。それで、みーちゃんや井の頭は何か相談したいのではないか?」

「そこにいる居候に聞かれたくないのであれば、場所を移すが」

「だ、大丈夫ですつ。ほんとに軽い相談なので」

「ならばいいが、アイツに遠慮する必要は無いぞ。??どんな些細なことでも相談は相談だ。君たちの悩みに優劣や大小は存在しない。勿論、他言することもないから安心してくれ」

そう言われてみーちゃんと心ちゃんが顔を見合せた。どちらが先に相談するか譲り合っている。みーちゃんの説得に負けたのか、心ちゃんが拳手して席を立った。しかし、言峰君は座るように指示すると自分の方から近づいて行く。

そして、席に座る心ちゃんの前で視線を合わせるように屈んだ。ちなみに高円寺君はニヤニヤと二人を見ていた。

「じゃ、じゃあ私の方から。??あ、あんまり自分に自信が持てないんです。周りの目気にしちゃうって、挙動不審になっちゃって、自分が恥ずかしくなっちゃって、変わりた、って思うんですけど、勇気が出ないんです」

「そうか。??無理に自信を持つ必要は無い。自信というのは後からついてくるものだ。君が改善すべきなのは人見知りの方だね。自信と会話、これを切り離して考えるといい。他者からの評価を気にして、言葉を選んでしまうんだろう? それは欠点ではないよ。言葉が詰まるのは君が優しいからだ。他人を傷つけないように、不快にさせないように、そう考えているから言葉が詰まるし、自分の一挙一動に不安を抱く。嫌われたく

ない、という考えから来たものだとしても同じことさ。優しい人間は他者から嫌われたくないと思う人が多い。心が冷たいものでなければそう思うのは当たり前であり、君だけが特別な訳では無い。そう卑下することじゃないよ」

「で、でも、それが原因で、皆から?」

「見下されるんだろう? 他人との優劣を付けたがるのは人間の性だ。どんな人間であろうと無意識のうちに評価を下す。変えるべきは考え方だよ。君も無意識に相手に劣等感を抱いているだろう? 相手の方が優れていると考えているだろう? ほら、今もそんなふうを考えてる。だから、俺に相談したんだろう? 君は人を恐れ過ぎだ。他人の視線に臆病になり過ぎだ。悪いことではない、でもあまりに過剰だと良いことでもないんだよ」

「は、はい」

「劣等感君の自信の無さの表れ。そこを改善するには君の考え方を変えなくちゃいけない。そうだな、まずは相手を傷付ける言葉を覚えようか」

「え、えええつ!」

「君の苦手意識を無くすんだ。口にすればするほど、脳裏に悪い言葉だと焼き付くから、感情が爆発しない限りは大丈夫さ。君は考えて話す子だ。無意識に返答したりしない。だから、これから暇があれば練習しよう。俺でよければ相手になるから暇な時にいつで

も訪ねてきてくれ。なんなら電話越しでも大丈夫だよ」

「あ、ありがとうございませう」

「気にするな。同じクラスの仲間だ。そうでなくても友人だろう？ これくらいのは負担にならないし、苦にも思わない。君がコミュニケーションにおいて自信を持つてくれれば、Dクラスとしても喜ばしいことだ。勿論、友人としてもね」

「は、はい」

顔を真っ赤にして心ちゃんは俯いてしまった。そつと言峰君は自分の電話番号が書かれた紙切れを彼女の手忍ばせている。

なるほど、こんな感じで相談に乗っているのか。ただ肯定するだけの私と違い、どこを改善するべきなのかをわかりやすく教え、その改善に手を貸す。相談する人が増えるのも当たり前だった。

心ちゃんの相談が終わったのと同時に言峰君はみーちゃんへと視線を向ける。そして、近付こうと歩き出した瞬間、高円寺君が背後、つまり教会の入口の方へと振り向いた。

それに反応して何事かと言峰君が視線を向ける。私たちもそれを追うように振り向いた。

「騒がしい来客だ。今日は優雅な一時とは程遠いみたいだねえ」

「——なに？　どういう意味だ六助」

「大変だ言峰ッ」

ガチャリ、と扉が乱暴に開かれた。そこに姿を現したのは池君、山内君、綾小路君、平田君、軽井沢さん、そして申し訳なさそうに佇む須藤君だった。

「どうしたんだ？」

「す、須藤がつ」

「——すまねえ言峰ッ！　俺、喧嘩しちまったっ！」

どうやら事件が起きたようだった。

櫛田桔梗の級友（2）

とりあえず私たちは何があつたのか事情を聞くことになった。教会内の応接室へと誘導され、対面式に置かれた大きなソファに全員で腰を下ろす。高円寺君は集まるのを嫌つてその場から動くことは無かつた。

集まつたメンバーは当事者の須藤君、平田君、軽井沢さん、綾小路君、池君、山内君、心ちゃん、みーちゃん、私、そして言峰君の十人だ。女子と男子に別れて座つたのだが、男子の方は少し窮屈さうである。言峰君はお茶を入れるから、と席を立つたままだつた。

「皆、紅茶でいいかな？」

「うん、構わないよ。ありがとう土郎」

代表して平田君が答えると言峰君は満足さうに紅茶を入れ出した。私たちはその間に須藤君本人から何があつたのかを聞くことにする。

「それで、須藤君。一体何があつたのかな？」

「ああ、櫛田。Cクラスの奴らと喧嘩しちまつたんだ。相手は三人で、俺は一人だった。なんか呼び出されてよ、ついに行つたらいきなりボロクソに言われてよ、でも折角堀北

たちに助けてもらったのに問題を起こしたくなかったから、無視して帰ろうとしたんだ。そしたら、アイツら急に殴りかかってきやがって」

「それで、つい殴り返しちゃったんだね」

「ああ、本当にすまねえ。あんなに助けて貰ったのに、結局、またやつちまった。足引つ張つてばつかだな、俺。謝つても許されねえのはわかつてるけどよ、それでも謝らせてくれ」

「須藤君?？」

「すまなかつた！ほんとに申し訳ねえ」

須藤君は全員に頭を下げた。鬼気迫る表情から本当に反省しているようだ。また、問題を起こしてしまったという罪悪感から顔は青ざめてしまっている。額からも汗の粒が浮き上がっていた。

言峰君がゆつくりと全員に紅茶の入ったマグカップを配膳した。そして、須藤君を見て、穏やかな笑みを浮かべる。

「須藤、今謝つても仕方ない。明日、クラス全員に誠意を込めて謝罪する方がいいよ。この時間はどうするか、という対策を考えるのに有効活用するべきだ。確かに君は詰られ罵られるだろうけど、それでも仕方の無いことではあった。反射的に拳を出したのならそれは防衛本能だ。止めることは出来まい」

「言峰??」

「彼女も、そろそろ来るだろう。迷惑をかけられたが、最もシヨックを受けているのは君の面倒を見た堀北のほずさ。君に贖罪の心があるのなら、堀北に許して貰えたのならば、我々Dクラスは君を助けるために力を貸すよ。同じクラスの仲間だからな」

「すまねえ、本当にありがとう」

「しかし、不可解なのはCクラスの目的だな。いくら須藤に傷が無いとはいえ、正当防衛にあたるし、もし須藤の証言が認められなくて不利になっても学校側は喧嘩両成敗で終わらせるはずだ。そもそも状況がおかしいな。だからCクラスに旨みはないはずなんだが??いやCクラスはBクラスに何度も嫌がらせをしていると言っていたな。これほもしや、学校側が介入してくるラインを探っているのか?」

「Cクラスの目的はどこまでやってもセーフなのかを見極めてることなのかな?」
「かもしれない。それが、CPの変動を見ているのか、これも嫌がらせの一環で、ptの支給を遅らせようとしているのか。学校側もCクラスが訴えを起せば、事実確認の為にptの支給を止めるだろうしな」

言峰君の推察に皆はなるほど、と感心していた。試験で満点を取るのは伊達じゃないようだ。まだ当事者から、それも須藤君一人からしか事情を聞いていないというのにここまで推理できるのは言峰君だけだろう。

やっぱり敵に回すと恐ろしい人だ。だが、彼は平田君並に仲間意識が強い。私がクラスの不利になるような事さえしななければ、今のように良好な関係は維持出来るはず。

何とかして堀北を退学に追い込んでやろうと考えるのはいたけど、完璧な計画ができるまではやめておいた方が良さそうだね。

トントン、と応接室のドアが叩かれた。言峰君がすかさず扉を開くと立っていたのは堀北だった。

どうやら彼から連絡を受け、飛んできたらしい。出来れば関わらないで欲しかった。また中間試験のように活躍されると困る。

「よく来てくれた堀北。事情は説明した通りだ。須藤については君に任せるつもりだ」

「そう、ありがとう言峰君。私としても思う所はあったから」

「気にするな。では後は任せよう」

そう答えると言峰君は壁際まで移動し、壁に背を預けた。堀北は須藤君の前まで歩いていく。言峰君は堀北に決定権を委ねるようだ。あの女が言峰君に信頼されているように腹立たしい。

「何か弁明はあるかしら須藤君」

「??すまねえ堀北。また迷惑かけちゃった。お前に申し訳が立たねえ」

「そうね、折角貴方を赤点からすくい上げたのにそれを不意にされた気分だわ。正直

言つて不愉快だし、裏切られたつて思つてる」

「ああ、そう言われても仕方がねえことをしちまつた。あんなに、俺の為に勉強を教えてくれたのに、俺は、俺はそれを全部、台無しに——」

「だから、それ以上にDクラスに貢献しなさい」

その言葉に須藤君は下げていた頭を上げた。目を見開き、堀北が何を言っているのか理解するのに時間がかかっているみたいだ。私も驚いた。勿論、他の人たちも瞠目し、信じられないものを見るような目をしている。ただ、言峰君だけが嬉しそうに表情を崩していた。

「貴方の失敗は私がカバーする。勿論、勉強面もそう。貴方は短気で手が早くて、粗暴で、言葉遣いも荒くて、勉強も出来ない」

「うっ」

「でも一つだけ誇れることがあるわ。貴方、バスケットでレギュラーになったんでしょ？

嬉しそうに私に報告してきたから覚えてる。部活動で活躍した生徒にはそれ相応のCPが与えられる。今後も貴方の高い身体能力を活かす機会がきつと来る。須藤健はDクラスにとつて欠かせない存在なのよ」

「ほ、堀北?..」

「貴方が底に落ちることになつても私が何度だつて手を差し伸べる。だから、貴方もそ

れに応じて、言葉遣いを改めること、勉強にも熱心に取り組むこと、もう誰にも暴力を振らないこと。これを誓ってちょうだい」

「ああ、誓う！ 今後、絶対に問題なんて起こさねえ！ もう、お前を裏切るような真似はしない！」

「分かったのならこれからどうするか、話し合うわ。もつと詳しい情報を提供しなさい」
須藤君は涙を流しながら何度も頷いた。明らかに入学当時の堀北じゃない。いつ、こんな成長を遂げたのだろうか。

非常にまずい事態だ。このまま堀北がDクラスに認められてしまうと、退学に追い込むのが難しくなってしまう。一体誰が、あいつにそんな成長を促したの？

「いや堀北、それ以上須藤から話を聞いても事態は好転しない。如何に須藤が無罪を主張しても、学校側は証拠がないと相手にしないだろう。Cクラスは確実に須藤を起訴するはずだ。ならば、第三者、つまり事件の目撃者を探す方が堅実だ」

「そうね、でもそんな都合の良い人がいるかしら？ それに他クラスの人が目撃者なら協力なんてしないでしょうし」

「特別棟付近は監視カメラも少ない。死角になる部分が存在するから、目撃者に頼らざるを得ない。仮にDクラスに目撃者がいたとしても決定的な証拠がなければ、学校もその証言を認めない。??どうやら結構追い込まれているようだ」

「クソ、俺が殴り返してなんかいなかったら！」

「いや殴り返したのは正解だよ須藤。もし無抵抗のまままで君が怪我を負えば部活動にも支障が出たかもしれない。Dクラスが不利にはなったが、何も全てがマイナスというわけではないよ」

「??:ありがとう言峰」

目撃者なんているのだろうか。人気の少ない特別棟だったし、何よりCクラスも周りに人がいないかどうか確かめてから事に及んでいるはず。

八方塞がりだ。このまま話し合っていたってどうにもならない。

「それに目撃者はいるかもしれない。一人だけ心当たりがあるんだ。名前は伏せるが、俺から後で連絡してみよう」

「本当かいっ!? よろしくお願いするよ士郎っ」

「ああ、協力してくれるとは限らないが、可能な限りは助力をお願いするつもりだ」
「良かった。なにも対抗手段が無いわけじゃないんだねっ」

「一応、他の目撃者も探してみましようか。それに目撃者じゃなくてもこちらが有利になる情報を提供してくれる人もいるかもしれないし」

「やってみるだけ損は無いだろう。じゃあ当面の目標は情報提供者を探すことだな」

「ええ、平田君や櫛田さんからDクラス全体に協力して貰えるようお願いできないかし

らっ。」

「うんっ。ぜひ協力させてくれ堀北さん」

「私もっ。他のクラスの人にも聞いてみるっ！」

先程まで沈んでいた空気が改善されていた。言峰君のおかげだろう。それと、認めたくないが、堀北が須藤君を許したのも影響している。

打開策があると分かり、まだ何もしていないのに皆事態が好転していると思つている。凄い話術だ。

言峰君と堀北が手を組めば、司令塔、いや統率者や支配者としてDクラスをAクラスまで引つ張りあげれるんじゃないか、と考えてしまう。

私たちは解散し、皆は各々に聞き込みに戻った。応接室に残っていたのは堀北、綾小路君、言峰君、私だけとなった。

「では、そろそろ俺たちも動かなければな」

「ああ、オレも協力させてもらおうぞ士郎」

「お前がいれば百人力だな清隆。期待してるよ」

言峰君と綾小路君の会話を聞きながら私たちは応接室を出た。綾小路君がいつも何考えてるかわからなかったけど、言峰君と話している時だけ饒舌だしテンション高い

よね。

この二人、結構仲が良かったり？

応接室を出ると高円寺君がさつきと同じ場所で足を組んで座っていた。

「話し合いは終わったのかい？ 随分と時間がかかっていたじゃないかシエロ」

「いつまで居座ってるんだ六助。俺は一度教会を出る。まだ居るつもりなら鍵は開けておくが？」

「ノンノン、いらぬ気遣いだねえ。私もそろそろお暇させてもらうよ。レディーたちが熱心に食事に誘ってきてね。シエロもどうだい？」

「それこそいらぬ気遣いだな。そのレディーの目的はお前だ。俺が行ったところで響をかうだけさ」

「H m m、なら仕方ないねえ。また会いに来るよ」

前髪をかきあげ、「アデュー」という言葉と共に高円寺君は教会を去っていく。本当に彼は何しに来てたんだらう。

高円寺君と言峰君の仲は謎が多い。クラスでもたまに言葉を交えていることはあるが、それでもあまり親密な関係には見えなかつた。でも、こうしてお互い遠慮なく言葉を交わしているを見るとかなり仲が良いように思える。

「さて、君たちはどうする？」

言峰君は堀北と私を見てそう尋ねてきた。

「私はBクラスに聞きに行ってみるっ」

「そうね、私は現場検証を試みるわ。もしかしたらCクラスが見落としていた監視カメラがあるかもしれない」

「そうか。じゃあ清隆、堀北の方を手伝ってやってくれ。俺は目撃者かもしれない人に会いに行く。その後、櫛田と合流しよう」

「??わかった」

綾小路君は少しだけ残念そうだった。どうやら言峰君と行動するつもりだったらしい。確かに堀北と一緒に行動するのは嫌だよね。なんなら私と一緒に聞き込みに行ってもいいけど。

そんな感じで私たちは行動を開始した。

2

やはり、と言うべきかCPは増えていたのにPtは支給されなかった。その後、ホームルームで茶柱先生がCクラスの訴えにより支給が中断されていることを知らされる。

前日に須藤君がクラス全員に謝罪しており、言峰君たちが予めこうなることを予言し

ていたから不満の声は上がらなかった。

「やっぱりCクラスは訴えてきたね」

「そうだな、やはりラインの見極めが濃厚か?」

「みただね。これから学校側が介入しないストレスの方法で何か仕掛けてくるかも」

「不安は残るな。それを見越した上で何かしらの手を打つしかないか」

そして放課後、私は言峰君と聞き込みに回っていた。言峰君の方で名前は教えて貰えなかったけど目撃者は見つけている。だが、それだけでは審議会で負けるかもしれないので、こうして些細なことでも情報を手に入れようとしているのだ。

「やっぱり、有力な情報は得られないね」

「まあ想定していたことだ。しかし、Cクラスの石崎が過去に暴力沙汰を起こしていたという事実は大い。訴えに信憑性がなくなる」

「うん、喧嘩が強いつて有名な石崎君が3人がかりで須藤君に傷一つつけられずに負けたなんておかしいもんね」

「抵抗の意思がなかった、といえばそれまでだが人間というのは反射的に腕で顔を覆うものだ。それなのに傷は顔だけ。明らかに殴られにいつているとしか思えない。少しでも須藤の証言に説得力が増せばいい」

昨日今日で聞き込みをしてはいるが、あまり情報は回ってこない。Bクラスは積極的

に協力してくれたが、Aクラスが少しではあるが手を貸してくれるとは思わなかった。ptの支給を急かしていると言われればそれまでだが、何か裏があるに違いない。

何より、少しだけ言峰君を意識しているように感じられた。しかし、それにしても暇だ。校舎近くで聞き込みを行っていたが、生徒の数も減ってきている。それに事件のこととはかなり話したし、もうプライベートな話題でしか言峰君と会話出来なくなってきた。いる。

??思い切つて聞いてみようかな。

「言峰君つて佐藤さんと付き合つていたりする?」

「ふふ、いきなりだな。俺は佐藤と交際してないよ。確かに佐藤は女子の中で一番親密な仲間かもしれないが」

「私より仲良いんだっ。妬いちゃうなー」

「自己紹介の後で直ぐに仲良くなつてね。そのまま教会の管理を俺が任された時に掃除を手伝つてくれたんだ。彼女にはかなり助けられてる」

「そっかー。それなら仕方ないねっ。じゃあ気になつてる女子とかいたりするのかな?」

「そうだな、Dクラスの女子は心優しい子ばかりだし、しっかりと芯がある子が多い。大変魅力的に感じるが、今はそういう感情を抱いてる子はいないよ」

「言峰君、モテるんだから大変でしょ？　この前他クラスの子に言い寄られたって聞いたよ？」

「まったく、どこからそんな噂が広がっているのやら。それは事実だが、俺は異性から好意を向けられるに値する男ではないよ」

「またまたー、言峰君はなんとつ、イケメンランキングの堂々一位に輝いているのですっ！　これを見ても自分がモテないって言えるかな！」

「くく、そんなものを見せられてしまつては自覚せざるを得ないな」

言峰君は苦笑いを浮かべていたが、嫌そうではなかった。少し強引過ぎたかな、とも思つたけど。やはり少し強引に距離を縮める方が効果的なようだ。やり過ぎるとよくはないが、消極的に接しても彼との距離は変わらないしこれくらいで十分なはず。

「だが、そういう櫛田はどうなんだ？　君は俺なんかよりモテていると思うが？」

「ええっ!?　そんな事ないよっ」

「この前他クラスの男子に言い寄られたって聞いたが？」

「もうっ！　意地悪しないでっ」

「ふむ、意趣返しのもりだったが、女子相手にやるものでは無いな。すまなかつた」

「別にそこまで怒ってないよっ」

やっぱり言峰君との会話は楽しい。話していて不愉快になることがないからだ。そ

れに彼は私に釣り合うスペックを持っているからね。こうして会話するだけでも周りにアピール出来るし、実際に会話が楽しいのだから効果的である。

ほかの男子だと下心丸出しだったり、露骨に媚びを売ってきたり、嘘を並べて煽ってやったり、結構疲れるのだ。言峰君が相手だと嘘をつく必要がないし、ストレスがない。それどころかストレス発散になってしまう。

やっぱり、彼を恋人に――

「それ、疲れないか？」

え？

櫛田桔梗の級友（3）

時間が止まったように感じた。

心臓が跳ね上がり、息が詰まるような感覚。いきなり、私が動揺するタイミングを見計らっていたかのような質問。表情が凍りついた。仮面が正しく機能せず、何とか真意を尋ねようとしても、出るのは喘ぐように洩れた空気だけだ。

「ど、どういう、意味かな??」

「いやなに、君を見ていて思っただけさ。俺相手にも明るく振舞っていたら疲れるんじゃないかな、とね。君が明るい性格なのは知っているが、それでも少なからずストレスは感じると思うが?」

「そんなことないよつ。私は、人と話すのが好きだから??」

「そうか。ならこれは君の友人、級友、同じクラスの仲間としての助言だ。その振る舞いはいずれ君の人間関係に軋轢を生み、尽くしてきた人間に裏切られることになるだろう」

「そんなつ」

「向こうがなにかしてくるのではない。君は女子生徒相手にも嫉妬を買わない素晴らし

く素敵な生徒だ。だが、君が内側に溜め込んだストレスはそうはいかないだろう？ いくつか爆発するタイミングが来るかもしれない。愚痴を吐くのは悪いことじゃないし、それをせずに生きていける人間なんて稀有だ。だから、君が目指す皆と仲の良い櫛田も、愚痴を吐いていようがおかしなことでは無い」

「私が、目指す??？」

「そうだろう？ 君が言っていたじゃないか、学校にいる全生徒と仲良くなりたい、友達になりたい、と。君の努力はみんな見てきている。その愛すべき人柄もね。そう口にした以上、少なくとも君はそういう人間ではないはずなんだ。元からそのような優れた人格を持つ生徒だったのなら、わざわざそれを口にしたりしないだろう。俺は君を応援しているし、些細なことで躓いて欲しくないと思っっている」

どうやら、私の二面性がバレたわけではないらしかった。そうだよ、少しもそんな素振りには誰にも見せてこなかったのだ、バレるはずがない。

言峰君は単純に私が内側に鬱憤を溜めていないのか気にしてるだけだ。優しい彼らしい質問であり、彼にとって私は自ら相談せずとも助言しようと思うほどの友人らしい。虚は突かれたが、距離が縮まっているのを確認できたから良しとしよう。

「ありがとう、私を心配してくれてたんだねっ」

「ああ、差し出がましいかもしれないがな」

「ううん、そんなことないよつ。ちよつとびつくりしちゃったけど嬉しかった」

「そうか。無駄に言葉数を多くしてしまうのは俺の悪い癖だ。簡潔に言うと思痴を吐きたくなつたのならいつでも頼つて欲しい、と言いたかつたんだ。どうにも感情が溢れると俺は自分を抑えられなくなる」

「ふふ、いつもより饒舌だったからびつくりしちゃつた。もし、助けて欲しくなつちやつたらお願いするね」

「必要になつたら言つてくれ」

「女の子は夢見がちだから、もしかしたら何も言わなくても言峰君が助けてくれるのを期待しちゃうかも？」

「くく、責任重大だな」

何とかがいつもみたいに戻れた。彼の観察眼は要注意だ。少しでもボロを出せば、いつ裏の顔までバレるかわからない。

やっぱり総合的にずば抜けて優秀な生徒だ。高校生とは思えないかな。彼なら私の内面を打ち明けても今まで通りに接してくれそうだし、なんなら手助けもしてくれるかもしれない。

でも、自分からリスクを冒すような真似はしたくない。それをするのは彼ともつと仲良くなり、言峰君が確実に私の味方をしてくれると確信できてからだ。

「おーい、言峰くーん！ 榎田さーん！」

前方から駆け寄ってきたのは一之瀬さんだ。Bクラスの中心人物でありまとめ役、私
が被っている仮面を素で持っている本物の榎田桔梗が彼女だ。

「一之瀬さん！」

「急に声掛けちゃってごめんね、今回の事件について話したくて」

「一之瀬か。何かあったのか？」

私と同じで言峰君も一之瀬さんと親交があったみたいだ。

一之瀬さんは息を切らしながら私たちを真剣な表情で見つめた。

「私たちBクラスも協力させてくれないかな」

「いいのか？ 君たちは直接な関わりがないし、俺たちDクラスを助ける義理はないと
思うんだが」

「友達が困ってるんだったら助けるのは当たり前だよ。それに、私たちもCクラスに
思う所はあるし」

「確か、何かと嫌がらせを受けているんだっただな。??協力してくれるのであればこれ以
上に有難いことは無い。こちらからお願ひしたいほどだ」

「そうだね、私もBクラスに協力して貰えるのなら嬉しいよっ」

Bクラスが協力してくれるのは願ったり叶ったりだ。私たちDクラスだけでは、捜査

に限界があつたから。それにCクラスと交戦中の彼らであれば積極的に情報を提供してくれるはず。

「よかつた。早速何だけどやつぱり裏で龍園君が関わっていると。Cクラスのリーダーは彼だし、暴力で彼らを纏めているのだから、勝手なことは出来ないはず」

「龍園か。彼の統治下にある生徒が勝手に問題を起こすはずがないな。ふむ、確実に裏で関わっているなこれは。ありがたい情報だ、感謝する」

「??なんだか分かつてたみたいだね。もしかして余計なお世話だったか?」

「そんなことない。確かに疑つてはいたが、君の証言で確信を持てた。些細な情報でも値千金、俺たちはCクラスではなく龍園翔への対策をするべきみたいだな。あの男の思考パターンを模索すれば先手は打てるはずだ」

「やつぱり言峰君つて頭良いよね。敵がCクラスだけだと思つてたら足元掬われそうだなー」

「そうだな。いつ後ろから刺すか分からないぞ? 気付いた時には手遅れだった、なんてことにはならないようにな」

「ふふ、怖い怖い。その時はBクラスが真正面から応じるよっ!」

「言峰君つてBクラスとも仲良かったの?」

「ああ、入学当初、まだクラス分けの真意を皆が知らなかった頃によく相談を受けてい

た。CPシステムが明らかになってからは減ったが、それでも相談を持ち掛けてくる生徒は少なくない」

「そうだね、私もよく耳にするよ。言峰君はBクラスでも誠実な男子として評判だから」
「Dクラスでも人気者だしねっ。顔もかっこいい上に運動も出来て勉強もできる、性格も良く男女構わず親身に接してくれる優しい男子だって有名だよ」

「やめてくれ。あんまり持ち上げられすぎると困ってしまう」

一之瀬さん、言峰君、私の三人は会話を弾ませながらも情報提供者を募り、聞き込みを続けた。

この日の放課後は久々にストレスなく過ごせた心休まるひと時だった。

3

「対策を思いついたのっ!？」

「声が大きいわ榎田さん。Cクラスに聞かれたら意味がなくなってしまう」

「ご、ごめんね堀北さん。驚いちゃって」

私たちは学校側から審議会までに一週間の猶予を言い渡されていた。そして今日は残り三日に差し迫った頃だった。

私たちDクラスはCクラスへの対策会議を行っており、集まったメンバーは堀北、平田君、言峰君、私、そして何故か堀北さんが連れてきた綾小路君だった。場所はもう定番と化してきた教会の応接室。

そこで堀北は爆弾発言を落とした。

「対策？　情報提供者を募る以外に何かわかったのかい？」

「ええ、平田君。正確にはCクラスに訴えを取り下げさせる方法よ」

「訴えを取り下げさせる？　説得じゃ無理だって話だったよね？　どうするつもりなの？」

「櫛田さんの言う通り、説得は無理ね。だから、相手を騙すことにしたの。特別棟に監視カメラがないのは確認済みよね？　そこに彼ら呼び出して偽物の監視カメラを見せさせる。後は学校側が真実を知っていて、私たちがどんな行動を取るのかを見ている、なんて話せば勝手に取り下げしてくれそうなもの」

「そんなの上手いくいかい？　騙されそうにないと思うんだけど」

「あそこはとても暑いわ。先に呼び出しておいて5分10分待たせておけば苛立ちや暑さによって正常な判断力を保てないはず」

確かに、やってみる価値はある策だ。

お世辞にも今回の事件の当事者たちは頭が良いとは言えない。あくまで策を練って

いるのは龍園君一人だと思ふし、彼らは脳死で命令をこなしているだけの駒だろう。

言峰君はどう思つてゐるのだろうか。堀北は私と同じことを思つたのか、優雅にソファに座つて珈琲を飲んでゐた言峰くんへと視線を向ける。

視線に気づいた彼は穏やかな笑みを作つて口を開く。

「そうだな、少なくとも俺はやつてみる価値はあると思う」

「ありがとう言峰君。貴方にそう言つてもらえれば心強いわ」

「だが、確実性に欠けるな。もし失敗すれば、龍園は隙を見せなくなるだろう。リスクが大きい作戦だ。その後に支障が出るからな」

「ええ、そうね。そこは私も理解してる」

「??ふむ、石崎は裁判に詳しいだろうか？」

「? 私が見た限りではそこまで知性のある生徒には見えなかつたわ」

「なら、嘘の訴えや証言は偽証罪にあたる、なんて嘯いてみれば彼も取り乱すんじゃないか? 暑さや苛立ちによる判断力の低下、そこに監視カメラの存在、そして嘘の訴えは懲役三年又は十年に相当する。ここまで言えば最早恐怖から訴えを即座に取り下げそうなものだかな」

「なるほど、偽証罪ね。詳しく知つていれば偽証罪が適応されるのは第三の証人だけと分かる。どちらにしる失敗するのなら、この手はマイナスにはならない」

「ああ、失敗する恐れのある作戦なら少しでも成功の為に尽くした方が懸命だろう。それに、もし失敗しても既に裁判で勝てる方法を用意はしている。安心して君の作戦を試してみるかい」

「?!ありがとう」

なんだか堀北と言峰君が良い感じの雰囲気になっている。苛立ちが募るが、ここは大人しくしておこう。

堀北が失敗するように事前に石崎君に情報を流してみる？ いやもしバレれば言峰君が敵に回るかもしれない。どうしよう、このままじゃ私より堀北の方が有用だと判断されるかも。

「もし、貴方に協力して欲しいと言えばついてきてくれるのかしら言峰君」

「?!やめておいた方がいい。龍園は俺や櫛田、洋介を警戒していると思う。石崎も俺たちの姿を見れば話す機会もなく逃げ出す可能性が高い。だから、比較的人に知られていない堀北と清隆が適任だ。堀北一人だけだと錯乱した石崎が攻撃してくる可能性もあるから清隆を連れていくといいだろう」

「オレ、堀北の肉壁なのか?」

「すまないな仕事を押し付けてしまった。俺や平田は動けない。だから清隆、お前に手を貸してほしいんだ。友人として、Dクラスの一人として仲間を助けたいと思ってい

る」

「是非協力させてくれ堀北！」

「綾小路君、どうしたの貴方。やけにテンションが高いわね」

こんなに綾小路君つて積極的だったかな。須藤君を助けるため動いていた時もそこまで自発的に動いてなかったし。普段根暗な彼がテンションを高いところを見るとぶっちゃけキモいな、つて思ってしまう。

「今回は協力しない、とは言わないのね」

「そうだな。今の堀北には手を貸すに値すると判断した。君もDクラスの仲間だよ」

「???そう」

そうと決まれば行動開始だ。

私たちは堀北の作戦を成功させる為の準備に取り掛かるのだった。

審議会まで残り三日。出来る限りの手を打たなければならない。

結局、審議会は始まることも無く終わった。堀北が提案した作戦は何一つアクシデントなく成功し、石崎君たちは慌てた様子で訴えを取り下げたみたいだった。無事に勝利を収めたDクラスは活気に溢れ、須藤君はまたも涙を流して皆にお礼を言っていた。

その日はBクラスと共に祝勝会を開き、両クラスの親睦を深めることになった。Bク

ラスの女子が言峰君に近付くのを何とか私は阻止していたが、気が付くと彼だけが姿を消していた。佐藤さんにだけ伝言を残しており、「急用が出来たから先に席を外す。悪いが、埋め合わせはまた今度させてくれ」と言っていたと皆に伝えてくれた。

皆で言峰君の欠席を惜しみつつも、二次会にカラオケやボーリングなどを回つて大いに楽しんだ。私もBクラスで連絡先を交換していなかった生徒とも交換出来たことから結構楽しんでいたと思う。

現在私たちのCPは95pt。まだまだ他クラスに大きく劣つてはいるが、それでも追いつけない差ではないはず。言峰君によれば、今後もCPを左右するイベントが起きる可能性が高いらしいし。

執拗に私に構つてくる池くんや山内くんとうんざりしながら、言峰君について考えていた。

かれこれ一ヶ月近い付き合い。まだまだ出会つて日は浅いが、告白するには十分なほど距離は縮めていると思う。言峰君と恋人になれば、女子の嫉妬を多少買いそうだが、立場は今以上に大きくなるはず。

無駄なことではない、が。果たして私の告白を彼が受けるだろうか。今まで何度も浮いた話があがつているというのに、彼が特定の誰かと付き合つた、なんて噂は一切広がっていない。火のないところに煙は立たない、つまり、そんな素振りさえ見せなかつ

たことになる。

彼はそもそも恋愛に興味があるのだろうか。カラオケルームで一人ぼつんと隅に佇む綾小路君を見つけたので少し探ってみよう。

「綾小路君っ。楽しんでる？」

「??オレが楽しんでるように見えるか？」

「あはは、ちよつと見えないかも。言峰君がいないから一人になってたの？」

「ああ、平田の所に行こうと思つてたが軽井沢が占領していた。おかげでオレは一人ぼつちだ」

「でも今は私と話してるから違うでしょ？ ほら、もつと楽しも？」

「お前は天使か榎田。俺は今猛烈に感動している」

「大袈裟だよお。??ちよつと聞きたいんだけどさ。綾小路君つて言峰君と仲良いでしょ」

「ああ、オレは言峰の友人だ」

やっぱり急に声のトーンが上がった。なるほど、綾小路君は言峰君に関わることがあるとテンションが高くなるのか。これはいい情報を知った。おかげで彼の扱い方がわかつてきた。

「言峰君つて恋愛相談とか受けてたりするの？」

「うーん、どうだろうか。本人はあまり恋愛は得意じゃない、と言っていたが」

「そうなんだ。過去に付き合ってた人とかいたのかなあ」

「さあ、どうだろうな。そこまでは聞いていない」

「気になるなあ」

「どうして言峰のことを気にしているんだ？ 本人に直接聞けばいいと思うんだが」

「言峰君ってあんまり自分のこと話さないから気になっちゃって。それに友達に恋愛相談したいって子もいたから」

これは事実だ。この前みーちゃんがしようとしてたのは恋愛相談であり、言峰君の好きなタイプを探ろうとしていた。直接的には無いが、どうやったら上手くいくか、などを聞いてそこから遠回しに聞こうとしていたみたいだけど。

もう少し踏み込んだ質問してみようかな。

「綾小路く——」

「おい！ 綾小路！ お前なに榎田ちゃんと良い感じになってんだよっ！」

「そうだぞこの裏切りもんが！」

「お前には堀北がいるだろ！」

池くんを先頭に馬鹿共が綾小路君へと集る。思わず心の中で舌打ちしてしまった。肝心な所で邪魔しやがって。さっきまで一之瀬さんにデレデレしてたくせに。

しかしこれ以上は今日は無理なようだ。きつともう男子たちは私と綾小路君を接近させないように動かし。

はあ、仕方ない。恋人になるのはもう少しだけ待ってみよう。

教会に二人の男がいた。

「やけに上機嫌だなシエロ。何かいい事でもあったのかい？」

「そうだな。新たにもう一人上質な果実を見つけた」

「ほう、もしや例のプリティガールかな？ 最近よく二人で行動していただろう？」

「ああ、ただのつまらん優等生かと思っていたが」

「君の趣味は困ったものだねえ。あんな無垢で自分を信頼してくれている者たちを地獄に落とそうだななんて」

「後は実るのを待つだけだ。キツカケは与えた。成長も促した。収穫の時期が待ち遠しいな」

不気味に笑う二人の姿を、ただ月明かりに照らされステンドグラスに浮かび上がった神だけが見ていた。

佐倉愛里の恩人

人と触れ合うのが苦手だ。

人と目を合わせるのが苦手だ。

人がたくさん集まっている場所が苦手だ。

いつからそう思うようになっていたのかは覚えていない。

気付くと私の周りには人がいなくなり、ただ独りの時間が増えていた。

一つ確かなのは、人は一人では生きていけないということ。

一人では生きていけないのに、一人でなければ生きていけない。そんな矛盾を抱えているのが、私だ。

どれだけ孤独を愛そうとも、私は私一人では生きられない。

だから、そんな私でも生きていける方法を探した。

そして見つけたのが、仮面を被るということだった。

それはグラビアアイドル・雫の仮面。普段の私、地味で目立たない影の薄い佐倉愛里を覆い隠すその仮面に私は没頭した。

偽りの仮面を被って、本当の自分を隠す。

その時だけは私は、私じゃなくなって、私になることが出来る。

この真つ暗な寂しい世界の中で、生きていくことが出来る。

でも、ふと思う時がある。

誰でもいいから、教えて欲しいことがある。

私は普通に生きているのだろうか。

皆も私と同じように偽りの仮面を被っているのだろうか。

漠然とした違和感が私に恐怖を抱かせた。

皆は分け隔てなく、本当の自分を見せているの？

分からなくなる。私は異端なのか。私は異常なのか。私は普通では無いのだろうか。

人との繋がりを持たない私には、その答えを知る方法がない。

だから、今日も、これからも一人きり。

仮面さえあれば、私は一人でも大丈夫。

偽りの仮面があれば、私は孤独でも大丈夫。

私は――、

私は――心の底から、手を差し伸べてくれる誰かを待っていた。

いつか、一人の殻に籠った私を誰かが引つ張り出してくれるだろうか。一人の世界を壊してくれるだろうか。

私の偽りの仮面を剥ぎ取ってくれるだろうか。

そんなことを願いながら、私は一人で生きている。

そのはずだった。あの時までには。

——言峰士郎くんは私、佐倉愛里の恩人だ。

1

「精が出るな、佐倉」

彼との出合いは突然だった。

四月半ば、特別棟で自分を被写体にした写真を撮っていた私へと、言峰君は声を掛けてきた。

誰もいないと思っていて、誰にも見られたくないと思っていた私は思わず逃げようとした。今思い返せばかなり失礼な態度だったと思う。

「そんな勢いで逃げられたら流石に傷付くぞ」

「ご、ごめんね」

慌てて逃げようとした私は足をもつれさせて盛大に転んだ。床へと激突しそうになった私を言峰君が防いだのだ。

すんでのところで私の肩を抱いた言峰君は寂しそうな表情を浮かべ、そして穏やかな笑みを作った。

「写真を撮るのが好きなのか？」

「うん、うん」

「趣味があるのはいい事だ。俺はあまり人に自慢できない趣味しか持っていないから、少しだけ羨ましく思う」

あくまで撮っていたのは自分自身だから、彼の質問を肯定するのは気が引けた。嘘をついてしまったという罪悪感で少しだけ胸が痛む。

言峰士郎くん。Dクラスの中心人物で、誰にでも好かれる優しい男子生徒。私とは真逆の存在。会話をしたのは今回が初めてではなかった。

言峰くんはクラスで浮いていた私に話しかけてくれる時がある。それも、周りに人がいない時を見計らって。

人の視線を集めるのが苦手な私を気遣ってくれていた、とても優しい心の持ち主。そんな彼から逃げようとして、あまつさえ嘘をついたという事実を再認識した時、さつきよりも胸が苦しくなった。

「それにしてもいつもと雰囲気が違うな。君は眼鏡を外して、髪型を変えただけでこんなに活発的に見えるんだな」

「え？ あつ、え」

そうだった！

私は今、グラビアアイドル雫としてここにいる。そんな姿を見られれば、私が雫だつてバレてしまう。ここまで隠し通してきたのに、こんな些細なことでバレてしまうのは嫌だ。

そう考え、ひとつ疑問が残った。

言峰くんはどうして私だとわかったんだろう。明らかに佐倉愛里と雫では別人に見えるはずなのに。

彼は、私の偽りの仮面を一目で見破ったの？

「??なんで私だつて」

「確かにまるで別人のようだが、君は佐倉愛里だろう？ 間違えるはずがないと思うが」

「そ、そうかな」

「ああ、普段の君がどちらなのかは分からないが、今の君と、教室にいる時の君、どちらも同じ佐倉愛里だ。その二面性を俺は否定するつもりは無い」

心が晴れやかになった。

彼は、私を私個人として見てくれている。地味なクラスメイトの佐倉愛里と、グラビアアイドルの雫をどちらも同じだと言ってくれている。

舞い上がった私は、少し踏み込んだことを聞いてしまった。

「あ、あの、言峰くんも、仮面を被ってるの?」

「仮面? ??なるほど、人の持つ複数の顔のことか」

聞いてから少しだけ後悔した。

こんなこと聞いたって鼻で笑われるだけだ。でも、言峰くんは真剣な表情で答えてくれた。

「うん。私は偽りの仮面を被ってるの。言峰くんは、違うの?」

「ふむ、そうだな。確かに俺も仮面を被っているよ。そして、基本的に人間は仮面を被っていないければ社会に出れない」

「え???」

「例えば、家にいる時の佐倉と、学校にいる時の佐倉が同じ話し方、同じ行動、同じ態度を取るだろうか。基本的に人は家にいる時と外にいる時とで別の仮面を被って生きている。同級生に対する仮面、教師と話す時の仮面、親と話す時の仮面。どれも同じ佐倉愛里だよ」

確かにそうだ。

人は接する人で態度が変わるといふ。友達と私とでは接する態度が変わるのを実際に目撃しているし、私自身も親とクラスメイトでは違う態度をとっていた。

「どれも本当の自分なんだよ佐倉。今俺と話している君と、教室にいる君とで何も変わらない。偽りなんてないんだ。誰かにとつてどう見えるかと同じさ。あくまで相手の判断であり、君の内面は何も変わらない。二重人格の類であれば少し話は変わるが」

「本当の自分?！」

「ああ、君が懸念してるのは自分が周りと違うということ、そして仮面を被つてなければ生きていけないと思つていことだろう。どちらも正しくて間違つていいる。確かに君は周りと違うし、人は仮面を被つていなければ生きていけない。本当の自分なんて実際には存在しないし、どれも本当の自分なんだよ。偽つて生きることには悪いことじゃない。仮面を被ることはおかしいことじゃない。それが普通で、当たり前なんだ」

「そう、なんだ。じゃあ、私も普通だったの??！」

「そうだ。君は普通の人間で、俺と同じDクラスの生徒で、俺の友人だ。君は一人に怯え、人に怯えている。君は孤独を愛し、心から通じ合える友人を欲している。矛盾しているようで、君の願いは何も矛盾していない」

言峰くんは私へと手を差し伸べた。慈愛を孕んだ瞳で優しく私を見つめ、受け入れるように穏やかな笑みを浮かべている。

その姿に私は一人の世界が壊れる音を聞いた。

「君が悲しい時に涙を拭い、君が寂しい時に隣に立ち、君が望む時にいつでも君の元に現

れる。そんな友人に俺はなりたいたいと思ってる」

「いいの?」

「君の悩みは特有のものだ。そんな悩みを解消出来るのは時間と信頼出来る友人だけだろう。君が成長出来るまで、ずっと傍で支え続けるつもりだ。悩みが出来ればすぐに相談してくれ。君の要望には極力応えよう。同じクラスの仲間として君を救いたい」

「あ、ありがとう」

私は恐る恐る彼の手を取った。

些細なこと。ただ私に友人ができただけ。たったそれだけの出来事。

なのに、私の籠っていた孤独な世界は気付けば消え去っていた。

ただ一人ぼっちで一人が好きなだけの寂しがり屋が心優しい友人を作った。

たったそれっぽっちの出来事で私は救われた。

もう、私が抱えてきた悩みは姿を消してしまった。

2

「雫? 知らないな」

「そ、そうだったの!」

「ああ、君となにか関わりがあるのか？」

放課後、私は言峰くんに会いに教会を訪れていた。

そこで私がグラビアアイドルだつてことを知っているのか聞こうとしたけど、言峰くんは全く知らなかったらしい。

つまり、彼が普段から私を良く見てくれていたということだろう。

「じ、実は私グラビアアイドルやつて、その、活動名が、雫なの」

「ほう、そういうことか。俺はアイドルなどの有名人に疎いから分からなかった。確かに君ほど綺麗な容姿をしていれば十分にやっていけるな」

「そ、そうかな？」

「寧ろ、眼鏡を掛けているだけでその存在を隠し通してきたことに驚いたくらいだ。雑誌に掲載されていたのなら、クラスの人間も知っているだろうし、その上で見つからないとは。凄まじいな」

「それ、褒めてないよね？」

「まあ褒めるべきことではないからな。あんなに陰鬱な雰囲気を放つていてはこの先を思うと不安になってしまう。バレたくないと言うのであれば正解なんだろうが」

言峰くんの驚いた顔は初めて見たかな。でも私がグラビアアイドルをやっていたという事実よりも、それをクラスメイトから隠していたという事実には驚いているのは

ちよつと失礼だと思う。

仲が良くなった証ではあるんだろうけど、いきなり気安くなりすぎて私は少し不安になつてしまった。

「いずれはその両方を佐倉愛里だと胸を張つて言えるようになると良いが、そこは君次第だな。無理強いはずるつもりないよ」

「ううん、私もいつかそうなりたいと思つてる」

「そうか。ならその為にも君の方が自信を持たないとな。雫の方が自信を持ち過ぎて、佐倉愛里の仮面が卑屈になり過ぎている」

「でも自信を持つつてどうしたら?」

「会話の慣れ、だな。誰かと話すことに慣れて、友人を作つてみよう。自分から声を掛けるのは難しいだろうから、そうだな綾小路辺りはどうだ?」

「綾小路くん? 彼なら気が合いそうだし、いけるかも」

「ああ、少なからず波長は合うんじゃないか? 君も綾小路も自発的に誰かと話す人間では無いからな。二人の友人として、君たちに親交が生まれるのは嬉しいことではあるよ」

「ちよつと頑張つてみる!」

「それがいい。自発的に動けば自信も付きやすい。今度二人が話す機会を作ろう。心配

するな、俺も付いていてやる」

「何度もありがとう言峰くん」

「気にするな。友人として君の努力には最大限報いるつもりだ」

本当に言峰くんには頭が上がらないな。

何度も私の為に動いてくれて感謝しかない。

それにしても綾小路くんか。

堀北さんと話してる姿はよく見かけるけど私と同じでクラスにはあまり馴染めてないと思う。あんまり誰かと話してる姿見た事ないし。

友達になれたらいいなあ。

ガチャリと教会の扉が開かれた。

遠慮なく中に入ってきたのは佐藤さんだ。その姿を見て少しだけ怖いと思ってしまった。

私は無意識に言峰くんへの後ろに隠れた。

「あれ、佐倉さん？ 珍しいね」

「ご、こんにちは、佐藤さん」

「そんなに怯えなくても??同じ頭文字なんだし、勝手に親近感持ってたんだけど」

「ご、ごめんなさい。あんまり人と話すの得意じゃなくて??」

「別に畏まらなくていいよ。何も取って食おうなんて思っていないから」

優しい声音で話しかけてくれたが、やっぱり苦手意識が出てしまう。言峰くんを除いて明るい人と話すのは気が引けるのだ。

そう言えば、佐藤さんはなんの用でここに来たんだろうか。

「士郎くん、佐倉さんと仲良かったの？」

「ああ、彼女とは友人だ。最近仲良くなってね」

「ふーん」

少しだけ佐藤さんの目が細まった。まるで言峰くんを責めるような視線を向けている。

「女の子とばっか仲良くなるよね」

「そんなことはない。俺は男女共に親しいつもりだが」

「ほんとかなあ。この前、Cクラスの椎名さん？ と歩いてるの見たけど」

「信用がないな。女子で親交が深いのは麻耶だ。君との付き合いが一番長い」

「なんか誤魔化そうとしてない？」

「?!今日はやけに手厳しいな」

佐藤さんに詰め寄られた言峰くんは降参、とばかりに両手を上げた。なんか恋人同士みたいだ。

少しだけいたたまれなくなり、私は声を上げた。

「あ、あの。今日はもう帰るねっ」

「ああ、また明日な佐倉」

「う、うん。ばいばい」

佐藤さんの尋問を苦笑しながら受けている言峰くんを背に、私は逃げるように教会を後にした。

そして帰路の途中、逃げてしまった自分に嫌気がさす。言峰くんには友達が多いのは当たり前のことなのに、少しだけ嫉妬してしまった。

そんな私が少しだけ嫌いだ。

五月の下旬頃。

私は特別棟の空き教室で声を殺していた。

いつものようにただ雫の写真を撮っていただけ、それなのにどうしてこんな目に合うんだらう。

教室の隙間から廊下を覗くとそこに居たのは須藤くんとそれに対面するように立っている三人の男子。

須藤くんは苦手だ。席が近いこともあり、彼の粗暴さに怯えることが多かった。暴力

的な側面を持つ彼の近くにいるのは私にとって恐怖だったのだ。

そんな彼が、どうしてここにいるんだろうか。

「で、何の用だよ」

須藤くんは悪態をついていた。

不服そうなのを隠しもせず、ぶつきらぼうに言い放つ。そんな彼を見て、三人の男子はニヤニヤと見下すような笑みを浮かべている。

「お前、レギュラーに選ばれたんだって？ Dクラスの不良品風情が目立ってんじやねえよ」

「??なんだと?」

「まともに勉強も出来ないカスがでしゃばってんじやねえって言ってるんだよ」

「ちつ、僻みかよ。俺は忙しんだ。そんなことでいちいち呼び出すんじやねーよ。時間の無駄だったの」

煽るように言い放つ男子だったが、須藤くんは馬鹿馬鹿しいとばかりに振り向き帰ろうとしていた。

それを見て、私は動揺していた。あの須藤くんが、暴力を振るわず相手にしようとしてない。短気な彼がどうしてこんな対応を??。

「なっ、逃げんのかよ!」

「逃げる？ 態々僻みを言うために呼び出すような奴が言う事かよ。俺は実力でレギュラーを勝ち取ったんだ。嫉妬でこんなことしてる方が逃げだろ」

「——てめえ！」

「俺は帰る。嫉妬するなり僻むなり勝手にやってる」

「お、おい！」

須藤くんはそのまま歩き出した。

罵倒を続ける男子たちに振り向きもせず帰っていく。

そんな時だった。

男子の一人が鬼気迫る表情で須藤くんへと殴り掛かっていた。

それに気付いた須藤くんは驚いたようで反射的に殴り返していた。

「な、なんのつもりだ!？」

「へへ、殴っちまったなあ！ これでお前は終わりだ須藤！」

男子たちは満面の笑みを浮かべ、特別棟を去っていく。

その後ろ姿を須藤くんは呆然と見つめていた。

「く、くそっ！ やっちまった！」

そして、数十秒たった頃、我を取り戻した須藤くんの顔は青ざめ、後悔しているようだった。

頭を抱え、しやがみ込んだ彼は、ブツブツと何事かを呟いた後、誰かに連絡を始める。スピーカーモードに切り替えられた端末から聞こえた数コールの後、電話をかけた相手が出たようだった。

「お、おれ、取り返しのつかねえことを?!」

『落ち着け須藤。何があつたんだ?』

「あ、綾小路。おれ、Cクラスの奴を殴っちまったんだ! どうすればいい!」

『??取り敢えずDクラスの皆に報告しよう。一度に全員だと大変だから、平田たちと合流して言峰の所に行く』

「わ、わかった」

『お前は今どこにいる?』

「特別棟だ!」

『わかった。特別棟を出て待っていてくれ。平田たちを呼んで直ぐに向かう』

「ありがとう綾小路?!」

電話の後、須藤くんは駆け足で廊下を去っていった。

私はそれを確認したあと、安堵の息を吐いて教室を出る。大変な場面に遭遇してしまつた。

まさか、巻き込まれないといいけど。

取り敢えず、言峰くんにご相談してみよう。

佐倉愛里の恩人（2）

夕暮れを過ぎ、夜の帳が降り始めた頃。

私は言峰くん、に須藤さんと男子三人が起こした事件を目撃したことを伝えに向かっていた。

夜は好きだ。誰かに会うことがないし、一人の世界を感じられる。夜の孤独は私に安心感を与えてくれていた。

言峰くん、に連絡して、返ってきたのは教会の応接室で待っていてくれ、という言葉だった。

既に何度か出入りした経験はあるが、一人で勝手に入るのはどこか気が引ける。何故か悪いことをしている気分になる。

憂鬱に思いつつも、私は教会に入った。

言峰くんは先に別の用事を済ませにいく、と言っていたがどれくらいかかるんだろうか。

初めて入った夜の教会はどこが幻想的に感じる。

周りから物音がせず、怖いくらいの静寂の中、はりつめた冷気のような肌寒さ。無機

質な印象を抱かせる。

月明かりが差し込み、ステンドグラスから神様のような姿の人が浮かび上がっていた。照明のないこの空間で、ほんの少しの恐怖と共に未知の場所を冒険するような子供心が湧き上がってくる。

ちよつぴり舞い上がってたのかな。

だから、陰に隠れるように座っていたその人物が目に入らなかった。

「——あら、貴女もここに用があるんですか？」

鈴が鳴るような声だった。

ゆっくりと立ち上がり、その人は祭壇の前へと歩いていく。月明かりを浴びた髪が白銀に輝き、逆光で顔が見えない。

随分小柄で、片手には杖のようなものが握られていた。

「う、うん。言峰くんに、話を」

「ふふ、実は私もそうなんです。ただ、用事は既に終わっていますが」

「そ、そうなの??？」

「ええ、私の目的は既に達成されていますから。今はただこの空間の空気を味わっていただけです」

女の子はそう言うと、ゆっくりと杖をつきながら私の方、つまりは出口へと歩いてい

く。段々と縮まる距離にビクビクと怯えてしまっていたが、彼女は特に何をするでもなくすれ違っていた。

「では、機会があればまた会いましょう」

その子は振り返ることもなく教会を出ていく。その後ろ姿を眺めながら、私は彼女の容姿について思い返していた。

——綺麗な子だったなあ。言峰くん、あんな子とも仲がいいんだね。

唯一の友人の交友関係の広さに感心しつつ、同時に妬みを抱いてしまう。

私と真逆の存在。私よりも友人が多くて、人に好かれる生徒。女性の櫛田さんならともかく、男の子でここまで男女構わず信頼されているのは凄いことだと思う。

そんなことを考えながら、私は応接室へと足を運んだ。

応接室は聖堂と違い、暖かみのある明かりに包まれていた。

無機質とは程遠い生活感のある一室。取り敢えず対面するソファの一つに腰を下ろす。

そして、特別棟で見ってしまった事件について考える。

私はどうするべきなんだろうか。このまま言峰くんに相談してなんて言っただけののだろうか。

私は多分、証人として人前で話せない。つまり、このまま目撃者として名乗りを挙げることが出来ない。勇気がないのだ。

じゃあ、なんの為に言峰くんへ相談しに来たの？

彼は仲間思いの優しい人だ。必ず須藤くんを助ける為に行動するはず。だとしたら、きつと私に見たことを証言するように促してくるだろう。

でも、私は承諾しない。怖いのだ。目立つことがとてつもなく怖くてたまらない。

偽りの仮面である雫であれば容易にこなせただろう。でも、佐倉愛里には出来ない。

そうすれば、言峰くんは私を見放すんじゃないだろうか。だって、私がやろうとしていることは、彼の友人を見捨てる行為だ。きつと幻滅する。

友達思いの人にとって、そんな行動は決して看過できないはずなのに。

——どうすればいいのかな。

分からない。

どれだけ問答を重ねようとも答えは出なかつた。

それもそうだ、私の心が拒否しているのだから。

須藤くんの無実よりも、保身に走ってしまうのだ。

私の醜くて弱い心が、そうさせるのだ。

ねえ、私はどうすればいいのかな。

「誰も君を責めないよ佐倉」

心臓が止まるかと思った。肩が跳ね上がり、わたしはノロマな身体とは思えない速度で声の聞こえた方を振り向く。

そこに居たのはいつものキャソックでもなく、制服でもない肌に密着する半袖のインナーみたいなアンダーシャツ姿の言峰くんがいた。

彼は着痩せするタイプだったらしい。インナー越しに隆起した肉体が見える。木の幹のように太い腕、ボデービルダーのような筋肉。穏やかな印象を覆す鎧を纏うような姿。

「このまま目撃者として名乗るかどうするかは君が決めなさい。仮に黙っていても誰も君を責めないよ」

「で、でも、須藤くんが」

「大丈夫。須藤の無罪は必ず証明出来る。俺はその手段を持っているからね。君はもっと気楽に考えていいよ」

首から上が別人みたいだ。

でも、それ以上に素直にかっこいいと思ってしまう。クラスの男子より少しだけ背丈の低い彼だが、それを感じさせない存在感を放っていた。

その答えは鍛え上げられた肉体からくる自信の表れだったのだろう。

そして、言峰くんはいつものような論すように穏やかな声音で私を否定しなかった。その事に、安堵を覚えつつ、そんな期待をしていた私が嫌になる。

「今回の事件、Dクラスの勝利は確定している。だから佐倉、君が考えるのは君が誰かの為に人前に出れるかどうかだけだ。注目されるのが苦手な佐倉愛里が、人気グラビアアイドルの雫と同じように目立つことができるかどうかの話なんだ」

「う、うん」

「それで君はどうする？ このまま黙っているか、恐怖を克服して名乗りを挙げるか」

「——私は」

「黙っているのは悪いことじゃないよ。今は無理でもいずれば出来るようになればいいだけだ。無理をしてまでストレスを抱える必要は無い」

私はどうしたい？

このまま黙ってる？

それとも、なけなしの勇気を振り絞って声を挙げる？

言峰くんはどちらを選んでも否定しないと云った。

逃げて、悪いことではないと云った。

でも、今逃げたらこのままずっと逃げてしまいそうで。

ずるずると、今度こそはと言いつつ逃げてしまいそうで。

逃げ続けた結果、私は私を嫌ってしまいそうで。

私はどうしたい？

私は、

私は――、

「私は――もう逃げたくない」

「そうか。その選択を俺は心から歓迎する。佐倉愛里、君は逃げることを選ばなかった。自分の為かもしれない。だが、結果的に誰かの為になる選択をした。君は確実に成長しているよ」

「うん。以前の私だったら、きっと黙っていたから。言峰くんのおかげで、前に進めた」
「今はその選択が出来ただけで十分だ。このまま行けば君が証言する機会は訪れないだろう。ただ、その選んだ結果が君を大きく成長させる」

言峰くんは嬉しそうに笑った。

自分のことではなく、私のことなのに喜んでいた。

彼は友人の成長を心から祝福できる人間なのだろう。いったい、この世界に彼のように他者の栄光を喜べる人間がどれほどいることだろうか。

本当にいい人なのだ。人格者で、善人で、良人で。まるで性善説の体現者のような人。そんな彼に出会えて、本当に良かった。

「喜べ佐倉、君の願いはようやく叶う」

その言葉に私は涙を浮かべていた。

3

「そう言えば言峰くん、なんでそんな格好してるの？」

嬉しさから零れた涙は止まることなく、そんな私に言峰くんは何も言わずに付き合ってくれた。

長い時間、溜め込んできた感情が一気に溢れでて、酷く赤子のように泣きじゃくってしまった。私が落ち着いた頃に言峰くんはホットココアをいれてくれた。その後、我に返って恥ずかしさから発狂しそうになったが、彼は笑うことも無くただ隣にいてくれたのだ。

そして、心に平静を呼び戻した頃、ずっと気になっていた疑問を投げかける。まるで少し運動をしてきたかのような格好の言峰くん。

いつもと違う格好はどういう理由からなのだろうか。

「ああ、これか。恥ずかしい限りだが、少しだけ運動をしていてね」

「は、恥ずかしいことなの？」

「この肉体を維持するための隠れた努力さ。俺は天才じゃないから、日々の積み重ねがなければこうなれない凡人なんだよ」

「どうやら言峰くんは努力する人だったようだ。それを聞いて、天才という私とは縁遠い人から一気に親しみやすい人のように思えてきた。」

「彼は努力を続けてきたからこそ、他者の悩みに共感でき、その改善に努めているのだろう。私みたいな平凡な人間の気持ちを理解しているのはそういうことだったらしい。」

「それにしてもまさか君が事件の目撃者だとは思わなかったな」

「そうなの？ 言峰くんなら分かってそうだったけど」

「俺はそこまで期待されるような人間では無いよ。できないことの方が多いからね」

「ふふ、言峰くんが言う謙虚に感じるね」

「謙虚なのではなく事実だ。俺は褒められた人間ではない」

「こういう所が人に好かれるんだと思う。鼻につかないし。」

「今ならもう一つ悩みを打ち明けても大丈夫かな？ 流石に迷惑かな。」

「でも、このままじゃ良くないし、思い切って言ってみよう。」

「あ、あの言峰くん。ストーリーとかに詳しい？」

「ストーリー？ 詳しい訳では無いが一般的なことなら知っているよ」

「私、最近ストーリー被害のようなものにあつて、ただの被害妄想ならいいんだけど」

「穏やかじゃないな。なるほど、誰かに雫の正体が気付かれたのか。ストーカーが誰かは分かるか？」

「う、うん。多分なんだけど、前にカメラを買いに行った時にいた店員さんだと思う」

「ふむ、相手が学生じゃなくて良かったが、そうか外部の人間か。どう対処したものか。一応、ここは監視カメラが多いし、迂闊に接触は出来ないと思うが」

「でも、段々エスカレートしてきて、今は寮のメールボックスに手紙みたいなのが何通も」

「そうか?? 少しでもだけ時間をくれるか? 何か対策を考えてみよう」

言峰くんは深刻そうな表情でそう言った。

悪いことしちゃったかな。今は須藤くんの件で忙しそうだし、私個人の話なのに巻き込んで。だんじやつて。

でも、彼ほど安心感のある人はいなかった。

「今日はもう夜遅い。そろそろ帰った方がいいな」

「そうだね。あんまり長居すると言峰くんにも迷惑だし」

「いやそんなことはないぞ。俺は会話が好きでな、こうして話す時間は楽しいんだ。寮まで送るから帰り支度を始めるといい」

「そ、そんな! いいよっ」

「ストーリーカーに遭っているんだから用心するに越したことはない」

そう言い切ると言峰くんは応接室に掛けてあったキャソックスを羽織り、私に帰宅を促す。

そして、彼は私が寮に着くまで一緒に歩いてくれるのだった。

結局、私が証人として人前に立つことは無かった。

堀北さんの活躍で、どういう訳かCクラスは訴えを取り下げたらしい。私はその事にほっとしつつ、少しだけ残念に思ってしまった。

今回、もし証言人として須藤くんの無罪を主張出来ていたら私はもつと前に進めていたし、クラスにも馴染めていたんじゃないかな、なんて考える。本当はその機会が訪れることがないとわかって喜んでくせに。

Dクラスは今回の事件で協力してくれたBクラスと祝勝会を開いているらしい。らしい、というのには私が参加しなかったからだ。

言峰くんは誘ってくれていたけど、やっぱり人が集まるところは苦手。

だからこうして、一人寮にも帰らず歩いている。

ショッピングモールを抜けて、路地裏を進む。誰とも会わず、誰にも見られずに一人の世界を堪能していた。

言峰くんのおかげで、一人の寂しきはなくなつたけど、こうして一人になる時がある。失つてから、居心地の良さを改めて知つたのだ。

隣の芝は青く見える、という。

孤独だった私は集団を羨んでいたのだろう。友人を欲していたのだろう。だけどこうして、変わった後に気付いた。一人の気楽さというやつだろうか。

言峰くんに相談してからストーカー被害も無くなった。

雫のSNSアカウントで執拗に粘着してくるファンがいなくなり、寮のメールボックスに変な手紙を入れられなくなった。そして、誰かに見られているような気配を感じなくなった。

本当に一人になつた気分だ。

晴れ晴れとした、清々しい心地。

光の差さない薄暗い場所。

日陰は好きだ。自分の居場所が日陰だったから。

でも、今は日向も好きなんだ。

私は路地裏を抜けて表通りに出ようとして――、

「——ッ!?!」

誰かに口を塞がれ、再び路地裏の奥へと引き込まれる。

一瞬の出来事に気が動転して、何がなにやらわからなくなつて。気付けば、また日陰へと引き込まれていた。

「へ、へへ雫ちゃん！ やつと会えた！ やつと会えたんだ！」

「――！」

「ダメだよ騒いじや。僕たちの愛は秘密にしないと。誰かに知られたらスキャンダルになつちやうでしょ？」

口を塞がれたまま私は抵抗出来ない。信じられない力で押さえつけられ、背後から抱きしめられているようだった。

気持ちの悪い吐息が耳や首筋に走る不快感。粘つとした手汗をかいた掌。怖気が走るほどに気色の悪い声音。

「どうして抵抗するんだい？ あ、もしかして恥ずかしいのかな？ うへへ、大丈夫だよ、僕も恥ずかしいからさ」

興奮しているのが伝わっている荒い息遣い。汗から漂ってくる悪臭に思わず蒸せかえりそうになつた。

気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い――。

「ああ、雫、雫。ようやく僕たちは結ばれるんだっ！ や、やつと僕たちの愛が報われる時が来たんだよっ!!」

「嬉しいんだねっ、わかるよ雫。あれ、そうだったね。雫じゃなくて愛理だったね。ごめんね、ずっと気づいて貰えるのを待ってたんだよね？」

嫌だ。

こんなの嫌だ。

逃げ出そうにも押さえつける力の方が強くて振り解けない。

悲鳴をあげようにも口を塞がれて満足に叫べない。

一体どうすれば――。

「このまま逃げてしまおう。そうすれば、誰も邪魔しないっ。僕たち二人で生きていこう。ほかに邪魔者はいない世界で、二人で幸せな家庭を築こうっ」

「――！」

「うんうん！ 子供は何人欲しいかなあ。僕は女の子がいいなあ。場所はどこにする？」

君の言う通りにするよお！」

逃げられない。

逃げられない。

逃げられない！

誰か、誰か助けて――！

「どうして、抵抗するんだ!? 僕がこうして会いに来たんだぞ!? もっと喜べよ!」
嫌だ。

誰か、誰でもいいから。

「こ、この! お前は大人しく僕についてくるだけでいいんだよ! 売女風情が、僕に逆らうんじゃねえ!」

男の掌が私の頬を叩いた。

その瞬間、何も考えられなくなる。

痛みが恐怖を呼び起こし、私は抵抗する気もなくなった。

その場で腰が砕けたように座り込んだ私に男は満足そうに頷く。

「そうだ、最初からそうしてりゃいいんだよお前は!」

「ご、ごめ、んなさい」

「ああ、ごめんね!? そんなつもりじゃなかったのに! 痛かったよね? 大丈夫だよ

! 君がわがまま言うからつい手が出てしまったんだ!」

男が私を抱きしめる。

私は何も出来ず、ただ呆然としていた。

人は本当に怖い時、涙なんて流さないらしい。

何も考えられなくなって、何も抵抗できなくなるんだ。

追いつめられた私は、ただ諦めてしまった。

「これは愛の鞭だよ？　君が嫌いなわけじゃないんだ。ほら、立って。僕たちの愛の巢に帰ろう？」

やっと、変わることが出来ると思ったのに。

やっと、前に進めたと思ったのに。

やっと、寂しくなくなったのに。

やっと、友人が出来たのに。

——　やっと、一人じゃなくなったのに。

私の未来はあっさりと壊れてしまう。

「はい?！」

「ああ！　良かった！　君もわかってくれたんだね！　愛理！」

手を引かれ、あっさりとして私は従ってしまった。

男は私の手を握ったまま、どこかへと歩き出す。

こんなの嫌だ。

私はまだ、言峰くん之恩を返していない！

誰か、誰でもいいから——、

「おい、なにやっつてんだ」

薄暗い路地裏。

人に見向きもされない日陰者が集う場所。
そんな場所に、光を灯した人がいた。

佐倉愛里の恩人（3）

—— 士郎から忠告は受けていた。

「佐倉？」

「ああ、佐倉愛里だ。君と同じで友人を欲しがっていてね。清隆はまだ異性の友達はいないだろうか？ この機にどうだろうか？」

「確かに、オレとしてはありがたいが?！」

「彼女には既に話してある。君とも話しやすいはずだ。同じようにあまり活発でない子だから」

「まあ教室にいる時はかなり内向的には見えるな」

士郎はオレに佐倉を紹介してきた。

祝勝会に向かう途中、オレと士郎は並んで会場へと向かっている。洋介は既に会場にいて準備を手伝っているんだそうだ。

その道すがらの出来事だった。

佐倉愛里。オレと同じDクラス的女子生徒。地味で影が薄く、眼鏡をかけていることもあつた暗そうな印象を抱いていた。

確かに、オレとは話しやすいだろう。あまり活発的ではないし、必要以上に距離を縮めようとは思わないから。それを理解して、士郎も提案したのだ。

「分かった。今度会わせてくれ」

「良かったよ。断られたらどうしようかと思ってた」

「友達の頼みは断らないだろ？」

「そうだな。ありがたいかぎりだ」

ふと、士郎が足を止める。

何かが気になったのか、端末を取りだし無言で操作を始めた。暫くした後、端末を制服のポケットへとしまう。

そして、オレと目を合わせて真剣な表情を作った。

「一つお願いしたいことがある」

「どうしたんだ？」

「佐倉愛里から目を離さないでくれ。彼女はストーカー被害に遭っている。相談を受けてから俺が対策はしたが、それでも完全に問題を解消できたわけじゃない。もし、何かあれば清隆、君が彼女を助けてやってくれ」

そう言いながら士郎はオレの端末を手に取り、佐倉の電話番号を打ち込んだ。そしてGPS機能をオンにして、彼女の居場所が分かるようにする。現在は学生寮にいるよう

だな。

それにしてもストーカー被害か。穏やかじゃないな。

内気な佐倉が狙われることなんてあるのか？ いや、内気だから狙われているのだからか。

「俺は今日、手を離せない急用がある。祝勝会には参加するが、途中で帰ることになるだろう」

「そうなのか？」

「ああ、だから君に見ていてほしい。もし彼女に異変があればすぐに駆けつけてやってくれないか？」

「分かった。だが、事前に佐倉に気をつけるように伝えればいいんじゃないのか？」

「佐倉は俺に迷惑をかけることをいやがる。そんなことを伝えれば、迂闊に自分からストーカーへと近付くだろうな。あまりにも危険な行為だ」

それなら佐倉が気付かないうちに問題を解決した方がいいみたいだな。

「綾小路くん??？」

「は、え??？」

「なにやってんだって聞いている」

佐倉のGPSが路地裏へと向かい、そこで表通りに出る前に急に引き返したからおかしいと思った。異変を感じたオレは祝勝会を抜け出し、走ってここまで来たのだが、あの男が士郎の言つてたストーカーか？

かなり危うい状況だったようだ。二次会で行ったカラオケから近い場所で助かったな。

「こ、これはその?? そうだ、彼女が道に迷ったみたいだったからさ。教えてやろうと思つて」

「その割には随分と強引だな。それに佐倉の頬が腫れてるが？」

「だ、だから彼女を薬局に連れて行ってやろうと??」

「そうなのか？ 佐倉」

「?? あ、あの」

オレが、目撃者がいると言うのに佐倉から手を離さない。

このストーカー、かなり覚悟を決めているようだ。逃げる素振りを全く見せない上に、笑っている。

佐倉はどうして振りほどかないのだろうか。

佐倉の頬は赤く腫れ上がり、表情は固く、その瞳には何の感情も映していなかった。

「オレは彼女のクラスメイトだ。佐倉も他人のアンタよりオレが連れていった方がいい

と思うが？」

「ぼ、僕が彼女に頼まれたんだから、最後まで責任は持つよ。だから君は、もう帰っても」
「??佐倉」

「は、はい」

この男と話していても埒が明かない。

佐倉自身が動かないとオレは何も出来ないからな。合意の上だと言われてしまえば、オレは手出しが出来ないのだ。

だから、佐倉を見つめる。彼女の答えを促す。そうするしか、方法がない。

この路地裏には監視カメラがない。

それをわかつているからストーカー男はこんなにも強気なんだろう。

「お前は どうしたい?」

「あ、綾小路くん」

「ほら、早く行こう? 早く腫れた箇所を冷やさないと君の顔に傷が残っちゃったら困るでしょ?」

急かすように佐倉の手を引くストーカー男。

なんとしても離れないつもりだ。

まさか、佐倉は屈服してしまっているのか?

だから助けを求められないのか？

弱いことを言い訳に思考を停止してしまっている。恐怖から逃げることを諦めてしまっている。

なんと投げかければ佐倉を救える？

「わ、私は」

「もう、早くしろよ！ 時間がもつたいないだろ！」

考えろ。

考えろ綾小路清隆。

この場で、一番彼女の心を開く方法はなんだ。

「佐倉、本当にいいのか？」

「お前もさつきからごちゃごちゃうるさいんだよ！ 高校生のくせに年上を敬えないのか!？」

喚くストーカー男を無視してオレは佐倉へと問い掛け続ける。

彼女の心を開く方法。

佐倉愛里の友人は土郎だ。つまり、土郎は佐倉の心を開いたことになる。

ならば、土郎と同じことをするしかないな。

「佐倉、誰かに助けを求めるのは恥ではない。危機に瀕した時、逃げるのは恥じゃない。」

確かに立ち向かうのは勇敢なことだ。美点だ。だが、今の君はどうだ？ それは逃げて
いるのでも、立ち向かっているわけでもない。思考を止めているだけだ。それは君の本
心じゃないだろ？」

「うるさい！ うるさい！ うるさい！ 黙れえええ！」

士郎はどうやって彼女の心を開いた？

どうして彼女に成長を促している？

佐倉愛里の抱える悩みはなんだ？

考えろ。

士郎のトレースは完璧じゃないし、綻びがある。

故に、畳み掛けるしかない。

早期に決着をつけないといけない。

「君の抱えていた悩みを解決するには自分から動くしかない。いつまでも誰かが勝手に
やってくれると期待するな。今の君は成長とは程遠い位置にいる。目指している場所
からかけ離れている。逃げるな、足を止めるな。立ち止まるな佐倉愛里」

「黙れって言ってるだろ！ 早くしろ愛理！ おい！」

オレと佐倉との距離がストーカー男の手によつて離れていく。

ただ手をひかれるがままの佐倉をオレはただ見つめ続ける。

そして、言葉だけを投げ掛ける。

「変わりたいんだらう？ 今のままじゃ嫌だったんだらう？ だから、士郎を頼ったんじゃないのか？」

「こと、みねくん」

「愛理い！ 耳を貸すなあー！」

どんどんと距離が遠くなる。

急げ、決定的な言葉を探せ。

士郎の期待を裏切るな。士郎が与えた成長の機会を潰すな。

今はただ一人の友人の為に、未来の友人の為にことなかれ主義を捨てろ。

「誰かの手を借りるのは悪いことなのか？」

「——」

「友人を頼るのはいけないことなのか？」

「——」

「助けを求めるのは悪いことなのか？」

佐倉の瞳に光が灯った。

もう一押しだ。

「誰かの助けを待つな！ 自分から声を上げろ！」

「——わたし」

「佐倉！ お前の願いを叶える為だ！」

その言葉がトリガーだった。

突然、佐倉が立ち止まり、ストーカー男が瞠目する。強い力で引こうとしているが、佐倉はなんとか耐えながらオレへと縋るような視線を向けた。

彼女の双眸から涙が溢れ出す。

不器用に歪んだ笑顔を浮かべ、絞り出すように言葉を吐いた。

「あ、綾小路くん」

「おい、やめろ！ 黙れ！」

一瞬の空白。

安堵の表情にオレはいつでも動ける体勢に入っていた。

「——助けて」

「この、売女がああ!!」

刹那、弾かれたように駆ける。

男が反応するよりも早く肉薄し、佐倉を掴んでいた腕を握りしめた。

「——え」

「佐倉からその手を離せ、ストーカー野郎」

全力で握り潰す。

遠慮はいらない。今この瞬間にこの男は犯罪者となった。

士郎が成長させる為に動いていたというのに、友人の邪魔をしたこいつは許せない。

「が、ああああああ！ 痛い痛い痛い!!」

男は膝から崩れ落ち、涙を流し始めた。

ここでオレは止める気がサラサラない。

この男の心が折れるまで、決してやめない。

「や、やめろ！ やめてくれ！ あああああ!!」

男が佐倉の手を離れた。

まだだ。

「た、頼むやめ、やめろ！ やめてくれ！ お、折れっ」

「??」

「あ、ああっ！ わ、わかりましたっ！ おね、お願いです！ も、もう金輪際！ 彼女

には近づきません！ だ、だからあ！」

涙だけじゃなく、ありとあらゆる体液を撒き散らし懇願する。

心が折れたのがわかるとストーカー男から手を離す。そして、佐倉へと視線を向けた。

「あ、綾小路くん。その」

「大丈夫か？」

「え、あ、うん。私は、大丈夫」

頬の腫れが酷いな。

オレは佐倉の涙を拭いながら、端末を取り出し、警察へと電話を掛ける。このままストーカー男を逃がすつもりはない。

後々、またなにかされても困るからな。

「あ、あの！」

「どうした？」

「———ありがとう、綾小路くん」

「ああ、気にするな」

ワンコールの後、警察が電話に出た。

清々しく吹っ切れたような笑顔を浮かべる佐倉を横目に、事情を説明していく。そして、すぐに急行するという言葉を聞いてから電話を切った。

ふとストーカー男に視線を向ければ既に逃げ出していた。

「あ??逃げちゃったね」

「警察を呼んだ。どうせすぐに捕まるだろ」

「うん」

オレは佐倉を連れて表通りへと歩みを始めた。

4

直ぐに警察と先生たちが駆け付けてくれた。

私と綾小路くんは事情聴取をされ、保護されることになる。その後、私は治療を受けることになり、綾小路くんは改めて茶柱先生たちに事情を説明していた。

理事長までも謝罪に現れ、教師陣と学校関係者から深く頭を下げられた。思わず私も謝っちゃったけど、それを見て綾小路くんがツツコミを入れてきた。

あの一件で綾小路くんと友人と呼べるほど距離が縮まったみたいだ。

「佐倉。大丈夫だったのか?」

「言峰くん。??うん、私は大丈夫」

「すまないな、まさかこんなことになるとは」

「こ、言峰くんが謝ることじゃないよ! そ、それに迂闊にあんなとこにいた私が悪い

し」

綾小路くんたち全員が帰った後、寮へと戻っていた私の前に言峰くんが現れた。とても心配していたようで、私の姿を見て安堵の息を吐いていた。

なんか心配かけちゃってごめんなさい。

「君が無事で本当によかった。??それにしても犯人はどこにいったんだろうな」

「警察が敷地外からは出ていないはずだから監視カメラを辿って直ぐに見つけるって言ってたよ」

「??:そうか。それは心強い」

言峰くんは穏やかな笑みを作った。

良かった、いつもの彼だ。

本当に言峰くんには頭が上がらないな。

綾小路くんが助けに来てくれたのだから、言峰くんが事前に言ってくれていたおかげらしいし、前も私の悩みを聞いてくれた。

そして今も私の為に動いてくれている。

今日は嫌なこともあったけど、それ以上にいいことがあった。

一つは私が自分から声をあげたこと。自発的に動けたこと。雫ではなく、佐倉愛里として。

もうひとつは綾小路さんと友達になれたことだ。

まだまだ少ないがこれで二人目。着実と増えていつてる。

言峰くんは相談できてから何もかもが変わってきた。

薄暗い路地裏を歩く日陰者から、日向を目指して歩くようになったのだ。

これも全て、言峰くんのおかげだ。

本当に頭が上がらない。

いつか、言峰くんが困っている時に力を貸してやれるようになれたらいいな。

——そう、言峰士郎くんは私、佐倉愛里の恩人なのだ。

5

有り得ない。

こんな結末、有り得ない！

おかしいじゃないか！

なんで僕がこんな目に遭わなきゃならないんだ！

ただ愛理への愛を！ 彼女の愛を！

雫の愛に報いようとしただけなのに！

「おかしい、こんな間違ってる?!」

彼女を見つけたのは偶然だった。

ネットで見つけたグラビアアイドルの雫。灰色だった僕の人生に光が灯った瞬間があったのだ。

何も持たない僕に、神が唯一くれたのが彼女という存在だったのに！

それなのに、どうして邪魔をするんだ！

僕と彼女の愛は本物だったんだ！

おかしいだろこんなのに！ 僕のたった一つの愛さえこの糞な世界は踏み潰すのか！

「僕が、一体どんな思いで?!」

「知るかそんなこと」

「誰だっ!」

背後から声を掛けられ振り返った。

階段の手前に立っていたのは神父のような格好をした男だ。

能面のような無表情を貼り付けている。

「お、お前！ 言っただけが違うじゃないか！」

「何も間違っていないと思うが？」

「だ、だってお前が！」

「たしかに俺は彼女は彼女をお前を愛していると言ったな」

「そうだ！」

この男は僕の前に現れて、助言をしてくれた！

僕と雫の愛を祝福してくれた！

だから、こいつの言う通り彼女をつけ回すこともやめたし、メールボックスに手紙を送ることもやめた。SNSで愛を囁くのも我慢したんだ。

それもこれも全部彼女と結ばれるためだって言ったのに！

「そうだろ！ お前は嘘を吐いたのか!?!」

「俺は何も嘘を吐いていないが？」

「でも、お前の言う通りにならなかったじゃないか！」

「そうだな」

「なら、責任を取れ！ 僕はどうすればいい!?!」

この男を頼るしかない。

こいつは僕たちを邪魔しなかった！

こいつの言う通りにすれば、またきつと雫と??!

「死ぬといい」

は？

「このまま自分の手で死ぬといい」

こいつ、何を言ってる??。

どういうことだ！ まさかこいつ！

「僕を騙したのか!？」

「騙してなどいない。俺は例えしか言っていないからな」

「何を??あ、あの時ッ！」

「例えば、君たちの愛に障害があったとしてそこで諦めるのは間違いだ。君の愛は本物だから、まずは彼女に好かれる方法を教えよう。??と例えの話はしたし、確かに佐倉愛里から好かれる可能性のある方法を教えた。何も騙していないし、嘘を吐いていない」

「お、お前ええええ!!!!」

こいつ、初めからそのつもりで！

僕をこうするつもりで??!

「僕が、どんな思いで！」

「薄汚いストーカー風情が愛を語るな。俺は果実は好きだが、それを横から手を出されるのが嫌いだ。汚されたものを誰が食べる？ それに、お前のような汚らしく醜い果実など手を伸ばす気にもならん」

「許さない！ 絶対に許さない！」

「お前はもう社会的に死んだ。役目も果たした。もう存在価値はどこにも残っていない。さっさと死んでくれ。見るに堪えない」

「ああああああああああああああああ!!!」

この男は絶対に殺す！

絶対に殺してやる！

僕は神父の皮を被った悪魔へと飛びかかった。

だが、気付けば空を舞っていた。

自分が階段から落ちていると認識したのは地面に激突する寸前だった――。

佐藤麻耶の ■ ■

初めはちよつとかつこいいいなって思っていた程度だった。

入学式の日、まだグループわけを明確にされずにいた女子たちの間で話題作りとして出てきたのが平田くんと言峰くんだ。

二人はDクラス男子の中でもずば抜けてイケメンで、そして性格もよくスポーツ万能、頭も良い。そんな優良物件だった。輪を調停するのが平田くん、輪を作るのが言峰くん。そんな感じの認識だったと思う。

そして、この二人は初日から仲良くなっていた。

一部女子からは目の保養なんて呼ばれてたけど、確かに分類の違うイケメン二人をみていてときめかない女子は少ないだろう。

あの日、平田くんの提案で自己紹介が始まり、私の前の席だった言峰くんへと順番が回ってきた。

彼は優雅な振る舞いで席を立つと、聞き取りやすく穏やかな声音で淡々と話し始めた。

「俺の名前は言峰士郎。中学校では冬木市にある教会で神父見習いをしてた。まあ見習

いって言っても大したことはしてないけどね。後は、スポーツ全般は得意かな。身体を動かすことは好きだし、勉強するのも嫌いじゃないよ。教えて欲しいところがあったら存分に頼って欲しい。皆とも仲良くしたいしね。最後になったけど、趣味は読書やボードゲーム、スポーツとか。みんな、三年間よろしく」

優しい話し方だったと思う。

今思い返せばかなり違和感のある話し方だ。もしかしてこつちが素だったりしたのかな。

当時、私はその顔に見惚れてしまっていた。

端正ながら、どこか冷めた感じの目つき。クールと言い換えれるのかな。

平田くんが正統派のイケメンとするなら、言峰くんは比較的クールなイケメンだった。

ぼー、と気を取られ私は自分の番が回ってきていたことに気づかずにはいたけど、言峰くんはそんな私に合図するように視線を送ってくれた。

頬が熱くなった。

周囲から見ても、確実に私は赤面していたと思う。

でも、いつもより饒舌に自己紹介が出来た。

どうしてかは分からない。もしかしたら、言峰くんの存在が私に安心感を与えてくれ

ていたのかもしれない。

私は、言峰くんがこの時、既に惚れていたのかもしれない。

1

入学式が終わり、私は軽井沢さんに遊びに行かないか、と誘われていた。

平田くんと女子数人のグループだ。何故か、言峰くんがいなかったから直接平田くんに聞いてみれば、学校施設のひとつに教会があるらしく、その管理を申し出に行くみたいだった。

それを聞いて、私は言峰くんに近づくチャンスだと思った。

軽井沢さんたちに謝り、職員室に向かった言峰くんを探しに行く。

この時に少なからず女子グループから反感を買っていたみたい。でも、そんなことどうでもよかった。

結果的にだが、言峰くんと一番親しい女子として、平田くんの彼女である軽井沢さんと同じ地位に立てたんだから。

そんな話は置いて、言峰くんはすぐに見つかった。

職員室前で茶柱先生と何か話していたのだ。

「契約通り、鍵の管理と教会の所有権はお前に譲渡する。事実上、教会はお前のものだ。学校側は干渉しないし、保持をしてくれる以上、毎月PPも支払われるだろう」

「ありがとうございます。しかし自分の手に負えない破損の修理等は学校側に依頼できるのでしょうか？」

「その場合は我々から業者を手配しよう。勿論、代金については故意による損害では無い限り、こちらが負担する」

「了承致しました。時間を取らせてしまったようで申し訳ないです」

「気にするな。これも教師の仕事の一環だ。使うものがない施設を利用してくれる者がいるのなら喜んで手を貸す」

「ありがとうございます。では、また後日に。失礼します」

「ああ、またな」

茶柱先生は話を終わると即座に職員室へと戻っていった。言峰くんの手には鍵が握られており、また契約書のようなものも持っている。

私は彼に近づき声を掛けた。

「言峰くんっ」

「佐藤か。洋介たちと遊びに行くと思っていたのだがどうかしたのか？」

「あ、あの私もなにか手伝えることないかなって」

「そうか。感謝する佐藤。実は一人で掃除するのは大変だと思っていたんだ。手を貸してくれるのなら喜ばしいよ」

「よ、よかった！ 何でもするからね！」

やった！

言峰くんと一緒にいられると思うと気分が上がる。嬉しさからいつもより声が上擦ってしまったけど、そんな私を言峰くんは微笑ましいものを見るような目で見てきた。

??ちよつと恥ずかしい。

「では、早速教会に向かおうか」

「うんー」

私は言峰くんについて行って教会に向かう。

その間、世間話をして色々と言峰くんの情報を探った。好きな物とか、好きな音楽とか、中学の時はどうだった、とか色々。

でも言峰くんは聞き上手でむしろ私の事ばかり話すことになった。んー、あんまり上手くないなあ。

教会に着く。比較的寮から近く、何時でも行ける距離だ。

それより驚いたのが、敷地の荒れ具合だと思う。雑草が生え、門から教会へと続くコ

ンクリートのタイルは見えないほど土に覆われている。

なるほど、これは酷い。

「??流石にこれ程とは思わなかった。建物自体は綺麗だが、敷地全体には手入れして
なかったようだな」

「これ、今から全部綺麗にするの?」

「ああ、大変そうだな。無理せずやめとくのなら言ってくれ佐藤」

「だ、大丈夫! 全然余裕だよ!」

??全然余裕じゃなかった。

まず草むしりから始めた私たち。

まだ4月だというのに汗水垂らしてしまった。言峰くんが事前にジャージを貸して
くれていたおかげで汚れは気にせずに済んだけど。

雑草を抜き終わると、今度はタイルの清掃に入った。ホースを蛇口に取り付け、水を
掛けながらブラシで擦る。

草むしりと違って大変さは減ったが、両方の作業で腰をかなりやってしまった。

この二つの作業が終わった頃、もう夕方になっていた。

教会の玄関で腰を下ろし息を吐く私へと言峰くんはスポーツドリンクを差し出して
くれる。

「汗をかいただろうから飲んでおくといい。まだまだ四月とはいえ長時間日に当たっていたんだ。熱中症や脱水症状を起こす危険もある」

「あ、ありがとう」

「礼を言うのはこちらだよ佐藤。君のおかげでかなり早く済んだ。俺一人ならきつと夜までかかっていたかもしれない。本当にありがとう」

「べ、別にいいよつ。私が好きで手伝ったんだから」

「それでもだ。出会ったばかりの間柄だと言うのにここまでしてくれるとは、優しいな君は」

言峰くんは私の隣に腰を下ろす。彼の手には私と同じスポーツドリンクが握られており、額から垂れる汗を首に掛けたタオルで拭っていた。

ちよつと距離が近い。私、汗臭くないかな？

不安に思つて、スンスンと自分の首元を嗅いでみる。多分、大丈夫なはず。

言峰くんつて全然汗臭くないよね。作業中にそれとなく匂つてみたのだけど、むしろいい匂いがした。中学の時の男子は体育の後ものすごく汗臭かったのに。香水も使つてないんだよね？

なんか私、変態みたいだ。

彼は私にジャージを貸していた為、スウェットパンツにインナーみたいに着用した半

袖のアンダーシャツを着ている。

上半身の筋肉の凄さが目に見えてわかった。中学の時に見てきた男子とは大違いなほど、鍛えられた肉体。その低めな身長を目立たせないほどの筋肉が存在感を放っている。

はつきりいつて目に毒だ。

それにしても、かなり距離が縮まったと思う。

同じ大変な作業を二人でやったことで一体感みたいなのが生まれていた。

名前呼びとかできるかな???

「あ、あの言峰くん」

「どうした?」

「あの、嫌じゃなければなんだけど、名前で呼んでもいい?」

「ああ、構わないぞ。ここまで手伝ってもらったんだ、遠慮せずなんでも言ってくれ麻耶」

「——っ! うん、士郎くん!」

心臓が止まるかと思った。

士郎くんはそんな私の動揺を見て意地悪な笑みを浮かべている。どうやらわざとやったみたいだ。

もう、彼は少しだけ意地悪なところもあったらしい。
やっぱりかっこいいなあ。

どうやったたら彼に振り向いてもらえるだろうか。私が櫛田さんに可愛さで負けてることも知ってるし、軽井沢さんのように積極的ではない。

どうしても、自信が湧いてこない。それでも、私は彼の隣に居たいと思ってしまう。
まだ出会って初日なのに、こんなにも好きになるとは思わなかった。

「一応、明日の放課後は花壇を作ろうと思ってる。その後は教会内の掃除だな」

「??明日も手伝っていい?」

「勿論だ。君がいれば心強い」

そんな感じで私たちの関係は始まったのだ。

2

「そう言えば、この前特別棟で佐倉さんを見たよ。何してたんだろう」

「佐倉?」

「うん。土郎くんも知ってるでしょ?」

「ああ、知っているよ。たまに会話もする仲だからな。それにしても特別棟、か。彼処に

は何かあったか？」

「さあ？ 特に何も無いと思うよ」

そうか、とだけ士郎くんは呟いた。

四月半ば。私たちは喫茶店にいる。女子に人気のこの喫茶店は、席に座っている大半が女子だ。士郎くん以外に男子の姿は見えない。

故に目立つ。私たちは、というより士郎くんはかなり注目を浴びていた。他のクラス的女子や他学年の先輩たちがゴソゴソと士郎くんを見ながらなにやら話している。

私は少しだけ優越感に浸った。

「麻耶、軽井沢たちは良かったのか？」

「軽井沢さん？ どうして？」

「今日は洋介と軽井沢たち女子グループでカラオケに行くって聞いていたが」

「あー、大丈夫だよ。軽井沢さんたちにはしつかり断りを入れてたし、それに士郎くんに会いたかったから」

「そうか。そう言われて嬉しいかぎりだ。だが、俺以外との友人関係をおざなりにするのはいただけないな」

「そう？ 軽井沢さんたちは毎日おしやべりしたりできるし、たまに遊びに行ってるよ？ 士郎くん二人きりの時間って少ないから」

実際そうだ。

軽井沢さんたちとは授業の合間などに話せる。昼休みもよく話している。でも、土郎くんと二人きりの時間は放課後にしかこない。

私にとって大事なのは土郎くんなのだ。こうして放課後になる度、彼に会いに行つてるのはほかの女子への牽制も兼ねてる。

土郎くんは知らない間にすぐ女の子と仲良くなつてるから。

「しかしなあ」

「もうっ、私はちゃんと折り合いはつけてるのっ。軽井沢さんたちも納得してくれてるからっ」

「ふむ、なら大丈夫??なのか?」

「大丈夫だつて! そんな親みたいなこと言わないでよ」

「すまん。君が孤立しないか心配だったんだ」

「それは分かつてるけど、大丈夫だよ。それに土郎くんがいる限り孤立はしないでしょ」
「それは、そうだな」

土郎くんは本気で私の身を案じている。

彼は心配してくれている。彼には内緒だが、土郎くんと常に一緒にいるから多少女子の輦蹙は買つてる。偶に陰口言われている時あるし。

「だけど、面と向かって何かを言われることは無い。一重に私と士郎くんの距離が近いからだ。」

「皆、士郎くんの反感を買いたくないのだろう。Dクラスの中で彼の存在は大きい。誰もが好意を持っている。」

「故に、私になにかしてくる人はいないはずだ。」

「でも正直、助かっていることはあるんだよ。あんまり軽井沢さんたちと遊んでないおかげでptの節約はできてるし」

「まあ俺も数度彼らと遊んだが、ptの浪費は凄まじいものだったな」

「でしょ？ いや遊ぶのは楽しいんだよ？ 軽井沢さんたちとは気も合うし」

「たしかにな」

「士郎くんは何かが琴線に触れたのかくつくつと喉を鳴らして笑った。」

「なんだか猫みたいだよね士郎くんって。平田くんは、犬かな？」

「最近、綾小路くんが士郎くんと話している姿をよく見かけるようになった。士郎くんは友人になったって言ってた。」

「よくよく見ると綾小路くんも結構イケメンだよ。これから三大イケメンって言われる日が来るのかな、なんて。」

「ああ、ptで思い出した。麻耶、君は教会の掃除を手伝ってくれるだろう？ その事に

ついでだ」

「うん、よく手伝ってるけど、それがどうかしたの？」

「俺が学校側から p t を貰っているのは教えたな。その一部を君に譲渡したいと思ってる」

「ええっ!? いいよそんなの!」

「しかしだな、無償で手伝ってもらうわけにはいかないんだ。君の善意を利用していろいろで心苦しい」

「私だっけ見返りを求めているわけじゃないんだよ? 士郎くんの手伝いがしたいからなのに」

「??すまないな、忘れてくれ。君が拒否しているのに押し付けるわけにはいかないな。俺のわがままだった」

そう言つて士郎くんは頭を下げた。

私は慌ててやめさせる。士郎くんはそれに応じたけど、もう一度だけ謝罪した。律儀だなあ。そんなの要らないのに。

それに私は十分見返りを貰っているのだ。士郎くんに見てもらえる、士郎くんと話すことが出来る。

これ以上に今は望むものがないし、p t を受け取るつもりはなかった。

その後、喫茶店を出ると教会に向かい、私は二人きりの時間を楽しんだ。

ねえ士郎くん。

貴方は私のことどう思ってるのかな。

躍動する愉悦至上主義者（原作三卷）

綾小路清隆の親友

須藤がきっかけとなったDクラスとCクラスの間に起きた諍い。

本来、審議会にて勝つ予定だったこの戦いは、堀北の用いた策によつて解決ではなく解消がなされた。被害者が訴えなければ、そもそも何もなかったことになる、ということだ。

オレは堀北と共に特別棟で石崎たちに会っていたのだが、彼女の騙りは凄まじいものだった。士郎に認められた、という自信が堀北の騙りに真実味を与えたのだろう。

その後の佐倉のストーカー事件も無事幕を下ろしたし、いつも通りの日常が帰ってきた気分だ。

オレは親友である士郎や洋介と夏休みに遊び尽くそうと考えていた。

Dクラスが誇る2大イケメンにして良心の二人。オレにとつて何よりも優先すべき存在。

そんな二人の内、士郎に放課後遊びに行こうと誘われ、またもや銭湯に来たのだが?。「うーん、偶には下々の生活も悪くない。普段なら私が浸かるに値しないこの湯も、それ

なりに価値はあるものだねえ」

「一般人には一般人なりの味わいと言うのがあるんだよ。お前の言う下々が富豪に憧れるように、下々が持ちえて富豪が持ちえないものもある、ということだ」

「ほう、他にもあるのかね？」

「詳しくは俺も知らない。あの男に引き取られるまではお前と同じ富豪側の人間だったからな」

オレの隣には士郎、その隣に高円寺がいた。三人で並ぶように湯船に浸かっている。なんだこの状況。

士郎と高円寺が昔ながらの仲、いわゆる幼馴染にあたる関係というのは知っていた。だが、オレと高円寺の間に会話があったことはなく、事実上初対面のような状態で裸の付き合いをしている。

本当に何だこの状況。

「綾小路ボーイは知っているかね？」

「いや、オレもあまり詳しくはないな」

「おや？ 君からは上に立つ者の風格がないが？」

「知らないからって富豪生まれとは限らないだろう六助。当たり前のようにお前の思考基準を他者に強いるな」

「私に合わせると?」

「そんなの知るか。俺はお前の常識を他人に強制するな、と言ってるだけだ」

「シエロ、君も私と同じく上に立つ者なはずなんだがねえ」

上に立つものの風格ってなんだろうか。

高円寺のように堂々とした立ち振るまいのことか? いや高円寺からは金持ちの

オーラのようなものが出てくる。一目見るだけで金持ちだとわかる感じだ。これに立つものの風格なのか?

でも士郎からは感じないな。どちらかと言えば他者の上、つまり支配とかそこら辺のことなのだろうか。

「しかし、綾小路ボーイ。君は不可解だねえ。上に立つ者の風格はない、でも上に立てる者の力量は持っている」

「?どういう意味だ?」

「君は支配者の素質を持っているのさ。既に支配者である我々には劣るがね」

「そんなのオレにあると思うか?」

「君の答えは聞いてないし質問に応える気もない。それくらい自分で考えたまえよ綾小路ボーイ」

それっきり高円寺は口を開かなくなった。脱力し、湯船で寛いでいるだけだ。

支配者の素質、か。

有り得ない話ではない。今はそうしていないだけで、やろうと思えば不可能では無いのだから。

しかし驚くべきはその慧眼である。

本当に計り知れない男だ。

「気にするな清隆。その男は自分の言いたいことだけ言って、思わせぶりな感じにしているだけだ。君の想像より浅い男だよ」

「結構ズバツと言うんだな」

「酷いねえ。これでも上に立つ者の責任を果たしているだけだと言うのに」

「酷いのはお前だ六助。相手に疑問を抱かせるだけでなく、その解消方法を教えなければ意味が無いだろう」

「君は飢える人間に魚を施すのかいシエロ。ナンセンスだねえ、私は釣り方を教えているのだよ。浅いのは君の考えの方さ」

「お前がやっているのは撒き餌だ。釣り方を教えず餌だけ撒いたって意味が無いはずだが？」

「私は閃きを与えているのさ。撒き餌に集う魚を捕まえる方法を自ら思いつかなければ成長には繋がらないだろう？」

「お前は思いつく前提で話すんだな」

「そういう君はまるで思いつかないことを前提としているようだ。一般人を見下しているのは本当に私の方かい？」

物凄い論争だな。

傍から見れば口喧嘩しているようにしか見えないが、当人たちにそういうつもりはなさそうだな。

どちらも真剣な表情で、相手をバカにしている様子は見られない。

このままでは論争は平行線のままだと思ったのか、士郎が立ち上がった。

「??あの日の続きをやるか、六助」

「次やったら負けると忠告したと思うが、シエロ」

同じように高円寺も立ち上がる。

お互いに全裸で向かい合っていた。このまま殴り合いを始めそうな雰囲気だ。

オレはとてつもなく気まぎれに感じたので口を挟むことにした。

「あの日の続きってなんだ？」

「中学二年の冬だったねえ。今のようにお互いの主張が納得できない時、我々はゲームをするんだ。実力で相手を黙らせるのさ綾小路ボーイ」

「前は神経衰弱をやった。四セットのトランプカード、ジョーカー四枚を含んだ21

2枚でやる神経衰弱だ。終盤、邪魔が入って決着がつかなかったが」

「今までの戦績は五分五分。お互いの得手不得手の不公平な勝負さ。だからこそ、次のゲームで我々の中で序列を作ることになったんだよ」

「負けた方が折れる。勝った方の主張が通る。社会でも罷り通る常識だ。だからこそ、不平等で不公平な勝負の方が真に実力の優劣が示されるんだ」

昔から士郎と高円寺は何かしらのゲームで主張を無理やり納得させていたようだ。

それにしてもトランプカード四セット分の神経衰弱は凄くないか。記憶力が良いとかの話じゃないと思うんだが。

「ちなみにその神経衰弱のルールは？」

「絵柄数字が全く一緒のカードを連続で四枚引くと得点になる。得点はカードに表記された数字と同じだ。互いに順番ずつカードを引くが、二枚目を引いた時点で一枚目と同じカードでなければ即行で相手のターンとなる」

「ジョーカーは得点の入れ替え。一発逆転の大チャンスを握る存在だねえ。ちなみに一度でもジョーカーを引くと揃わなければ問答無用でシャッフルが行われる」

「考えたの誰なんだ？」

「?!俺だな」

「記憶力はシェロの方に軍杯が上がるだろうねえ。それは私も認めるところさ」

「?? 士郎に有利なゲームだが高円寺は不満はなかったのか？」

「実にナンセンスだ綾小路ボーイ。さつき言ったばかりだろう？ 我々の間で有利不利は関係ない。真に実力を測るゲームならばそれを覆して見せてこそ実力者、という訳だよ」

成績上位陣ならではの考え方だ。

身体能力、学力、知性、判断力その全てに秀でた彼らだからこそ成立する勝負であり、破られることの無いルールなのだろう。

一般人とは価値観が違う。

実力があるからそんなことが言える、とかそういう話ではない。そういう考え方ができるから実力者としてなるべくなくなったのだ。

「?? 取り敢えず上がらないか？」

士郎と高円寺の論争は聞いていて面白いのだが、環境が悪すぎる。

このままでは逆上せそうさ。

二人は顔を見合せたあと、仕方ないと言わんばかりに脱衣所へと向かうのだった。

オレは豪華客船にいた。

どうやら茶柱が言っていたバカンスとは本当のことだったらしい。一年生全員を乗せた客船が海を優雅に進んでいた。

そんな楽しい雰囲気とは裏腹にDクラスの首脳陣たちが集まって会議をしている。場所は学校側から与えられたオレたちの部屋だった。

部屋割りはオレ、洋介、土郎、高円寺である。高円寺を土郎に押し付けとけばなんとなかなるだろう、という学校側の意志のようなものを感じるな。

部屋に集まったメンバーは五人だ。

オレ、洋介、土郎、堀北、櫛田である。高円寺は既に外出した。何故か参加させられているオレだが堀北に強制的に連行されたのだ。

そういう所が友達が出来ない原因だぞ堀北。いや、でもおかげで一人ぼっちで船の中を歩き回ることを回避出来たな。ありがとう、お前に友達ができるよう応援しているぞ堀北。

「特別試験がある可能性？」

「ええ、これまでの一年生のCPの変移を調べてみたらちょうどこの時期と重なったの。何かしらの試験があるとみていいわ」

「確かに、CPを左右する試験があってもおかしくはないな。そうでもしなければクラ

ス間の差が埋まらない」

「そうだね、覚悟をしておいた方が良さそうだ」

堀北が話したのはこの豪華客船でCPの変動する特別試験がある可能性。士郎や洋介も同意しているし、オレもそうだと思っている。

まず一学年が集められていること、プールの最初の授業で泳ぎが必須だと言っていたこと、判断材料は結構転がっていた。それに気付けたのはおそらく士郎と高円寺くらいだろうか。

堀北でさえ、CPの変移を調べなければ分からなかっただろう。しかし、士郎は気付いていなかったフリをしているみたいだ。特に口を挟む気もないので黙っておこう。

「??なんとなくだがクラス主体となる試験になりそうだな」

「どういふことかしら言峰くん」

「前提である話だが、我々が競い合うのはあくまで他クラスだ。つまりクラスで協力して試験に望む必要がある。確証があるわけではないが、個人で競い合う試験ではないと見ていいだろう」

「つまり、チームワークを主とした試験になると?」

「ああ、俺たちにとって特別試験は今回が初めてだ。つまりクラス競争が今後なされるとして前提であるチームワークを培う試験かもしれない」

「そうかもつ。つてことは何かしらの仲間内に不和を齎す試験の可能性があるつてことだよねっ」

「そうとなれば、なかなかきついかもね。僕たちはまだ完全に一致団結出来ているわけじゃない。そこを突かれれば、クラスが崩壊する未来も有り得る」

「??そうね。前の私がそうだったように、まだまだ個人の力でAクラスに上がろうとしている人も少なくないわ。何とかして全員の歩調を合わせないといけない」

試験の内容が分からない限り、対策は出来ない。

だが、傾向が分かれば、何かしらの対処は出来るかもしれない。そういう話だろう。Dクラスは一枚岩じゃない。まだまだ集団としてバラバラの状態だ。危機感の欠如、とも言えるが真剣に試験に取り組もうとしている人間は多くないのだ。

池や山内がその代表だろう。Aクラスに上がりたい、でも楽もしたい。そういう気持ちで歩調を乱す可能性がある。

「と、なればまずは意識の共有を優先しなければな。全員が同じ意気込み、同じ志を持たなければ不和は必ず生まれる」

「須藤くんのように意識改善出来ればいいんだけれど」

「??幸村くんや長谷部さんたちは集団行動苦手そうだもんね」

「うん、彼らに強制は出来ない。でも、Aクラスを目指しているのは同じはず。僕らDク

ラスが纏まること自体は難しいことじゃないと思う」

「そうだな洋介。最底辺に落ちたからこそ、どん底から這い上がる気概は持ち合わせているはずだ。協力することは出来る」

オレたちDクラスにとつて最重要なのは勝つことじゃない。チームとして纏まることだな。

その手段こそオレは持ち得ないが、この四人ならば容易なことだろう。オレは今までと同じように静観を保っていれば問題ない。

「綾小路くんにも協力してもらおうよ?」

やめろ堀北。

「??オレにできることはないぞ?」

「貴方、協力するって言ったわよね? 覚えていないなんて言わせないわよ」

「確かに言ったが??」

あれは勉強会についてだった気がするんだが。記憶を捏造してないか? とうかが曲解してまでオレを前に出そうとしないでくれよ。

そんなこと言ったら――、

「綾小路くんは卑下し過ぎだよ。もつと自分に自信を持つてっ」

「そうだよ。清隆が色々してくれていたのは知ってるよ。勉強会の時だって、堀北さん

と一緒に須藤くんを赤点から掬い上げてたよね」

「ふふ、清隆も同じDクラスの一員なんだ。君を邪険に扱う人間はいない」
ほら、こうなるだろ。

いや分かっててやったな堀北。オレが断れない状況を作りやがった。強かになったのはいいが、オレに頼るのはやめてくれ。

他力本願ばかりしていると友達が出来ないぞ。

「友人としてお願いする清隆。俺たちに力を貸してくれないか？」

「僕も友人として、君の力を借りたいと思ってる。お願いできないかな？」

「是非やらせてくれ。オレにできることがあるばなんでもやるぞ」

もはや怖いものは無い。

オレたちは親友なんだ、手伝わないわけがないだろ。いや、そういえばオレたちは同じ施設で育った仲だった気がする。

オレの脳内から溢れてきた記憶がそれを物語っている。

「??扱い方が分かってきたわね」

ボソツと堀北が何か呟いた。

聞き取れなかったが今はどうでもいいことだ。オレはこの記憶にある風景を堪能するのに忙しい。

「清隆の助力も得られたことだし、当面の目標はチームで纏まることで相違はないな？」

「ええ、ないわ。試験の勝敗以前に優先すべきだもの」

「そうだね、今回は勝ち負けよりも皆がクラスとして一致団結できるようにしないと」

「頑張ろうねっ」

意見も纏まり、第一回首脳会議は終わりを迎えた。

「清隆、これから洋介たちと昼食を取りに行くんだが、一緒に来ないか？」

行くに決まっている。むしろ行かなくて何をするというのか。

「あら、綾小路くんはこれから私と作戦会議よ。申し訳ないけど彼を借りていくわ」

「そうか、なら仕方ないな。また後でな清隆」

おのれ堀北！

一時間後、堀北から開放されたオレは士郎に連絡を取り、客船内の喫茶店で落ち合うことになった。

先程の作戦会議で堀北から指示されているのは積極的に試験に参加すること、堀北が呼んだら直ぐに来ること、堀北の指示には「はい」と「イエス」で答えること、の三つだ。暴君か。

それ以外にも小さな指示が幾つかあったが本気でオレが守ると思っているのだろう

か。オレは何かあったら士郎と洋介の指示を優先するつもりだぞ。

士郎は既に喫茶店内でコーヒーを飲んでいた。

オレはその席に近付き、一人の少女が士郎の隣に座っていることに気がつく。彼女は、前に士郎と噂になっていたCクラスの女子か？

「来たか清隆。紹介する、俺の友人である椎名ひよりだ」

「こんにちは綾小路くん。Cクラスの椎名ひよりです」

「あ、ああ。綾小路だ」

「喫茶店に彼女が居てね。この際、君に紹介しようと思っていたんだ清隆。争いごとが嫌いなひよりと君は気が合いそうだと思っただよ」

「どうやら士郎はまだオレに友人を増やそうとしてくれてるらしい。最高だ。」

椎名ひより。かなり大人しい感じの女子で、おっとりしたような雰囲気がある。活発的な生徒と比べて仲良くはしやすそうだな。

「綾小路くんは本を読みますか？」

「え、あ、読むがそれがどうかしたのか？」

店員に注文を頼もうとした瞬間に声を掛けられて吃ってしまった。

椎名は続けて言う。

「どんな本を読みますか？ 漫画？ 小説？」

「まあ小説だな。最近は純文学なんか読んだりしている」

「そうですか。今までどんな作品を読んだことが？」

「そうだな、つい最近読んだのは夏目漱石だな。『それから』というやつだ」

「夏目漱石ですか。人間関係を深く描写するのが特徴的ですよ。私も読むことがあります。海外の小説は読んだことがありませんか？」

「それほど多くはないが『ABC殺人事件』とか有名なものが多いな」

やけに嬉しそうだな。興奮しているのか、瞳が大きくオレを映している。

士郎はまるで子供が戯れているのを見守るような穏やかな表情を浮かべている。オレと椎名が仲良くしているのを嬉しそうに見ていた。

『ABC殺人事件』ですか。あれは——」

「——」二緒してもよろしいですか？」

鈴が鳴るような声だった。

椎名の話を遮り、オレたちに接近してきたのは銀髪の小柄な女子生徒。杖をつき、背後に数人の男女を侍らせている。

「話を遮ってしまい申し訳ございません。私も話に加わりたかったもので」

「坂柳か。構わないよ、座りたまえ」

士郎は立ち上がると、椎名とオレの隣の椅子を引き、少女を誘導する。ちようど士郎

に対面する位置だな。

「他の者はどうする？ 席がないので、必要であれば店員に声をかけるが」

「いえ、そのままで大丈夫ですよ」

「そうか？ 君らがそのままでもいいのならそうするが」

士郎が席に着いた。

オレたち四人の中で静寂が訪れる。同じテーブルを囲む異色の組み合わせ。各々が違うクラスに所属しているという状況だ。

「私はAクラスの坂柳有栖です。よろしくお願いします皆さん」

坂柳、そう名乗った少女の襲来は予期せぬものだった。

綾小路清隆の親友（2）

坂柳有栖。

ニコニコと人懐っこい笑みを浮かべ、オレたちを見つめている。正確にはオレと士郎をだな。椎名には見向きもしていない。

窓から差し込んだ光に反射しその輝かしい銀髪が煌めいた。

どこか幻想的な雰囲気を感じている。

「——それで、坂柳はどうしたんだ？」

反射的に問い掛けてしまったのはオレだった。

士郎から声がかかるであろうと予測していたその少女は、少し意外そうな表情を作る。

「偶然、この喫茶店で言峰くんたちを見かけてたもので??お話がしたくなつたんです。

ダメだったでしょうか？」

「いや、そういうわけではないが」

「良かったです。そう言っていただけで」

挑戦的な眼差しで坂柳は笑う。

Aクラス、その頂点に位置する二人の生徒。一人は確か、葛城と云ったか。葛城とクラスを二分しているのが、目の前の坂柳有栖だ。

オレも士郎も接点はないと思っていたのだが。

坂柳は不気味なほどに穏やかな表情を浮かべている士郎へと視線を向ける。

「言峰くんはAクラスの生徒にも相談に乗ってあげているそうですね」

「俺は教会の人間だ。悩みを抱える者にクラスは関係ない。故にたとえAクラスであろうとBクラスであろうとCクラスであろうとも、等しく悩める子羊だ」

「ふふ、葛城派の生徒には良くしていたようぞ?」

「悩みを打ち明けられたのならば、それに尽力するのは神の信奉者として当たり前だと思おうか?」

「その貴方の当たり前が私の邪魔をしている、としてもですか?」

どうやら坂柳は士郎が葛城派に助力していたのが気に食わないらしい。

ただクラスの争いごとには干渉していないと思うのだが、それは八つ当たりではないだろうか。

士郎も流石に苦笑いを浮かべている。

「ふむ、俺の行為が邪魔、か。坂柳、それは君の能力不足が原因ではないか? 俺は入れ知恵もしていないければ、勉強を教えたいたわけでもない。つまり、単に君のリーダーと

しての手腕が足りなかった。ただそれだけだと思うが？」

「そうですか。人のせいにするな、と？」

「ああ、自分の行いに成果が表れなかったとして、それを他者の能力不足、あるいは他者の行いに不満を抱く人間はリーダーには向いていないよ。それではただの暗君だ。それに未だクラスが二分されている現状が、君にリーダーとしての魅力がないと如実に示している」

「ふふ、言ってくれますね」

坂柳の背後に立っていた数人の男女が分かりやすく士郎に響蹙を抱いている。たった一人女子生徒は誰にも見えない位置でほくそ笑んでいたが。堀北の時もそうだったが、相談者でなければ士郎は容赦がない。

士郎と坂柳は互いに穏やかな笑みを浮かべたまま、しかし言葉はかなり敵対的だった。

椎名とオレは変わらず静かにその問答を眺めているだけだ。

「言峰くん、貴方のことは個人的にかなり評価しています」

「それは光栄だな」

「しかしどこまでいってもただの優秀な生徒なだけ。貴方のような人間はこの社会にござまん存在するでしょうね。あくまで優秀なだけである貴方は私の敵に値しない。た

だの通行の邪魔をする路傍の石と変わりない」

「はは、君は路傍の石ころ如きに通行を妨げられるのか？」

「生憎と身体が弱いもので」

「??それは失礼なことを言った。謝罪する」

皮肉合戦は坂柳に軍杯が上がる。

士郎は心優しい男だ。相手が傷つかないように配慮する。故に例えそれが相手の失言を誘導するような言動のせいであつたとしても本気で謝る。

流石、オレの親友だ。とても良い奴である。

しかし、自分の弱点を利用して勝つて、それで嬉しいのか坂柳。士郎の謝罪を目にして溜飲を下げている。

「私が言いたかつたことは伝わりましたか？」

「??すまない。俺には意図が読めなかつた」

「仕方ありませんね、分かりやすく教えて差し上げます。私は貴方に身の程を弁えて欲しいのです。大した実力も持たない一優秀な生徒だけの貴方がAクラスの内部争いに干渉するのは見過ごせません。貴方如きがいくら葛城派に尽力しようとも結果は見えていきますが」

「そうか。それが君の意見か」

「貴方は黙って見ていることです。所詮、クラスを率いるリーダーにはなれなかった言峰くんは一之瀬さんに劣る存在ですから」

そう言い終わると坂柳は席を立った。

それからオレに目配せすると、一度オレたちを見渡せて頭を下げる。

「お邪魔してすみませんでした。私はこれで」

坂柳を先頭に喫茶店の出口へと向かうAクラスの生徒たち。もう用はないと言わんばかりに歩いていたが、ふと立ち止まり、オレへと振り返った。

貪欲な瞳がオレを射抜く。

「貴方と戦える日が来ることを楽しみにしていますよ綾小路くん」

「??なんのことだ?」

「今はそれで構いません」

言い切ると今度はそこ坂柳たちは喫茶店を出た。

他にも客はいたが今は静まり返っている。Aクラス、つまりは現時点で一年生のトップクラスに立つ存在が訪れていたのだ。

その話を妨げられる人間は限られているだろう。

それから暫くの静寂が続き、次第に少しずつ会話が聞こえてくるようになった。

「すまないなひより。どうにもあのことについて詳しく話す雰囲気では無くなったよう

だ」

「構いませんよ士郎くん。皆さん密かに私たちの会話に耳を立てていますから」

そんな椎名の言葉を聞いて心当たりのある生徒たちが動揺するように肩を震わせた。確かに聞き耳を立てていたようだ。

それにしてもあのことはなんだろうか。聞こうにも今は聞けないだろうし、士郎がわざわざオレに話してこないのなら聞くべきことじゃないな。

また今度でいいだろう。

「清隆もすまない。君とひよりにはもつと親睦を深めて欲しかったのだが」

「いや大丈夫だ士郎。椎名とは仲良くなれそうなのがわかったし十分恩恵は受けている」

「そうですね。私も綾小路くんとは仲良く出来そうです」

椎名の同意を持ってオレと椎名の初邂逅は終わりを迎えるのだった。

2

どうやら堀北の予測通りだったようだ。

無人島に上陸したオレたち一年生は初めての特別試験を迎えた。

Aクラスの担任である真嶋先生から特別試験の内容が告知される。

この無人島における特別試験では大前提として、各クラスに試験専用のp tを300支給する。そして用意されたマニュアルには、p tで入手出来るモノのリストが全て載っていて、生活必需品である飲料水や食料、その果てにはバーベキューセットから旅行感覚として遊べるものまで購入可能なものとして記載されていた。

そして特別試験終了時、つまり一週間後に各クラスに残っているp tが夏休み明けにCPとして反映されるらしい。

その他にもルールがあり、今回船の中で留守番している坂柳が欠席扱いとされ、Aクラスは30p tマイナスされた。つまりリタイアは30の損失となる。

学校側から配布された腕時計は体温や脈拍、人の動きを感知するセンサー、GPSも備えているらしい。かなり高性能だ。これは生徒が何らかの非常時に遭遇した際の対処の為だろう。

その後、茶柱によって説明された追加ルールは五つ。

スポットを占有するには専用のカードキーが必要であること。一度の占有につき1p tを得ることができ、占有したスポットは自由に使用できること。他クラスの占有するスポットを許可なく使用した場合50のペナルティを受けること。キーカードを使用することが出来るのはリーダーとなった人物に限定されること。正当な理由なく

リーダーを変更することは出来ないこと。

大まかなルールは以上と言ったところだ。その他にも細かなルールはあるが、それよりもリーダー当ての方が気になる。

七日目の最終日、点呼のタイミングで他クラスのリーダーを言い当てる権利が与えられる。その際、見事他クラスのリーダーを的中させることが出来たなら、的中させたクラスひとつにつき、50ptを得る。そして逆に言い当てられたクラスは代償として50ptを支払わなければならない。

こんな感じか。

ぼうつと試験について考えを巡らせていると女子の悲鳴が聞こえてきた。

「こ、こんなの無理っ。男女共用なんでしょ!?! 絶対無理だからー!」

叫んでいたのは篠原だ。

青ざめた表情で簡易トイレを指さしている。学校側から無料で支給された簡易トイレはダンボールにビニールを被せただけの作りだ。

女子だけじゃなく男子ですらも嫌悪感を抱くものである。

ちなみに堀北、洋介、土郎の三人はマニュアルを持って少し離れた場所で会議をしている。

「で、でもよ。我慢すれば一週間後には300ptを手に入れられるんだぜ? たった

「一週間だぞ?」

「関係ないっ! 無理なものは無理だから! あんた達と一緒にしないでよ!」

「な、なんだと!?!」

何としてでもptを得たい池と、衛生面の心配や生理的嫌悪を隠しきれてない篠原が口論を始めた。

教師陣は今回の特別試験のテーマは『自由』だと謳った。が、本当に必要なのはやはりチームワークだろう。士郎たちが言っていたようにDクラスは纏まりに欠けている。いま、その推測が当たってしまったっていた。

「さ、さすがに男女共用は?」

大天使榊田も動揺してしまうほどである。

簡易トイレ、それはもしや教師陣がクラス崩壊を招く為に用意した罠だったのでは?

「池、ptが欲しい気持ちはわかるが、だからって精神的苦痛を受けるのは違うだろ」

「す、須藤?」

「そうよね須藤くん! ほら、あんたも須藤くんを見習いなさいよ!」

驚くべきことにその場をおさめようと最初に動いたのは須藤だった。四月の頃とは比べものにならないほど成長している。

が、しかし須藤には両方の意見をまとめた折衷案を出せる賢さがない。つまり円満に場を収める能力がないのだ。そんな風に片方に肩を入れれば、

「須藤お前！ 女子に味方すんのかよっ」

「女に媚び売ってんじゃねーよ！」

「大体！ 今まで足引つ張つてきた奴が調子に乗んな！」

「今度は点数稼ぎか!? 見苦しいな！」

池の意見は男子の総意だった。それを否定するということは男子の大半の意見を蔑ろにするということ。

やはり今の須藤にはまだ無理だな。

そろそろ話し合いを終えた堀北、洋介、士郎の三人が帰ってくるはず。

「落ち着け。確かに須藤は足を引つ張つてきたかもしれないが、今それを批判するのはおかしい。少しは冷静になれ」

「そうだよ、僕たちで争つてどうするんだい？ 仲間同士で協力しなくちゃ試験は乗り

越えられないよ！」

Dクラスの2大イケメンが帰ってきたことから女子たちが静かになり、良心二人組の言葉で男子も落ち着きを取り戻していた。

相変わらず凄いな、オレが同じこと言っても火に油を注ぐだけになりそうだ。

「で、でもよお、俺だつてクラスのことを思つて」

「それは分かつている池。でも、それより先に話しておくことがある」

池の肩を叩いて土郎は穏やかな笑みを浮かべた。

その言葉を聞いて池も引き下がる。そして、土郎は堀北へと視線を向けた。なにかの合図だろう。

堀北は一度頷き、言葉を紡ぐ。

「今回、300ptを残して試験を乗り越えるのは不可能と見ているわ」

「なっ！　ただ一週間我慢するだけだろ！」

「そうね。でも一週間よ？　一日二日なら出来たでしょうね。一週間となれば体調を崩す人も出るかもしれない。それが原因でどれくらいptが引かれるかは知つていてしょう？　トイレで揉めていたようだけど、仮設トイレは20ptで購入可能よ。どちらがより安全な策なのかしつかりと皆にも理解して欲しいの」

「確かにそれは理解出来る。だが、あくまで必要としているのは女子だけだ。女子の為に男子が割りを食うのは?？」

堀北に噛み付いたのは幸村だ。真面目な性格で、成績も良い優秀な生徒である幸村を納得させるのは感情論だけでは不可能である。

男子にとってメリットがあるということのを伝えなければ首を縦に振らないだろう。

「ちらり、と堀北が士郎へと視線を向けた。堀北が説得するよりも士郎の方が良いと判断したか。」

「確かに士郎は幸村と良好な関係を築いている。それは洋介にもなし得なかった事実だ。」

「幸村、男子にデメリットは無いはずだよ。女子と男子、同じ目標を抱えているんだ。なにも勝ちたいのは男子だけじゃない。今回、俺たちが目指すべきなのはDクラスの勝利ではない」

「何を言っている？」

「勝利できたのならよし、だがあくまでオマケだ。俺たちが必要とするのはクラスの内部崩壊を防ぐこと。例えば勝てたとしても、それで男女に溝が出来てしまえば次からどうする？ 仲間内で協力できるか？ 無理だろうな。疑心暗鬼になり、互いに足を引っ張り合うことになるだろう」

「??わかった。そうやってしまえば本末転倒だな。俺は言峰の意見に賛成する」

「ありがとう。今回は男子が女子に譲歩する。確かに君らにはデメリットに映ったかもしれない。しかし、次は女子が男子を助けてくれるようなことがあるかもしれない。そう信じて助け合うことこそが集団で戦うコツだよ」

幸村が折れたことで男子は誰も反論するものがいなくなつた。

決まりだな。

取り敢えず、オレたちは茶柱に仮設トイレを注文すると再び全員で集まった。そこでDクラス首脳メンバーの意見を堀北が代表して話し始めた。

「ここで話し合っても暑さで気が滅入るだけだわ。判断力も鈍くなるし、苛立ちも募つて再び男女で諍いになるかもしれない。だから、まずはスポットの占有を優先することにすることにしたわ」

「何処か宛てがあるの?」

櫛田の質問に堀北は土郎へと視線を向けてから頷いた。

「土郎くんによれば学校側は私たちが安全に過ごせる場所にスポットを作っているはずよ。つまり、日光が直接当たらず、飲水もあつて近くに食料があるスポットが必ず存在する」

「つてことはいち早くスポットを見つけなきゃならねえつてことか」

「そうね須藤くん。取り敢えず森の中でスポットを探すわ。須藤くんを先頭に体力に自信のある人は他のスポットを見つけてきてちょうだい。ついでに食べ物を見つけてくれたら助かるわ」

「っし! 任せろ堀北!」

「貴方の活躍に期待しているわよ。ここまで被ってきた汚名を返上しなさい」

希望者を元に作られたほぼ男子主体の肉体労働チームは須藤を先頭に森の中へと入っていった。

運動能力の高い士郎や洋介が残っているのは皆の調停の為だろう。それに堀北と三人で策を練るのだからあまり離れられないわけだ。緊急事態に対処出来なくなるしな。「私たちは拠点となるスポットに向かう。体力に自信の無い人は言峰くんや平田くんと言つて。彼らなら一人二人なら背負つたり肩を貸して歩けるだろうから」

堀北がそういうや否やオレたちは移動を始めた。堀北を先頭、士郎や洋介を最後尾に歩いているのだが、女子の八割近くが最後尾近くにいる。どう考えても二人目当てである。

くそ、これでは親友のもとに行けない。

もう足を挫いてしまった井の頭が士郎に背負われていた。早すぎる。

女子からは響聲を買って鈍臭いだの、ぶりっ子だの言われている。流石に可哀想だが、士郎に密着しているのはオレも許容出来ない。

オレも足を挫いたと言えば、洋介が背負ってくれないものだろうか。

「哀れね」

やかましいぞ堀北！

綾小路清隆の親友（3）

??本当にあつたな。

森の中を歩くこと数十分。オレたちは明らかに手を加えられている開けた場所に出た。どうやスポットの一つらしく、川が近くを流れており、日差しが少ないことから生活する場所としては快適だろう。

恐るべきは士郎の慧眼である。

まさかフェリーが無人島を一周している時に見ただけでここまで読んでいたのか。

流石、オレの親友である。鼻が高いな。

スポットに着いたオレたちは休息をとることになり腰を下ろす。

士郎は背負っていた井の頭を下ろすと堀北、洋介と共にまたもや作戦会議を始めた。オレたち他のDクラス生徒が参加しても意味が無いことは既に以前までの会議で分かりきっている。

男子の総意を話すのが洋介、女子の代弁者が士郎、堀北はそれを踏まえた上で意見を纏める調停者、と三者は役割を分担している。

井の頭は未だに頬が赤いな。大丈夫か？

背負われている時なんて熱暴走してそうな感じだったが。

数分程で作戦会議が終わり、士郎たちが戻ってくる。

特にオレたちに話すことは無いらしく、唯一伝えられたのはテントと飲料水、そして衛生面を考えシャワーを購入するということだった。

先の士郎の説明で、今度は一つも反対意見が挙がらなかった。

そうして、オレたちはここを拠点とすることにし、テントを建てていくのだった。

3

士郎がCクラスの女子を連れてきた。

伊吹と言うらしい。なんでも、龍園というCクラスの支配者とクラスの方針で揉め、追放されたのだとか。頬が赤く腫れ上がっており、明らかに殴られた後だと分かる。

Dクラスからは男女ともに同情の声がかかり、歓迎していた。

そんな光景を堀北はいつものような無愛想な顔で眺めている。

「Cクラス、スパイではないのかしら」

「可能性は高そうだが、スパイなんかを士郎が連れてくるか？」

「言峰くんは困ってる人を見逃せない人よ。彼の性格が災いして連れてきてしまった、と考えているわ」

確かにありそうだな。

士郎は優しいからな。困ってて、傷付いてる伊吹を見て放っておけなかったんだらう。

「彼女にDクラスのリーダーが誰かバレないといいけど」

「結局、誰がなったんだ？」

「口にする気はないわ。たとえ貴方でなくても誰が洩らすか分からないもの」

「??Dクラスを疑ってるのか？」

「完全に信用しきれているわけじゃない。でも、人の口に戸は立てられないでしょう？」

もし他のクラスの生徒に聞かれればそれだけで終わりなのよ」

「確かに、そうだな」

堀北の言うことはもつともだ。

どこから洩れるか分からない。今回の特別試験においてリーダーがバレるといふことは最低でもマイナス50ptの損失を受けるのだ。

用心するに越したことはない。

「今日はこのまま須藤くんたちが持つてきてくれた食料で一日過ごすわ。まだ不慣れな

環境に適應するべきだもの」

「まあ下手に動いて体力を消耗するよりはマシだな」

「ええ、それと明日は朝から私と一緒に他クラスの偵察に協力してもらおうわよ綾小路くん」

「断らせてもら——」

「あら、貴方言つたわよね、何でもするって」

「??是非手伝わせていただきます」

オレは逆らえなかつた。

何でもやると言つてしまつたせいで堀北の指示に従わなければならない。自分で自分の首を絞めてしまつたな。

折角の親友とのバカンスが??堀北め。

「——綾小路くん」

「佐藤か。どうかしたのか?」

佐藤がオレのどこまで走り寄ってくる。

その後、隣に立っていた堀北を一瞥して都合が悪そうに森の中へと視線を向けた。

「ちよつといいい?」

「構わないが」

佐藤に従い、オレは森の中へと付いて行った。

佐藤と共に森へと入った。

程なくしてオレたちは立ち止まる。佐藤は少しばかり頬を赤らめていた。モジモジと何かを言いづらそうにしている。

「これはもしや??。」

「あ、綾小路くんってさ」

「これは本当にあの、伝説のイベントが——?」

「士郎くんと仲良いんだよね?」

「??親友だな」

そんなわけなかった。

僅かな幻想を抱くことも許されなかった。

これはオレじゃなくて士郎のイベントだな明らかに。親友として誇らしいな。モテまくって青春を謳歌している。

しかし、客観的に見てオレと士郎が仲良く感じるのか。それは、かなり嬉しいな。

「じゃあさ、士郎くんのさ」

「??士郎がどうかしたのか?」

「す、好きな女の子のタイプ、とか??知ってる?」

モジモジしてたのはこれが原因か。

このような質問、私は土郎が好きですって告白しているようなものだしな。恥ずかしくて当然か。

それにしても好きなタイプ、か。

過去に一度、それっぽいことを言ってた気がするが。

果たして好きなタイプであっているんだろうか。下手に間違った情報を教えて佐藤を混乱させるのも気が引けるな。

どうしたものか??。

「それを聞いて、後悔しないか?」

「え?」

「オレは直接聞いたわけじゃないからな。あくまで推測だし、間違ってるかもしれない。聞くのなら参考程度に考えた方がいいだろうな」

「??いいよ、教えて」

オレの警告に真剣な表情で佐藤は頷いた。

覚悟は出来ているようだな。聞いて後悔するなよ。

「個人的にだが、オレは佐藤だと思ってる」

「——え、ええ!？」

「士郎は皆に分け隔てのない態度をとっているが、それも絶対じゃない。どこかに優先順位というのがあるだろうな。現に、他の男子よりもオレや洋介を優先することが多いように思える」

「そ、そうかも?？」

「そこで、女子の中で見てみれば士郎は佐藤と一番距離が近いだろ? どうも佐藤と比べて、ほかの女子とは一步線を引いている感じがする。ボディタッチの回数、言葉の柔らかさ、たまに見せるちよつとした意地悪。身に覚えはないか?」

「あつ」

肩に手を置く、手を掴む、頬に触れる。

士郎が女子相手に出るボディタッチだ。下心はないように見えるから誰も気にしてない。友人に接する時のような気さくさが表れているのだろう。

まあその洋介はしないであろうボディタッチのせいで女子人気が凄まじいことになつている訳だが。

それと士郎は親しい人間相手に意地悪なことをする時がある。

意地悪と言っても可愛いもので相手を傷つけるようなことじゃない。むしろ、喜ばれるような意地悪が多い。

例えば、褒め殺しとかがそうだろうな。自分に自信の無い生徒を相手にこれをしていのを見たことがある。まあ、王と井の頭のことなんだが。

佐藤は思い当たる節があつたようだな。

「絶対とは言えないけどな。士郎がそれをどう思っているかが分からない。仲が良いから頻度が高いだけであつて好きなタイプとは関係ないかもしれないしな」

「ううん。ありがとう綾小路くん」

「気にするな。オレもお前の恋路を応援している」

「も、もう！ からかわないでよ！」

顔を真っ赤にした佐藤から逃げるようにオレは森を歩き出した。

佐藤もため息を吐いた後にオレの後を続くように歩き出す。オレと佐藤が人気のないところで二人きりでいたなんて士郎に知られたら困るな。

それにしても士郎は佐藤を誰かと重ねているような気がする。

親友であるオレや洋介とは別の扱いをしている。まるで旧知の間柄だったかのような、そんな態度だ。

高円寺なら何か知ってるかもしれない。後で聞いてみるか。

「シエロの好みかい？ それはまた面白いことを聞いてくるねえ綾小路ボーイ」

「お前なら何か知ってそうだったからな」

二日目。

皆より早く目覚めてしまったオレは川に顔を洗いに来ていたのだが、先客がいた。

高円寺は誰も居ないのをいいことに上裸で水浴びをしていたようだ。いや高円寺なら人がいても上裸にはなるだろうが。

そこで昨日の疑問をぶつけようと思ったのだが??。

「残念だが、シエロが語っていないことを私が口に出すのは気が引けるねえ。私もシエロに嫌われるのはごめんだ」

「そうか。??それなら仕方ない」

「そういうことは本人に聞きたまえよ綾小路ボーイ。??まあシエロは絶対に口を割りそうにないが、そうだねえヒントぐらいはあげようかな」

ヒント、か。

銭湯にいた日、高円寺と土郎が交わっていた論争を思い出した。ヒント、それは魚の釣り方ではなく撒き餌の方を言っていると認識していいのだろうか。

「シエロについて知りたいのならば、まずは考え方を改めるべきだねえ。アレは私にす

ら完全に理解できない理で動いている。何故、シエロがDクラスに選ばれたのか、疑問を疑問のまま放置しておくのは愚か者のやることさ綾小路ボーイ」

それだけ言い切ると高円寺はオレから視線を外した。もう交す言葉はない、つて感じだな。これ以上何か言っても無視されるだろう。

しかし、士郎がDクラスなのは疑問だな。茶柱をしてAクラスの完成系と言わしめた並ぶものなしの優等生。平田や櫛田がDクラスなものも納得出来ないが、士郎はそれ以上に不可解だ。

そこに全てが隠されているのだろうか。

だが、士郎が語らなかつたことを詮索するのは親友のやることじゃないな。

それに特に困ることもないし、むしろDクラスだったおかげでここまで仲良くなれたのだ。

士郎がいなければオレは今もぼっちで、青春を謳歌することを諦め、心が乾いていたかもしれないな。

学校側に初めて感謝を捧げた瞬間だった。

「よう鈴音。お前も俺たちに加わりに来たのか？」

オレは堀北と共にCクラスの拠点に出向いていた。

Cクラスは砂辺におり、明らかにPtを浪費しているように見える。ざっと見渡す限り、使い切ってしまったているのか？

キヨロキヨロと周りを見るオレを他所に、堀北がCクラスの支配者、龍園と対峙していた。

「そんなわけないでしょう。それと、気安く名前で呼ばないでくれるかしら？」

「くく、なら偵察か？ 随分コソコソしたマネするもんだなあ鈴音」

「??豪遊する貴方たちに比べればマトモだと思っただけだ」

「そりや言ってるな。だが、俺からすりやPtをケチってるお前らが馬鹿らしく思えるぜ」

喉を鳴らして龍園は笑う。そこに表れたのは嘲笑。明らかに見下している感じだな。

堀北はそれをものともせず毅然としている。

「貴方、もしかしてリーダー当てだけでPtを得るつもりなの？」

「??面白いこと考えるじゃねえか。流石は石崎たちを翻弄しただけはあるな。だが、俺は既に勝ちを拾ってる」

「勝ち？ どういうこと？」

「そりや自分で考えろよ」

明らかに堀北は狼狽していた。

龍園の言葉の真意に気付かず、既に勝ったという言葉に動揺させられている。

Cクラスの真の狙いはCPでなくPPの可能性が高い。確証があるわけではないが、そうだと仮定するとPt浪費と辻褃が合う。

が、わざわざ堀北に教えてやる必要は無いな。龍園が言ったように自分で考えなければ意味が無い。

「そういや、エセ神父はどうした？」

「エセ神父？ 言峰くんのことかしら」

「ああ、ウチの椎名と仲が良いみたいだからな。交友関係の高さは認めるが、それ以外は所詮ただの優等生だ。何かしら動いてくるとは思ってたが??やはり買い被り過ぎだったか？」

「言峰くんの総評はAクラスの完成系よ。私たちが目指すべき姿が彼。貴方に貶される立場じゃない」

「だが、結局Dクラスを率いることもできてねえだろ？ カリスマ性はあるがな」

「彼は貴方のようにDクラスを駒扱いしない」

「だからDクラスなんだよてめえらは」

堀北は俯いた。

何も言い返せなかったが故の悔しき。こんな男がCクラスだと言う屈辱感。もう

吹っ切れたと思っていたが、やはりDクラスという評価がトラウマのような形で脳裏に焼き付いてしまっているのだろう。

しかし、龍園の言葉には誤りがある。

士郎はDクラスを率いることが出来た。やろうと思えば簡単に実行出来ただろう。だが、士郎は堀北がAクラスを目指していると知り、その成長を促すことにしているのだ。

あの日、教会で交わした問答をオレは覚えている。士郎は堀北を成長させるために、リーダーから身を引いたのだ。後は、Dクラスそのものの成長も含まれているかもな。

士郎が一人でやってしまえば、Dクラスは不良品のままAクラスに上がってしまう。地獄の始まりだな。

「帰るわよ綾小路くん」

「?! ああ」

「もうお帰りか? 尻尾巻いて帰るくらいなら少しは遊んでいけよ」

まるで敵とすら思われていないような発言。

堀北は龍園に振り返ることなく早足で去っていく。

オレも慌ててついていくが、その際、ビーチパラソルの下で寛いでいた椎名と目が合った。手を小さく振ってくれたのでオレも手を振り返す。

友人つて素晴らしいな。

堀北は士郎に憧れを抱いている。

自分が目指すべき相手であり、それでいて自分の意見を尊重し、自分の成長の為に力を貸してくれる存在。

堀北鈴音にとって、それが言峰士郎だったのだ。

その憧憬はかなり強いもので、堀北が兄である堀北学を見る目に近い。

それ故に、士郎の否定は自分の憧れの否定、目指すべき未来の否定にあたる。今回は龍園がそれを踏み抜いた。

あの日、教会で交わされた問答。

堀北にとって相当ショックだったはずだ。茶柱の話聞いて、その時点で士郎へと憧れに近いものを抱いていたのだろう。だからこそ、今の自分を否定された時に酷く傷ついた。在るべき姿が、自分が辿ってきた道を壊したのだ。

でも、彼女は折れなかった。Dクラスで最も成長したのは堀北だ。その成長の根底にあるのは士郎から認めてもらいたいという気持ち。折れなかったのは新たな目標を作ったため。

堀北鈴音にとって、言峰士郎は誰よりも優れていて、誰よりも認めてもらいたい相手だった。

だから、須藤の事件で士郎に意見を尊重され、仲間だと認めて貰えたのは嬉しかっただろう。俯いていたが、オレは彼女の頬が綻んでいたのを知っている。

でも、統率者として、リーダーとして認められたわけじゃない。それを堀北は知っている。

今回の特別試験は堀北にとって士郎にリーダーとして認めてもらうチャンスなのだ。だから積極的に自分が意見を出し、Dクラスを必死に引つ張ろうとしている。クラスメイトにも好意的に接するように心掛けている。

——堀北はAクラスを目指すことより、士郎に認められるのを優先している。目的の履き違え。

憧れへの強い渴望。

勝利を捨てた堀北では士郎には認めて貰えない。

士郎が言っていたのは、みんなを率いて、その上で勝利を齎すことの出来る統率者だ。皆が望んでついてくるような、そんなリーダーを目指さなければ士郎にはいつまで経っても認めて貰えない。

どうしたものか?!

堀北の背を追いかけながら、オレは思案する。

このままでは堀北の成長に繋がらない。だからといってオレが口出しするのも士郎

の邪魔になるかもしれない。

まあまだ試験終了まで時間はある。

士郎に直接どうするべきか聞いてみるか。

オレと堀北は一度拠点に戻った。

簡易的な地図を起こし、スポットについて話し合っていた士郎と洋介が歓待してくれる。

「お帰り、堀北さん、清隆！」

「よくやってくれたな。疲れたのであれば少し休んでおくといい。これから昼になればもっと動かなければならなくなる」

「??大丈夫よ」

「オレも大丈夫だ」

堀北の様子がおかしい。

何かを言い出そうとして、俯いてを繰り返している。まさか、堀北お前——、

「ねえ言峰くん」

「どうしたんだ堀北」

「——私は、まだ間違っただままなのかしら？」

堀北鈴音の憧憬

初めはただの平田くんと同じ優等生だと思っていた。

綾小路くんから度々話題に出されていた言峰くん。仲良しこよしが大嫌いな私とは相容れない人。

孤高を目指していた私にとって、関わることの無い生徒だったのだ。

それが一変したのは五月一日の放課後だ。

担任である茶柱先生へと抗議に行った私はそこで言峰くんの話を聞かされた。

「言峰君、ですか？」

「ああ、言峰士郎は平田同様統率者としても駒としても長けた存在だ。それに、唯一高円寺を御する生徒でもある。お前がAクラスを目指すなら必ず必要になってくるだろう。個人の力では限界がある。まだ高校一年生とはいえ、社会に片足を踏み入れているんだ、子供のように癩癩を起こしてばかりでは前には進めない」

生徒指導室。

綾小路くんの友人である言峰くん。Aクラスに上がるのに必要だと言われるほどの人物で、私と少しばかり会話を交えた程度の仲。

「お前が目指すべきAクラスの完成系が言峰士郎だ。学力、知性、身体能力、判断力、協調性、その全てが秀でた存在。そしてカリスマ性をも持ちえている、正に完全無欠と言つていい生徒だな。本当に高校生なのか疑うレベルだ」

確かに言峰くんは欠点を持たない。成績も学年一位クラス、運動神経も高円寺くんを超える。

プールの授業で高円寺くんを抜き去り、一位を取ったのが言峰くんだった。その時見た彼の異常なまでの筋肉量を思い出す。

なら、そんな彼がどうしてDクラスなのか、という疑問が残る。平田くんや櫛田さんもそうだが、最低でもBクラスに配属されるべき人物だ。

「では、何故彼はAクラスではなくDクラスに配属されたのでしょうか」

「それは答えられない。生徒のプライバシーに関わるし、お前たちに知る権利はない。唯一知る方法は本人に直接尋ねるしかないだろう」

そう言われれば、仕方ない。

個人情報 を軽々しく教師が口にできるわけではないのだから。

綾小路くんに頼んで、私は言峰くんに会うことにした。彼の力を借りられれば、きっとAクラスに上がることも難しくくない。

何故か特別棟にいらしい彼と合流する場所は教会になった。

正直、この時点で私はかなり精神的に参っていた。

Dクラスという評価。兄とは違う不良品。私は間違っていたのではないか、と考えた
くなくて、逃げようとして言峰くんを頼ったのだ。

だから――、

「それで、話というのは？」

「??貴方にAクラスに上がる協力をして欲しいの」

「ふむ、何故そのような要求をするのか聞いてもいいかな？」

「私は、Dクラスに配属されたことに不満を抱いているわ。でも、それは貴方もそうでしょう？ 学力の高い貴方が、Dクラスなんてプライドが許さないはず」

「??なるほど。俺がDクラスに協力するのは構わないよ。だけど、君に協力するつもりは無い」

「なっ！ どうして――」

「それは君が本題を理解してないからだよ。そもそもその話、下された評価に不満を抱くことが間違っている。人は生きている限り、必ず他者に評価される。そして、その評価に不満を抱いてはならない。何故ならその評価は己の行動の結果だからだ」

彼の言葉に酷く動揺した。

情けないくらいに、泣き出してしまいたかった。

唇を噛んで、身体の震えを止めようとした。

「君は他者との協調を拒んだ。拒絶した。個人で全てやっていけると思い込んでいた。その時点でアウトなんだよ。日本社会が真に必要なと必要とするのは有能な個人じゃない。円滑に物事を進められる集団だ。確かに有能な社員は出世出来るだろう。だが、その有能を君は履き違えている」

「?！」

「社会が求める有能な人間は協調性がある集団を引っ張れる存在だ。後方から指示するだけのボスはいらない。先頭に立って集団を率いることが出来る人間を有能な人間というんだよ。君は当てはまらない。この学校は学力だけが高い生徒ではなく、周りに溶け込め、協調することができ、それでいて頭の良い人間を排出したがっている」

「私は?！」

「君は孤高を目指しているようだが、それでは人はいかないし、何より君を異物として排除しようとするだろう。君は嫌われ者の部下を出世させようと思うかい?」

ああ、きっと彼の言葉は正しい。

私がかやってきたことは、全て無駄だったのではないか、そう思う。兄という目標に追いつくためにやってきたことは、間違っていた。

——私は、不良品だったのだ。

「君はこのままじゃ就職なんて出来ない。出来たとしてもやっていけない。個人業なら大丈夫だろうが、大手企業なんかだと受け入れられない。有能な個人というのは周りに認められて初めて存在を許される。今の君はきつと許されないだろう。排他されていくだけだ」

「それでも、私は」

「君の行動の結果が今の評価、Dクラスという評価。君は孤高なんかじゃなく、ただ独り善がりな異端者。例え、俺が君に協力したとして、Dクラス全体は君の意見を受け入れない。つまり、俺や平田を経由する指示になるだろう。それは果たして君の実力と言えるだろうか？」

「——ッ！」

「結局、一人では何も出来ない。その時点で君は孤高なんかじゃなく孤独なんだ。だから俺は君に協力はしないよ。でもDクラスには協力するさ。仲間だからね。君は何もせずにただ孤独でいればいい。それが君の評価なんだから」

心が折れた音を聞いた。

私の内側から聞こえた音だ。夢が崩れ去り、憧憬が消え去っていく。灰のように風に吹かれて見えなくなる。

涙を堪えるのが限界で、でも逃げ出すことも出来なくて。

本当に自分が情けなくて、許せなかった。

「堀北、孤高と孤独は似て非なるものだよ。何も仲間を頼れ、と言っているのではない。君の感情が許さないことを無理強いするのは酷な事だ。利用すればいい、信頼なんて二の次だ。君が孤高を目指すのならば、先導者ではなく、支配者として在るべきだ。思考を把握し誘導する、他者からの信頼を勝ち取る、カリスマ性が君には足りない。他者から下された評価に不満を抱く前に、覆そうとする意志が今の君にはない。この程度で挫折するようでは社会に出たところで何も出来やしないんだ。なら、堀北鈴音はこのまま孤独な少女として何もしない方が身のためだよ」

「――」

そんな言葉を皮切りに私は走り出していた。

みっともなく涙を零しながら、顔を上げることもしせずに逃げたのだ。

Dクラスという評価、茶柱先生の指導、言峰くんとの問答。短い期間で積み重なった感情が爆発した。追い討ちをかけるように続けられた在り方の否定。私が目指していた孤高の履き違い。

仕方の無いことだが、プライドの高い私にとって最も屈辱的だった。何より、その言峰くんの言葉や下された評価に納得してしまったが為に抑えられなかったのだ。

私は自室にこもり、泣いた。すすり泣いた。

誰かに相談することも出来ない。それもそうだ、そんな生き方を選んだのだから。今更になって後悔が襲ってくる。

やっぱり、私は兄のようにはなれないのだ。

ふと、言峰くんの言葉が脳裏に蘇った。

彼は私を貶していたように感じていたが、その節々からは叱咤激励が表れていた。もしかして、私の成長を促してくれていたのではないか。

そう考えて、私は決意した。

そうだ、ここで立ち止まっただけでは意味が無い。これまでの道を否定しない為にも、私の目標に迫りつづけたためにも、歩みを進めなくてはならない。

その為にするべき事はまずクラスから認められること。信用されることだ。

これまで散々関わりを避けてきたのだから、難しいだろう。

それでも言峰くんに認められるには、それしかない。

そう、いつしか言峰くんは兄と同じ、私の憧れとなっていた。

1

私はなんとか須藤くんたちを赤点から拾い上げた。

手を差し伸べ、どん底から這い上がる手伝いをした。野蛮な彼らに勉強を教えるのはかなり大変だった。

でも、根気強く続けていると、いつしか彼らも真面目に取り組むようになった。その中でも須藤くんの変貌は凄まじいものだった。下手に私が言葉をかけるよりも、行動することで変えられたのだ。

達成感と共に、これで言峰くんに認めてもらえるのではないか、そう考えてしまった。彼に褒めてもらえれば、そんな考えを振り払う。私は褒めてもらいたいわけじゃない。彼に指導者として統率者として認めてもらいたいだけなのだ。

だから、言峰くんから須藤くんが暴力沙汰を起こしたと聞いた時は血の気が引いた。私が救った須藤くんが、Dクラスに迷惑を掛けたのだ。これでは言峰くんにも認められない。それ以上に、裏切られたという精神的ショックが大きかった。

呼吸を整え、教会の応接室へと向かう。

そこで須藤くんの謝罪を受け、私は彼を許した。確かに手が早いのはいけない事だ。でも今回に限っては彼に非はない。むしろ通り魔に巻き込まれた感覚に近いだろう。

相手がCクラスの龍園くんであると聞き、何かしらの対策を練るために私は行動を開始した。

特別棟に向かうと、綾小路くんと共に現場確認を行う。

やはり、監視カメラはなかった。

「?!監視カメラはないな。と、すれば今回、Cクラスに訴えられたらほぼ詰みの状況となるわけか」

「そうね。実際に須藤くんは殴ってしまっている。圧倒的に不利だわ」

「だが、士郎は既に目撃者に検討をつけているらしいな。なにもただ負けるといいうわけではないだろ」

「目撃者がDクラスの生徒だった場合、証拠能力は著しく下がるわ。でっち上げているようにしか感じないし」

「と、すれば訴えられないようにするしかないわけだ」

綾小路くんは嘆息していた。

「そうだ。私たちは崖っぷちまで追いやられている。折角、中間試験を乗り越えたというのに、このままじゃ須藤くんがクラス内の反感を買いかねない。」

「私がリーダーとして纏める所の話ではなくなってしまう。そんなことがあれば、兄さんにだって、言峰くんにもだって認めて貰えないかもしれない。」

「——監視カメラがないのをCクラスは知っていた」

「え?」

「監視カメラの存在は今回の問題を大きく左右する。前提として存在するんだ」

「何を??」

監視カメラ。

綾小路くんは真剣な表情でそう呟いた。

そう、今回のキーは監視カメラだ。

Cクラスは監視カメラがないのを知っていて、それを利用するために特別棟に須藤くんを呼び出した。全ては監視カメラがない、という所から始まっている。前提がそうなのだ。

つまり、それを覆すことが出来れば、訴え自体を取り下げることも??。

「それにしても、ここは暑いな」

「そうね。長居すると熱中症の危険性があるわ」

「ひとまず移動するか」

私は綾小路くんの意見に同意し、特別棟を出た。

それからひたすら考える。

全てを覆す、その方法を。

それを思いついたのは、審議会が刻一刻と迫っていた時だった。

起死回生の一手。不安材料は多い。不確定要素の塊。それでも、無駄なことでは無いはず。

言峰くんたちに相談してみたら、実行に移すかどうか考えよう。

「対策を思いついたのっ!？」

「声が大きいわ櫛田さん。Cクラスに聞かれたら意味がなくなってしまう」

「ご、ごめんね堀北さん。驚いちゃって」

放課後。

審議会が残り三日に差し迫った頃。教会の応接室で私は言峰くんたちに思いついた対策を語った。

「対策? 情報提供者を募る以外に何かわかったのかい?」

「ええ、平田君。正確にはCクラスに訴えを取り下げさせる方法よ」

「訴えを取り下げさせる? 説得じゃ無理だって話だったよね? どうするつもりなの?」

「櫛田さんの言う通り、説得は無理ね。だから、相手を騙すことにしたの。特別棟に監視カメラがないのは確認済みよね? そこに彼ら呼び出して偽物の監視カメラを見つけてさせる。後は学校側が真実を知っていて、私たちがどんな行動を取るのかを見てい、なんて話せば勝手に取り下げてくれそうなもの」

「そんなの上手いくいかい? 騙されそうにないと思うんだけど」

「あそこはとても暑いわ。先に呼び出しておいて5分10分待たせておけば苛立ちや暑さによって正常な判断力を保てないはず」

お世辞にも今回の事件の当事者たちは頭が良いとは言えない。あくまで策を練っているのは龍園くん一人だと思うし、彼らは脳死で命令をこなしているだけの駒だろう。

言峰くんはどう思ってるのだろうか。私は不安になりながらも、優雅にソファに座って珈琲を飲んでいた言峰くんへと視線を向ける。

視線に気づいた彼は穏やかな笑みを作って口を開いた。

「そうだな、少なくとも俺はやってみる価値はあると思う」

「ありがとう言峰君。貴方にそう言ってもらえれば心強いわ」

「だが、確実性に欠けるな。もし失敗すれば、龍園は隙を見せなくなるだろう。リスクが大きい作戦だ。その後に支障が出るからな」

「ええ、そうね。そこは私も理解してる」

「??ふむ、石崎は裁判に詳しいだろうか?」

「? 私が見た限りではそこまで知性のある生徒には見えなかったわ」

「なら、嘘の訴えや証言は偽証罪にあたる、なんて嘯いてみれば彼も取り乱すんじゃないか? 暑さや苛立ちによる判断力の低下、そこに監視カメラの存在、そして嘘の訴えは

懲役三年又は十年に相当する。ここまで言えば最早恐怖から訴えを即座に取り下げそ

うなものだがな」

「なるほど、偽証罪ね。詳しく知っていれば偽証罪が適応されるのは第三の証人だけと分かる。どちらにしろ失敗するのなら、この手はマイナスにはならない」

「ああ、失敗する恐れのある作戦なら少しでも成功の為に尽くした方が懸命だろう。それに、もし失敗しても既に裁判で勝てる方法を用意はしている。安心して君の作戦を試してみるといい」

「??ありがとう」

こんな短時間で更なる策を思いついたの？

私の策以上に相手の不安を煽る作戦だ。高校生で法律に詳しい人間など少ない。それに、懲役がある、なんて伝えられれば石崎くんでなくとも心が竦むはずだ。

やはり、彼は凄い人だ。

兄さんに並ぶ、人に信頼され、人を信頼し、誰かに手を差し伸べることも厭わず、その手から取り零すことも無い。言峰くんは完璧なリーダーの素質を持っている。私なんかより遥かに優れた統率者だ。

でも、彼は私や平田くんなどのサポートに回っている。どういう思惑かは想定出来はしないが、なんとなく私たちの成長を促してくれているのではないか、と勝手に思った。

「もし、貴方に協力して欲しいと言えばついてきてくれるのかしら言峰君」

「??やめておいた方がいい。龍園は俺や櫛田、洋介を警戒していると思う。石崎も俺たちの姿を見れば話す機会もなく逃げ出す可能性が高い。だから、比較的人に知られていない堀北と清隆が適任だ。堀北一人だけだと錯乱した石崎が攻撃してくる可能性もあるから清隆を連れていくといいだろう」

「オレ、堀北の肉壁なのか?」

「すまないな仕事を押し付けてしまった。俺や平田は動けない。だから清隆、お前に手を貸してほしいんだ。友人として、Dクラスの一人として仲間を助けたいと思っている」

「是非協力させてくれ堀北!」

「綾小路君、どうしたの貴方。やけにテンションが高いわね」

綾小路くんの態度に瞠目してしまった。

普段の眠たげで抑揚のない口調からは考えられないほど、活気に満ち溢れた返事。何かは分からないがやる気になってくれるのであれば、悪いことではない。

それよりも、今、言峰くんは否定しなかった。

つまり――、

「今回は協力しない、とは言わないのね」

「そうだな。今の堀北には手を貸すに値すると判断した。君もDクラスの仲間だよ」
「??そう」

目尻に熱いものが走った。

醜態を晒さないように涙腺をキツく締め、顔を伏せる。

ああ、彼に認めてもらえた。

兄さんに最も近い存在。私が目指すべき生徒。

まだリーダーとして認めてもらったわけじゃない。あくまで仲間内としてだ。

それでも、嬉しさは留まることを知らなかった。

言峰くんたちと別れたあと、時間を経て、涙がこぼれ落ちる。成長を感じる。報われた気がする。

今、進んでいる道は間違っていないかった。

——私は、今度こそ正しい道を歩めている。

2

—— お前が目指すべきAクラスの完成系が言峰士郎だ。学力、知性、身体能力、判断力、協調性、その全てが秀でた存在。そしてカリスマ性も持ちえている、正に完全

無欠と言つていい生徒だな。本当に高校生なのか疑うレベルだ。

——それは君が本題を理解してないからだよ。そもそも話、下された評価に不満を抱くことが間違つてゐる。人は生きてゐる限り、必ず他者に評価される。そして、その評価に不満を抱いてはならない。何故ならその評価は己の行動の結果だからだ。

——君の行動の結果が今の評価、Dクラスという評価。君は孤高なんかじゃなく、ただ独り善がりな異端者。例えば、俺が君に協力したとして、Dクラス全体は君の意見を受け入れない。つまり、俺や平田を経由する指示になるだろう。それは果たして君の実力と言えるだろうか？

——堀北、孤高と孤独は似て非なるものだよ。何も仲間を頼れ、と言つてゐるのではない。君の感情が許さないことを無理強いするのは酷な事だ。利用すればいい、信頼なんて二の次だ。君が孤高を目指すのなら、先導者ではなく、支配者として在るべきだ。思考を把握し誘導する、他者からの信頼を勝ち取る、カリスマ性が君には足りない。他者から下された評価に不満を抱く前に、覆そうとする意志が今の君にはない。この程度で挫折するようでは社会に出たところで何も出来やしないんだ。なら、堀北鈴音はこのまま孤独な少女として何もしない方が身のためだよ。

——Dクラスになったと聞いたが、3年前と何も変わらないな。ただ俺の背中を見ているだけで、お前は今もまだ自分の欠点に気づいていない。この学校を選んだのは失

敗だつたな。

—— お前には上を目指す力も資格もない。それを知れ。

—— 俺は正しく会長より堀北を評価している。突き放すだけが全てじゃないですよ堀北会長。貴方が間違つていたことを、俺が証明してやる。

—— なら、足掻いて見せろ鈴音。お前が下された評価を覆せ。

—— 堀北、お前ならできる。今のお前は間違つてなんかいない。だから泣くなよ??。

—— シエロは先を見据えることに關して、卓越した観察眼を持つている。本当の意味で君が認めさせたいと思うのなら、君がシエロに勝たなければならぬよ堀北ガール。その時が来るのが楽しみだねえ。

—— 今の堀北には手を貸すに値すると判断した。君もDクラスの仲間だよ。

—— 堀北、今回の特別試験、言峰士郎から目を離すな。

—— 特別試験では君を司令塔に置くことにしよう堀北。頼んだよ。堀北会長に認めてもらいたいのだろうか？ この機を逃すな。君ならできる。

—— だが、結局Dクラスを率いることもできてねえだろ？ カリスマ性はあるがな。

—— だからDクラスなんだよてめえらは。

ねえ、言峰くん。

「——私は、まだ間違っただまなのかしら？」

転機×強襲×逃走

ああ、主よ。どうして私を救ってはくれないのですか？

私が悪意を宿しているからでしょうか？

私が悪意を隠しているからでしょうか？

主に信仰を捧げ、良き人として振る舞い、善行に身を尽くし、それでも尚足りえぬと仰るのですか？

私は全てを捧げてきました。

彼女を愛し、彼女の為にありとあらゆる教えを説き、貴方様の庇護に入れて貰えるように、と。

主よ。

貴方は人を救わないのですか？

——何故、彼女を救ってはくれなかったのですか？

1

堀北の言葉に時間が止まったような感覚が齎された。

その言葉の意味を理解していない平田を含め、堀北、言峰、綾小路、その場にいた計四人の動きが止まる。

綾小路は傍観を、平田は理解を、堀北は期待を、そして言峰は——、
「間違っている、か。難しい質問だな。間違っている、間違っていない、それを決めるのは俺ではない。そして、君自身でもない。正誤を定めるのは当事者ではなく第三者。つまり世間の声だ。正しいか間違っているか、に法律やルールは関係しない。その行いが世間にとって正義か悪か、ただそれだけに完結する」

「では、貴方は私が間違っているかどうか、分からないと」

「ふむ、しかし君が俺に問いかけているのはかつての俺の問答の話だろうな。君を認めるかどうかという話、仲間としては勿論認めている。Dクラスで君を仲間と認めている者はいないだろう。池たちを赤点から救い、須藤のために奔走した君を、今もこうしてDクラスの勝利のために尽くしている君を認めぬ者はいない」

縦るような堀北とは対称的に、言峰は余裕を持った表情で相對する。

陽射しで陰ったその表情は誰にも分からなかった。しかし、全員がその声音から穏やかに微笑んでいることを確信するだろう。

一つ一つ、丁寧な言葉を紡いで、宥めるように、赤子をあやすように言峰は続ける。

「そして、Dクラスのリーダーとして認めるかどうか。これは難しい話だ。俺個人の評価として、君に足りないものは成績。司令塔としての勝利だろう。信頼を得て、仲間と認められて、残るのは君をリーダーとしたDクラスの勝利だけだ。それさえあれば、俺もDクラスも君をリーダーとして認めざるを得ない」

「今回の特別試験で、私がDクラスを勝利に導くことが出来たら?」

「ああ、それが出来ればDクラスは全力で君に協力しよう。君をリーダーとして、その指示に疑いなく従い、君を手助けするために尽力し、君の障害を取り除く手足となる」

堀北の瞳に決意が満ちる。

それを聞いていた平田も活気に溢れ、綾小路も友人の為にと頷いた。

「私を、認めてくれるの?」

「認めるさ。君の実力があれば皆がついて行くだらう。君を否定する者はもういないよ」

「そう。ありがとう、言峰くん」

「あまり気負いすぎるとよ堀北。あくまでDクラスの勝利だ。君一人が頑張ったところで達成出来るものではない。優秀な人間は個人ではなく集団での成績を残すという。真にリーダーを目指すのならば、君は仲間を頼らなくてはならない」

それだけ言って、言峰は再び平田と地図に須藤が見つけたスポットを書き込んでい

く。簡易的なものだが、ないよりはマシだ。

無言でその場を去っていく堀北を眺めながら、綾小路は一人佇む。その言葉に抱いた違和感。歪な会話。その答え。

その正体に気づけないフリをして、飲み込む。

いつものように無表情を保ったまま、綾小路は言峰と平田の元へと歩き出した。

二日目夜。

皆が寝静まり、周囲からは虫の声だけが響く。

月明かりの下、森の中の岩陰に言峰、岩上に高円寺がいた。岩陰に腰を下ろす言峰と、2メートルにも及ぶ岩の上で優雅に立ち、月の威光をその一身に浴びる高円寺。

二人の密会を知る者はいない。

「そろそろ動き出すんだろう？ いい加減我慢の限界を迎えたと見える」

「——黙れ」

「君の精神は異常だねえ。片や隣人を愛し、平等に手を差し伸べる信仰者。片や、隣人を突き落とし、平等に刃を突き立てる背信者。プリティージャーガルとは異常性が違う。常人なら自刃してしまいそうな二面生だ」

「違う。俺は?」

「あの日、君に生き方を説いたのは間違いじゃなかったようだねえ。さぞ苦しいことだろうに」

「こんなこと、してはならない」

「良心の呵責、罪悪感。誰もが持つそれを、君も備えていた。実に度し難い。悪意の塊でありながら、善人であろうとする残酷な矛盾」

「そうだ。俺は敬虔な信徒で、隣人を愛す博愛主義者で??」

「罪悪感など感じなければ、普通に生きていたはず。どんなに神に縋ろうとも、神は君を救わなかっただろう?」

「――」

「君は生まれる時代を間違えたのだよシエロ」

暗雲が月を隠した。

そしてCクラスの女子生徒、伊吹滯を迎え入れた以外に大きなアクセシブメントもなく、Dクラスは五日目を迎える――。

2

転機は突然だった。

全学年、無人島試験に望んでいた学生を襲ったのは凄まじいほどの豪雨。吹き荒れる風に、肌にあたきつけられる雨粒。

夏場だというのに感じる肌寒さ。

「——予想外よ。学校側はこの事態を予測していなかったらしいわ」

「でも、特別試験は続行するんだよね？」

「ええ、最悪なことだね。川の氾濫、体力を奪う雨、歩き辛い泥道。これではいつものように焚き火も出来ない。この調子だと明日まで降るわよ」

「まずいな。体調不良でリタイアする生徒が出るかもしれない。そうなれば、試験どころの話じゃなくなる」

なんとか雨を防いでいる三つの防水テント。急遽、テントを多く購入する羽目になったDクラスだったが、さすがに反対するものは出なかった。

男子テント、女子テントに別れ、3つ目のテントには作戦会議として堀北、平田、綾小路の3人が集まっている。言峰は現在、どこか避難できそうな場所を探すと告げてから外出していた。

「テントで明日まで凌げればいいのだけど」

「難しいだろうな。如何に大きなテントと言えど、Dクラス四十人が過ごすには狭すぎる。この中央テントを使えばマシにはなるだろうが、そうすると情報の漏洩を防げな

い」

「そうね。もし万が一に伊吹さんが侵入でもすれば、私たちの実行してきた作戦が露呈するし、最悪リーダーを推測する手掛かりになりかねない」

「Dクラスの皆を疑うわけじゃないけど、ここは荷物含め大事なものが多すぎる」

食料、スポーツを書き記した地図、全員の着替え、マニユアル。中央テントはたった三人だけだと言うのにかかなりの狭さだ。

一般的に入る許可が無ければ入室を許されていない。基本的に立ち入るのはこの場にいる三人に言峰、櫛田、軽井沢を加えた六人だ。それ以外は入室の許可が降りることはない。とはいえ、反感を買いそうなものだが、そこは言峰が説得したらしく幸村含め非難の声が上がることは無かった。

仲間意識も上がり、Dクラスは前提条件である一致団結を達成しようとしているのである。

「Aクラスは同じように洞窟内を拠点としているため、大した被害はないみたいだな」
「かなりの好条件のスポットだったみたいね。悪天候に左右されないのはかなり有利よ」

「そうだね。スポット占有の競走で負けたのが後になって響いてきた感じだ」

Aクラスは葛城を司令塔として今回の特別試験に望んでいる。堀北が最も警戒して

いた坂柳ではない。

保守的な葛城よりも厄介なのは攻撃的な坂柳だ。守りと攻め。現状維持に尽力し、守りを固めようとする葛城よりも、更なる点差を広げようとする坂柳の方が恐ろしい敵である。

距離を保って逃げる者を追い掛けるより、罠を張って妨害してくる相手の方が今のDクラスにとって強敵なのだ。

「Bクラスは私たちと同じように防水テントを購入しようね。これは言峰くんからの証言だから信頼出来る」

「Bクラスらしいやり方だな。勝利だけでなく仲間が欠けるのを阻止しようとしている。完全にオレたちDクラスの上位互換だ」

「??僕らもいつかはそれを超えるよ。今はまだ地盤を固めることに時間を費やす。Dクラスはスタートラインにすら立てていないからね」

「そうね。今回の特別試験で勝つこと。それでようやく私たちは他のクラスに並び立てる」

一ノ瀬をリーダーとしたBクラス。派閥によってクラスの団結から程遠いAクラスよりも集団としての力は強い。

信頼し、信頼される。堀北が目標とするリーダーに最も近いのが一ノ瀬だ。それを越

えてこそ、ようやく兄である堀北学、そして憧憬の相手、言峰士郎に認められる。彼女から学ぶことはまだまだ多い。

だが、敵としては警戒に値しない。彼らは集団としての力こそ強いが、個人個人の総力で比べれば、Dクラスに軍杯が上がるはずだ。

しかし、最も不可解なのは――、

「不可解なのはCクラスよ。全P tを吐き出したと思ったたら未だ無人島に残り続ける。全員がリタイアするものだと思っていたけれど」

「龍園含め四十人、その全てに欠員がいなかった。それに既に勝ちを拾っている、だったか」

「どういう意味だろうね。何かしらのルールの穴に気付いたのかも」

「リーダー当ての最高獲得P tは150。つまり全てを吐き出したとしても、まだ取り返せる上に、Cクラス以外は50ものP tを失う。私は龍園くんがこれを狙っていると思っていたわ」

だが違った。

Cクラスは初日に全P tを使用していたようで、かなり豪遊していた。龍園は堀北の指摘に首を振っていた。あれは演技のように見えなかった。

つまり、本気でそれ以外に勝ち筋を見つけているのだ。一体どうやっているのかは全

く分からない。

龍園翔。坂柳に匹敵する強敵。今までのBクラス、Dクラスとの衝突を顧みるに、ルールの裏を突いたやり方を狙ってくる。

思いもよらぬ方法でこちらを攻撃してくる可能性があるのだ。

「??」先ず、Cクラスとの接触は避けた方が良さそうね。Dクラス全体に今日は拠点から出ないように説得しないと」

「何があるか分からないな。現状において厄介なのはCクラスだ」

「早速みんなに通達しようか」

方針は簡易的なものであるが定まった。言峰がいないこの場で、決定的な策を練ることとはできない。

このクラスのブレインは間違いなく彼なのだから。堀北や平田はあくまで調停者に過ぎないのだ。彼以上に常に勝ち筋を残している生徒はいない。

今だって、既に勝つ方法は見つけてあるはずだ。そんな信頼が言峰士郎にはあった。

平田から軽井沢と榎田へ、堀北から須藤、幸村へと指示が通達される。そこから伝播式に全体へと知らされる。

綾小路は一人考えに耽る。

龍園が既に得た勝利、Aクラスの拠点、言峰の違和感。この特別試験は疑問は多い。

何より驚いたのが高円寺の試験の参加。本人が何かしたわけではないのだが、それも性格的に真つ先にリタイアするものだと考えていた。

今も外で豪雨の中、ポーズングを取っている。退屈はしていないようだ。まるで何かを待っているのかのように。

「大変だよっ」

中央テントへと櫛田が駆け込んで来た。

かなり慌てている様子だ。

その場にいた三人の視線が彼女へと集まる。

「どうしたの?」

「さ、佐藤さんが!」

「佐藤?」

綾小路が疑問符を浮かべた。

それに追従するように平田や堀北も怪訝な表情をしている。

「言峰くんを探しに行つてから戻ってきていないって!」

「どういふこと?」

「佐藤さん、言峰くんを探してくるって言ったきり戻ってきていないらしくて、かれこれ

30分は経つてゐるみたい!」

この雨の中、佐藤は言峰を探しに森に入っていったらしい。

おかしい。とてつもなく不可解だ。

如何に成績の悪い佐藤と言えども、この悪天候の中、外を歩き回るような愚行はしないはず。あれは言峰という体力面で優れている生徒だから出来ることだ。彼の身体能力なら泥道をもものともせずに行くことが出来るだろうから。

まるで誰かに呼び出されたかのような状況。

考えられるのは――、

「罨か？」

「ええ、そうみたい。やられたわ」

綾小路の言葉に堀北が同意する。

明らかに佐藤は誘い出されている。

それを齎したのは彼女しかいない。

「伊吹さんはテントにいないのかしら？」

「見てないかも。佐藤さんと何か話してたのを最後に、どっか行っちゃったみたいで」

「確定だな」

「まずいわ。これが龍園くんの策だとしたらきつと佐藤さんは――」

――リタイアに追い込まれる。

佐藤は森の中をさまよっていた。

たった一人の男子生徒を探して、頼りない肉体を酷使し、歩き続けている。雨が体温を奪い、泥道が体力を奪い、暗闇が気力を減入らせる。

それでも彼女がその足を止めなかつたのは一人の男子生徒の身を案じてだった。

「???、言峰くん、どいこ」

限界が近い。

息遣いが荒くなり、呼吸がままならない。低体温、まるで風邪をひいたかのような倦怠感に頭痛、そして発熱。

消耗した体力を回復させる為に、佐藤は傍にあつた木へと寄りかかった。

彼女が森へと入つた理由。

それは伊吹に聞かされた話が原因だった。

『Dクラスの言峰士郎って奴。龍園に闇討ちされるみたい』

ボソツと佐藤にだけ聞こえる声量で呟いたその言葉に身体が突き動かされた。

考えるよりも早く、走り出していたのだ。

今更になって後悔する。

平田たちを頼つた方が良かったと。堀北や須藤たちに探してもらつた方が早く見つ

くれたのではないか、と。

でも、そんなの後の祭りだ。

今はいち早く言峰へと危険を知らせなければならぬ。

龍園、Cクラスよりも早く――、

「お前が佐藤麻耶だな」

声に驚き振り返った先、立っていたのは十人を優に超える男女だった。そのどれもがCクラスの生徒。

警戒心が沸き立つ。心臓の鼓動が忙しない。背中を走る冷や汗。背筋を凍らせる緊張感。

咄嗟に佐藤がとった行動は、逃げの一手だった。

「アルベルト」

が、女子生徒の中でも佐藤は運動を得意としていない。ましてやこの雨の中で奪われた体力は回復していなかった。

アルベルト、と呼ばれた屈強な黒人の男子生徒が佐藤の腕を掴んだ。必死に振りほどこうにもピクリともその男子生徒の腕は動かない。

「は、離して!」

「おいおい、俺たちは道を探ねようとしただけだぜ? 何をそんなに怯えている?」

「こんなの、先生たちに訴えたら——」

「訴えたら、なんだ？」

「——ッ！」

反射的だった。

佐藤へと顔を寄せてきた龍園。攻撃される、という防衛本能がその頬を平手で叩いた。

バチン、という軽快な音が響き、雨に流される。

当の叩かれた本人はくつくつと喉を鳴らしていた。

「叩いちまったな。これでお前は他クラスへの暴力行為を働いたわけだ」

「ち、ちがつ」

「残念だなあ。これを教師共に伝えればDクラスは一体どれだけのp tを引かれることやら」

「あ、あんたが先に！」

「——失格なんてこともあるかもなあ」

「——」

特別試験。その失格行為。

今まで、この五日間の努力を佐藤一人の手で終わらせてしまう。有り得てはいけない

ことだ。

クラスからの響感だけでは済まない。培ってきた信頼も、友情も、地位も、そして言峰士郎との関係をも終わらせかねない。

正常な判断力の欠如。

かつて堀北が石崎相手に行った方法。

龍園はそれを意趣返しとして佐藤へと行う。

力が抜けたように佐藤はその場にへたりこんだ。既にアルベルトの手は離れている。

龍園は俯く佐藤を覗き込むように屈んだ。

「お、お願いします、ゆ、許してください、さい」

「おいおい、謝罪で俺の傷が癒えるかよ」

「そ、そんな——」

「でもまあ、お前がリタイアしちまえば、許してやらんこともねえなあ」

「——あ」

理解した。

自分は嵌められたのだと、佐藤は理解してしまった。

最後尾に立っているのは伊吹だ。見えづらいが、確かにいる。

つまり、自分は誘い出されていたのだ。

「本来ならDクラスは試験失格、となるところをたつたマイナス30の損失で許してやるって言うてんだ」

「あ、あ」

双眸から流れ出る涙。

ダムが決壊したかのようだ。涙は雨水に流され、地面に溶けていく。

恐怖、後悔、屈辱、羞恥、そして諦め。

「ご、めんなさい、士郎く——」

「——誰に謝っているんだ麻耶」

掛けられた声に振り向いた。

穏やかな表情、そうだ彼が佐藤が探していた——、

「??てめえは」

「よくも俺の友人を泣かせてくれたな。それに、ここまで来るのに覆面を被った生徒たちから襲撃を受けたんだが、まさかCクラスか？」

「ハッ——無傷で帰ってきやがって」

ぱさり、と言峰の上着が麻耶を包む。そして、安心させるように肩に手を置いた。

敵対クラスの男女十数人に囲まれているというのに余裕な表情、いつもと変わらない

声音。

そうだ、彼なら。言峰士郎ならば負けるはずがないのだ。

「俺の予想以上だったわけだ、言峰エ」

「暴力を實力と履き違えているようだな龍園」

言峰士郎と龍園翔が対峙した。

転機×強襲×逃走（2）

3

雨が激しく打ち付ける。

肌を叩く不快感に身を振りながら龍園は不敵に笑った。

霧が出てきた。視界は悪い。足場も不安定。

自分が戦うにはこの上なく良好な状況。泥臭くても構わない。最後に勝ちさえすれば、それでいいのだから。

「——で、この状況をどうするつもりだ？」

「どうする、とは？」

肩を震わせる佐藤の身を案じながら言峰が問いを返す。

多勢に無勢。背水に追い込まれていながらも、その表情に変わりはない。どこからその余裕が来るのか。

龍園側はCクラスの男女ともに十五人。いずれも対言峰を想定しての人数であり、身

体能力が高い者ばかりだ。しかし、相手は佐藤の肩を抱く言峰ただ一人。

事前にあのエセ神父の身体能力が学年でもトップクラスなのは知っていた。上着を佐藤に被せ、半袖のアンダーシャツから浮き出る筋肉を見れば一目瞭然だ。

だが、それでもこの人数差をどうにかすることは出来ない。

「俺たちは十人以上、そしてここには屈強なアルベルトもいる、喧嘩慣れした石崎も後から合流するだろう。つまり残る二十人以上がお前の敵として加わるわけだ。対して、お前は足でまといを抱えた上にその身一つ。で、どうする？」

「そうだな。お前たちは暴力を信じて疑わないらしい。逆に問いたいのだが、俺はどうすべきだと思う？」

「ハッ、そりゃ追い込まれてんだ。危機的状況を回避するしかないだろ」

嘲笑を含んだ龍園の言葉に、言峰は首を傾げた。

その仕草に龍園は眉を顰める。

「俺は、追い込まれてるのか？ 危機的状況なのか？」

「??何を言ってるやがる」

「ふむ。確かにお前たちはこれから十五人の生徒で囲んで袋叩きにする予定だし、危機的状況なのかもな。だが、それはあくまで俺が反撃しないことを前提としたものだろう？」

「一人や二人は刺し違えるってか?」

「笑わせるなよ龍園。この程度の人数で刺し違えられるわけがない。俺を倒したければ Cクラス全員を連れてきてからにしろ」

その言葉に時間が止まった。

龍園も、アルベルトも、伊吹も、他の Cクラスの生徒も耳を疑う言葉だ。不敵に笑う言峰の隣で佐藤の震えが止まった。

先程までの絶望が嘘だったかのように、今は安堵している。絶対的な信頼、やはりこの男は人心掌握で龍園の上をいつている。

「??理解出来ねえな。本気で言っているのか?」

「そもそもこの策を考えたのは龍園じゃない。俺だ」

「——は?」

「俺と椎名が懇意にしていたのを知っていたはずだが、なぜ警戒しなかった? 才女でありながらも運動神経に劣る椎名だから意識から外していたのだろう? そして、繋がりがあくまで優等生止まりの俺だったからこそ、警戒に値しなかった」

「お前、まさか」

「椎名から石崎、伊吹、金田。その三人から龍園に情報が回るわけだ。他クラスの P t の効率的な減らし方をな。そして、お前はさも自分が思いついたかのように実行した。俺

がばら撒いた断片的な情報を見聞きし、策として立案した」

額から零れる雨水を払いながら言峰は淡々と告げる。

信じられないという表情を浮かべるCクラスへと丁寧な教えを説くように。

「お前がそういった策を好む傾向にあることは須藤の事件、そしてそれより以前にCクラスとの衝突を相談してきたBクラスの生徒から聞いて、推測できた。そして実行は最終日近くであり、夜間、若しくは悪天候の時。今は絶好な条件だったわけだ」

「?？」

「お前は俺が森の中に入っていったと伊吹から連絡を受け、嬉々として潰しに来たのだろうか？　そしてあわよくば他の生徒を釣って更に減点させるつもりだった。連絡手段は、彼女が隠し持っていたトランシーバカ」

「ありえ、ない」

ボソリと伊吹から言葉が溢れた。

龍園は笑みを浮かべられず射抜くような眼光で言峰を見つめている。

「これは余談なのだが、お前が堀北に告げた言葉を考えていたんだ。確か、『既に勝っている』だったか？　まるで誰が気付くか試しているような言葉だったな。きつと自分の元を訪れた生徒全員に告げていたんだろうな」

「そこにすら、気付いたってのか？」

「ああ、ついさっきだがな。Aクラスのスポットを見てきた。あれは明らかにお前たちCクラスが譲渡したものだろう？　つまり契約していたわけだ、AクラスとCクラスとで何かしらの交換条件を——」

「アルベルト」

遮るような龍園の言葉に反応してアルベルトが距離を詰める。

言峰とアルベルト。身長差は果てしない。

その恵体から繰り出される暴力は、相手を易々と吹き飛ばすだろう。そう思ってしまったほどのもの。

アルベルトの右腕がうねりを上げ、止まった。

「あまり侮ってくれるなよ山田アルベルト。俺はお前より遥かに強い」

「——」

振り上げられた腕は、その関節に抑えられ止められた。

左手でアルベルトの右腕の関節を抑えながら、言峰が笑う。

初動。攻撃態勢に入り、最も力が入っていない状態を狙った技術。ただ殴る蹴るの喧嘩だけに慣れていた彼らとは培ってきた技量が違う。

「勿論、こんなことをしなくても握力だけでお前の攻撃を受け止めることも出来たが」

「——Great」

アルベルトが下がった。

龍園もようやく自分たちが追い込まれつつあることに気付き、それでも不敵な笑みを作った。

雨がより激しさを増し、霧が濃くなる。

そんな中、言峰は更に言葉が続ける。

「お前たちは仮に俺がこれから暴力を振るつたとしても訴えることは出来ない」

「プライドの為に黙ってるってか？」

「それ以前に信用の差だな。これまで学校側に貢献してきた優等生である俺、問題ばかり起こすCクラス。差は歴然だ。普通ならどちらの証言を信用する？ それにこの状況、俺が集団で囲まれて脅迫された、とでも言えば正当防衛として認めて貰えそうな程だな」

「クク、この状況を本当にお前が作ったんだとしたら、俺たちは手のひらで転がされていったわけだ」

「今回のお前の反省点は椎名ひよりを疑わなかったことだ。これまでクラスメイトに干渉してなかったはずの椎名が、突然として他のクラスメイトに断片的な情報を伝えて回った。あまりにも不審だったはず。でもお前、いやCクラスはそれを変わり者だったから、で片付けた。いや、もし龍園の耳に入っていたのなら疑っただろう。しかしお前

の耳には届かなかったわけだ」

佐藤から離れ、言峰が近付いた。

龍園たちとの距離が三メートルとなる。

「見つめ直すべき点が次々と見つかるな龍園」

「ぬかせ」

「椎名という明らかなスパイ。これはお前への反抗が原因だ。Cクラスの伝達能力。これはお前の統率力が原因だ。お前は暴力で支配しようとして、同時に反抗する者も作り出した。支配者としてまだまだ未熟な証だな」

近付く。

残り二メートル。

「お前が信じてやまない暴力は万能なものじゃない。支配も、協調も出来ない。それに、更に上質な暴力を持つ者に屈する運命にある」

「??」

「それを今から教えてやろう」

一メートルまで近付いた。

瞬間、アルベルトの身体が弾かれた。

「」

何が起きたのか、見ていた面々は理解できない。

当事者であった言峰とアルベルトだけがそれを認識出来ていた。

簡単なことだ。アルベルトがタツクルするより早く、言峰が肉薄し、更にその胸部へと掌底を放っただけ。

たったそれだけで巨軀を誇る黒人の恵体は後方へと吹き飛ばされ、無様にも地に這い蹲ることになった。

「——見えたか？ 龍園」

「マジかよ?？」

「言峰ッ!」

呆然とただ見つめるだけの龍園とは違い、小宮と近藤が接近する。

両者ともに拳を振り上げ、殴り掛かろうとし——、

「がっ」

言峰の裏拳が小宮の顛顛を弾き、そのまま遅れて身を振って行われた、かかと落としがその頭を地へと沈める。

「ひっ」

視線を向けると近藤は完全に怯え切っており、立ち竦んでいた。

だが、そんなこと関係ないと言わんばかりに言峰の上段蹴りが側頭部を打ち抜いた。

崩れ落ちる近藤から龍園へと視線を移し、言峰は笑う。

「これで三人倒れたな。お前の計算を上回ったぞ龍園」

「はは、暴力までも一級品と来たか。??伊吹ッ！」

「——ッ！」

尚、龍園の笑みは崩れない。

叫びに反応した伊吹が言峰へと接近し、顔面目掛けて拳が振るわれる。

しかし、三度振るわれた拳は全て空を切り、次第に焦りが生じてくる。

そして放たれたハイキックを言峰は身をかがめて躲す。そのまま弾丸のように肩から伊吹へと肉体を叩きつける。

吹き飛ばされた伊吹は木へと背中を打ち付け、呼吸が困難になり起き上がれない。

「さて、四人目だ。どうする龍園」

「全員で行くぞ！ 先頭は俺が——」

「遅せえよ」

既に肉薄を終えていた言峰の拳が龍園の胸を穿った。

「——ガッ！」

恐らく手加減された一撃。

倒れた己の肉体が動かなくなる。

圧倒的な戦力差だ。

たった一人に、無傷でここまでしてやられた。

懐かしい敗北感、だが絶望にはまだ足りない。

「クク??確かに強えが、今後どうなるかわかってるのか?」

「??」

倒れ伏した龍園を言峰が見下ろす。

その表情に変わりはない。

「小便してる時は? 寝てる時は? お前はいつ、どこで襲われるか分からない恐怖を

——」

「まだ理解していないのか?」

「なに?」

「俺はまだ全力すら出していない。その気になれば拳一つで殺せる」

わざわざ屈んだ言峰は龍園の瞳を見つめながら告げる。

「——お前は浅はかだな。相手が自分を殺さないと考えている。相手が暴力を振るわないから安心して自分は暴力を振るえる。そう信じきっている」

「なんだと?」

「逆に聞くが、真に追い詰められた人間は何をするか分からないぞ? 包丁、鈍器、縄、

人を簡単に殺せる道具は容易に手に入る。お前は世間を知らなすぎる」
「??」

「もし佐藤を傷付けられ激昂した俺がお前たちを殺しに来たのならどうするつもりだったんだ？　そこまで想定していなかったのか？　お前のやり方は怒り、憎悪を買いやすい。事前にライン、つまり引き際を弁えておけ」

殺意の籠っていない瞳。

だが、何故か龍園の中で焦りのようなものを抱かせた。まるで果てしない闇を見ているかのようなその瞳に、思考が停止する。

これは——恐怖、なのか？

違う。龍園は今ままで恐怖や絶望と言ったものとは無縁の存在だった。

ではこの感情は一体なんだと言うのだろうか。

「——増援が来たか。流石にこれ以上の長居は佐藤の身が危ないな」

「逃げるのか？」

「ああ、逃げるさ。??お前にひとつ助言しておいてやる。もし、本格的に俺と戦いたいと思っているのなら歓迎しよう。その時はお前が用意した舞台、お前が用意した策を尽くひねり潰してやる」

「ハッ——出来そうだから恐ろしいもんだ」

「その為にも、我慢を覚えろ。策を実行する前に今一度考え直す時間、つまり仲間と話し合え。お前一人では限界が来る」

遠くから龍園の名前を呼ぶ声が聞こえる。

石崎だ。どうやら残りのクラスメイトが合流してきたらしい。言峰はそれに気付いたのか振り返ると佐藤の元まで歩いて行つた。

「し、しろくん」

「怖がらせて悪かつたな。帰るぞ」

「この、まま逃がすかよ。石崎ッ！ 他の奴らも追いかける！」

合流したばかりで状況を理解出来ない石崎たちならば言峰に恐怖は抱かないはずだ。この場にいた生徒では無理だが、言峰の強さを知らない石崎たちなら追える。

その確信と共に龍園は指示を下した。

石崎たちは直ぐに言峰へと向かつて走り出す。

「鬼ごっこか。失礼する麻耶」

「え、きやつ」

言峰は佐藤を抱き抱えると走り出した。

そのまま逃げるように去っていく。

「は、はやつすぎ」

「まじかよー！」

石崎たちの驚嘆を背後に、言峰の加速は止まらない。

人一人抱えてこの速度、並のスポーツ選手を凌駕していた。

泥による不安定な足場、木々による障害、視界を遮る濃霧。

全てをものともせずに加速していく言峰。その速度に佐藤は目を瞑ってしまう。

どんどんと離されていく距離。

止まらない加速。

石崎たちはやがて追いかけることを諦めていた。

言峰の背中が暗闇へと消えていく。

4

「あ、あの、ありがとう土郎くん」

「??怪我はなかったか?」

「え、うん!」

追っ手を撒ききった後、言峰は走るのをやめ、佐藤を抱えたまま歩いていった。ここから拠点はそう遠くない。

五分もしないうちに辿り着けるだろう。

佐藤は状況を呑み込めたのか、言峰に抱えられているという状態に顔を赤面させていた。

いつもみたいに穏やかな声音、優しい笑顔。安心感が湧き出てくる。

「つ、強いんだね喧嘩」

「喧嘩は慣れていない。あくまで俺はただの武に身を置くものだ。本来、素人相手にその武を振るうことは褒められたものではない」

「でも、私を助けてくれたし」

「そうだな。悪戯に暴力を振るった訳じゃないから、主も寛大な心で認めてくれるだろう」

安堵からか、感情が爆発し涙が零れる。

危機を乗り越えたという安心感、言峰といるという嬉しさ、色々なものが溢れてくる。

「あ、あれ、涙が?」

「怖かったんだろう。随分な思いをさせてしまった」

「士郎くんのせいじゃないよ?」

何度も涙を拭いながら佐藤は笑った。

かなり弱っている。体温も高い。呼吸も正常ではない。

これはリタイアさせるべきなのだろうか、と言峰は思案する。

「私、試験終了までは頑張るからっ。だからリタイアはさせないで?！」

「??わかった。皆には内緒にしておこう。だが、それで何かあれば——」

「私だってDクラスの一員なんだよ? もっと信用して」

「そう、か。君は強いな麻耶」

「ふふ、士郎くんもね」

「??今回の騒動は秘密にしておいてくれないか? 俺がそれとなく言っておく。全て伝えてしまうとDクラスが混乱してしまうかもしれない」

言峰の言葉に佐藤は首を縦に振った。

堀北が指導者として成長しようとしているというのに、その邪魔はできない。それは楽しみがなくなってしまう。

そう考え、言峰は唇を噛んだ。

「まだだ。また思考が安定しない。二つの思考が、二つの善悪が心を引き裂こうとしている。」

「??大丈夫?」

「——ああ、俺は傷一つないよ」

佐藤の言葉に引き戻された。

何故、彼女にだけ自分はこうも優遇しているのだろうか。

この学校で初めてできた友人だからなのか。

最も身近にいた異性だからなのか。

それとも――。

考える必要は無い。

言峰は佐藤を抱えたまま、Dクラスのスポットへと帰還した。

敗北・勝利、そして――

生まれた悪。

備わっていた善。

矛盾を孕んだ存在。

言峰士郎——旧姓・■士郎は聡明な子供だった。

厳格な父、心優しい母。

記憶に残る穢らわしい両親。

自分という破綻者を産み落とした憎悪の対象。

幼少期はいつも不安だった。

少年期には絶望に変わり、とある男によつてそれが悪いことではないと教えられた。

他人の苦悶でしか、不幸でしか生き甲斐を見つけられない。

間違っていることは知っていた。だから自制してきた。ずっと苦痛を感じていた。

そして、信仰に身を捧げた。天におわす我らが主に救つて貰えぬかと試行錯誤した。

善行を積んだ。隣人を愛した。

善行を積んだ。平等に手を差し伸べた。

善行を積んだ。

善行を積んだ。

善行を積んだ。善行を積んだ。善行を積んだ。善行を積んだ。

善行を——。

人の愛し方が分からない。

隣人を愛せなかった。愛とは何か。■土郎は人を愛せなかった。

他人の不幸でしか生の実感を受けられない自分に、誰かを愛せるものか。

好きだと思っていた、大事にしていた彼女の死に、何も感じなかった。

寧ろ、自分の手で地獄に落とせなかったことを酷く悔やんだ。

それでも隣人を愛そうとした。

平等に手を差し伸べられなかった。

他人の幸せを受け入れられない。他人の成長を許容できない。

妬みだ。自分はこんなにも幸せになりたいのに、どうして他人の幸福を願わなければ

ならないのか。

差し伸べた手が握られることに嫌悪感が湧き出る。

それでも平等に手を差し伸べた。

善行を積んだ。主は自分を救わない。

善行を積んだ。自分は何も変われない。

善行を積んだ。何も、変わらない。

善行を積んだ。なんの為に生きているのか。

善行を積むのをやめた。

主は自分も、そして彼女も救わなかった。

信仰心はとうの昔に消えていた。それでも縋っていたのはどうしてだろうか。

自分の中の悪が囁いた。

神父が嘲笑う。その何が悪いことか。

友人が高笑う。何を以て悪とするか。

これ以上、何を求めればいいのだろうか。

そして、我慢の限界を迎えた時。

■ 士郎の両親は死に絶えた。自分の中の悪が微笑んだ。

1

—— 思い返せばおかしな点は多かつた。

無人島試験。私たちが初めて臨んだ特別試験。

炎天下、無人島での生活を強要された生徒たち。所属するクラスによって方針が大きく別れていたと思う。

坂柳の不在の為、葛城の指示を仰いでいたAクラスは早々に洞窟内という良質なスポットをみつけ、そこに引きこもった。

一之瀬がリーダーを務めているBクラスは一致団結を行動指針とし、特に目を引くような策を用いなかった。一人も欠かず、試験を乗り切るって感じだったと思う。

そしてCクラスは龍園の支配の下、初日でp tを全て吐き出した。正直、やり方には賛同出来ない。でも、私が何か代案を出せる訳もなく、悔しさとともに反論を呑み込んだ。

全クラスで最も謎が多いのはDクラスだ。率いる者が決まっていないクラス。平田、榎田、堀北、言峰というリーダーと思われるものが複数いる。須藤との一件で、CクラスとDクラスが揉めた際、それを解決したのは堀北だと龍園が言っていた。つまり、堀北に龍園は負けたわけだ。

だから、Dクラスのリーダーは堀北だと思っていた。警戒すべきは堀北で、後は多少優秀なだけの奴ら、と龍園も言っていたし、私も他の三人は警戒に値しないと考えていた。

そんな中、Cクラスは敗北した。言峰士郎というたった一人の生徒に負けたのだ。

「りゆ、龍園さんっ」

石崎たちが戻ってきた。佐藤を抱えて逃げた言峰を追っていたが、どうやら逃げ切られたらしい。あの身体能力だ。石崎たちでは捕まえるのはおろか、追いつくことさえ出来なかつただろう。

龍園は顔を歪めながら立ち上がる。短時間とは言え意識を失っていたせいで、何をされたのか知らないけど動く度に身体に激痛が走るらしい。ざまあみろ。

「な、何があつたんですか？」

「ハッ——ただの優等生じゃなかつたみたいだな。アイツは優等生の皮を被った化物だ。フィジカルでCクラスを潰しやがった」

龍園は自嘲するように呟いた。鬱陶しい雨が額から流れ落ちてくるのを払いながら、私も身を起こす。

雨は止む気配を見せない。

次第にアルベルトや小宮、近藤たちも起き上がる。

どうやら全員が手加減されていたようだ。目立った外傷もない。

「ここで起きたことは何も聞くな。そして、誰にも話すなよ。石崎たちや他のクラスに漏らした奴は制裁を加える。覚悟しておけ」

「は、はい」

龍園は鋭い眼光で周囲の人間を睨みつけた。全員が俯き、石崎以外は声を発することも出来なかった。

どうやらひよりによる裏切りも、言峰の強さも黙ってろってことらしい。石崎たちも何となく何が起きたかわかっているようだが、全容が掴めたわけじゃない。あいつの怖さを知るのはあの場にいた十五人だけだ。

龍園はいつもみたいにニタニタと不快な笑みを浮かべ、石崎への視線を向けた。

「それで、上手くやれたか？」

「はい。Bクラスが二人、Aクラスが一人です。どいつも馬鹿みたいに外歩いてたんで」
 「大方、周囲の様子を見に行かされ、それに逆らえなかった気の弱い連中だろう。こっちはBクラスが三人、Aクラスが二人だ。ククツかなりの額だな」

石崎たちも上手くりタイアに追い込めたらしい。Aクラスは流石にガードが硬かったが、Bクラスの方は金田がスパイとして潜り込んで、気の弱そうな奴を私みたいに誘き出した。

私の方は失敗したけど。

元々、今回はDクラスの方は言峰を潰す作戦だった。おまけが佐藤麻耶の方だ。

あいつの情報は龍園の耳にも入っていたらしく、各クラスに太いパイプを持つ言峰を

屈服させて有効活用するつもりだったみたい。

結果は惨敗だった。

それにしてもAクラスがマイナス90ptでBクラスがマイナス150ptだ。リーダーの目処もついてるし、最終的にはもつと大きな被害を与えられる。

「勝ちも確定したな。だが、同時にDクラスの一人勝ちも許したか」

「仕方ないでしょ。あんなのいるなんて聞いてない」

「言峰を狙ったのは失敗だったか。あいつを狙うのは坂柳を落とした後だったな」

「そ、そんなに強かったんですか？」

「??暴力でも、知性でも全てを上回りやがった。それ以上聞けば、お前を潰さないといけなくなるぞ石崎」

「あつ、すいません！」

Aクラスのリーダーは分かっている。Bクラスも金田が見つけた。問題はDクラスのリーダーを見つけれなかったこと。つまり、ptを下げる手段がない。

どうしたものか、と考えていると足音が一つ近付いてきた。

「負けたんですね龍園くん」

「———今ごろのこのこ歩いてきやがって。随分とやってくれたな、ひより」

椎名ひより。

Cクラスきつての変わり者で、才女。読書好きで争いごとが嫌いなくらいしか何も知らない女子生徒だ。

今回はひよりへの変わり者という周囲の評価を利用されたわけだけど。

「やってくれた、とは？」

「?? ああ？」

「私は情報を提供しただけで、敵対行動を取ったわけじゃないですし、何よりCクラスが不利になるようなことはしてませんよ」

龍園の顔が呆然としている。馬鹿丸出しだ。

でも、確かにひよりは言峰に言われたことをそのままCクラスに流しただけだ。それをどう判断し、どのように活用したかは全て龍園の責任となる。与えられた情報のソースを疑わなかったのも龍園だし。

「?? 確かにな。今回の件でお前を問いつめるつもりはねえ。敗因は俺の浅い考えだった」

「残念です。あんなにも頑張ったのに負けてしまったなんて」

「ククツ言うじゃねえか」

龍園は真面目な表情を浮かべる。

「次負けたら俺は支配者を降りる。覚悟は決めた。もうてめえらに下は向かせねえよ」

「龍園さんっ!」

石崎がキラキラした瞳を向けている。きもい。

「そんな龍園くんと言峰くんから伝言です」

「あ?」

「どうせならAとB、両方落とすつもりは無いか、とのことですよ」

そう言っつてひよりが差し出したのはカードキーだった。

2

特別試験最終日。

8月7日。長くも短い無人島での生活がついに終わりの時を迎える。

過酷なサバイバルではなく、親友たちとバカンスに来ていた気分だった。かなり楽しく過ごせていたと思う。

終了時間とされていた正午になっても、まだ周囲には真嶋先生たちの姿はない。

『ただいま試験結果の集計をしております。暫くお待ち下さい。既に試験は終了しているため、各自飲み物やお手洗いを希望する場合は休憩所をご利用ください』

そんなアナウンスが流れ、生徒たちが一斉に休憩所へと集まっつていく。他に仮設テン

トの下にはテーブルやら椅子やらが用意されていて、十分な休憩が取れそうだった。

「終わったね。??大変だったけどかなり楽しめたよ」

「そうだな。良い経験になった」

オレの隣で平田が安堵の息と共にその場に座り込んだ。オレも同じように座り込む。

肩を並べ、同じ目標を胸に特別試験に挑めた。勝敗はどうあれ、当初の目標であった

一致団結は達成したのだ。肩の荷がおりたのだろう、平田はやり遂げたと力を抜いた。

「堀北さんの策が上手く行けばいいけど」

「ああ、リーダーを事前に開示してそれを指名させたあとリタイアする。相手はリー

ダー指名失敗でマイナス50ptとなる、だったか」

「うん。おかげで士郎がリタイアしちゃったけど、マイナス30ptの損失は彼がス

ポットを占有し続けたことで帳消しになったね」

士郎はリタイアした。今のリーダーはオレだ。

正当な理由なくリーダーの変更はできない、だったか。体調不良によるリタイアはど

うやら正当な理由だったようだ。

ひとつ不可解なのはこれが堀北の策というところか。

平田は本気でそう思っているようだが、これは士郎の考えた策だという確信がオレの

中にはあった。

入れ知恵、ではないな。士郎は堀北の成長を促している。きっと断片的に情報を与え、気付きを与えたのだろう。かつて言っていた高円寺と士郎の論争を思い出す。飢えたものへの施しについて。

撒き餌という情報を与え、釣りをするという閃きを与えた。士郎は高円寺の意見を参考にしたのか？

「結局、Cクラスは一人もリタイアしなかったんだね」

「みたいだな。あの状態から一人も欠かさなかったのは凄いな」

Cクラスも他クラスと同様にこの場にいた。

龍園はジャージのポケットに手をつ込み不敵な笑みを浮かべながら立っている。

その周囲からCクラスは一人も離れていない。

意外と統率が取れているらしい。全員の表情を見る限り、忠誠心のようなものを感じる。

堀北は龍園に今後勝てるだろうか。

キーン、と拡声器のスイッチが入る音が砂浜に入ると、真嶋先生が姿を見せる。

慌てて列を形成しようとする生徒を、手で制止させた。

「そのままリラックスしていて構わない。既に試験は終了している。今は夏休みの一部のようなものだ、つかの間ではあるが自由にしている構わない」

生徒たちに緊張が走り、雑談が止んだ。

「この一週間、我々教員はじつくりと君たちの特別試験への取り組みを見させてもらった。真正面から試験に挑んだ者。工夫し試験に挑んだ者。様々だったが、総じて素晴らしい試験結果だったと思っっている。ご苦労だった」

真嶋先生からの、迷いのない褒め言葉を受け生徒たちから安堵が漏れる。

やっと特別試験が終わったのだと実感できたのだろう。

「ではこれより、端的にはあるが特別試験の結果を発表したいと思う」

どのクラスが勝っているか、現時点で確信出来ているのはオレや士郎、高円寺くらいだろうか。

「なお結果に関する質問は一切受け付けない。自分たちで結果を受け止め、分析し次の試験へと活かしてもらいたい」

Dクラスの最終ptは220だ。士郎のリタイアで減ってはいるがそれでもほとんど消費せずに、スポット占有だけでもかなり稼げている。

真嶋先生は続ける。

「ではこれより特別試験の順位を発表する。最下位は――Bクラス0pt」

生徒たちに動揺が走った。

誰しもが予想し得なかった結果。Bが龍園、いやCクラスへと強い敵意を向けて睨ん

でいる。もしかして、狙われたのはDクラスだけじゃなくAクラスやBクラスも同じだったか。

つまりリタイアでptをかなり削られたワケだ。

「続いて三位はAクラス10pt。二位はCクラス100pt」

結果が予想出来ていたのか龍園は不敵な笑みを一切崩さなかった。

なるほど、士郎は龍園と手を組んだらしい。今回の目論見はAクラスとBクラスをたき落とすことだったのだろう。

「そしてDクラスは——320ptで一位となった」

歓声が爆発した。

人気がない船内。

端末から試験結果を見ていた言峰は笑みを零す。BクラスとAクラスの絶望した表情。今までの尽力が全て無為に帰したその無様。実に味わい深いものだ。

しかし、まだ足りえない。これでは満足出来ない。

だが、自分を満足させてくれる人間は沢山いる。

堀北鈴音、櫛田桔梗、王美雨、軽井沢恵、平田洋介、龍園翔、一之瀬帆波、坂柳有栖。どれも上質な獲物だ。

端末に映る堀北が目に入る。

頑張りが報われたからか、仲間たちに囲まれ涙を流すその姿は微笑ましいものだ。

コツン、と靴が床を叩いた。

言峰が振り向いた先にはAクラスの生徒であり坂柳によって縛られている神室真澄が立っていた。

彼女は訝しげな表情を浮かべている。

「約束、守ってくれるんでしょね？」

「守るさ。一度決めたことを反故にするつもりはない」

悠然と言峰は返す。

端末を懐にしまい、神室を見つめながら立っている。

そんな姿を神室は腕を組んで睨みつけた。

「これでもかなり危ない橋を渡っているのよ。労力に見合った成果を見せてくれないと」

「ああ、君の働きには報いるつもりだ。リタイア、ご苦労だったな」

「ふざけないで。坂柳の指示にないことをしたからかなり怪しまれてる。こんなこともうごめんよ」

神室が吐き捨てた。

目の前にいるのは良人の皮を被った悪人で外道だ。唾棄すべき存在。

そんな彼にしか出来ないことを頼んでいる身ではあるが、やはり嫌悪感はある。

「そんなに信用ならないか？」

「当たり前でしょ。坂柳とどう結託しているのか知らないけど、目撃者として名乗るつもりでこの契約を結んだんだから」

「ふふ、結果は夏休み中には出すさ」

「それが信用ならないって言ってるの」

言峰へと詰め寄り、その胸倉を掴んで睨みつける。

それでも尚、この男の表情に変わりはない。寧ろ、聞き分けのない幼児を見るかのような微笑みを浮かべていた。

虫唾が走る。

「俺も長い間我慢を強いられていたんだ。それも全て念入りな準備の為だ。生まれてこの方、我慢ばかりしてきた。慣れたものだよ」

「知らないわよそんなこと！ 私に強要するな！」

「声を荒らげてはいけない。聞かれたらどうする？」

「死ねっ」

神室は苛立ちを我慢出来ずに悪態をついて歩き出した。

その後ろ姿を見ながら、言峰は嗤う。
「喜べ神室。君の願いはようやくやく叶う」
全ては——の為に。

I
wanna
taste
your
content
t

特別試験二日目の夜。

Bクラスに所属する一之瀬帆波、神崎隆二の両名は森の中を歩いていった。

月明かりだけを頼りに道を進むが、何度も足を踏み外し転びそうになってしまう。夜の帳は既に降りた。木々によって閉鎖された空間は光さえも遮る。

「ここら辺だったよね?」

「ああ、夜道故に確証はないが」

約束の場所に辿り着いた、はずだが不安は残った。

それもそうだ。同じような景色。見渡す先は全て植物だけ。目印になるようなものは限られている。

だが、どこか見覚えがあつた。既視感の正体は――、

「おや、客人が来たみたいだねえ」

二メートルにも及ぶ岩の上、金髪を輝かせる男が立っていた。

堂々と、まるで世界の中心が自分の立ち位置と言わんばかりの自己主張。溢れ出る圧

倒的自我。

その男が放つ独特な気配を二人は知っていた。

「高円寺くん???」

「如何にも、プリティーガール。私以外に高円寺六助は存在しないし、私以上の人間も存在しない。当然の摂理だが、当たり前のことをこなせたことには及第点をやろう」

「凄いや神崎くん、全然何言ってるのかわかんないっ」

「???」ここまで意味不明なのは高円寺くらいだろうな」

見せつけるように髪を撫で付けた高円寺に動揺を隠せない。

相手が自らの言葉を理解しないのが悪い、そう言いたげな態度だ。

「シエロ。いつまでそこにいるつもりだい？ あれらは君の客人だろうか？」

「??ああ、そうだな」

高円寺が岩裏に視線を落とす。

その声に反応して出てきたのは高円寺以上に屈強な肉体を持つ男だ。上着を脱いでいる為はその筋肉質な身体は一目瞭然だった。

「ここまで隆起した肉体はCクラスのアルベルトくらいだろうか。」

「士郎くんっ」

「待たせたようだな。すまない」

Dクラスの言峰士郎。

神崎から見て、凄まじいポテンシャルを持つ優等生だ。総合力で言えば、一之瀬を上回るかもしれないと警戒する生徒でもある。

誰にでも平等に接し、密やかに学年全体の女子に好意を抱かれている端正な顔立ちをした人気者。

「ううん、全然待ってないよ。寧ろ、私たちが待たせちゃったみたいだし」

「不本意だがその馬鹿が話し相手になってくれていた。俺も待ってはいないよ」

「退屈させちゃったかなって思ったけど、それなら大丈夫だね」

言峰は心なしか元気がない。

いつもみたいな穏やかな笑みを浮かべてはいるが、覇気がなかった。

「それで??特別試験の話、だったか」

「うん。士郎くんから見て、今回の特別試験どう思う?」

「ふむ、そうだな。今回の特別試験は今後課題になってくる協調性を元にした下地だと思っている。まず大前提として特別試験で競い合うのは個人ではなくクラス。集団での戦い方を重視しなければならぬ。その為にもこの試験はチュートリアルのようなものだと思うが」

「なるほどね。つまり一致団結を高めるための試験だつてことかな」

「ああ、推測には過ぎないがな。この試験でクラス内で溝を作るようであれば、以後勝ち上がるのは難しいだろう。それに、ルールがある以上、一人で戦うのは不可能だ」

一之瀬は納得したように頷いた。

神崎も同様だ。今後の為にもこの特別試験は勝敗よりもクラスの離反を気にかけて方がいい。

Bクラスは元よりそのつもりだったが、Dクラスも同じ方針なようだった。

そこで、黄金の偉丈夫が口元を歪めた。

「君たちは実にナンセンスだねえ」

「つどこういう意味かな高円寺くん」

「ほら、その問いかけ。答えを聞けば返ってくると思っっているのは良くない。少しは頭を使い給えよプリーティーガール」

「??:高円寺、おまえの言葉は理解できない」

神崎が声を荒らげた。

不敵に嗤う高円寺は可哀想なものを見る目で、一之瀬、神崎の両名を見下す。

憐憫。格上の者にのみ許された感情を見せる高円寺に二人の心がざわついた。

「理解できないのは君の怠慢さクールボーイ。何事も理解しようとする、不可能でも実行する、それが君たち弱者の義務だと思っっているが?」

「お前は自分を強者だと思ってるのか？」

「思う？　だから君はナンセンスなんだよ、クールボーイ。思う思わないは関係ない。そこに私がいるということが何よりの証明であり、確証なのさ」

「意味がわからない」

「それは残念だ。寛容な私と言えど、理解する気がない者に親切に説いてやることは無い。答えを待つ、他者に委ねる。なんとも貧困な思想だ。そういう者たちが蔓延るこの世を憂いてしまおうよ」

話す気がなくなつたのか、高円寺はそれ以上口を開くことが無くなつた。

沈黙が訪れる。

流石にお人好しな一之瀬といえど、ここまで言われて黙っていることは出来なかつたが、有無を言わせぬその黄金からの視線を受け口を噤んだ。神崎も同様に言葉を発することは出来ない。

そんな中、くつくつと押し殺した喉を鳴らす笑い声が聞こえてくる。静寂な空間で、その笑い声はよく響いた。

「お前は本当に変わらんな六助」

「何か答えでも見つけたかい？」

「ああ、また助けられてしまったようだな」

「気にすることはない。私と君の仲だ。それに、その歪みの結末を見届けたいという思いもある。必要経費と言うやつさ」

「??」そうだな。隣人の事ばかり考えすぎていた。俺は自由なんだ。やつと、あの呪縛から抜け出せたんだ。好きにやらなくては、長年の我慢が報われん」

何か不穏な気配を感じる。

穏やかな笑み、とは毛色が違う笑みを零す言峰。

全身が産毛立つのが分かった。一之瀬と神崎は無意識に身構える。

「??士郎くん?」

「——」一之瀬帆波、Bクラスの生徒で俺に相談を持ちかけてきた者は何人いると思う?」

唐突な問い掛け。

一之瀬は困惑を隠せずに眉を顰める。

「どうだろ、かなりいたと思うけど」

「十八人だ。内訳は男子が五人、女子が十三人だな。その中に君の親友である白波千尋、そして君も含まれている」

「何が言いたいの?」

「俺はその全員の秘密を知っている。無論、君もだ」

時が止まった。

理解するまでその言葉を脳内で何度も繰り返す。

そして理解した。

顔が青ざめ、冷や汗が溢れ出る。

「ま、まさか??」

「人に聞かれたくない。聞かれてしまえばこの学校に居られない。くだらない悩みから、その者の今後を左右する罪悪。随分と幅広く相談されたものだ」

「脅すつもり? ??正直、君は、士郎くんはそんな人じゃないと思ってた」

「どういうことだ、言峰ッ!」

神崎が声を荒らげた。

明らかな脅しだ。見過ごせるようなものではない。

言峰は嗤う。

「ふむ。脅しとはまた物騒なことを。俺はただ事実を伝えただけであり、君たちを脅迫するようなことは口にしていないと思うが?」

「??何が目的なの?」

「目的? 目的とはなんだ? この掛け合いに意味はあるのか?」

「——は??」

言峰の背後で高円寺が静かに行く末を見守っている。

言峰士郎はこんな人間ではなかった。善良で、博愛主義で、誰からも好かれるような性格の男子生徒だった。

それが今はどうか。あんなにも親身に相談に乗っていた男が、悩みに大小などないと言っていた男が、くだらないと吐き捨てたのだ。

明らかに異常な事態だ。

「人の行動原理には、その根底にある愉悦が作用する。勝ちたい、負けたくない、見返してやりたい。どれも等しく愉悦だ」

「愉悦?」

「君にもあるだろう? 愉悦を持たぬ人間など、それはただの機械だ」

一之瀬を庇うように神崎が前に立つ。

それを見ても言峰は尚嘲笑うように続けた。

「俺は——他人の不幸でしか生きられない人間だ。他者の苦痛でしか生き甲斐を感じられない欠陥品だ。Dクラスに配属されたのも納得がいくものだな。人の不幸に悦を感じることを誰が許容する?」

「士郎くん?」

「隣人の破滅を尊び、他人の不幸を好み、苦悶の声に安堵する。ああ、なんておぞましい

人間なんだ、と。自分はなんて罪深い悪人なんだ、とそう思っていた」

——言峰士郎にとつての愉悦は、まさしくそれだった。

「だが、それももうおしまいだ。なぜ、他者に許容される必要がある？ 理解に何の意味がある？ 等しく無価値だ。この掛け合いも、俺の心情の吐露も、全てが無意味なもので、意義がない」

「??苦しんでただね」

「それは同情か？ 俺に憐れみを抱くのはやめた方がいい」

「どうして？」

「満足しているからだ。俺を産んだ穢らわしい両親を憎み、良心の呵責を嫌悪し、罪悪感を嘔み殺した。だが、今となつては全てが愛おしく感じる。俺には幸福を感じる心があつた。機能が備わつていた。どこに憐れみを抱く必要があるというのだ？ 喜ばしいことではないか。愉悦を感じることが出来ることのどこが欠陥だと言うんだ？」

「??それでも、私は士郎くんが苦しんでいたんだと思うよ。今はそんなことないかもしれないけど、昔の君はそうじゃなかったんでしょ？」

「??確かにそうだな。それは間違つていない」

「じゃあ、ずっと我慢を強いられてきたんだよね。私たちにとつて当たり前前の幸福を実感できずに、空虚な生き方を選んだ士郎くんは——」

一之瀬帆波はどこまで行っても善良だった。

言峰にとつてはそれが喜ばしいことではある。

この掛け合いに意味は無い。が、少なくとも無価値ではなかった。

「——一之瀬帆波、これは警告だ。俺は君のその善良な性格を心から尊敬している。だからこそ、君の破滅を見届けたい俺にとつて、君が折れることは何よりも許せない」
「うん」

「今は何もしない。だが、これから先、俺はBクラスを潰しに行く。それまで決して折れ
てくれるな」

「——その時は本気で立ち向かうよ。私たちBクラスが」

「ああ、それでいい」

言峰が心から笑った気がした。

神崎がその笑顔に瞠目する。しかし、一之瀬には分かっていた。彼は確かに悪い人だが、非道ではない。

悪人ではなく悪党。非道ではなく外道。それが言峰士郎という善良さを持ち合わせた人間だった。

「龍園翔には気を付けろ。あの男は君が思っている以上に悪知恵が回る」

「龍園くん？」

「正攻法で戦うことは褒められるべきことではあるが、推奨されるものではない。時には悪辣さが君を助ける時がある。善意だけでは集団を導くことは出来ないぞ」

言峰が背を向け歩き出した。その後を高円寺も喉を鳴らして笑いながら追従する。独特な二人だったが、両者共にそんなに悪い人では無い気がした。

神崎は依然として警戒していたが。

「言峰士郎、高円寺六助、あの二人は危険だ一之瀬」

「そうかな？　高円寺くんの方は分からないけど、士郎くんはそこまで思うほど悪いことはしてないと思うよ？」

「確かに現時点では何かしたわけじゃないが??」

「士郎くんは他人が墮落したり、足を踏み外したりするところを見たいと思っっているわけではなくて、それでしか生の実感ができない人なんだよ。それを開き直すことで良心の呵責を止めてるんじゃない？」

「???そうかもしれないな」

きつとあの二人はBクラスの敵として立ちはだかるであろう。

それでも、嫌いにはなれなかった。

特別試験五日目。

Bクラスを襲ったのは凄まじい豪雨だった。

「うわー凄い雨だねー」

「このままじゃまずいな。何かしらの対策をしなければ」

そんな悪天候に見舞われながらもBクラスは冷静さを欠くことなく、対処していく。降り続ける雨に辟易しつつも、乗り越えられる自信があった。

この時までには。

それから数時間後、点呼の為に現れた星ノ宮の言葉で一之瀬及びBクラス生徒は絶望することとなる。

「残念だけどBクラスから五人、リタイア者が出ちゃった」

「——え？」

悲痛な面持ちでそう告げた星ノ宮に一之瀬は動揺を隠せなかった。

リタイアした五人はいずれも内気な生徒であり、食料を取つてくるという金田について行つた者たちだ。

そして気付く、あの時の言峰の言葉の意味を。

—— 龍園翔には気を付ける。あの男は君が思っている以上に悪知恵が回る。

その意味を理解した時、湧いてきたのは激しい怒り、そして途方もない悲しみと後悔だった。

五人のリタイアによるマイナス150ptの損失はかなり大きなものだ。

「嘘」

「一之瀬?」

「こんなのって」

一之瀬の顔が歪む。

言峰の忠告をもっと考えるべきだった。

楽観的に受け止め、皆を敗北に導いたのは自分だ。救えたはずの五人を蔑ろにしたのも自分だ。

「嘘だ?」

「落ち着け、一之瀬っ」

「こんな、こと?」

神崎が一之瀬の肩を掴んだ。

一之瀬がその場から崩れ落ちるように座り込んだと同時に、その心が折れた音が聞こえた。

それを目の当たりにしたBクラスの生徒たちも、次々と力が抜けたようにへたり込

む。

龍園の悪辣さは一之瀬の想像の範疇を大きく上回っていた。

Bクラスは、一之瀬帆波は、

——Cクラスに大敗を喫したのだ。

人を喰らわば神まで（原作四巻）

軽井沢恵の天敵

「こつん、と盤上を駒が叩いた。

静寂を切り裂いたその行いを、少女は微笑みと共に迎え入れる。

「経験があつたようで」

「ボードゲームは全般的に手を出した。アレがうるさいのでな」

薄暗い一室に光が差し込み、盤上を照らす。

閉鎖的な空間に二人の男女が向かい合っていた。互いに穏やかな笑みを浮かべ、淡々と駒を動かしていく。

「ちなみにチェスは得意なのですか？」

「苦手ではないな。恐らくだが、俺よりもアレの方がチェスは強いだろう」

「彼は底が見えませんか。あの人と同じで」

「あの人？」

「貴方は知らなくていいことですよ」

「そうか」

こつん、と盤上を駒が叩いた。

挑戦的なその言葉を受け、男は嗤う。

「さて、終ぞ約束は守っていただけませんかでしたね」

「君と交した約束なぞないと思うが？」

「あれだけ目立つようなことをして。貴方にはDクラスのリーダーから降りていただくように言っただけですが」

「ふむ。一体何が気に食わないのかな？」

「??貴方が表にいる間はあの人は動きを見せないでしょう。そういう人だと思ってますので」

「なるほど、俺がいなくなれば姿を現す、と」

「正確には直接引きずり出せる、ですね。私はあの人と真正面から正々堂々と戦いたいのです」

こつん、と盤上を駒が叩いた。

二人は互いに見つめ合った。

「それに、一之瀬さんにまで手を出してしまわれて。あれは私の獲物でした」

「なんの事だか」

「龍園くんに入れ知恵したのは貴方ですよ。彼ではあの策は思いつかなかったはずで

す」

「どうだろうな。彼奴ならやりかねん」

「いいえ、断言出来ませぬ。彼は意外と慎重です。引き際を弁えている。龍園くんは暴力的な思想を持っていますが、それでもまだ常識から抜け出せていない。秩序の内側にいます」

「では入れ知恵したのは秩序の外側にいる人間だと？」

「どうでしょう。貴方の考えは実の所よく分かっていますから」

こつん、と盤上を駒が叩いた。

こつん、と盤上を駒が叩いた。

こつん、と盤上を駒が叩いた。

こつん、と盤上を――、

「葛城くんを落としてくれたのは感謝しています。私と貴方とに関係性がないことをアピールしていたおかげでクラスの統一は簡単に終わりそうです」

「そういう契約だったからな」

「ええ、私が石崎くん相手に訴えを起こす、その代わりに貴方は葛城くんを落とす。そういう契約でした」

「結局、履行されなかったがな」

「する必要が無くなったんですから仕方ありませんよね。つまり得をしたのは私だけという事です」

「ふふ、確かにそうだ。だが、俺も十分にメリツトは得た」

「??なんででしょうか？」

「教える義理はないな」

「残念です」

指し手が止まった。

少女は熟考する。

「??強いですね。プロレベルでは？」

「あくまで趣味だ。こんなものに価値はない」

「ふふ、チェスプレイヤーが聞いたら怒りそうですね」

「必勝パターンがある。先手有利。将棋や囲碁に比べてパターンが少ない。詰め将棋の

ようなものだな」

「言ってくれますね。全てのパターンを把握していると？」

「さあ、どうだろうか」

「ですが、着実と私の勝ちに近づいています」

「君もアレ並に強いみたいだ」

今度は男が熟考する。

少女は己の勝利を確信して疑わない。

負ける気など初めから存在しないのだ。

「さて、この特別試験の結果ですが」

「法則を見抜いたみたいだな」

「あまりに簡単なものでしたので。貴方は？」

「誰が優待者かは把握していた」

「そうですか。貴方ほどの洞察力と観察眼があれば可能でしょうね」

「買い被り過ぎだな」

「ふふ、では決着をつけましょうか」

「??終わり、か」

「ええ、この結果次第で貴方が私に劣ることを証明してあげます」

こつん、と盤上を駒が叩いた。

二人の表情に真剣味が帯びる。

こつん、と盤上を駒が叩いた。

気付けばノータイムで手を指し出した。

こつん、と盤上を駒が叩いた。

こつん、と盤上を駒が叩いた。

こつん、と盤上を駒が叩いた。

こつん、と盤上を駒が叩いた。

こつん、と盤上を駒が叩いた。

こつん、こつん、こつん、こつん、こつん、こつん、こつん、こつん、こつん、こつん。

「チエックメイト」

勝敗は決した。

残されたのは一人の勝者と、一人の敗者。

——勝者の嘲笑がやけに鮮明だった。

1

電車を眺めていた。

離れ離れの街を繋ぐ電車の行方を見届ける。

ゴォー、ガタンゴトン。

無意味な行動。

駅のホームでただひたすらに行き交う人の群れと電車を眺めるだけの、時間の浪費。何も考えたくない時、こうしてこの場所を訪れた。

夕暮れの駅のホーム。

水平線に射し込む太陽の眩さに目を細めながらもただじつと佇んでいた。

感傷に浸っているのだろうか。

分からない。

自分にはそんな機能があったのか、それすらも分からない。

優秀な遺伝子を持って生まれたことに何の意味があるのだろうか。

優秀な両親、優れた環境、恵まれた生活。どれも為にはならなかった。

愛とはなんだろうか。

愛を知らずに生まれ、愛の間に産まれなかった。

愛を持たず、愛を知らず、愛を理解出来ないまま生きてきた。

結局、彼女を愛していたのだろうか。

記憶の中にいる少女が微笑む。

駅のホーム。

彼女はここで翔び立った。

その最期を脳裏に焼き付けて。

「士郎くん？」

その呼び声に意識が浮上する。

水面から顔を出したかのように空気を必死に取り入れた。

「大丈夫？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

言峰の肩を揺すり、呼びかけたのは佐藤だった。

久々に悪夢のようなものを見た。あの日を鮮明に思い出すかのような夢。

どうやら寝ていたらしい。

無人島での特別試験が終わり、佐藤たちと合流する為に集合時間前に待っていたのだ

が、ベンチに腰を下ろしたままの状態で意識を失っていた。

言峰は己の醜態に動揺しながら、佐藤へと視線を向ける。

心配そうな彼女の顔を見ていると、懐かしい記憶が蘇ってくるようだった。

「すまない。寝ていたようだ」

「ううん。無人島であれだけ体張ってたんだから仕方ないよ。疲れてるんじゃない？」

「いや、問題ない。それより麻耶は体調は良くなったか？」

「うん。一日しっかり休んだら治ったよ」

微笑む佐藤に自然と言峰も穏やかな笑みを作った。

二人は他のメンバーと合流する為に、目的の場所に向かう。

2

結局のところ、私はこの学校に入っても何も変わることは無かった。

いや、違う。最初から変わるつもりなんてなかったのかも知れない。

良い意味でも悪い意味でも何も変わらず、あの時のまま。

その理由はとても簡潔だ。シンプルなんだ。

私は私のことをよく理解している。人に好かれるような人間じゃないことも、影で悪

口を言われてることも、全部知ってるし、理解してる。

私はそういう人間なのだから。

でも、それで構わない。

変わる気なんて、全部分かかっていて変わろうと思わない。

私はそれを苦痛だと感じなくなってしまったから。

何故なら、私がそれを望んでいるのだから。

客室に備え付けられたシャワー室から出た私は、肌を濡らす水滴もそのままに全裸のまま鏡の前に立つ。もう何度、鏡を叩き割りたいと思っただろうか。

脇腹の古傷を見る度に、おぞましい過去が顔を覗かせる。

目眩と吐き気を覚え、洗面台に手をつけて私は嘔吐く。

どうして私が、あんな目に遭わなければならなかったのだろうか。

どうして私が、今もこうしてこんな風に苦しまなければならぬのだろうか。

どうして、どうして、どうして——私だけがこんなにも。

過去は変えられない。

誰にも変えることは出来ない。

神様は残酷だ。

あの日の悪夢を境に人格は破壊され、青春も、友達も、そして自分をも失った。

その間違いを正さなければならぬ。

どれだけ嫌われても、また同じ目に遭うより、ずっとマシだ。

青春なんていらぬ。

友達なんていらぬ。

必要なのは自分自身の身の安全。それだけなのだから。

その為にも、私は何だってやる。自分を守るのなら、悪魔とだって契約してやる。

平田くんも、佐藤さんも、篠原さんも——そして綾小路くんも。全部利用してやる。

私の為に、全てを捧げる覚悟は出来た。

私は寄生虫。一人で生きることできない、弱い生き物なのだ。

それでも、あの二人のぶつかりを見て、彼を見て、私の中の何かが再びうごきだしたのを感じた——。

私にとって、言峰くんは怖い人だった。

得体の知れないものへの恐怖。それに似た感情。

彼を初めて見た時、中学時代の悪夢が脳裏を過った。あの、最低で最悪な虐めつ子たちと同じ気配を感じたのだ。

だけど、言峰くんは彼らと違い、誰にでも優しい優等生だった。

平田くんと双璧をなす、Dクラスの二大イケメンにして、良心とも呼ばれる彼らは私に対して安心感を与えてくれた。

きつと言峰くんも、平田くんのように私の過去を打ち明ければ、きつと力になってくれたと思う。

でも、第一印象の時に感じた悪い予感を思い出す度に、気が進まなかった。結果とし

て、平田くんの彼女として女子の中では十分な地位を得たのだから問題はないけど。

無人島試験も終わり、翌日、私と平田くんの二人、言峰さんと佐藤さんのツーペアでダブルデートのようなものを行うことになった。

誰が言い出したのかは知らない。多分、平田くんの用事が私と言峰くんとでブツキングした結果なんだと思う。そこに佐藤さんが加わったのかな。

「今日はごめんね軽井沢さん」

「ううん。別にいいよ」

隣で言峰くんたちを待つ平田くんが申し訳なきような顔で謝ってきた。彼が断れない性格だったのは知っている。

だからこうして契約を持ちかけたんだし。善意に異様な執着を示す平田くんなら私を守ってくれるって思ったから。

「プール、大丈夫だったのかい？」

「上着を羽織ってれば問題ないと思う。傷跡も見えないだろうし」

「そうかな。だいたいいいけど」

「悲観し過ぎじゃない？ 最悪、バレたって平田くんが守ってくれるでしょ？」

「尽力はするよ。ただその時は士郎にも頼った方がいいと思うけどね」

苦笑しながら平田くんが零した。

彼は言峰くんを頼りすぎている。信頼は甘い毒だ。ゆっくりと心を潤わせ、やがて死に至らしめる。

心を殺すのはいつだって裏切りなのだから。

いや、平田くんだけじゃない。

Dクラスの生徒は言峰くんを不用意に信頼しすぎでは無いだろうか。

確かに頼りになるし、頭も良くて顔も良くて運動も出来る。何より性格が良い。

それでも私が感じたあの心配は何かしらの理由があるはずなのだ。私は彼を信用しきれていないし、信頼できていない。

寄生先として最適なのはやはり平田くんだろう。

言峰くんは候補の一つだったけど、私とじゃ釣り合いが取れていない。もし仮に言峰くんと付き合っていたのなら、私はトップには立てなかつたはずだ。

きっと彼と交際した女の子はほかの女子からの響きを買うだろうから。

「ごめん。お待たせっ」

「待たせたみたいだな。悪い二人とも」

佐藤さんが言峰くんを連れ立って現れた。さりげなく腕を組んでるあたり二人の距離が近いのがわかる。

言峰くんと最も親しい女子は間違いなく佐藤さんだろう。顔以外に目立った特徴が

無いのにどうして彼女はあんなにも言峰くんと仲が良いのだろうか。

私かわざわざ危険を犯してまで着いた地位に、ただお気楽で樂觀的な彼女がいることが妬ましい。

「僕たちもさつき着いたところだよ。気にしないでくれ」

「そーだよ。さつき着いたもん」

「ここは無難に平田くんに合わせておく。」

「水着は持つてきてるよねっ」

「うん。もちろん」

佐藤さんが私に視線を合わせながら問い掛けてきたので頷いた。

プールの入口前を集合場所にしていたのでそのまま私たちは男女に別れて更衣室へと向かった。

「軽井沢さん大丈夫なの？」

「え、何が？」

「体育の授業プールの時欠席してたし、何かあるんじゃないの？」

「あ、うん。ただの仮病だから大丈夫」

案外目敏い子だ。

私の欠席をサボりではなく何かしらの理由があると勘づいていたみたいだ。傷跡を

見られないように気を使いながら私たちは水着に着替えた。

もとより泳ぐつもりなどない。競泳水着の上から上着を羽織っておく。流石に競泳水着で泳ぐのはダサすぎるしそんな格好を見せるなんて出来るわけない。私の今の地位が揺るぎかねないから。

佐藤さんは水色のビキニを堂々と晒している。

私も傷さえなければ、あんな風に他人の視線を気にせず好きなもの着れたんだけどな。

私たちが更衣室を出ると既に男子二人は待っていた。

が、何だか人集りが出来てる。言峰くんと平田くんを囲むように女子生徒が集まっていた。

どうやら逆ナンされているようだ。

「人気だねっあの二人」

「まあクラスのツートップだしね。ランキングでも二人ともトップクラスだったし」

「それもそっか」

佐藤さんが感慨深そうに頷いていた。何がしたいのかは分からない。

どうせ自分の男が人気者なのが嬉しいだけだろうけど。正式に付き合ってるとは聞いていないが。

男子の中でもランキング上位者として不動の人気を誇る二人だけど、最近では綾小路くんも徐々に人気が出てきていた。以前から顔が整っていることは知っていたし、地味にイケメンランキングの方でも五位にいたけど、根暗そうな感じだったから不人気だった。

ここ最近と言峰くんたちと一緒にいることが多いから女子の視線が向くようになったみたい。

正直私は彼のことを不気味に思ってる。

だって何考えてるかわからないし、無表情だし、根暗でキモいし。数度話した程度の中ではあるが、平田くんたちと仲良くなければ話すことさえなかったと思う。

言峰くんが私たちに気づいたのか平田くんの肩を叩くと、集まっていた女子たちに断りを入れてこちらに歩いてきた。

相変わらず顔がいい二人だ。

平田くんはサッカー部なのもあって身体も引き締まっているし、爽やかな感じだ。

言峰くんは??プールの授業の時もこっそり見てたから思っていたが、顔から下が別人過ぎるでしょ。

首は太いし、腕なんて私の太ももぐらいある。腹筋も六つに割れていて、胸筋や背筋、下半身も含め筋肉質過ぎる。まあ、女子たちには安心感があるのかなんとかで人気みた

いだけど。

二人とも普通の黒い海パンを履いてた。お揃いみたいだ。

ただの男子たちがお揃いだとキモイけど、彼らみたいなイケメンなら許されるから不思議である。

「それじゃ行くっか」

「はいっ」

平田くんの提案に佐藤さんは元気よく手を挙げた。

男子二人は私たちの水着について触れなかった。きっと私を見て触れるべきでないという配慮だろう。

いらぬ所で気が利く二人だ。

平田くんを先頭に、そして佐藤さんが続く。

言峰くんは一瞬私を見た後、何も言わずに歩き出した。振り返る直前、笑っていたよ
うな気がする。

いや、確かに変な格好だけど笑わなくていいじゃん！

私はしれつと言峰くんに肩パンをした後、走って平田くんに寄った。

それを見た佐藤さんが對抗するように言峰くんの腕を絡ませる。

この時、私は気付くべきだったのだ。

彼の笑みの理由を。私が追いつく瞬間、おぞましいような恍惚とした笑みを浮かべていたのを。

あの——悪魔の正体に少しでも、気付くべきだったのだ。

軽井沢恵の天敵（2）

二度目の特別試験の説明が終わり、私、綾小路くん、幸村くん、外村くんの四人は退室を促された。

真嶋先生の指示に従い、そのまま部屋を出る。幸村くんは我関せずといった態度でそのまま廊下を歩いて去っていった。

集団行動出来ない人ってなんなの？

頭でっかちな人間は反りが合わないから嫌いだ。合理的にしかものを考えられない人間は感情的な私を嫌う。まあ、私も好かれようなんて思っていないからどうでもいいけど。

「??幸村は今回の作戦会議に召集されてる。早く各々の見解を討論したかっただけだと思っぞぞ？」

そんな後ろ姿を眉を顰めて見つめていた私に、綾小路くんが言った。相変わらず表情に変化はなく、気味の悪い男だ。

もしかしてフォローしてるつもりなの？ 拙いながらも擁護するような言葉に呆れる。どうでもいいっての。

結局のところ、何も言わずにどっか行ったのは変わりないでしょ。

「どうでもいいし、なに？ 私が悪いつての？」

「いや、そういう訳じゃないが」

「平田くんたちと仲が良いからって調子に乗りすぎでしょ。きもつ」

「え?!」

私の辛辣な言葉に綾小路くんは困ったような顔をする。取り繕ったかのようなその態度に、榎田さんを思い出して苛立ちが募ってきた。

「てか、話しかけないでよキモイから。そのキモオタも絶対話しかけないでよ」

「コポオツ!」

外村くんが気色の悪い断末魔と共に萎縮する。ほんとにキモイんだけど??。

「??洋介からお前のことを頼まれてるんだ。迷惑かもしれないが」

「私は子供かつ。保護者面しないですよ」

「俺としても友人への義理立てはしたい」

「??まあここで無下に扱って平田くんに変なこと吹聴されても困るし、大人しく言うことを聞いておくことにする。」

それはそうとして、未だにこの場から離れないキモオタは要らないでしょ。臭そうだし、あまり近くにいて欲しくない。

「分かった。でもそのキモオタはさつきと消えてくれる?」

「い、いや拙者も?」

「なに? ごによごによ喋らないでよ」

「?!!ごめんなさい」

「ほんつとに目障りだから消えて」

「すぐごと立ち去っていく外村くんを見送ると私は綾小路くんに視線を移した。心なしか咎めるような目つきをしている。

確かに言い過ぎかもしれないけど、キモイもんはキモいし。なによりああいふ奴らこそ私みたいな人間を陰で笑っているのだ。中学の時もそうだ。

——いくら助けを求めても誰もが目を逸らし、拳句には加担したのだから。

「ほら、さつきとして」

「ああ、歩きながらでいいか?」

「どうせ付いてくるんでしょ?」

「まあ、そうなるが」

私が先行して歩くと綾小路くんも慌てて隣に並ぶ。

「そういえば、こうして二人きりになるのは初めてだった。いつもは誰かが間にいたから。」

綾小路くんは平田くんや言峰くんと仲が良い。それも親友と呼べるほどに。だから、周りの女子たちも綾小路くんに好意的だ。まあ、顔がいいってもあるだろうけど。

随分と打算的な女子ばかりだ。誰も私のやり方に文句を言える人はいないだろう。

篠原さんたちだって寄生虫だ。

同じ穴の貉なんだ。

「最近、篠原たちと上手くいってないらしいな」

「それが何？ アンタには関係ないでしょ」

「洋介と土郎が心配してたぞ。お前が孤立するんじゃないかって」

「別にどうってことないし。向こうが勝手に陰口叩いてるだけでしょ？」

篠原さん、松下さん、佐藤さん——いわゆる軽井沢グループと呼ばれる女子集団だ。クラスのエエラルキーでも上位にいる。

そしてその頂点に立っていたのが私だった。平田くんと交際することによって私は不動の地位を手に入れた。しかし、言峰くんと仲が良いってだけの理由で佐藤さんも同じ立場にいる。

いわゆる二人のリーダーがいるみたいな状況だった。

そんなことが長く続けば、いずれグループは割れる。

結果的に横暴を繰り返していた私から人が離れ、佐藤さんの方に集まった。ただそれ

だけの話である。

しかし、平田くんの彼女である以上、私をどうこうできる人はクラスにいない。まだ、地位は保たれてる。あの時のようには、絶対にならない。

「軽井沢、お前の孤立はDクラスにも少なくない影響を及ぼす。士郎はそれを懸念していた。勿論、お前の身を案じてもいたが」

「何が言いたいのか？」

「オレたちは無人島試験で結束を固めることが出来た。だから現状維持は必要条件なんだ。まずはこのまま地盤を固める必要がある。その為にも女子内で諍いが起きるのはまずい」

「??綾小路くんって意外と頭良いの？ 私と同じで馬鹿だと思ってた」

「オレはそんな風に思われてるのか??? え、もしかして他の女子にもそう思われてる？」

「そうでしょ。意欲的に発言しないし、置物みたいじゃん」

「??確かにそうだが。それはそれとしてシヨックがデカイな」

他人の目とか気にするんだ。そこには正直、意外性を感じる。

自己主張のない人だと思つてたから尚更である。

「話を戻すが、このままいけばそう遠くない内に諍いになる。これは確定的だ。一度、お前の下から離れた篠原たちがどうするかはお前も想像出来るだろう？」

「出来ないし。うざい」

「??嘘だな。軽井沢、お前馬鹿な振りをしているだろ?」

「は? 何言ってるの?」

何が嘘なの? 私のこと知らないくせにキモイんだけど。

そもそも頭が良かったらこんなやり方してないし、私は虐められたりなんかしてなかった。

「頭が良いとか、そういうことじゃない。お前は馬鹿な振りをしてるんだ」

「だから何言ってるの?」

「何も知らないフリ。気付かないフリ。クラスの女王を意図的に演じている。そうした方が上の立場に居れると知っているから」

「??」

「口の悪さ。態度の悪さ。頭の悪さ。意外にもそういつた何もかもが悪い人間の方が強いんだ。頭の良い人間は軋轢を避ける。争いから遠ざかろうとする。だから、お前の言うことに従うし、身内になることで敵とみなされることを回避している」

凶星なのかは私にも分からなかった。

意識していた訳では無いから。確かに気丈に振舞ってはいたが、そこまで用意周到に考えていたわけじゃない。むしろ盲点だったと言える。

だけど、その言葉が意味するのは私が無意識に模倣をしていたという事実だ。私は知っていたのだらう。

誰の真似をすれば、虐げる側になれるのかを。

「それって悪いことなの？ 皆同じようなことしてるでしょ？」

「そうだな。悪いことじゃない。それもひとつの実力だ。そういつたやり方が出来る人間の方が昇進が早いんだ。他人に嫌なことを押し付けられるからな。無能な上司って言葉があるように」

「ふーん、私がそうだって言いたいの？ 喧嘩売ってる？」

「いや別にお前を無能と言ったわけじゃない。本当だ。??マジだから振り上げた拳を下ろしてくれ」

私が拳を下ろすと綾小路くんは安堵の息を吐いた。こいつも人のこと言えないでしょ。無駄に演技が上手いし、そういうフリは私以上だと思ってる。

「結論から言うと、お前なら颯躰を買っても軋轢は避けられたはずなんだよ」

「まあ、そりゃね。意外と篠原さんたちは扱いやすいし」

「だからおかしな点がある。明らかに第三者が介入してるとしか思えない」

「はっ。」

私は思わず足を止めた。

「お前を孤立させようとする動きがあった。この事実だけは忘れずにいてほしい」
そう言いきると綾小路くんは先に歩いていった。

どういうこと？

誰かが私を貶めようとしてるってこと？

ありえない。一体誰が??。

そんなことできるのは佐藤さんか榎田さんくらいだろう。ほかの女子を味方につけるやり方は榎田さんは熟知してるはず。

でも、篠原さんたちは佐藤さんの下にいる。

佐藤さんは言峰くんといればそれでいいって感じだったし、今更私になにかしてくるメリツトがない。

?? 一体誰がそんなことを。

一抹の不安を抱えながらも私は綾小路くんの隣へと小走りで向かった。

3

珍しいことに私は言峰くんと二人きりになっていた。

船内を並んで歩く。何やら言峰くんが案内したい場所があるらしい。

「珍しいね、言峰くんが私と二人でいるなんて」

「確かにな。君と二人きりでいると洋介に申し訳ないからな」

「平田くんはあんまり気にしないとと思うけど」

「彼はそういう男だ。物事に寛容すぎる」

談笑を交えつつ、目的の場所へ向かっていく。

サプライズということで、どこに向かうかは知らされていない。そう言えば他の人たちは今何してるんだろうか。

「さて、清隆から聞いていたと思うが、大丈夫なのか？」

「あ、うん。時間が経てばどうとでもなるでしょ」

「遺恨というのは根強く残る。君が悪いとは一概には言えないが、やはり君から動かなければ好転はしないだろう」

まあ、確かに向こうからアクションを起こすことは無いでしょ。かと言って平田くんや言峰くんから何か言うのも響きを買っただけで、私の立場を更に悪くするだけになる。

つまり、私から動かなければどうにも出来ない状態なのだ。

篠原さんたちは私を共通の敵として結束している。本来なら起こりえなかったことだけど、綾小路くんが言うには第三者の介入によるものらしい。誰かが意図的に

思考を誘導しているのだとか。

そんなことできるものなのだろうか。

「あれ、高円寺くん？」

「ああ、あれは気にするな。今回関わってくることは無い」

「？ ふーん」

何だか奇妙な言い回しだった。

高円寺くんは壁を背にニヤニヤと私たちを見ている。綾小路くんの次に何を考えているのか分からない人だ。

その横を通り過ぎると突き当たりを右に曲がった。

本当にどこに向かつてるんだろうか。

「篠原たちが君から離反したのは唆した人間がいるからだ」

「？」

「思考を誘導し、そうさせた者がいる」

言峰くんは綾小路くんと同じことを言っていた。

そう言えば、綾小路くんはあの話は誰にもするなと言っていた。つまり第三者が存在するという事実を隠しておけ、と私に言い含めていた。

「大方、君が散財したツケを食わされ、君の横暴や態度に嫌気がさしていた彼女たちから君を離したのは、君を孤立させる為だろう」

「そんなことまで分かるんだ」

「ああ、どのような思考か知っているからな」

「??あれ、行き止まりだけど?」

私たちがたどり着いた場所はおおよそ豪華客船とは思えないほど無骨な鉄板に囲まれた一室だった。

エンジンルーム? なんの部屋だろうか。

「言っただろう? 君を孤立させる為だ」

「何言つて——キャツ!」

突然、近付いてきた言峰くんが私の右手を掴み壁へと押しやられる。

え、なに、どういうこと!?

顔を上げれば言峰くんと目が合った。

彼は、能面のような冷たい表情をしている。

「篠原たちを唆したのは俺だ。全てはこの状況を作るためにやった」

「——え?」

「ずっと考えていたんだ。お前から放たれる違和感をな」

言峰くんは私の右手を掴んだまま離さなかった。上に引き上げられるようにされ、肩が痛んだ。そして、痛みから逃れようと自然とつま先立ちになってしまう。ますます離

れられない状況にはまりこんでいく。

「お前は虐げる者の立場にいる。だが、明らかに匂いが違う。軽井沢恵からは虐げられる者の匂いがする」

「は、はあ？」

「ほら、俺と目が合う度に瞳孔に小さな揺らぎがある。俺と対面すると瞬きの回数が増える。俺と会話すると声が僅かに上擦る。脳裏に不安と恐怖が過ぎついている証だ」
私を覗き込むように言峰くんが見下ろす。

その瞳はまるで底のない深淵のように光が差し込んでいない暗いものだった。恐ろしい程に美麗で、恐ろしい程に人形めいている。

怖い。

怖い。

怖い怖いこわいこわいこわい——。

「決定的だったのは先日のプールでのことだ。明らかに様子が違った。いつも以上の不安が瞳に宿っていた」

「——」

「お前、虐められていただろうか？」

「な、に言つて」

「否定しなくてもいい。これは問い掛けじゃない。予感より確かなもの。つまり俺は確信しているんだよ」

声音に冷淡さが。

瞳に冷淡さが。

私知っている言峰士郎ではなかった。

やっぱりだ。

彼は、善人じゃない。私の目には言峰士郎という人間が、悪意の塊にしか見えない。

「プールの授業を頑なに出席しようとしなかったな。そうか、なにか隠してるな？」

「や、やめっ」

「———これか」

言峰くんは私が反抗する前に素早く服をたくし上げた。

そして、それを見て初めて笑みを浮かべた。優等生の穏やかな笑みとは違う。微笑み

でもなければ、嘲笑でもない。

まるで悪意を塗りたくったかのようなおぞましい笑みだった。

———ああ、見られた。

見られてしまった。

「脇腹に残る傷跡。刃物が這ったような傷口。やはりそうだ」

「ううっ」

「横暴な態度も、カーストへの執念深さも、全てはこれが原因か。虐げられることへの恐怖が、君をそうさせていた」

言峰くんは傷跡を空いた右手でなぞった。

私のトラウマを吟味するように指を這わせる。

「俺に警戒心を抱いていたのは君の弱者としての勘か」

「———お、お願います。誰にも、言わ、ないで」

「ふふ??ふははははははっ!」

私の懇願に対して言峰くんは無邪気な笑いを零した。

そうだ、彼らはいっだって弱者の言葉に笑みを浮かべる。でも、言峰くんは違う。明確に違う。

その笑みには純粹な悪意がある。

中学の時の、彼らとはその純度が異なる。

彼らが弱者を虐げること喜びを見出すのならば、言峰くんは他人の絶望に希望を見出していた。

だって、彼は私の秘密を知って、心から安堵していたのだから。

「さて、どうしようか」

「おね、がいします。なんでも、する、から」

「なんでも？　??できないだろう？」

「いうことは、なんでも、きくから。ことみねくん、がのぞむなら、からだだつて」

「笑わせるなよ。俺にとつてお前の体に価値は無い。それに、そういった行為は愛を育む為に行われるべきだろう」

「じゃ、じゃあどうしたら」

私の縋るような言葉に言峰くんは更に笑みを深めた。

底なしの悪意が私を見て笑っている。

「不安か？　軽井沢。俺がお前の秘密をどうするかわからなくて」

「??」

「俺は最高に楽しいよ。秘密を黙っておく。秘密を喋る。俺は今、どちらでも好きな方を選べるんだから」

「ッ！　おねがいしますっだれにもいわないでっ」

「仮に秘密を黙っておくとする。そうするとお前はいつバラされるか分からない不安に三年間脅かされることになる。そして秘密を喋るとする。お前は今までの立場を失い、その後の学校生活はとて過ごせたものでは無いだろうな」

「——っ」

「同情はされるかもな。だが、お前は今までどのような態度をとってきた？ 横暴で、わがままで、高圧的な人間であつたはずのものに明確な欠点が見つかるんだ。男子はまだしも女子はどうするだろうな？ 悪意を持たない人間はいない。俺がそうであつたように、生まれながらにして良心を備えながらも人は皆悪意を持つている。性善説なんて戯言を抜かす奴もいるが、所詮は集団で孤立しない為に皆それをしないだけだ。秩序維持の為に悪意を無意識に抑えているんだよ。生まれ持った性質を隠し続けた人間が、格好の獲物を見つけるんだ。飢えた肉食獣の前にご馳走様を与えるようなものなんだよ。抑圧された悪意がお前に襲いかかるはずだ」

そんな未来を想像して、私の中の恐怖が溢れた。
怖い。

あの時の二の舞だ。

一度悪意をさらけ出した人間は枷が緩くなる。どんどん境界線が曖昧になっていくのだ。

そうなつてしまえば最早誰にも止められないだろう。

あの時のように、私はまた――。

「それで、どうしようか」

「おねがいですつ、だれにも」

「おかしな話だ。何故俺がお前の懇願に耳を貸さねばならん。誰に対して懇願してるんだ？」

「いや、だ。いやだいやだいやだつ」

涙は流れない。

あまりの恐怖からか、私は必死に縋っていた。僅かに残された希望にその手を伸ばそうとしていた。

きっと、私が諦めないように言峰くんが助かる術を提示しているのだろう。だって、そうでなくては楽しめないのだから。

「それにお前が普段から人に好意を向けられるような人間であれば、バラされた所で同情されて終わりだったろうに。自業自得だろ」

「あ、ああ」

「ふむ。精神的に脆そうだな。これじゃ長続きはしないか。じゃあ——」

ああ、神様。

私がいけなかつたんですか？

なにもしてないのに。

ただ、他人に虐げられないように、必死だっただけなのに。

どうして私ばかりが、こんな目に合うのですか？

どうして。

どうして。

どうしてどうしてどうして——。

——誰か、助けてよ。

「やめろ、士郎」

突然割って入った第三者の声に私と言峰くんはほぼ同時に視線を向けた。

そこに立っていたいたのは綾小路くんと、Cクラスの龍園くんだった。

いつも通りの無表情な綾小路くんに対して、龍園くんはその見た目に反して瞠目しているように見える。明らかに動揺だ。

「清隆に、龍園か。何の用だ？」

言峰くんが私の手を離した。

腰が立たなくなった私はそのままズルズルと壁に背を擦りながらへたり込む。

そんな私を一瞥した後、綾小路くんは淡々と告げた。

「お前を止めに来た」

「??止める?」

「ああ、友人として見逃せるものじゃない」

「ふふ、お前が友人を騙るか清隆っ」

僅か。

ほんの僅かではあるが、綾小路くんの登場に私は希望を見出してしまっていた。暗闇の中に光が差し込んだ。

軽井沢恵の天敵（3）

前兆はあつた。

ここ最近の士郎の様子を見ていると不自然な点が多く見られる。

軽井沢に頻繁に視線を向けることが増えた。

今まで洋介の彼女という点、そして友人という点で繋がりがあつた二人だが、実を言ううとそれほど仲良くはない。

オレ目線、軽井沢の方が一方的に士郎のことを避けている節があつた。二人きりになるのを嫌がつている。生理的嫌悪とか、そういうレベルじゃない。

軽井沢恵は言峰士郎に対し、明確に恐怖を抱いていた。

だから、二人が並んで船内の人気のない方面へと歩いているのを見て、オレは即座に行動した。

これが杞憂である、ということはありません。

オレの推測は、もはや確信になつていたのでから。

二人を追つて奥に進む。

この先は何も無い。あるのは行き止まりだけだ。

監視カメラもなく、教師や船員も滅多に訪れない場所。

ああ、士郎にとつてうってつけの場所だった。

オレは士郎のことをほとんど知らない。

どこまで実力があるのか、検討もついていない状態だ。

言峰士郎はオレと同じく、その実力を公にすることをしない。

あくまで優等生止まりの力しか周囲に見せていないのだ。

未知数の実力を持つ相手に、真っ向から立ち向かう――。

普段のオレなら有り得ない行為だ。

だが、それでも。

オレは?!

「おや、綾小路ボーイ。こんな場所になんの用かね?」

「高円寺?!」

立ち塞がるように高円寺がいた。

いや実際には壁に寄りかかっているだけだ。通行の邪魔をしていないわけでもない。

しかし、その瞳からはここから先には行かせないという意思が宿っている。

オレは足を止めた。

「士郎が通つたはずだ。悪いが先に行くぞ」

「ほう。どうしてかな？ 君にメリットはないと思うが？」

「メリットデメリットは関係ないだろ」

「君もなかなか言うようになったねえ」

クスクスと高円寺が笑いを零した。こちらを嘲るようなものではなく、純粹に面白いものを見た、と言いたげである。

オレも自覚はしている。綾小路清隆はこんな非合理的なことをしないだろう。

「さて、私としてはシエロの邪魔だてはしたくない。それこそ合理的ではないからね。しかし、その反面、好奇心というものは抑えられるものでもない」

「やはり士郎に加担しているのか」

「いや？ 私は何も言われていないよ。同じことさ。シエロのやることに対して好奇心を抑えられなかった。だから、邪魔することなく見届けるつもりだったのさ」

この問答の時間もどかしい。

きつと高円寺への説得は意味を持たない。この男は膨大な自我の塊だ。オレに説得などされようものなら、問答無用で潰しに来るだろう。

どうすべきか、考えを巡らせていると高円寺がオレの背後に視線を向けた。オレも追従するように振り返る。

「面白そうなことやってんじやねえか。俺も混ぜろよ」

「ドラゴンボーイじゃないか。愉快な仲間たちを連れてどこに行くつもりだい？」

「テメエが隠してる秘密の場所だ」

龍園が石崎、アルベルトの二人を連れて現れた。

不敵な笑みを浮かべながらオレの隣に並び、高円寺に相對する。石崎、アルベルトの二人は距離を取って近づいて来ない。

高円寺を警戒しているのか？

「これは面白そうな展開だねえ。決めたよ、綾小路ボーイとドラゴンボーイ。君たちのみここを通るといい。後は認めない」

「そうか。感謝する」

「ハッ、どうせ押し通るつもりだったんだ。手間が省けて助かったぜ」

煽るように龍園は高円寺に笑みを向ける。が、これは虚勢だな。

彼我の戦力差は歴然だ。龍園が高円寺のポテンシャルを見抜けないわけが無い。その底のない潜在能力は恐らく、オレを上回る可能性すらあるのだから。

オレと龍園は先へ進む。

石崎とアルベルトは高円寺を前にして立ち止まってしまっていた。

「にしても、どうしてテメエなんだ綾小路」

「さあな。高円寺に聞いたらどうだ」

「まああの似非神父と絡んでる時点で何かしらはあると思っていたが。これは期待以上になるかもな」

「お前がどうしようとする勝手だが、手は出すな」

「出さねえよ。俺はあくまで言峰の弱点を探りに来ただけだ」

「そうか」

4

「どうやって来た？ 此処への道は」

「高円寺ならすんなり通してくれたぞ」

「そうか。六助め、やってくれたな」

士郎が悪態をついた。その表情はいつもとは違う、悪意に満ちたものだ。

オレが見てきた優等生とは反転しており、しかしこの顔こそが本来の性質なのだろう。

驚きはしなかった。予兆はあったのだ。

龍園はオレたちの問答を静かに眺めている。関与する気は全くないようだ。

「??なるほど。理解した。お前だったか清隆」

「そうだ。士郎、お前の邪魔をしていたのはオレだ」

「須藤の事件で堀北に入れ知恵をして俺の計画を潰し、先の無人島試験では伊吹に佐藤を誘き寄せるように誘導した。そして次は軽井沢を助ける為に俺の邪魔をしにきた」

「間違つてはいない。が、軽井沢の為じゃないな」

「??なに？」

「オレは洋介から相談を受けていた。士郎、お前が今しがた知った真実を、伝えられ、出来れば見守つてやって欲しいと友人として頼まれている」

「ほう。洋介は俺を信用しなかったか」

士郎が興味深そうに問い掛ける。

が、オレは首を横に振り、その言葉を否定した。

「違うな。洋介はお前に重荷を与えたくなかったんだ。ただでさえ、クラスのをに身を粉にして動いてくれているお前に、これ以上頼りたくなかったんだよ。つまり、親友として、お前を信頼した上での行動だ」

「??そうか。ではひとつ聞きたい。いつから気付いていた？」

「初めの違和感は五月初めの堀北との問答だ。あの日、お前は堀北に成長を促していたんだと、オレは思っていた。だが、改めてお前の言葉の意味を考えたらそこに不自然な

点があつた」

「不自然な点？」

「お前は堀北への精神的成長を促すと同時に、孤立するように仕掛けていたんだ。支配的思想の植え付け、それがお前の本当の目的だったんだろう？」

「ああ、彼女が最後には破滅を迎えるように仕向けていたのは事実だ」

「でも、成長を喜んでいたのも事実なんだな。少しずつだがお前が分かってきた」

オレは士郎を知らな過ぎた。

この男が一体どんな目的で、どのようなものを考え、どのように見ているのか。それを全く知ろうとしていなかった。

こんなの友人ではない。

「二つ目の違和感は佐倉の件だ」

「確かにあれは流石に性急だったか」

「ああ、まあお前が佐倉の身を案じていたのもまた事実だろう」

士郎は真剣な表情でオレを見ている。

そのポーカーフェイスは見事なものだが、焦りが生じているのを見逃すわけがないだろう。

明らかに動揺している。

「最後の違和感は坂柳だ」

「??なに？」

「坂柳の言動は明らかに別の意図を孕んでいた。そうだな、表の意味が言峰士郎との繋がりの否定。そして本来の目的が、オレへの忠告だ」

「そういうことだったか」

「坂柳は同時に三つの目的を達成していったんだ。さっきも言ったように士郎との繋がりの否定。そして、オレへの存在のアピール。最後に言峰士郎という存在に対するオレへの忠告だ」

ここまで言えば聡明な士郎は理解しただろう。この場には腰を落としたまま動けずにいる軽井沢と静観はしているが不安材料の龍園がいる。あまり多くを語るべきではない。

坂柳はオレを知っている。

そして、士郎を潰すことでオレを表舞台に引き上げようとしている。

オレへの忠告というのは勝手な憶測だ。坂柳にとって最悪な展開はオレが士郎に潰されることだ。

つまりは無謀な挑戦だった。

「幾度となく俺の邪魔をするつもりなんだな」

「お前の邪魔をしにきたわけじゃない。オレは洋介という親友の願いと、親友である言峰士郎を止める為に動いている」

「詭弁だな」

「友人とは互いの間違いを正すものなんだろう？　これはお前が教えてくれたことだ士郎」

「全く。随分とまあ口数が増えたな清隆」

——直感的にオレはその場から飛び退いた。

一瞬の選択。迷わず動けたのは奇跡に近い。

オレの頭があつた空間を風ぐようにして士郎の右足が斬り裂いた。

あまりにも早すぎる。

これは、単純なフィジカルの差だろう。

技術なんてない。身体能力によるゴリ押し。

「——ッ！」

「よく格闘技なんかで世界一なぞ争つたりするが、無意味だと思わないか？」

言葉を紡ぎながら士郎の攻撃は止まらない。

オレの視線を置き去りにするような肉薄、そして放たれる型のない右腕による攻撃。身体を振ってなんとか躲すと耳元で風が弾けた。

「技術を学んで、戦い方を学んで、それで強いなぞ笑わせる」
「つぶね！」

「己の肉体、ルールのない殴り合い。ガキのような喧嘩。動物的だが、真に優劣を表しやすうい」

裏拳が頬を掠めた。

速く、重い。まともに当たれば、それだけで大ダメージだ。

急所以外に当たろうとも激痛は免れない。

言峰士郎は肉体そのものが武器だ。

「技術などで、弱者が土俵に立つためのきっかけに過ぎん——ツ——」

拳による左からの衝撃を流し、回転に加える。身体全体をバネのように振り、渾身の右足による蹴りが士郎の首を穿った。

「今日はよく喋るな士郎」

「——」

速度と威力は脅威的だが、攻撃は大ぶり過ぎる。

初動さえ見逃さなければ、避けることは難しくない。

だが、

だが——、

「確かに今日はよく舌が回る日だ。久々に気分が高揚しているのかもしれない」
「体重差か」

木の幹のような重量感のある首。

急所であるはずの部位は、圧倒的質量を持った筋肉によって守られている。多少赤く腫れているだけで、大したダメージは与えられていない。

「身長差は5から6程。体重差は40から50。因みに俺の体脂肪率は小数点以下だ」
「まさしく筋肉の鎧か」

「俺も世間では天才と呼ばれるらしくてな。なるべくしてそうなたただけだ」
外側が硬いのならば、内側を狙うしかない。

が、露骨を狙っても腕を掴まればオレは負けるだろう。
連撃からのスキをつくか。

「それで、俺を止めてどうするつもりなんだ？」

「さあな。そこまで考えてない」

今度はオレの方から肉薄する。

姿勢を低く、獣のように地に這った。

土郎の前蹴りをそれを上回るような力で踏みつけ、阻止する。

「——ッ！」

初動。関節が動く前。筋肉に力が入る前の動作。最も力の入っていない瞬間。確かにオレと土郎では身体能力に開きがある。

が、土郎が言っていたように技術でそれはカバー出来る。

アッパー。

左フック。

右ストレート。

連続して顔面へと叩き込む。

急所と言えるほどでは無いが、鍛えられるような部位でもない。

オレの筋力でも攻撃が通る。

最後に鳩尾に膝蹴りを――、

「ツッ」

気付けば、オレは宙に浮いていた。

背中から落ちる前に体を捻って着地する。

「言つたる？ 真に優劣を表すのは生まれ持った身体能力だ」

どうやらオレは吹き飛ばされたらしい。

土郎はただ踏まれていた右足を振り上げただけだ。

成人男性の体重をもともせず、力みにくい体勢から蹴り飛ばせる筋力。しかも殴ら

れながら。

「さて、そろそろ温まってきたな」

「そうだな」

士郎が上着を脱ぎ捨てた。

鎧のような恵体が蒸気を放っている。

剥き出しの肉体、その躍動。

同時にその拳がオレの眼前に迫っていた。

鼓膜を揺らすような鈍い音が響いた。

その衝撃波は振動を起こし、オレに地震が起きたかのような不安定さを与える。

「避けたか。紙一重だったな」

「流石に心臓が止まるかと思っただぞ」

士郎は拳を突き出したまま邪悪な笑みを浮かべている。

咄嗟に横へと飛んだが、もし当たっていけば死んでいたかもしれない。

士郎の右手が貫いた先には大きく凹んだ壁があった。拳大に歪んだそれを見れば、頭蓋骨だって簡単に砕けそうだと理解する。

当たりさえすればホンモノの二の打ち要らずだな。

「心から思うことがある」

「??」

「お前は止めると言ったが、それは本当に必要なことなのか？」

「どういう意味だ？」

「士郎は吐き捨てるように言葉を零す。」

「我慢することは義務なのか？　我慢することが美德なのか？」

「我慢？」

「お前たちは強要ばかりだ。何故、我慢しなければならぬ？　物心がついてから十二年間、我慢してきた。誰しにも幸福の追求が認められているだろうが」

「振り上げられた拳を屈んで避ける。」

「同時に眼前に蹴りが迫った。」

「放たれた蹴りを起点に身体を捻り、士郎の頭上を飛び越える。」

「頭痛が止まない。吐き気が止まない。耳鳴りが止まない。嫌悪感が募るばかり」

「何を言ってる」

「俺は悪なのか？　なあ教えてくれよ清隆」

「裏拳を流し、続け様に放たれた左足の薙ぎ払いをバク転で躲す。」

「唾棄すべき悪はここにいて綾小路清隆」

「オレはお前を悪人とは思わない」

「笑わせるなよ」

大ぶりの右腕。

躲せない。

受けるしかないか。

「——グッ！」

両腕でガードしたが、凄まじい衝撃が走った。

身体が弾かれ、仰け反る。

踵落としが迫った。

「お前が友人を騙るな」

またもやバク転で回避する。

が、既に士郎の拳はオレの腹を捉えていた。

「——ッ！」

「お前に他人を愛しく思う機能なぞないだろ」

全身の酸素が吐き出され、オレは背中から壁に叩き付けられた。

思考が乱れる。痛みが脳に警鐘を鳴らす。

「お前は同類だと思っていた」

士郎が近付いてきた。

「俺と同じで、人を愛せない憐れな人間」
もう、少し。

「なあ、何故邪魔をする清隆」

今だ——！

振り上げた拳がオレに落とされる瞬間、素早く関節を抑えると両脚で首と脇腹を締め付ける。

柔道の技の一つ、腕挫十字固。

如何に屈強な肉体を持つ士郎と言えど、関節技による痛みは無視できないはずだ。

「——グアツ!!」

抵抗出来ないように限界まで関節をキメる。

痛みで士郎は呻いているが、油断はできない。

「軽井沢に謝罪しろ、士郎」

「なぜ、だ？」

「お前がやっているのは非道な行いだ。信仰に背く行為だぞ」

冷たく説き伏せる。

が、士郎は震えると、抑えきれないと言わんばかりに笑みを浮かべた。

「あはははははっ!!! 信仰なぞどうにしていなっ！ 神なぞに縋るような愚かな真

似はやめたっ！」

「なに？」

士郎は敬虔な信者だったはずだ。

その姿を、態度を、信仰を、オレは見ている。あれは演技だったとは思えない。

「ああ、あれは習慣が抜けなかつただけだ。大した意味は無い」

「??」

「大体、そういつた行いは他人からの評価を集めやすい。無条件に心を許されやすい。現に、俺は多くの相談を受けてきた」

確かにその通りだ。

こうして士郎が他者に信頼されてきたのもそういつた姿を見せてきた証だろう。

「バカみたいだよなあ。同性を愛してしまつたからなんだと言うんだ。過去に罪を働いたからなんだと言うんだ。虐められた？ 自分の二面性に嫌気がさす？ 兄に認められたい？ 吐き気がする」

「士郎、お前は」

「言つただろう、清隆。お前と同じだ」

士郎は笑つた。嘲つた。嗤つた。

その嘲笑は士郎自身にも向けられているような気がした。

その一瞬の油断が、命運を分けた。

「綾小路ッ！ 油断してんじやねえよ！」

龍園の声に瞬時に反応して関節をさらに締め上げる。が、微動だにしない。

まさか、無理やり筋力で――、

「ガアアアアアアアッ!!!」

「――バケモンが」

龍園の引きつったような声が聞こえた。

徐々にオレの身体が浮いていく。持ち上げられている。

片腕で、倒れた体勢から、関節を決められた状態で。

これは流石に、予想出来なかったな。

士郎は立ち上がった。

――オレの身体が床へと吸い込まれていく。

胎動

——この世界に産み落とされた悪は、人を恨むことをしなかった。

1

龍園は言峰士郎という名前に既視感を覚えていた。

面識はない。しかし、その名前を聞いたことがある。

無人島試験での敗北を経て、彼はその名前について調べた。しかし、言峰士郎という名前はインターネット上の何処にも存在しない。SNSでも名前が上がることはなく、ではこの既視感は一休なんだと言うのか。

長い時間を掛けて、労力を積み重ね、心身を削りながら凡そ五時間、照明の落ちた客室の中、龍園は歓喜した。

見つかったのは言峰士郎ではない。

それ以前の旧姓であった■ ■士郎だった。

しかし、そこにあった歴史に目を疑うこととなる。

■ ■ 士郎。

中学二年次で陸上十種競技で非公式ながらも当時のジュニア世界記録を全て更新。

中学一年次では既に全国模試で一桁台の順位をマーク。

ボクシング、キックボクシング、空手、バドミントン、卓球、テニス等、全国大会初出場と同時に優勝を飾る。

ピアノコンクールにて最優秀賞を授与。

数えるのも億劫な伝説を打ち立てていた。

まさに天賦の才。

世界中が■ ■ 士郎という存在に注目していた。

全ての天才を軽々と凌駕する怪物。

天からありとあらゆるギフトを授けられた神の申し子。

だが、中学三年の春、突如として■ ■ 士郎は姿を消した。

消息不明の天才はその後どうしていたのか、誰も知らない。
が、龍園は確信していた。

この男は間違いなく言峰士郎であると。

ネット上に写真は存在しない。

だが、この既視感の正体に龍園は気付いたのだ。

だが、今はどうだ。本能が危険信号を発しているのだ。

目の前の存在から尻尾を巻いて逃げろと。

脱兎のごとく駆けろと。

屈辱的な警鐘に、反してその思考は冷静だった。

「——ッ!!」

言峰が綾小路を振り下ろすのと同時に龍園は駆け出ししていた。

逃げる為ではない。されど、綾小路を助ける為でもない。龍園は今後も誰かを助けるような行為はしない。ましてや、他クラスの、それも敵対関係にあるDクラスの生徒である綾小路を助ける為に動くことは有り得ない。

だからこれは、いずれ言峰を倒す為の布石なのだ。

「ガッ——」

綾小路が頭から叩き落とされるより刹那の瞬間。

龍園の前蹴り、所謂ヤクザキックが言峰の頬を穿った。

全体重を乗せた鋭く重い蹴り。

喧嘩慣れた龍園から無防備な言峰へと繰り出された一撃は人の頸椎を折るには十分な威力を誇っていた。

綾小路を振り下ろす為に腰を落とし、前屈みになっていた言峰の頭が弾ける。同時に

右腕の拘束が緩み、綾小路は即座に体を捻って離脱した。

が、速度が乗っていた肉体を制御出来るはずもなく、綾小路は鈍い音を立てながら床を転がる。どうやら背中から落ちたようだ。受身はなんとか取れてはいたものの、それを加味してなお、言峰の筋力は上回る。

あれで無事にいられるのは超人の類だけだろう。それこそ、言峰士郎と言ったような完璧超人だけだ。

「助かった、龍園」

「別にテメエを助けたわけじゃねえよ」

感謝しているようには見えない無表情な綾小路に、龍園は冷たく返した。戯言を吐く余裕があるのなら十分だろう。

今はそんなことより目の前の男に集中しなければならぬ。本来なら手を出すつもりはなかった。ただ、言峰と話がしたかっただけなのだ。

あの男が関与したと思われる事件について、尋ねたかっただけなのである。

だが、最早手を出してしまった以上、自分も無事ではいられないだろう。

龍園は既に言峰に大敗を喫している。言い訳の仕様の無い敗北を味わっている。権名を経由して唆され、手のひらで転がされて、自分の得意分野だった暴力で、手も足も出ない程に打ちのめされた。

「——リベンジいいか？」

龍園は両手をスボンのポケットに突っ込みながら不敵に笑う。未だ本能は警鐘を忙しなく響かせ続けていた。

背筋に言い様のない寒気が走り、顫から一筋の雫が流れ落ちる。全身が無意識に産毛だつていた。

「くくっ、やはりこうなるか」

言峰はゆっくりと立ち上がる。先の龍園の一撃で頭が弾かれ、手について座り込んでいたが、やはり致命には事足りなかったらしい。

口裏が切れたのか口端から滴る血筋を拭いながら笑みを零す。頬は赤く腫れ、右腕も同様に腫れ上がっている。流石にあの状態から無傷ではいられなかったらしい。何度か右手を開いて閉じてを繰り返していたが、痺れているようで満足に動かせていない。

明らかな好機だ。

こちらは多少なりダメージを負ってはいるが言峰と戦えるほどの実力を持った綾小路、そして喧嘩慣れした無傷の龍園の二人。対して相手は右腕を満足に動かせていない怪物一人だ。

戦力は未だ未知数、しかし勝てない状況ではない。

「震えてばかりいたと思ってたが」

「ハツ、節穴か？」

「なるほど、存外そうだったのかもしれん」

言峰は敵意を向けない。殺意を向けない。

他者に対して負の感情を募らせない。

それはその為人によるものか、それとも路傍の石ころに向けるような――、

「ボクシング、か」

綾小路が零す。

無感情なこの声音からは警戒が洩れ出ていた。

言峰は両の拳を顔の前で握る。

ここに来て初めて構えを見せた。きっとそれは龍園と綾小路の二人と本気で戦う必要があると、認識したが上だろう。

あそこまで技術に対して嘲りを見せていた言峰のその変化。馬鹿にする以前に、本能は更に怖気ていた。

「しゃらくせエ」

右は満足に使えない。

ならば利き腕ではない左のみである。

蹴りならば警戒するが、痛めた右腕では満足に拳を振るえないだろう。

経験則による勝利の逆算。

龍園は勝てると予感した。

故に肉薄する。

地を蹴り、身を低く、視線を振り切るように。

拳を真下から顎先に向けて振り上げる――、

「――ッ！」

咄嗟に避けたのは奇跡だろう。

いや本当に避けていたのだろうか。

龍園の頬を掠め、言峰の左拳が宙を裂く。

空間が震えた。乾いた音が鳴り響く。

速い。速すぎる。

目で追えないなんてものでは無い。認識することすら不可能な速度。

龍園は計算を誤っていた。

耳を劈く弾けた音。予感する。次に来るのは右腕によるストレート。

「――グッ」

烈火のごとく放たれた綾小路の右足による蹴りが言峰の脇腹を捉えた。攻撃態勢に入り、無防備になったその隙に、渾身の力で振るわれた一撃が加速する。鈍い音と共に

僅かであるが、その肉体が浮いた。

綾小路の全力の一撃は確かに言峰に届いた。脳裏に敗北を過ぎらせる程の一撃は届いたのだ。

だが、それでもなお足りえない。

超人はこんなものでは倒れない。

痛みなんて無視すればいい。ただそれだけなのだ。

日々の積み重ねは決して己を裏切らない。言峰士郎の肉体は、絶えずその躍動を繰り返す。

息を吐き、言峰は耐えて見せた。

急所に、致命に届く一撃は、その機能を停止させるに至らない。

「——マジかよ」

今度は綾小路が零した。

同時に言峰の、剥き出しの肉体が躍動を始める。

大気をふるわせ、空間を歪ませるかのような蹴りが放たれる。天与の肉体がうねりを上げ、その威力に何かが悲鳴を上げた。右脚が綾小路へと叩き付けられる。咄嗟に両腕に阻まれるも、それを気にも留めず、ガードの上から粉碎する。

綾小路の両腕が悲鳴を上げた。まるでスレッヅジハンマーでコンクリートを砕くよう

に、その蹴りは重く、速く、鋭かった。

綾小路の身体が弾かれる。

両腕によるガードを押し潰し、顔面を叩くように一撃は振るわれた。後方へと吹き飛んだ綾小路は床に転がる。肢体を投げ出したかのように吹き飛んでいく様を見て、龍園は咄嗟に言峰へと拳を繰り出していった。

が、気付けば龍園の身体は地に伏せていた。

それを理解するのに掛かった時間は凡そ三秒。

警戒していなかった右腕によるストレートが龍園の顔面を穿っていたのだ。痛みが脳内を駆け巡る。危険信号が全てを投げ出させようとしてくる。

何も見えなかった。あまりにも速すぎた。

喧嘩慣れた龍園と言えど、プロボクサーの拳は受けたことがない。脳から激痛が知らされる。

叶うのならばのたうち回りたい程の痛み。

だがプライドが許さない。

いやそれ以前にそんな暇などないのだ。

龍園の目には追撃を入れようと歩み寄る言峰の姿が映っていた。

まずい、まずいまずい——！

龍園は痛みを無視して立ち上がる。

しかしそれも虚しく、言峰は射程距離に龍園を収めていた。腰を落とし、前蹴りを放とうと筋肉が蠢き――、

「――あ？」

龍園の不可解な声と共に言峰は崩れ落ちる。

平衡感覚を失ったかのように膝を着いた言峰を見て龍園は顔を訝しげに顰めた。綾小路も同様、身を起こして静かに視線を向けている。

その場で言峰の状況を理解していたのは本人自身。彼は知っている。かつてボクシングをやっていた身だ。

思考の断線、視界の明転、平衡感覚の揺らぎ、膝の震え。これは間違いない。脳震盪だ。

次に理解したのは綾小路、遅れて龍園も確信する。

原因は龍園の不意打ちによる蹴りだ。あれが脳を揺らした。

強靱な肉体が裏目に出た。首を支える筋肉が発達していたが故に中身だけに振動が伝わってしまった。

と、すれば最初に龍園への左拳による攻撃を外したのは、これが原因だろう。

三人はほぼ同時に一つの思考に辿り着いた。

龍園と綾小路は好機と見た。

言峰は己の失態に動揺する。

最も近い距離にいた龍園が動く。それに呼応するように言峰も即座に立ち上がった。右、左、右、左。

交互に放たれる暴力の嵐。顔を固めた言峰の両腕に、脇腹に、鳩尾に、次々と刺さる。龍園とて喧嘩は強い方である。対人経験数で言えば、綾小路を大きく上回る程だ。

一撃一撃に、殺意を込める。全身全霊を賭して、この連打に全力を捧げる。

脇腹に、鋭い一撃が刺さる。

鳩尾に、重い一撃が食らいつく。

そして、顔面に渾身の一撃が放たれた――、

肉体が宙を舞う。

大きく振りかぶり、無造作に振る舞われた破壊の拳は龍園の肉体を捉え、凄まじい衝撃が貫通する。

龍園はカウンターを食らってしまった。

言峰士郎は痛みに慣れている。それは綾小路からの関節技を見て理解していたはず。その上で、驕ってしまった。

勝利を予感し、気を緩ませた。

一瞬。

ただ刹那の随。

放たれた一閃は龍園の軀体をくの字に折り曲げ、その背中をボールのように壁へと叩きつける。

肺から空気が吐き出され、呼吸がままならない。意識が飛びそうになる。

——これは、ヤベエだろ。

殺意は籠つていなかった。

敵意さえ抱いていなかった。

言峰の拳にはなんの感情も込められていなかった。

まるで、目の前の羽虫を叩くかのように龍園を真つ向から叩き潰したただけなのだ。

綾小路の足が止まる。

それは恐怖からではない。

それは確信だった。

言峰は今、やつとウォーミングアップを終えた状態。つまり、今この瞬間に肉体がようやくやくフル稼働しているということ。

先程までは本気ではあつたが、全力ではなかった。

そもそも、目の前の男はその気になれば文字通り拳一つで人を殺せる男だ。本気で、

全力で頭に拳を打ち込まれれば、きつと死を迎えるほどの。

「どうした、足が止まっているぞ清隆」

「そうだな。流石に今のお前には近付けないぞ士郎」

今近付けば、綾小路はねじ伏せられるだろう。

先程のように攻撃を避け続ければ或いは、しかしきつともうそれはさせてくれない。

言峰士郎は今なお学習している。綾小路の技術に、速度に慣れてきている。

異常なまでのスベックの高さ。

動体視力、反射神経、運動神経、体幹、筋肉量、技量——そして、学習能力。全てが群を抜いて高く、綾小路を上回っている。今の綾小路が言峰を倒すとなれば、知略を尽くさなければならぬ。

きつとこの学校において、肉体面で言峰に勝てる人間はいない。いや、全国の高校生ですら勝てないだろう。

世界中の高校生が一切に殴り合いを始めたとして、最後に立っているのは言峰士郎と確信できた。

勝てない。この状況では綾小路清隆は言峰士郎を止められない。

ホワイトルームという特殊な環境で育った綾小路の後天的思考が歩みを止めた。

しかし、だからといって友人の非道な行いを止めずしてどうするのだ。

——親友とはそういうものなのだろう。なあ、士郎。

これはかつて言峰が綾小路に教えてくれたものだ。

友とはそうあるべきであり、親友とはそういうものなのだ。

で、あれば綾小路清隆は健全に、今だけは勝利を捨て、友人を、親友を全うしなければならぬ。

その決意の元、踏み出した一步目は、

「——やっぱりテメエだろ？」

龍園の一言で止められた。

龍園は壁を背になんとか立ち上がる。

そこに不敵な笑みはない。笑う余裕すらない。

途切れかけている意識を何とか手繰り寄せ、龍園翔は言葉を紡ぐ。

「■士郎が姿を消して、たった一週間に三つの事件が起きた」

「——」

「さっきの拳で確信したぜ。なあ言峰士郎」

龍園が知った事件とはある中学校で起きた三つ。

どれも悲惨な結果を生み出したものだ。虐められっ子が、社会的弱者が、裏切られた者が、復讐を果たした上で、その身をも破滅した、というもの。

そこに言峰士郎の、■士郎の名前は上がっていない。だが、龍園は本能で、言峰士郎という本性を理解していた。

一之瀬帆波は言峰士郎を誤解している。言峰士郎は他人を尊ぶことの無い生き物だ。そもそも、その根底に外道や非道といった言葉は当てはまらない。アレは他人に一切の関心がなく、他人の苦悶のみに目を向けている。

恐らく言峰士郎が持っていると思われる良心は、後天的なもの。教育や周囲の環境が生み出したものだ。そうでなくてはならない、そうしてはいけない。思っているのではなく、認識しているだけだ。

言峰士郎は先天的に悪として生まれている。後付けで植え付けられた良心は正しく機能しなかった。

寛容的なのは、他人に興味が無いから。路傍の石にいちいち感情を向ける人間がいるのか。

慈悲深いのは、負の感情を抱かないから。路傍の石にいちいち感情を向ける人間がいるのか。

言峰士郎の視界には他人の苦悶しか映っていない。

龍園の本能がそう囁いた。

「それからお前が高校に入学するまでの間に起きた事件は39件。どれも、加害者と被

害者が両方とも破滅を迎えている。前の三件と一緒にだ。しかも、テメエの手は全国にまで届いていた。SNSでも使ったか？」

「——知らないな」

「いや、テメエが通っていた中学は廃校になってやがる。その後、市内にあった他の中学二つとも廃校だ。原因はどれも、他の事件と同じだ。ただ規模が学校全体だっただけだな」

「それで？」

「テメエ、端から良心なんて持ってねえだろ。なんで人間のフリしてんだよ悪魔が」

龍園は今度こそ不敵な笑みを浮かべた。

それに対して言峰は無感情な視線を向けている。

綾小路と龍園の視線が交錯する。意味は伝わった。

龍園は匣を買って出た。

言峰に怒りの感情を抱かせ、隙を与える為に。

「我慢とかなんとか抜かしてたが、そんなにはばとままが怖かったか？」

「——くふ、ふふ、あははははははっ！」

龍園の全身に怖気が走った。

恐怖だ。それは原始的な恐怖。被捕食者が捕食者に対して抱く、絶対の上下関係。生

まれて初めてののそれに、龍園の顔が歪んだ。

冷や汗が溢れ出る。

言峰の哄笑は止まらない。

悪魔のようにただ喉を震わせる。楽しいからじゃない。嬉しいからじゃない。面白いからじゃない。

今なお、言峰の瞳は龍園に対して慈愛を孕んでいた。

おぞましいナニカが鎌首を擡げる。

「くだらないくだらないくだらないくだらないっ」

「才能があるからなんだ?」「勉強ができるからなんだ?」「喧嘩が強いからなんだ?」

「なんの意味があるんだ?」

「なあ、恋愛つてなんだ?」「他人の愛し方つてなんだ?」「愛おしいという感情を知っているか?」

「教えてくれないか?」

「愛を」

「純愛を、友愛を、親愛を狂愛を博愛を恋愛を家族愛を」

「教えてくれよッ! 龍園翔ッッ!」

狂ったように喚きながら言峰が龍園へと拳を振り上げる。綾小路はただ見ているこ

としか出来なかった。親友の変貌を、己がその本性を未だ理解出来ていなかったことを。ただ無感情に見ているだけだった。

軽井沢は目を瞑り、耳を塞ぎ、震えているだけだ。

そして、龍園はただ受け入れていた。

その拳が振り下ろされた瞬間が、言峰を倒す絶好の機会だからだ。綾小路は必ず動く。龍園は確信している。

しかしいくら待てども、拳が己に向かって振り下ろされることは無かった。

「なんのつもりだ、六助」

「ふむ。そうだねえ、横槍と言うやつさ」

振り上げた言峰の右腕を高円寺が掴んでいる。ギリギリ、と互いに肉体を軋ませながら、微動だにしない。

綾小路は見ていることしかしなかった。何故なら、視界の端に高円寺の姿が見えていたから。勝算はなかった。しかし、この戦いを有耶無耶に出来るカードが現れたのだ。

委ねた方が得策だと判断しての事だった。

「君は変わらないねえ、シエロ。全て投げ出すつもりかい？」

「??貴様はいつもそうだな。お前、本気で俺が手を出さないと勘違いしてないか？」

「H A H A H A つ。シエロはジョークの才能があるみたいだ。良かったじゃないか。君

こそ勘違いしているようだが、本気で私を相手に出来ると思ってるのかい？」
一触即発。

言峰は高円寺の腕を振り払い、互いに向かい合う。手負いの言峰と余裕の表情を浮かべる高円寺。

綾小路も龍園もどちらが勝つか予測できないカードだった。

「彼女が死んだのがそんなに——」

「——死ね」

言峰の拳が高円寺へと放たれる。

が、それは既のところで止まった。

「??冷めたな。よし、これから湯に浸かりにいこうか」

言峰はそう言うのと独りでに歩き出した。かと思えば、それに高円寺もついて行く。綾

小路は数秒思考を巡らせると、追従した。

龍園はちらりと軽井沢へと視線を向ける。

彼女は呆然とした顔で三人の後ろ姿を眺めていた。

意味が分からないみたいだった。当然だ、龍園も理解していない。

仕方ない、とため息を吐くと龍園は軽井沢に顎でついてくるように促し、自分も歩き

始める。

数歩ほど苦しそうに歩いていたが、暫くすると普通に歩き出した。
軽井沢はその十秒後に、その後を追うのだった。

共同戦線（1）

受胎告知。キリスト教の聖典、『新約聖書』に書かれているエピソードの一つ。聖告、処女聖マリアのお告げ、生神女福音とも言う。一般に、処女マリアに天使のガブリエルが降り、マリアが聖霊によってキリストを妊娠したことを告げ、またマリアがそれを受け入れることを告げる出来事だ。

聖母マリアはその祝福を喜んだのだろうか。

子を孕み、生の誕生を祝う。当たり前の感性、常識の範疇。彼女は、産まれてくる我が子を愛しみ、慈愛をもって微笑んだ。

では、キリストはどうだ。

この世に生まれ落ちることに、何を覚えた。どんな感情を抱いた。聖人として生きることを余儀なくされ、正しさの下に生きる彼は、幸福を享受出来たのだろうか。

懐妊。受胎。

母親は喜ぶはずだ。

自らの意思で子を成し、我が子の誕生を待ち侘びるだろう。

しかし、受胎した子は、それを喜ばしく思うのか。

悪としてこの世に生まれ落ちた男にとって、その誕生は祝福される出来事だったのだろうか。

今日の社会は、悪を許さない。法の下、いや多数派の意思の下で正義を、正しさを強制されている。

オレには理解出来ない。

しかし、言峰士郎にとって、この世に生まれ落ちたことこそが、なよりの悲劇だったのではないだろうか。

1

「僕は卑劣な人間なんだ」

初めて紡がれた言葉は、何処か寂しげであった。

オレはその言葉の真意を読み取れず、僅かに首を傾げ、先を促した。

「中学生の頃、自分可愛さで、僕は親友を見殺しにした」

続いて洋介の口から飛び出したのは驚愕の事実だった。

あの洋介が、と視線を向ければ、普段からは想像出来ない自嘲するような表情。

許しを乞うように項垂れる姿を見て、オレは視線を彷徨わせる。

「僕は中学二年生になるまで、クラスであまり目立たない生徒だった」

「??ちよつと想像できないな」

「だろうね。今とは全然違うから」

苦笑いを浮かべ、また視線を海へと向ける。

客船のデッキで、オレと洋介は肩を並べて立っていた。潮の香りを混ぜ合わせた冷たい風が心地良い。

海面に浮かぶ滲んだ月を眺めながら洋介は続けた。

「目立ちもせず、かと言って影も薄すぎず。友達もそこそこ。本当に普通だった。そんな僕には小さい頃から仲良しだった幼馴染の杉村くんって男の子がいたんだ。小学校は六年間同じクラスで家も近所だったから毎日一緒に登校してた」

懐かしむように、洋介は儂げな表情で、洋介は過去を思い返す。

「中学一年生になって初めて別のクラスになった。それでも最初は一緒に登下校していたんだけど、ある日を境にそれも減ってきて、いずれ僕はクラスの子とばかり遊ぶようになった」

それ自体はどこにでも転がっている話ではないだろうか。

人は環境に左右される。ごく自然なことだ。友人関係が変わるのだって別におかしなことじゃない。

ただ、洋介が言いたいのは、そういうことでは無いのだろう。

「僕は気付かなかった。杉村くんが虐めにあつていたことも知らずに、のうのうと日々を過ごしていた」

手すりを強く握り締め、何かを堪えるように洋介が言う。

「何度か杉村くんは、僕に対してSOSを発信していた。不自然に怪我をしていたり、痣ができた。だけど僕は友達と遊ぶことを優先して本気で取り合わなかった。杉村くんは元々気が強い人だったから喧嘩っ早いところがあつた」

「??」

「僕は、見て見ぬふりをしてた。本当は気付いてたんだ。彼が、虐められてるのに、気付いていて、我が身可愛さに、それを無視した」

これも、またありふれた話ではないだろうか。

オレは当事者じゃない。だから、洋介を責める権利を持たない。

「怖かったんだ。彼を助ければ、今度は自分が虐められるんじゃないか。助けてい、という意思に反して僕の身体はそれを拒絶した」

「その話は、士郎に?」

「したよ。??彼と仲良くなつて、教会に訪れて、僕は懺悔した。あの日の後悔を、吐き出したくて堪らなかつた」

「士郎は許したのか？」

「君も知ってるだろう？ 士郎は優しいんだ。だから、僕に必要な言葉をくれなかった。一切の慰めもしなかった」

言峰士郎という人間は優しい。

だからこそ、その人間の成長に繋がらない行為は一切しない。かつて堀北に厳しい言葉を投げかけたように、決して甘やかしたりなんかしないのだ。

「彼は僕に叱責すらしなかった。ただ寛容的に話を聞いただけだった。士郎は、僕にとつて最も欲しい言葉も、言われなくなかったことも、言わなかった」

「だろうな」

「ただ事実だけを突きつけたんだ。僕の薄汚く、矮小で、卑劣な本心を突きつけた」

「そうか」

「士郎はこう言ったんだ。君が求めているのは、許しだ。自らの浅ましさを正当化することだ。それを求めている限り、君は一生目を逸らし続ける」

士郎らしく厳しい発破だ。

その言葉の意味をオレは理解した。

「士郎の言う通りさ。僕は自らを肯定して欲しかった。そんなことないよって、言つて欲しかった。罪を正当化したかっただけなんだ」

「洋介が変わったのはそれが原因だったのか？」

「杉村くんが飛び降りてからだよ。彼は今も死なず、ただベッドの上で眠ったまま。その償いがしたかった」

「それは償いじゃない」

「――」

何となく洋介と杉村くんがどういう末路を迎えたのか把握した。

だからこそ、オレは洋介の履き違えを正すべきだろう。このままではきつと士郎は洋介を見限るかもしれない。

平田洋介は間違ったまま進もうとしている。

「洋介がやっていっているのは償いでは無い。明らかな慰めだ。自らを正当化するだけの為に、自慰に過ぎない」

「それ、は」

「お前はまだ何も変われてない。洋介、お前初めから知っていたんじゃないか？」

「ち、ちがう！ 僕は知らなかった」

「お前は見て見ぬふりをしていたんだ。環境の変化を理由に自らを正当化していた。根本から変われてない。いつも自分を正当化する理由を探している。それが優等生の仮面を被ったお前の本性だ」

洋介は未だに慰めを求めている。

だが、オレも士郎もそんな安易な言葉を与えるほど無関心な人間ではない。

「お前が人気者を志しているのは正当化の為だ。いつしか自分が間違いを犯してしまった時に、それを許されようとしている。軽井沢を始めとした女子たちに、その行いを正当化してもらおうとしている。初めから今まで、何一つ変わっていない」

「そ、んなことは」

「無いか？ 無いと言いきれるか？」

怯んだように肩を震わせたのをオレは見逃さなかった。

「それは償いじゃないぞ洋介。お前の自己満足だ。現にお前は軽井沢を救っていない。本当に償うつもりならば、偽装カツプルなんかにはならなかったはずだ」

そう、軽井沢と洋介の関係は偽装だ。

あの話を聞かされた時から違和感はあった。軽井沢が助けを求めて、その結果が今の状態だと言うのなら、それは救いではない。

洋介は自分の立ち位置の破綻を恐れて、何も出来ていない。

「やっぱり未だ克服出来てないんだな。軽井沢同様、お前自身もその立場に追いやられることを恐れている」

「??そうだね。僕は怖いんだ」

「ただ、それでもお前は変わろうとはしていたんだ。その行い自体は間違つたものじゃない」

当然、誰もが虐められる立場を嫌うだろう。

それは洋介だけじゃない。軽井沢の時、何人の生徒が自らの破滅を恐れて目を逸らしてきたのか。

この件に関しては、洋介を責めることは出来ないし、何より何もしていないオレが責める権利を持っていない。

オレに出来ることは士郎と同じく、ただ自らの正義を教えることだけだ。

「———ありがとう清隆。やっぱり、君は本気で僕のことを考えてくれてるんだね」

「親友だからな」

微笑む洋介にオレは淡々と返した。

ただ今の発言には引つ掛かりを覚える。君は、と洋介は言った。

まるで士郎は違うかのような言い方だ。

「本当はね、気付いてたんだ」

「??」

「士郎は決して善人なんかじゃないって」

どういう意味だろうか。

オレから見て、士郎ほど善人であらうとしている人間はいないと思うが。

「軽井沢さんからは虐められてる人特有の匂いがした。士郎からは、杉村くんを虐めていた人と同じ匂いがしたんだ」

「知ってたんだな」

「清隆も勘づいてみたいだね。うん。僕は最初から分かつてたんだよ。士郎は良い人だけれど、あくまで善人じゃない」

オレの場合は勘づいた訳じゃないが。

士郎から感じ取った違和感に整合性を求めた結果、その答えに辿り着いただけだ。

だからこそ、尚更に勘だけでその答えに至ったことを恐ろしく思う。

「でも、士郎はまだ何もしてない。全部が嘘じゃないと思うんだ。例え、取り繕った善意だとしても、本人が正しいと認識した行いなら偽善じゃない」

「そうだな」

「だから、僕は信じたい。士郎が非道な人間じゃないってことを」

——君に軽井沢さんを見ていて欲しいんだ。

洋介はそう締め括った。

??なんだこれ。

激闘を繰り広げ、両方共にかかりのダメージを負ったオレたちは、先程までの対立とは打って変わって肩を並べる湯に浸かっていた。

豪華客船の施設の一つである銭湯。備え付けられた窓から見える青空と海。学生ではとても手が届きそうにない景観だった。

銭湯の利用者はたった五名。ほぼ貸切と言っている。

貸し出されていた水着を装着し、肩まで湯に浸かる三人をオレは何とも言えない表情で見つめる。

いや、縁に腰を下ろし、足だけ湯につけている軽井沢が一番困惑してそうだが。

「で、何がしてえんだこの状況」

龍園が顔を顰めながら投げ掛けた。勿論、質問の相手は士郎である。高円寺と士郎はオレたちなぞお構いなしに湯を満喫していた。

「何かしたいのはお前の方だと思っていたが？」 龍園

「ああ？」

「そもそもお前が俺の下に訪れたのは話したいことがあったからだろうか？」

「チツ、まあそうだ。想定外なことはあったがな」

オレとしてもあの戦闘は想定外だった。

善人としてこれまで過ごしてきた土郎ならば、オレという目撃者ができた時点であつさりと身を引くと思つていたのだ。それに加え、龍園という他クラスのリーダー格まで現れた。

間違いなく状況としては土郎が不利だったのだが。

「——土郎は目撃したことはないのか？」
「おかしなことを聞くなあ清隆。前提を考えるといい」
なるほど。

土郎は目撃されたことを痛手と思つていないのか。それとも想定範囲内だったのか。

いや今回は前者だ。

今まで、言峰土郎という人間は穏やかで、優しく、クラスの為に身を粉にして動いてくれる善人だった。

それをオレや龍園が声を荒らげたところで、評価が覆ることは無い。既に他の生徒へと刻まれた言峰土郎の評価はその程度では揺るがないか。

「龍園、先にオレの方からいいか？」

「別に構わねえよ。さっさとしろ」

「助かる」

龍園は士郎に話がありそうだが、先に解消しておきたいことがある。

軽井沢の件だ。洋介から頼まれている以上、軽井沢を助けることを最優先にしなればならない。

オレは士郎の方へと顔を向ける。

闇を孕んだ底の無い瞳が、空虚なガラス玉が俺を映した。

??視界の端に映る高円寺が鬱陶しい。無駄にポーズングを取るのをやめてくれ。

「士郎、お前は軽井沢をどうするつもりだったんだ？」

「??ふむ。どうするもなにも、それは彼女の選択次第だな。彼女の秘密をバラす、黙っておく。俺はどちらも愉しめる」

名前を挙げられた軽井沢の肩が跳ねる。

士郎に詰められた時を思い出したのか、僅かに身体が震えていた。スクール水着を身に纏う軽井沢は異様に士郎に対し怯えを見せている。

無理もないか。

「洋介の件もある。オレは士郎の行いを止めたい」

「それは今後か？ それとも今回だけか？」

「軽井沢に関わることだけだ。後はどうだっていい」

實際、オレは士郎の行いに思うところはない。

士郎が楽しんでゐるのなら、オレも喜ばしく思う。他者をどう害そうとオレに関係は無いのだから。

ただ今回は別だ。洋介との約束は反故に出来ない。

「そうか。??わかつた、軽井沢には何もしないよ」

「それが聞ければ十分だ。ありがとう士郎」

「氣にするな清隆。俺も洋介の意向を無視するつもりはない」

穏やかに微笑む士郎にオレは安堵する。

ただ今後も犠牲者は出るだろう。それだけは確信できる。

それでも士郎の行いは悪いことばかりではない。

例えば堀北や佐倉のように成長に繋がるきっかけにもなるのだ。

何処に士郎の真意があるのかは定かではないが。

「済んだか？」

「ああ、すまない龍園」

「一時的とは言え共闘した仲だ。大目に見てやるよ」

龍園は余裕のある面持ちで士郎を見る。

髪をかきあげながら、不遜に言い放った。

「俺からの要件は一つだけだ」

「ふむ、何かね？」

「Aクラスを落とす。その為にも手を貸せ言峰」

Cクラスの王、龍園翔は傲慢な態度で告げた。

「Aクラスを、か。理由を聞いても？」

「現状、Aクラス以外の3クラスは横並びに近い。だが、Aクラスだけが突出してしまっているのは分かってんだろ」

「ああ、先の無人島試験の結果だな」

「そうだ。それでも尚、落としきれれてない。だが、今回の特別試験はマイナスがある。絶好の機会だと思わねえか？」

無人島試験では確かにマイナスが存在しなかった。

しかし、今回の特別試験は優待者を当てられるとCPが引かれるというデメリットが存在する。

尚且つ、三対一という構図を成り立たせることが出来る特殊な試験だ。

「優待者の共有、とまではいかねえが。それでも法則を見つける手助けぐらいはできんだろ」

「裏切りを恐れるのは当然だな。しかし、法則を見抜いたとて、その時点で裏切ることも容易だと思うが?」

「だがテメエはそれをしねえ。テメエはAクラスになんぞ興味ねえだろ」

「正解だな。お前は俺の裏切りを心配する必要は無い」

恐らくではあるが土郎は試験に積極的に参加しない。

無人島試験でもその片鱗は見えていた。クラス間競走に一切の興味を抱いていないのだろう。

見えているのはあくまで他者の苦悶にだけ。

己の求める悦があるのなら、土郎は喜んで手を貸すだろうと、オレは思っている。

「先の無人島試験で葛城は失脚した。あれはもう前に立てねえ。つまり次から出張ってくるのは坂柳だ」

「目も当てられない惨事だったな」

「抜かせ。だが、坂柳はまだ完全にクラスを掌握できていねえ。今がAクラスを俺たちの土俵まで引きずり下ろす絶好の機会」

龍園の言いたいことは分かった。

求めているのはスタートラインの強制だ。一時的に4クラスを同じ土俵に立たせることによって、今までの禍根を綺麗さっぱり解消しよう、と言いたいのだろう。

恐らくだが士郎はこの要望を受ける。しかし、堀北たちには話さない筈だ。独断で動く予想できる。

「話は理解した。が、その上で承諾できない部分がある」

「あ？」

「勝たせないのはAとB。そして、CクラスとDクラスも勝たない」

「何言って——」

「俺はAクラスは相手にしない。お前が言った通り、クラス競走には興味が無い。だが、坂柳有栖、その個人には関心がある」

つまりはまあ、そういうことだろう。

士郎はどのクラスも勝たせる気はなく、それでいてAクラスのリーダーの一人、坂柳有栖とのサシによる直接対決を望んでいる。

「チツ。だがptは貰うぞ」

「構わん。法則自体は独自で見つけろ。優待者情報はくれてやる」

「感謝はしねえ」

「必要ない」

そう言い切ると士郎は一人、サウナへと向かった。

残された四人の間に沈黙が訪れる。なんだこれ、士郎オレを置いていくな。気まずい

ぞ。

今からでも追い掛けるか、そう思い立ち上がろうとして――、
「言峰の弱点についてだ」

龍園の言葉に遮られた。

言峰士郎の独白（1／2）

——告白しよう。

俺は破綻者だ。

生まれながらにして、万人が美しいというものを愛せず、醜悪で歪なものを貴んだ。善よりも悪を愛し、他者の苦痛や不幸でしか幸福を得られない欠陥品だったのだ。

先天的に悪意を孕み、後天的に備え付けた良心の呵責に懊悩する毎日だった。だからこそ、俺はあの女に魅入ってしまったのかもしれない。

1

「ねえ、君も初めてなの？」

しんしんと降り積もる雪の下、白い息を吐き出しながらその少女は俺に声を掛けてきた。

中学一年生に上がったばかりの俺より、僅かに背の高い女だ。高校生位だろうか。首

元に巻いたマフラーを引き下げながら微笑む彼女に視線を送り、返答する。

「そうです、少々興味が湧いたので」

「ふーん、神様を信じてるとかじゃないんだ？」

「どうでしょう。ただ現時点では信仰心は持ち合わせてないです」

痛々しい笑みが似合う女だ。

明らかに無理をしている、そう思わせた。左頬にテーピングされたガーゼから視線を離し、今度は俺から言葉を送る。

「そういう貴女は？」

「いたらないなあ、なんて思ってるかな」

「曖昧ですね」

「だね」

互いに笑う。

初対面ではあったが、俺はその女に興味を抱いていた。その心中で何を考えているのか、気になったのだ。

「君、名前は？」

「■■■■士郎です」

「私は■■■■って言うの。これから同じ信仰者としてよろしくね？」

寒さで悴み、赤みを帯びた指先。差し出された手を握り返す。

ひんやりとした冷気と肌に微かに腕が震えた。

「うへえ、ゴツゴツしてるね」

女は俺の武骨な掌を確かめるように力を入れた。

■■家に生まれてから、肉体的に鍛えることを怠けたことは無い。常人よりも筋密度の高い肉体を持つて生まれた俺は修練と共に成果を残している。

「何かやつてるの？」

「ボクシング、バドミントン、卓球、キックボクシング??まあ色々な個人競技に手を出しています」

「凄いじゃん。私なんて何も誇れるものないよ?」

「寧ろ、ひとつの事に誠意を持って取り組めない節操なしだと思いますけどね」

これは本音だ。

父に言われるがまま、熱意も無くやる気もない状態であれやこれやに手を出している。

そして、結果を出してしまうばかりに父も歯止めなく要求を重ねるのだ。

「時間だ、またね士郎くん」

鐘の音が響く。

彼女はにへら、と屈託のない笑みを浮かべ俺に背を向けた。

彼女の進む先には同じ高校の制服を身にまとった男が待っている。恋人だろうか。かなり軽薄そうな見た目をしている特徴の少ない男だった。

「ええ、また後日にでも」

この言葉が彼女に届いているかは知らない。ただ男を見た瞬間、僅かに肩が震えていたのを俺は見逃さなかった。

降り積もった雪に己の軌跡を残しながら、教会を後にする彼女の背を見つめた。

「ふむ、恋人かね？」

彼女の姿が見えなくなった頃、ふと背後から声が掛かる。

声の先を振り向けば、そこに立っていたのは黒いキャソックに身を包んだ神父がいた。

確か、言峰綺礼だったか。

「神父様、恋人ではありませんよ。初対面です」

「そうか。君は確か■■■家の者だったな。失礼だが名前を聞いても？」

「士郎です。父とはご縁が？」

「士郎、そうか士郎か。??いやなに、あの男の婚礼を祝福した身でね。その縁だ」

言峰綺礼は感慨深そうにそう零した。

キャソツク越しにその完成された肉体が窺える。一つの武を極めた者の肉体。俺が目指すべき完成系の一。

「父は信仰心なぞ持ち合わせていなかったと思いますか？」

「君の母君の要望だった。まあ、元はと言えば君の母君と別の男の婚礼をする予定だったんだがね」

「??それは、初耳です。しかし、そんな他人の身の上話を話しても大丈夫なのですか？ 守秘義務と言ったものはあくまで貴方には課せられないと？」

「他人では無かろう。君の父親の話だ。私としても急な要望の変更で割を食った身でね、愚痴ぐらいは吐かせてもらいたい」

「よく言いますね。貴方、性格悪いでしょう？」

「君の方こそよく言う。両親に関心なぞないだろうに」

覇気のない瞳から目を逸らす。何故か、俺の心の闇を覗かれたような気がした。

神父は笑みを浮かべながら肩に積もった雪を払う。

「それで、■■家の者がどう言った心積りなのかね？」

「家は関係ありません。個人的に訪れただけですから」

「ほう。では信仰心と言うよりも懺悔に近いのかな？」

「??まあ、それが理由ですね。己の罪業を吐き出したかっただけなので」

俺が抱える矛盾を誰かに肯定してもらいたかったただけなのだ。信仰心などは初めから持ち合わせていない。

しかし、神に縋ればこの頭痛が治るとして、そうなればこの身を信仰に捧げることは吝かでもなかった。

「君さえ良ければ、神のお膝元に」

「いえ、もう来ることは無いでしょう。父はあまりいい顔をしないとしますので」

「そうか。それは残念だ」

ざく、と雪を踏み潰す。

背後に佇む男に視線を向けることなく俺は教会から出るために歩き出した。白い息が頬を掠めて白銀の世界に溶ける。

「私は君がこの教会の戸を叩くことを待ち望んでいる」

——そして、その時こそ、君の願いはようやく叶うだろう。

しんしんと降り積もる雪の中、白銀の世界に佇む古びた教会。凍える両手をポケットに突っ込んで、振り返った。既に神父の姿はない。

俺は底知れぬ苛立ちを抱いていた。

「帰ったか。今日は遅かったな士郎」

「申し訳ございません。夕食に遅れましたでしょうか？」

「そんなことは無い。寧ろ、私はお前が出した我欲を喜ばしく思うほどだ」

父は朗らかにそう言った。

どうやら俺が教会に行つたのは既に知られているらしい。一体どのような方法を使ったのかは知らないが、理由までは大丈夫だった。

俺が取り繕つた興味という言葉だけ耳に入つたか。

「さあ、席に着け士郎。夕飯にしよう」

「はい。御同席致します」

「これ、■■■■お前も座らんか」

「はい旦那様」

父の声掛けで俺と母が席に着く。その後使用人たちが夕飯を配膳し、対面する位置にいる父と母が先に料理に手を付けた。一口含み、飲み込んだのを確認してから俺も追隨する。

静かに何度か料理を口にした後、父はワインを手に取つた。

「今年は寒さが長引いているな」

「はい。四月半ばというのにまだ雪は降っています。末までは続くでしょうか」

「お前の記念すべき入学式も雪の中行われた。桜が見れないのが残念だったが」

「そうですね。自分もそればかりが心残りです」

ハンカチで口元を拭いながら父は笑顔を浮かべる。

その姿を見て、鈍い痛みが後頭部に走った。

「それで、新しい環境には慣れたか？」

「先輩方、教師も良くしてくれています。また学校長も三学年の仲を深めたいという自分の要望に取り計らってくれました」

「おお、何かするののか？」

「再来週あたりで三学年合同のキャンプファイヤーを行う予定です。生徒会選挙に向けて、自分も顔を広める必要があるのです、渡りに船でした」

「そうかそうか。お前は本当に優秀だな士郎」

無能な男だ。

■家として、本来なら当主にはなれないほどの落ちこぼれ。プライドと見栄ばかりが先行する哀れな存在。

この男の他に当主に向いた人間がいなかったから、選ばれたただけだ。能天気で、息子が何を考えているのか理解しようともしていない。

ああ、吐き気がする。

感情が交錯する。

自らの中に沸き立つ悪感情を飲み込み、決して顔に出さないように取り繕う。

俺は■士郎だ。

間違つても、そのような思考は許されない。

「どうかしたか？ 士郎」

「いえ、少しばかり疲れが出てるみたいです」

「む、少しスケジュールが過密だったか？」

「そんなことはありません。自分の程度が低いからですから、父上は何も間違つてなどいませんよ」

「ならいいが??」

この空間にいるのは苦痛だ。

俺に期待し、愛情を注ごうとするこの男の存在が苦痛でしかない。

この男は俺を見てなどいない。

■家の次期当主としか、俺を見ていない。

「ご馳走様でした。では、自分は先に失礼します。まだ予習が残ってますので」

「ああ、励みなさい」

「はい。良い夜を」

使用人によって回収されていく食器を見送り、食堂を後にする。無駄に広く長い廊

下。

月明かりが差し込む光景。

何故だが、教会で出会った女の顔が脳裏を過る。

「? ? くだらない」

暫く外を眺めていると、ガチャリと扉が開いた。

「あら、士郎。どうしたの?」

「いえ、特に何も。外を眺めていただけです」

「そう。風邪を引かない様にね」

母だった。

幾つ歳を重ねてもその美貌が衰えることはなく、父をして美しすぎた、と言わしめた。

長い睫毛を瞬かせながら、母は俺の肩に手を置いた。

「まだ痛みは引かない?」

「はい」

「そう、教会に行ったのでしょうか? 従兄さんには会った?」

「——」

どういふことだ。

意味がわからない。

あの神父と母に血の繋がりがあつたのか？

「あの、母——」

「私を母と呼ばないで」

平手が頬を叩いた。

ジンジンと走る痛みに呆然としつつ、理由を求めて母を見つめた。

「全く穢らわしい。あの、男よ。あの男が全て、悪いのよ。ああ、シロウ??」

まただ。

俺はまた間違えた。

錯乱した様子で母は自室へと歩いていく。

その姿を俺は追うことなく、見送った。

母が正気では無いのを俺は昔から知っていた。

幼少の頃より、母は父の前以外で『母』と呼ばれるのを嫌っていたのだ。嫌悪して
ると言ってもいい。

ふたりの間に何があつたのか、俺は知らない。

ただ神父曰く、浅からぬ因縁がありそうな話だつた。

頭痛が止まない。

吐き気が止まない。

良心の呵責が身を焼き焦がす。

そして、思い出した。

俺は、あの女という時だけは自らを痛めつける罪悪を忘れていたのだ。

理由は分からない。

ただ、また会いたい、そう思ってしまった。

2

「うひゃあ、頭良いねえ士郎くん」

「いえ、二次関数は中学で習う教程だと思えますけど」

「甘いよ。私は四則演算も不自由なんだっ」

「自らの不出来を自慢げに言われても?？」

なんて返せばいいんだよ。

思わず吐きそうになった悪態に、心中で驚嘆した。両親の前ですら崩れることの無い仮面。それが外れかけたのだ。

やはり、俺は彼女という気が緩んでいるのか？

教会の談話室。言峰神父より与えられた俺と彼女のみに許された空間。

その一室で、俺は彼女に勉強を教えていた。どうやら学ぶという行為が苦手な彼女はこうして成績の良い俺を頼ったということらしい。

それにしてもこの頭の悪さで良く高校に入れたものだ。

「推薦入学だったんだよ。だから何とか入学は出来ただけだよ。まあついていけないというか」

「分不相応なことをしましたね」

「辛辣だよっ」

新しく増えた左目の腫れ。

よく見れば彼女の右手には包帯が巻かれていた。いやそれだけでは無い、膝や太もも、ありとあらゆる肢体に傷を負っている。

「士郎くんはさ、将来何になりたいの？」

「俺は——」

答えようとして、言葉が出なかった。

確かに俺は何を目指しているのだろうか。言われるがままに優等生を演じて、それで何がしたいのだろうか。

分からない。俺はどうすればいいのか。

「分からないです。まだ何も」

「まあ中学生じゃそんなものだよ。私はそうだなあ、誰かと結婚してごく一般的な幸せな家庭を築けたらいいなあ」

「今は幸せじゃないんですか?」

「ううん。幸せだよ。彼氏もいるし、両親もいる。学校に友達も居ないけど、ただ生きていくだけで、幸せなんだ」

俺とは程遠い価値観だ。

そんな風に考えることが出来たらどれほど良かったか。

「幸せの在り方って人それぞれだし、土郎くんが感じる幸福も、私が感じる幸福も程度は違えど、同じ幸福じゃない?」

「はあ?」

「例えば、夢が叶うことを幸せだっていう人もいるし、努力が報われることを幸せだっていう人もいる。好きなことをする、好きな人という、子供と遊ぶ、勉強をする。ありとあらゆる幸福の形があるんだから、私の感じる幸福も間違っていないと思うんだ!」

つまりLED照明完了!」

照らしてどうすんだよ。

「先輩は勉強を幸せだと思わないんですよね?」

「うっ、まあそうだけど」

「じゃあなんで今こうして勉強をしているんですか？」

「そりゃあ、必要だからじゃない？ 何も全てが幸福に繋がるわけじゃないし、生きる為にはそれなりの苦痛が伴うものだよ。これは先達としての助言だね。あれ、私今めっちゃいいこと言わなかった？」

「いえ、当たり前のことを偉そうに言われても?？」

「士郎くん、なんだか最近口悪くない？ なに？ 反抗期？」

反抗期か。

親に反抗できるような気概のある人間だったら良かったがな。

俺は父という存在に逆らうことが出来ない小さな人間だ。

「先輩、手が止まっていますよ」

「うっ、頑張ります」

「はい。言峰神父に珈琲でも貰ってくるので大人しく続きを頑張ってください」

いそいそとノートに教科書の問題を書き写す様を見ながら、俺は談話室を後にする。

向かう先は言峰神父の元だ。礼拝堂にでも居るはずだが。

礼拝堂に訪れると言峰神父はいた。

祭壇の前で跪きながら、熱心に祈りを捧げている。その様は敬虔なクリスチャンを想起させた。信仰は俺を救ってくれるのだろうか。

彼女は言峰神父同様、敬虔な信徒だった。神に縋り、毎日この場所に足を運ぶ。俺もその姿を見て、こうして毎日信仰を捧げている。

「言峰神父」

「士郎か。どうかしたか？」

俺の声掛けに反応して言峰神父はゆっくりと立ち上がった。

空虚な瞳がこちらに向けられる。

「珈琲を淹れさせて貰いたいのですが」

「構わんよ。談話室のものは自由に使っている」

「言峰神父もどうですか？」

「??そうだな。頂いておこう」

「わかりました」

踵を返し、再び談話室に戻ろうとした矢先、その肩に手を置かれた。

「待ちたまえ、少し話をしないか？」

「構いませんが??」

「ふむ。君が教会を訪れてそれなりの日数が経った。私が見る限り、君の信仰は本物だ。どうだね、見習としてここで神に奉仕する気は？」

「そうですね。正直言って有難い話です」

「ふむ、何か問題でも？」

「俺には時間が無い。こうして教会に何度も足を運んでいるのは一重にそれ以外を蔑ろにしているからに過ぎないんです。だから、父はあまりいい顔をしない」

「そうか——」

言峰神父は暫く考えを巡らせるように口元に手を当てた。

そして、言い放つ。

「——それも一興だな。■ ■の子倅、君に愉悦の何たるかを教えてやろう。耳を傾けるといい、我が同類よ」

共同戦線（2）

／ 3

「——言峰士郎、お前は どうして矢面に立とうとしない」

豪華客船、その一室。

茶柱佐枝に与えられた客室で、二人は視線を交わす。

試験三日目午後。

ベッドの上にスーツ姿のまま半身を横たえ、リラックスした姿勢のまま茶柱はそのような言葉を投げかけた。その音の先にいるのは椅子に座るDクラス、いや三学年で最も優れていると茶柱が判断している男だ。

茶柱にとつて綾小路以上に油断ならない存在であり、当初は関わろうとする気さえなかった。

担任である茶柱にだけ閲覧出来たその経歴。異常で歪で悪逆な事件に絡んでいるという疑いをかけられている優秀な生徒。安易に触れれば、火傷どころでは済まない、そ

う考えていた。

では、何故今になり接触しているのか。

単に言えば不安だったからだ。茶柱の推測ではその男は入学と同時にクラス、いや学年全体を掌握出来ていたはず。それほどに長けた人心掌握術とカリスマ性をその男は持っている。

これまでの経歴がそれを物語っているのだ。

だが、目の前の男——言峰士郎はそれをしなかつた。

何故、という疑問。言峰士郎は何を為そうとしているのか。何を狙っているのか。

まるで潜伏するかのようにななる力を秘めたまま日々を過ごす言峰を見て、茶柱は漠然とした不安に駆られていた。

何かを待っている、そうとしか思えなかつた。

かつて言峰が通っていた中学に留まらず近隣の学校、果てには県外にまでその手は及び、幾つかは廃校にまで追いやられてる。

なのに何故、この男は何の処罰もなく、そして誰にもその所業を知られていないのか。茶柱だけは知っている。

言峰士郎は一切の証拠を残さず、一切自らの手を汚さずに他人を死に追い込むことができる。

誰の印象にも残らず、疑惑もかけられることなく、それを遂行していたのだから。ただ、言峰士郎はやり過ぎた。

通っていた中学校が廃校になれば、その中でも唯一何の被害も受けていなかった生徒が怪しまれるのは当然だ。

事実、こうして茶柱に情報が回ってきている。

彼の周囲は誰も疑わなかった。

みんな口を揃えて言うのだ。

——彼はそんなことをできるような生徒じゃない。

するしない、ではなくできない。

目を通した資料の中でその証言を知った時、茶柱は恐怖に身を震わせた。

言峰士郎は待つていたのだ。

誰もが自分を疑わず、目的を遂行出来る瞬間を。例え証拠があつたとしても、それでも、誰もが言峰の容疑を否定する。そう言った状況が完成するのを待つていた。

善人の皮を被ることで内に秘めた邪悪を秘匿し、敢えて優秀止まりな生徒を演じることで、そんな事が出来るはずない、と周囲を納得させた。

恐ろしい化物だ。

茶柱はそう確信した時、最早近付くことさえ恐れていた。当初は綾小路清隆という異

質な生徒を使いDクラスからの脱却を考えていたが、すぐに改めた。

言峰士郎がいる限り、このクラス間闘争で負けるはずがない、と。しかしどうだ。

今、言峰士郎はどうしている。

何もしていない。

少なくとも茶柱が認知する限りでは目立った動きは見せていなかった。

あくまで優秀ないち生徒を演じ続けている。

それが、茶柱佐枝にはとてつもなく不安だったのだ。

警鐘を鳴らしているのだ。

——言峰士郎はこの学校を食い潰す気だ。今までそうしてきたかのように、今回も。

ただ、この学校には教師の目が届く範囲が広い。各施設に備え付けられた監視カメラ、端末でのメッセージのやり取り、以前と比べてかなり動きにくくなってはいる。

だが、目の前の男ならばいざずれ——、

「何が言いたいのですか？ 茶柱先生」

穏やかな声音に思考が断たれた。

依然として投げやりな言葉に相手を見下すかのような態度を取り続けている茶柱だったが、言峰は気にする様子もなく微笑を浮かべたままだ。

「お前には支配者としての力がある。それこそ、お前が関与してきたと思われる残酷な事件がそれを証明している」

「??事件ですか、全く身に覚えがない話です」

「だろうな。今や疑いを持つているのは私だけだ。お前の企みは成功しているよ」

「私にはそのような力はありませんよ」

「そう思わせるために、今は潜伏を続けているのか?」

「はあ??茶柱先生、一生徒に過大評価は良くないですよ。あなた達は公平に分け隔てなく生徒を見るべきだ」

「見ているさ。私は少なくともそのつもりだ」

ああ、そうだろう。

茶柱は言峰士郎という存在を正当に評価している。この悪魔の子がどのような目的でどういった行動をとるのかは未だ不明だが、それでも善人ではないことは明白だ。

寧ろ、他の教員こそ言峰士郎という存在を公平に見ていないと言えるだろう。

他クラスの担任を初め、用務員に至るまでその全てが言峰士郎を信頼している。その猫被りに騙されている。いや、猫被りという可愛らしい表現が通用するのは櫛田桔梗程度だろうか。

きつと、これから言峰士郎が事に及んだ時、教員たちは誰もが疑いを持たないはずだ。

言峰はそういう風に自らを演じている。

そんなことをするような、ではなく彼はそんなことが出来ない。

そう思わせることが可能な人心掌握術。彼の気分次第でカルト教団など簡単に作れてしまおうだろう。

故に、茶柱はその真意を、目的を聞き出すまで不安を抱え続ける。

だが、茶柱とて教師だ。

自らの教え子が間違つた道を進もうとしているのなら、正す必要がある。自分にそんなことが出来るかは置いておいて、そうなるように務める義務がある。

最早、彼女にとってクラス間の壁など考えている暇はない。

教師として、言峰士郎という悪性を抱え込んだ生徒に救いの手を差し伸べなければならぬ。

茶柱にはそう思うだけの人情と教師としての責任感があった。

「私は、お前を異常だと非難するつもりは無い」

姿勢を正し、茶柱は真摯に言峰へと向き直った。

今までの態度は決して舐め腐っていたわけじゃない。挑発的な意味は微塵も込めていなかった。

ただ、怖かったからだ。今もこうして言峰と単独で接触するのに怖気ている自分が

る。それを悟られたくなかった。

教師が、自分が受け持つ生徒に怯えているなど、笑い話でしかない。

「俺は異常に見える、ということですか？」

「視点の問題だろう。お前の過去を知らない者は疑念すら抱かない。私も、お前の素性を知らなければただの優秀な生徒として認識していただろう。その悪逆な行いに気がすしなかつたはずだ」

「悪逆とは酷い言い方ですね」

「お前の悪辣さを肯定するつもりは無い。ただ、だからといってその全てを非難するつもりは無いんだ」

「茶柱先生は面白いことをおっしゃいますね。社会的に見て悪というのは問答無用で裁かれるべきです。そこに一切の猶予は与えられてない」

「それは?」

言峰士郎。

旧姓・三上士郎。茶柱佐枝は三上家の異常さを知らなかった。

三上家は第二次世界大戦後に創設された特異な一族である。三つの国家が優秀な遺伝子のみを掻き集めて作り出す天然の天才。人はどこまで行けるのか、という実験、その成果。

三上家は日本で行われたその実験の結果だ。

日本中で精査された選りすぐりの遺伝子を取り込み続け、その果てに生まれたのが三上士郎だった。

神に至る実験。三上とはそういうものなのだ。

本来、言峰士郎はその最高傑作として三上家を存続させなければならなかった。

ただ唯一の欠陥があるとすれば、それは――、

「俺は茶柱先生、貴女を尊敬しているんですよ」

「何を――」

「俺の過去を知って、俺の悪逆非道な行いを知って、それでも教師として接してくれている。救いの手を差し伸べようとしている」

言峰はゆっくりと立ち上がった。

背の高い男子生徒、その肉体が茶柱佐枝を見下ろしている。

「俺は自らの悪を知ったその日から、誰かに救いをもたらそうとは微塵も思わなかったんです。世界に産み落とされたことを憎み、善良なるものとして祭り上げられたことを恨んだ。俺は生まれてきたくなくなかなかった――」

「そ、それでも私はお前を――」

「茶柱先生、今もこうして俺を恐れている貴女だから尊敬できる。そして、夢想してしま

うんです、ありもしない情景を」

闇を孕んだ瞳が茶柱を覗き込んだ。深淵の如き底のない暗闇。まるで呑み込まれてしまいうので、茶柱の思考が歪む。

上手く言葉が出てこない。どう声をかけたらいいいのか、漏れ出るのはたどたどしい吐息だけだった。

「もし、俺が自らの悪を自覚する前に貴方と出会えていれば、救いの手を取っていたのなら、きつとその時は——いえ、こんな話はなんの意味もありませんでした」

「こゝとみね」

「どちらにせよ、いずれは破綻していったんでしよう。俺は世間と同じ物の捉え方ができない。世間が善良を尊び、美しきものを愛でれるのならば、俺は悪逆を尊び、穢らわしいものを愛す。どうしても俺はこの世界で生きられない」

言峰士郎という存在にとつてこの世界は生きにくくて仕方なかったはずだ。自分がやりたくないことを是として、生き甲斐を否とする。苦痛でしか無かったはずなのだ。

根本からズレている人間が、正常だけを肯定する社会で生きていけるはずがない。悪を為したいという欲求を生まれ持っていた者に善を説いても理解できないだけなのだ。「安心してください茶柱先生。俺は貴女をどうこうするつもりはありません。ただ見ていて欲しいんです。貴女が救済しようとした悪人がどのような惨禍を撒き散らすのか」

「ダメだ言峰——」

「あと少しで土台が完成するんです。坂柳に敗北することによつて俺の地位は揺るがないものとなる。頭痛と吐き気に苛まれ続けたあの日までの自分に、我慢を強いられてきた俺自身に報いる時が来たんですよ」

ガチャリ、と扉に手を伸ばし、言峰は微笑む。

その表情は、茶柱には寂しそうな子供のように見えた。

「ありがとうございます。俺は貴女を肯定しますよ」

「言峰、私は——」

立ち上がり手を伸ばす茶柱だったが、言峰はそれを遮るように扉を閉めた。

縫るように伸ばされた手が虚空を彷徨い、やがて力なく落ちる。

扉一枚。二人を隔てるそれは、心の距離のようで、どうしてもその背中は遠く見えるのだ。

／4

「お待ちしておりました言峰くん」

「ああ、随分と待たせたみたいだな。すまなかつた」

「お構いなく。お陰で準備はしつかり出来ましたから」

コッソ、とカップが置かれた。

日差しが二人を照らし、その卓上に置かれたチェスボードと二つのティーカップを映し出す。

言峰士郎と坂柳有栖は両者ともに笑みを浮かべ席に着いていた。

「ギャラリーが多いみたいだが？」

「貴方との決着の為に私が呼んだんです。各クラスの重鎮がこの対局を見守ってくださいませ」

「敗者が晒し上げられるわけか」

「ええ、言い方は悪いですがその通りです。この場で、貴方との優劣を示したかったもので」

この空間にいるのは二人だけではなかった。

Aクラスを始めとしてさまざまな生徒たち、リーダー格である葛城、一之瀬、龍園、堀北など、神妙な面持ちで両者の対局を静かに待っていた。

集まった生徒の総数は数え切れないほどだった。

「大丈夫かな、言峰くん」

「大丈夫さ、榊田さん。士郎が負けるはずないよ」

「そうだよねっ」

榎田の不安げな言葉に平田は安堵させるかのように言葉を紡いだ。

それを胡乱気な表情を隠そうともせず、堀北は見つめてゐる。楽観的過ぎて頭を抱えなくなつてゐた。

「堀北は士郎が勝つと思うのか？」

綾小路はそんな様を見ながら堀北に声をかけた。

堀北は思案するように眉を顰めるながら答える。

「どうでしょうね。言峰くんの実力を疑うつもりはないけれど、坂柳さんが勝算のない勝負を仕掛けるとも思えないわ」

「そうだな。坂柳の性格から見ても勝てるという自信ありきのもだろう。でも士郎の方も勝算が無ければそんな勝負受けないと思うが」

「その辺は二人のチェスの腕前を見てみないと分からないわね。言峰くんなら何かしらの対策をしているはずだけど」

答えは出ない。

綾小路もこの勝敗の行方を推測するのは至難だった。両者の腕前を知らない以上、その推測は無意味なものだ。

しかし気になるのはAクラスで坂柳に従つてゐた女子生徒だ。確か神室真澄だった

か。

何処か焦つたような表情をしている。しきりに周囲を見渡しているし、貧乏ゆすりの如くつま先を床にうちつけている。

そして視界に龍園の姿が映った。

二人の対局をにやにやと見つめている。またろくでもないことを考えていそうな男だ。

「始まるわよ」

堀北の言葉に意識が引き戻され、綾小路は言峰と坂柳の二人へと視線を移す。

「さて、一応聞いてみますが先手、後手どちらになさいますか？」

「ふむ。決め方は？」

「私から仕掛けた勝負です。言峰さんに判断を委ねましょう」

「そうか、ならコイントスで決めよう」

そう言うと言峰はポケットから一枚のコインを取り出した。

坂柳は瞠目しつつも問いかける。

「事前に準備なさっていたのですか？」

「ああ、こんなこともあろうかと拝借しておいた」

「ふふ、期待してしまいます。貴方はどれほど強いのか」

「それはこのゲームで時期にわかるだろう」

言峰がコインを親指と人差し指で支えた。

「表で」

坂柳のその言葉と同時にキイン、と甲高い音を奏で、コインが宙を舞う。幾回にも回転を重ねたコインはやがて言峰の手の甲へと落ちた。包み込むように左手が重ねられる。

「表だな。先手は君だ」

「——？」

「どうした？」

「いえ、なんでもありません。では先手を打たせてもらいます」

坂柳の手がチェスの駒へと伸ばされる。

掴んだのはポーンだった。

「始めましょうか」

「ああ、よろしく頼む」

「はい。よろしく願います言峰くん」

二人の対局が始まった。

共同戦線（3）

試験最終日。

最早全てが終わったと言える。4クラス合同で行われた優待者試験。グループディスカッションにて様々な話し合いが行われ、次第にその方針は黙秘へと近づいていった。

勝利するために残された手段は優待者を当てること。各グループに一人いる優待者、その法則を見つけ出すこと。

オレたちは敗北したのだ。

唯一マイナスが無かったのはCクラスだけだ。龍園だけが優待者の法則を見つけ出し、マイナスされたCPを相殺した。

だが、BクラスとDクラスは、多大なCPをAクラスに奪われることとなった。

敗北のきつかけである士郎と坂柳のチェスゲーム。

士郎は僅差で負けたのだ。あの、Dクラスで最も突出した能力を誇る言峰士郎という人間が、負けた。

その事實はオレが思うよりも大きな影響を及ぼした。

士郎の敗北はDクラス内に大きな絶望を齎す。堀北は自らの憧れが敗れたことにショックを受けていたようだ。洋介や榎田もそうだ。士郎が負けたということは、Aクラスには士郎を上回る頭脳を持った生徒がいるという証明になる。

実質的なリーダー格同士の衝突による格付け。

最早、Dクラスはどう転んでもAクラスには勝てない、そう印象づけるのに十分な結果だった。

／5

「敗北、か」

士郎が小さく呟いた。噛み締めるように歯切れ悪く漏れた声音からは一抹の後悔を漂わせている。

「——見事でした言峰くん。間違いなく、貴方は私が知る中で最も手強かったチエスプレイヤーです」

紅く輝く水平線を背に立ち上がった坂柳が微笑んだ。その表情には嘲笑が含まれている。だが、それと同時に敬意のような感情を想起した。

カツン、と杖先から軽快な音が弾む。

坂柳は脱力したように座り込む。土郎の隣まで歩み寄ると、鈴のように透き通った声で諭すように口を開いた。

「契約は履行してもらいます。このゲームの勝敗は、今試験の勝敗でもある。互いに法則を見抜いた身として、貴方には何もしないでしてもらいます。助言、試験への参加、些細なヒントさえ与えてはなりません。龍園くんも既に法則を見抜いている以上、Bクラスに情報を与えてイーブンにされても困るのです。私がAクラスを掌握する為にも格差を見せつけなくてはならないのですから」

「ああ、約束は守るさ」

「利口ですね。厄介な相手だと思ってきましたが??存外、蓋を開けてみれば可愛らしいものです」

雪原のように透き通る白い少女の細い指が土郎の髪を撫でた。まるで、利口な犬を相手にするように、嘲った言動。

土郎にその敗北を刻み込むかのように坂柳は頭を撫でる。

その光景は互いの立場を明確に表している。

勝者と敗者。揺るぐことの無い格差だった。

「それでは、しっかりと敗北を噛み締めてください、敗者の言峰土郎くん」

坂柳はひらひらと手を振って立ち去っていった。この場にいた側近たちも追従して消えていく。

それにしてもやけに煽るな。明らかに過剰に煽っている。士郎の性格上、煽ったところで意味が無いことなぞ、坂柳も知り得ているはずだが。今回の勝負以外にも何か目的があるのか？

「——ハッ、くだらねえ」

龍園はニヤニヤと嫌味な笑みを立ち去っていく坂柳に向けていたが、士郎にそう野次を飛ばすとCクラスの生徒を伴って同様に立ち去った。

「言峰が負けたのか」

「うん、残念だけど。坂柳さんは士郎くん以上の強敵みたいだね」

「今回の試験で優待者の法則を見抜けていないのは俺たちだけか」

「坂柳さんに全部奪われる前に対策しないとっ」

暫くして、一之瀬や神崎たちBクラスが立ち去る。

残されたのは呆然と立ち尽くすDクラスの生徒だけだ。

オレはゆつくりと隣に立っていた堀北に視線を向ける。

「——」

その表情は目に見えて青ざめていた。自らの憧れの敗北。

それが何を意味するのか。

流石にかける言葉が見つからなかった。

洋介や櫛田も似たような反応を示している。

そういえば、こうやって敗北を実感するのは初めてなのか。

最底辺からスタートしたとはいえ、あくまでその時はまだ敗北したとは言い難い状況だった。まだ勝機はある。そんな風に考えられていたからだ。

その後も中間試験を乗り越え、須藤の暴力事件を解決し、そして初めての特別試験でも完勝を飾った。

オレたちは初めて敗北の苦澁を味わっている。

そして何よりも言峰士郎という存在の敗北は、信じ難いことだったのだ。

これが特別試験だったのなら、まだDクラスそのものが足を引っ張っていたから、と各々で言い訳が出来た。

ただ、今回はだれも介入、干渉のできない一対一での競い合い。真の優劣を決める戦いだった。

最早、言い訳はできない。

今全員の心に刻まれたのだ。

言峰士郎は坂柳有栖に劣っているのだと。

——そういう風に刻み込まれた。

言峰士郎は坂柳有栖以上の事が出来ない。成果を挙げられない。やられたな。

どうやら下地は完成したみたいだ。

今この瞬間を持つて、士郎が入念に続けていた擬態が完成した。つまり、これからだ。

あの破綻した人格を持つ人間が胎動を始める。

産声をあげようとしている。

取り返しがつかなくなっていることに、誰一人として気付いていない。いや、一人だけいたな。

龍園だけはオレ以上に士郎を理解していたはずだ。

——ふと、士郎が動いたのを見て思考を打ち切る。

今のオレには例え、士郎が何をしようが関係ない。ただ親友としての関係を続けていれればいい。

士郎の悪逆非道をオレは咎めない。むしろ肯定すらするだろう。

何故ならオレたちは河川敷で殴り合い仲を深める不良のように、互いの欠点を教えあつたソウルブラザーというやつである。

「——すまない。負けてしまった」

伏し目がちにそう零した士郎を見て、堀北が駆け出した。その背中を追うものはいない。

苦笑しながらそれを見送った士郎に佐藤が抱きついた。

オレから送る言葉はない。Dクラスも何も言うつもりがないらしい。

士郎たち二人を置いて、オレたちは立ち去った。

まずは、法則を見つけないのはならないのだ。

／＼6

「そうか、言峰は敗れたのか」

「予想外の出来事で、Dクラスは騒然としてますね」

「当然だな。Dクラスにとつて言峰は最早希望に等しい。他クラスに劣ると言われ続けた不良品共の中で、唯一対抗出来る、いや総合的に勝っている人間だった」

茶柱は紫煙を吐き出しながら苦々しい表情で零す。

夜。暗い海面に浮かぶ月。

幻想的な風景を目に焼き付けながら、オレは人気の無いバルコニーに立っていた。隣

にはDクラスの担任教師である茶柱が煙草を啞え、手摺に身を預けている。

優待者試験での勝利は見込めないだろう。

坂柳は既に法則を見抜いており、龍園も気付き始めている。Dクラス内で唯一、優待者の法則を知っていた士郎という対抗馬も、先のチエスの勝敗から口を封じられてしまった。

無人島試験での勝利が一転、BクラスとDクラスの惨敗という結果で収束しそうだ。

「茶柱先生は士郎について知っていたのですか？」

「——いや何も聞かされていない。私を知ることが出来たのは僅かな経歴だけだ。言峰士郎という類まらない才能を持った、天賦の才を与えられた優等生。私はその外面しか知らされなかった」

「では何故、あの時士郎の扱いに気をつける、なんて堀北に？」

「大人になると、人は言葉の裏に敏感になるんだ。取り繕われた賛美にどのような利害を含んでいるのか、悪意を隠しているのか。そんなことばかり考えてしまう。純粋な子供時代とは違い、我々は経験を積みめば積むほど、新たな人間関係の構築が難しくなるんだ」

「灰が僅かに舞った。」

底なしの闇へと落ちていく灰を視線で追い掛け、再び茶柱へと目を向ける。吐き出さ

れた紫煙が夜空に掻き消えた。

「集団として最適化された筈の言葉が、人間だけが持つ高度な知能がより我々を苦しめる。コミュニケーション能力というものは存外、社会に出て最も必要なものなのかもしれない」

学力、知力、身体能力、判断力。

学生時代に必要とされ、社会に出てからはあまり重要視されなくなる技能。きっと、安定して人生を送るのに必要なのは人との繋がりを保つコミュニケーション能力なのだろう。

「最も人を集めるのは何か。信頼だ。例えば、どんなに優れた人間であろうとも、この社会は異端とされれば排除する。そういうった先例はお前も知っているだろう？」

「ええ、人間だけでしょうね。そういう集団意識があるのは」

「劣等感、猜疑心、我々人間に与えられ、その関係を破綻させるものだ」

まあ、つまるところ。

茶柱が言いたいのはそういう事なのだ。

「アンタは士郎について初見で看破したのか」

「——いいや、私が最初に抱いたのは疑心ではなく劣等感だった」

恐れではない。

茶柱という一人の人間、その感情が言峰士郎の真実に辿り着いただけという話だ。

「私以上の能力を持つていながら、私以上に人の上に立つことに優れている人間。それも齡15の子供だ。私自身、人より劣っていると認識しているからこそ、底に孕んだ嫉妬がアイツに目を向けさせた」

「表面上ばかり見ていた楽観的な奴らとは違い、その内面を覗こうとしたアンタが答えに辿り着いた」

「ああ、洗いざらい調べたよ。どうにか言峰士郎の欠点を探し出してやろうと、何故Dクラスなのか、その不良品たる所以を見つけ出そうとな。その結果、理事長に釘を刺される破目になったが」

月夜を眺め、茶柱は笑う。そこにあるのは自身への嘲りだろうか。

「他のDクラス共はどうした」

「状況は最悪です。無人島試験での勝利が高めつつあった士気を一気に崩された。お通夜ムードですな」

「他にも引つ張れる者はいたと思うが」

「堀北は立ち直るまで時間がかかりそうです。自らの憧れが敗れたんだ。彼女にとつて兄の失墜と同等の絶望だとは思いますが。洋介や櫛田も受けたショックは小さくない。何より、今この状況で優待者の法則を見つけようとしている生徒が一人もいないことが

なによりの証明だと思えますけどね」

「フツ、やはりこうなつたか?」

茶柱は小さく笑つた。

「予想はしていたんですか?」

「ああ、だが、言峰の行動原理が未だ謎のままだ。何を求めて動いているのかが一切分からない。今のままではただの愉快犯としか思えん」

「士郎の中学時代の話を聞くことは——」

「——ダメだ。話すことはできません。他の生徒も同様にな」

ゆっくりと振られた首。まあ期待はしていなかつた。

茶柱はDクラスを見放したかのような態度をとるが、職務は真つ当にこなしている。

何より、オレには目の前の女が本気で言峰の身を案じているのが理解出来た。

「奴にとつて今回の敗北が何を意味してると思う」

「実力差では?」

「しらばつくれるな綾小路。周りに人はいない。隠す必要も無いだろう」

「??意識の植え付けですね。生徒や教師に上限を与えた。言峰士郎の限界を教えたんだと思いますよ」

「だろうな。これで何かあつた際、坂柳にできないことは言峰士郎にも出来ないと思わ

せることが出来たわけだ。才能の限界をあの言峰でも、本物の天才には勝てないと、植え付けた」

士郎はいったいどこまで計算していたのか。計り知れないその神算鬼謀に笑うしかない。

「ともあれ、これからだろう」

「——何を」

「これで準備が整った。最早、言峰にとつてここは疑われることの無い楽園になった。外部からの介入もなく、内側はあいつを疑うことすらしない」

「一つだけ、謎が残されています」

「謎？」

「何故、オレや龍園、軽井沢に自身の本性を教えたのか、です」

「アレは成り行きでは無かったのか？」

いや、あれは士郎が仕組んだことだ。

あの場面を作り出すのが目的だったはず。

そうでなければ、何故オレたちが誘導されたのかが分からない。

「なら、わざと見つかつたんだろう」

「だからその理由を」

「理由を求めめることの方が間違っているんじゃないか？ 人間がとる全ての行動に理由があるとは思えん。言峰にもそれは当てはまるはずだ」

「??士郎は細心の注意を払っていた」

「邪魔して欲しかった——そんなわけないか」

茶柱は煙草を灰皿に押し付けると、吐き出すように零した。

だが、オレはその言葉に答えを見つけたような気がした。

士郎は良識を持つている。善行の尊さを知っている。故にそれを繰り返してきた。後付けに備え付けられた良心を活かそうとした。そうすることによって内に秘めた悪意を隠した。

——言峰士郎は、邪魔して欲しかったのか。

自分の中で、すっと腑に落ちた。

別に士郎に善良さを求めている訳では無い。例え、万人が憎む悪人であろうともオレという疎外された人間の手を取ってくれたことは何も変わらない。

オレを案じて洋介との関係を取り持ってくれた。佐倉や椎名といった友人を与えてくれた。

言峰士郎がどういう人間であろうとも、オレたちが親友であるという事実は何も変わらない。

「お前はこれからどうするつもりだ綾小路」

「特に何もしませんよ。オレは今で十分満足している」

「言峰を止める気は無いと？」

「逆に聞きますが、何故止めないといけないんですか」

「なに？」

「オレの親友が悪人であっても、社会が勝手に悪人と呼んでいるだけだ」

軽井沢の件で止めようとしたのは洋介に頼まれたからだ。たまたま互いに譲れないものがあっただけ。

他の生徒がどうなろうとオレの知ったことではない。

「ふ、ふふ、そうか。そうだな。お前はそういう人間だった」

「アンタはオレについても知っているんだろう？」

「ああ、知っているとも。担任教師の権限だ」

「アンタは止めるつもりなのか？」

「??私には無理だった。既に遅かったんだ。選択を間違えた時点で、最早、その手を取る機会は失われている」

端末からチャイムが鳴り響いた。

茶柱の視線を受け、画面を表示する。送られてきたのは試験に関するメールだった。

『鼠グループの試験が終了しました。結果発表をお待ちください』
 続けてメールを受信した。

『虎グループの試験が終了しました。結果発表をお待ちください』
 『兎グループの試験が終了しました。結果発表をお待ちください』
 『竜グループの試験が終了しました。結果発表をお待ちください』
 『馬グループの試験が終了しました。結果発表をお待ちください』
 『羊グループの試験が終了しました。結果発表をお待ちください』
 『猿グループの試験が終了しました。結果発表をお待ちください』
 『鳥グループの試験が終了しました。結果発表をお待ちください』
 『猪グループの試験が終了しました。結果発表をお待ちください』
 ほぼ同時に八つのグループが終わった。恐らく結果3の裏切りだろう。実行したのは坂柳だ。

それから数分遅れて端末が振動した。

『牛グループの試験が終了しました。結果発表をお待ちください』
 『蛇グループの試験が終了しました。結果発表をお待ちください』
 『犬グループの試験が終了しました。結果発表をお待ちください』

これは、Cクラスか。なるほど各クラス三人ずつ優待者がいたようだ。つまり、Aク

ラスがプラス300CP、Bクラスがマイナス150CP、Cクラスが変動なし、Dクラスがマイナス150CPか。だいぶ引き離されたな。

完敗という表現がふさわしいほどに敗北した。士郎を欠いたDクラスではこの結果も仕方の無いものだ。

「坂柳か」

「でしようね。坂柳は士郎と同じで法則を見抜いていた。いつこうなってもおかしくはなかった」

「追い打ちをかけてきた。Dクラスを本格的に機能不能にまで潰そうとしているようだ」

「オレはこれで失礼します」

そろそろ部屋に戻った方がいい。士郎たちも就寝準備をしているだろうし。

「——綾小路」

背後から茶柱に呼び止められた。

オレは振り返らずに言葉を待つ。

「私は間違っていただろうか」

「?？」

「本当は分かっていたんだ。言峰士郎という人間を知った時にやるべきことが」

その声からは悲壮感が漂っている。どうしようもない理不尽に抗えず、絶望を齎された、負けた人間の声音だ。

「あの日、あの時に、私は——」

「一緒に死殺んでやるべきだったんだ??」

オレは何も答えなかった。

カーストルーム（原作四・五卷）

坂柳有栖の■

ラケットがボールを打ち返す。

その度に軽快な音がコートに響いた。

オレは今、幸せの絶頂にいるのかもしれない。ここまで満たされる時間は己の人生を振り返っても一度としてなかった。

今ならこの照りつける太陽を受け入れる所か抱擁してやりたいくらいだ。

「やるねっ士郎！」

「君もな洋介ッ！」

夏休み。無人島試験、優待者試験。二つの特別試験を乗り切り、勝利と敗北の両方を得たオレたちは学校の施設の一つを借りて、テニスをしていた。

何でも、士郎が使用の許可を取ってくれたらしい。やはり優等生というのは教師陣に顔がきくのか。素晴らしいな。

「そっちいったよ清隆ッ」

「——任せてくれ」

俺の元の流れてきたボールを打ち返す。ぱすん、と張り詰めたネットが振動するのがラケット越しに伝わってきた。

ボールが土郎の隣に立つ神崎へと向かう。

「フンッ！」

「あッ」

鋭い返球にオレはボールを返し損ねてしまった。

これにてゲームセット。土郎、神崎ペアの勝ちだ。

「よし、ナイスだ神崎」

「ポイントのほとんどは言峰の功績だろう」

「そういうな。君がいなければこうはいかなかった」

「確かに、平田も綾小路も初心者とは思えないほど上手だな」

互いに勝利を褒めたたえ合う土郎と神崎から視線を外し、ボールの行方を追う。

コロコロと壁に跳ね返ってきたボールはオレの足元で止まった。

「惜しかったね」

洋介が額から流れる汗をテニスウェアで拭いながら歩み寄ってくる。鍛え抜かれた腹筋が露になり、観客席の方から女子たちの黄色い悲鳴が聞こえた。

「すまん、取り損ねた」

「今のは僕でもちよつと厳しかったかなあ」

「そうか？ 洋介ならいけそうだが」

「どうだろう、士郎なら余裕そうだけど」

苦笑しながら洋介が零した。

まあたしかに士郎なら余裕だろう。優待者試験の際に見た限り、あの恵体ならば、世界だつて狙えそうだ。本気出して無さそうだしな。

「それに、何だか背が伸びたよね」

「??ああ、五センチほど高くなつたんじゃないか?」

「そんなにすぐ伸びるものなのかな」

「士郎はびつくり人間だからな。何があつても不思議じゃない」

「なにそれ」

洋介が堪え切れないといわんばかりに嘖き出した。

が、士郎の背は伸びたわけじゃない。元から高かったのを何かしらの方法で低く見せていたのだろう。その原理まではオレには分からなかったが、そのような節はあつた。

「洋介、清隆。少し休憩しよう」

「そうだね。水分補給しておかないと」

「倒れたら困るな」

士郎の提案に賛同し、オレたちは休憩することにした。

それにしても、これが夏か。

ホワイトルームにいた頃とは違う。青春を感じる。

親友や他クラスの生徒とこうして共にスポーツに励み、切磋琢磨する。夏休みって素

晴らしいな！

この高揚感はおかしくさせる。全校集会で校長の長話の途中で叫び出したくなる感覚に似ているのかもしれない。

流石に違うか??。

／ 1

屋根の下での休憩中。

今回集まったメンツはDクラスから士郎、洋介、佐藤、軽井沢、篠原などといった大抵一緒に遊ぶイツメンというやつだ。軽井沢が孤立しているという話だったが今はそんな風には見えない。女子って怖いな。

他にはBクラスから一之瀬や神崎、そして士郎が紹介してくれた友人であるCクラス

の才女、椎名である。他にもBクラスの生徒が沢山いるが生憎名前を知らない。

各々が日陰でだべっている。士郎の隣には佐藤や王、みーちゃんがいるし、洋介の周りには篠原たちがいる。間に入って邪魔をするような気概は流石にない。というか響を買いそうだな。

かと言ってBクラスの面々の輪に入れるほど親しい生徒はいない。ということでおレは消去法で椎名の隣に腰を下ろした。

椎名は読んでいた本から視線をオレに移す。オレはタオルで汗を拭いながら視線を合わせた。

「意外です。綾小路くんはスポーツが得意だったのですか？」

「得意という訳じゃないが、まあ体を動かすのには慣れてる」

入学当初は運動能力を隠そうとしていたが、士郎たちに合わせる為には程々に実力を発揮しなければついていけない。そういうわけで運動が得意な帰宅部、程度には留めている、よな？

「確か椎名は苦手だったんだよな」

「はい。恥ずかしい話ですが運動はからつきしで。本の虫と言われるくらいには引きこもることが多いせいですかね」

「まあ得手不得手は誰にでもあるだろう。オレも椎名みたいに勉強ができるわけじゃな

いしな。それに、将来的に運動能力が求められる職業というのも限られてる。そう気にすることでもないと思うが」

「そうでしょうか、そう言つて貰えると助かります」

椎名は開かれた分厚い本で顔を隠しながら微笑んだ。まるで深窓の令嬢を彷彿とさせた。

よく見れば暑さのせいか頬が僅かに上気している。日陰でもこの暑さだと普段外に出ない椎名にはきついのだろうか。

「綾小路くん、そんなに見つめられると少し照れます。私の顔に何かついてますか？」

「悪い。そんなつもりじゃなかったんだ」

目尻の下がった椎名を見て、オレは慌てて首を振った。

「暑くないかと思つてな。慣れてないだろう？」

「そう、ですね。あまり長居はできないかもしれませんが。折角誘つていただいたのに、申し訳ないのですが」

「無理に誘つたのはオレたちの方だ。たまには外で過ごすのも悪くないかと思つて」

「確かに最近ほどの生徒も屋内でしか遊んでいるのを見かけませんね。それだと少し不健康ですし、判断としては間違つていないと思います。私も外で本を読むのは嫌いでは無いです」

「良かった。本当は嫌だったかと心配してたんだ」

「いえ、言峰くんや綾小路くんは友人だと思っています。例え、ご一緒に身体を動かすことは出来なくても時間を共有するというのは楽しいものですよ、存外に」

椎名の言葉にオレは感動していた。

異性の友達というのはこれで二人目である。佐倉とも偶に士郎を挟んで出掛けたりすることはあるが、未だそこまでの仲にはなれていない。

士郎の言っていた通り、オレと椎名は波長が合うのかもな。

「言峰くんには感謝しています。特定の友人を作ることなくひとりの世界にいた私に、外の世界の愉悦というものを教えてくださったのですから」

「そうか。士郎は良い奴だからな」

オレの親友は最高だなっ！

ふと引つかかる言葉があった。愉悦、愉悦か。高円寺や士郎が同じようなことを何度か繰り返していったな。

そこにどういう意味を孕んでいるのかは知らないが、なにか引つかかるものがある。

まあ気にすることではないか。

「これをどうぞで」

椎名が脇に置いてあったスポーツドリンクを差し出してきた。

「いいのか?」

「私はあまり汗もかいてませんし、それに綾小路くんは頑張っていましたから。そのご褒美です」

「負けてしまったけどな」

「言峰くんは勝ち負けではなく、何を得たかだと仰っていましたよ」

士郎が言いそうなことだ。

まあこうして親友たちと青春を謳歌している以上、得るものは得ている供給過多だ。どこまで自分が恵まれているのかと思うと怖くなってきた。

もしや明日事故にあったりするの?か?

??ホワイトルームでのマイナスが帳消しにされただけかもしれないな。

「有難く貰うが、これ、飲みかけ?」

「嫌でしたか? 私はあまり気にしないので」

「別にそういうわけじゃない。椎名が良いなら気にしないでおく」

少しだけ減っているスポーツドリンクを傾け、数口分一気に飲み干した。汗をかいて乾ききった喉が潤っていく。

体を動かした後に味わうこの瞬間だけでも、意味があったと思える。

「間接キス、ですね」

「——うふあつ」

不意な言葉に喉を通り過ぎようとした水分が気管に入り込んだ。思わず噎せてしま
う。

「な、なにを」

「ふふ、良かったです。綾小路くんもそういう反応するんですね。もつと機械的なお人
かと思つてました」

うつすらと頬を紅潮させながら椎名は微笑んだ。

なんなんだこの、ラブコメのワンシーンのような感じは。

「すみません、少しだけ席を外します」

暑さに耐えきれなくなったかのように椎名は手をパタパタと仰ぎながら本を抱えて
離れていった。

その背を追うようにオレは椎名を眺めていた。

??青春を感じる。

「あ、綾小路くん、ちよつといいい?」

不意に背後から声がかかる。

視線をやればそこに立っていたのは軽井沢だった。

青春を感じない??。

「どうした」

椎名との落差に顔を顰めそうになったが流石に失礼だったので思い留める。

なんというかオレは軽井沢に苦手意識を持っている。それもこれも優待者試験での一件のせいだ。あの時に言われた言葉にオレはかなり傷つき、それからというもの二人になるのを何とか避けてきた。

何故かやたらと軽井沢の方から寄ってきたのには困惑したが。

「き、聞きたいことがあるんだけど??」

やけに挙動不審だな。それに平然と隣に腰かけている。

やたらと距離が近いが、お前あの時オレに吐いた言葉を忘れたとは言わせないぞ。

まあここで断つても後が怖い。それに孤立していても力は健在だ。軽井沢の持つ洋介の彼女というアドバンテージは篠原たちが反感するだけでは揺るがない。女子たちも嫌々ながらも彼女の言葉には従わざる得ないのだ。

つまり、不用意に下手を打つとオレの青春が破壊されかねない。

オレは続きを促すように頷いた。

「その、あの、す、好きな子、とかいるのかなって??椎名さんとか」

「椎名か? 仲はいいが友人程度の関係だぞ。なんで名前が上がったのか分からないんだが」

「で、でもなんか距離近かったし、さっきだって、か、か、間接、キスしてた、し」
タジタジな軽井沢を見ていると少しからかいたくなってしまう。

何か勘違いしているみたいだからこの際乗ってみるのも面白いかもしれない。

「別に間接キスくらい普通だろ？ 何だ意外とウブなのか」

「なっ——わ、私だって間接キスの一つや、二つくらい余裕であるし！」

「じゃあ飲んでみるか？」

「——へ？」

軽井沢は呆然とペットボトルの飲み口を見つめる。

既に赤みを帯びた頬から顔全体へと広がる紅潮。一筋の汗が額から流れ首元を伝った。

数秒の空白。

女子たちの姦しい世間話が響く。

「??」

ゴクリ、と軽井沢の喉が鳴った。

よっほど喉が渴いていたのか？

「??」

おい。

どうするんだこの空気。

この無言の間が気まず過ぎる。

「——い」

「やっぱオレが飲む。喉乾いたしな」

軽井沢が何か言う前に遮り、オレはスポーツドリンクを飲み干した。

「あ」

「ふう、美味しいな」

目を点にしながら軽井沢が零した。

やがて自分がからかわれていたのを悟ったのかその表情は怒りで染る。

「——い、このっ」

「ぐはっ」

痛い。

パンチがオレを貫いた。

／2

「えいつ」

「なんのっ」

それから一時間ほど。

男子組は休憩中だ。今は女子たちがテニスラケットを片手にコートで興じている。

一之瀬と白波を相手に、佐藤とみーちゃんが戦っていた。

「夏とはいえ、少しは外で体を動かすのは必要だからな」

士郎がタオルで汗を拭いながら言った。

半袖故に丸太のように太い腕が露わになっていた。普段あまり見せることの無い筋肉に女子たちは喜んでいたらようだ。

「夏バテにだけは気をつけないと」

「ああ、皆には徹底して塩分と水分を摂るように言い聞かせている。しっかりと汗をかいているのがその証拠だ」

日陰の下で士郎と並んで座り、女子組の試合を眺めていた。

例の如く洋介は女子たちから離れられずにチラチラとこちらに助けてほしいような視線を送っていたが、さしもの士郎も苦笑を返すことしかできなかったようだ。

「堀北とは話せたのか？」

「難しいな。多少なりとも今はコミュニケーションを取れているが、良好とは言い難い」

「そうか」

堀北は余程シヨックだったのか、士郎が坂柳に敗れてからずっと会話すらままならぬ状態だ。

堀北の兄への憧憬は尋常ではない。オレたちが理解してやれるほど浅い因縁でもないし、何よりその根底に強く根付いたものを否定してやることも出来ない。

堀北にとって士郎は道標であつた。目標であつた。そして憧れだつた。

故に、自分が信じてきたものが負けたという事実を受け入れる時間が必要だ。

「それにしても大袈裟だと思つうほどだな」

「仕方あるまい。彼女にとって、Aクラスに俺を上回る生徒がいることは絶望でしかないのだから」

「そういうものか」

自分が追い掛けている人間の格上が、倒すべき敵を率いている。

現段階で勝てるビジョンは一切浮かばない。そもそもDクラスは士郎の運用方法と間違えている。

本来、彼は駒として使つた方が効率がいいのだから。

「一つだけ、聞いてもいいか？」

「どうした」

「本当はあのチェス、勝てたんじゃないのか？」

その一言に土郎の笑みが深まる。

「どうしてそう思うんだ？」

「チェスは先手有利なゲームだ。後手は引き分けるのが精々。土郎が坂柳に負けるに至って、あまりにも完璧過ぎた」

「完璧、か」

「ああ、土郎は負けたというのにミスがなかった。一つもだ。なら、本来であれば引き分けられた勝負だったんだ。差し違えもなく、実力も拮抗していた」

坂柳は疑問に思わなかっただろうか。

ずっと最善手を打ち続けた土郎が負けたのだ。それに、土郎であれば全てのパターンを記憶していてもおかしくはない。

高円寺と4デツキ神経衰弱を出来るほどだ。不可能ではないはず。

「オレとしてはその前のコイントスの時点でお前は後手になることを知っていたんじゃないのか、と思わざるを得ない」

「不可能だろうそれは。コイントスは坂柳が表と答えた後だったとはいえ、操作するな
ど土台無理な話だ」

「確かに不自然な動きはなかった」

「そうだろう。清隆、今日は随分と要領を得ない話をしてくる」

士郎は楽しそうだった。

笑いながら、疑うオレに怒りを抱くことなく接している。

「すまない。はしやぎすぎたか」

「気にするな。俺もよくある」

「そうは思えないけどな」

「ふふ、清隆も随分と遠慮なく言ってくるようになったな」

何を言ってるんだ。

オレたちは魂の友、ソウルブラザーだぞ。前世から親友だったかもしれないしな。

「ブラザー、最後に一つだけいいか？」

「??ブラザー？」

「ああ、間違えた。士郎、最後に一つだけいいか？」

士郎が頷いた。

オレは深呼吸して、口を開く。

「士郎は、何がしたいんだ？」

「どうだ、ろうな。俺は何がしたいんだらうか」

視線を下に落とし、考える。

入学当初は己の愉悦しか見ていなかった。あのクソ神父に説かれ、六助に誑かされ、彼女が死んで、両親が消えた。

それからというもの、俺の中にあつた困っている誰かを助けたい、という欲望。正義の味方への強い憧れが沈んでいった。

だから、ここに入學するまで至る所で至る人間に、至る苦しみを与えた。全ては自分のため、究極的な自己愛を貫く為に。

それで良かった。良心はどうに捨てきれていたはずだったんだ。

しかし、佐藤麻耶と親しくなつて、自分の中の何かが崩れだした。

忌々しく思い、完全に葬つたはずの、善人としての言峰士郎が顔を出す。いや、あれは三上士郎だ。正義の味方

俺が何よりも嫌う俺だった。

最早、矛盾した欲望を抱えたまま、ここまで来てしまった。

もう引き返せない。今更引き返す気もない。

「そうだな、困っている人を苦しめたいんだ、きっと」

今やるべきことは、兼ねてより準備を重ね、ようやく始めるに至つたことだ。

坂柳有栖。俺をチエスで破った少女の顔が脳裏に浮かぶ。その顔が歪む様を拝めるのもあと少しだ。

もう、ひと我慢。

それですべてが報われる。

一度始めてしまえば、止まることなど、できない。

高度育成高等学校学生データベース

氏名????? 言峰士郎

クラス? 1年D組

学籍番号 ■■■■

部活動 無所属

誕生日 4月15日

評価

学力 A+

知性 A+

判断力 A

身体能力 A+

協調性 A+

面接官からのコメント

高校一年生とは思えない能力を持つ。受け答え、自信、表情全てが高水準であり、保有するカリスマ性は我々を魅了するほどだった。

—— 閲覧規制 ——

Dクラスとする。

担任からのコメント

非常に良くできた生徒です。入学初日にクラスでの立ち位置を確保し、教師陣への売り込みも完璧でした。彼一人いればどんな集団も円滑に回せることでしょう。又、彼が教会の管理を申し出てくれたおかげで助かっており、契約としてPPを与えています。

坂柳有栖の ■■■ (2)

月夜が照らす教会。

何処か神秘を内包して見えるその場所は、私とは縁遠いものだと思っていた。信心深いわけでもない。神を信じてもない。

ましてや己の人生を他の存在に委ねるなんて、馬鹿らしいとさえ思う。

私は神聖な神のお膝元にはあまりに異端な人間だった。

人の優劣は産まれた時に決まる。

遺伝子上で全てが定められるのだ。

天才、秀才、凡人。優等な遺伝子を持つか、劣等な遺伝子を持つか。

両親が如何に優れているか。

その才能をどれほど引き継いでいるか。

私は人間の優劣が遺伝子で決まるのだと、そう定義している。

故に、だからこそ、私は信心深いわけでもない。神を信じてもない。

己の人生を他の存在に委ねるなどという愚行を否定する。

私は生まれついた天才で、勝者であることを義務付けられた存在。神に縋らず、唾を吐き捨てることも厭わない。

そのような考えがあつて、私はそういった場所を避けてきた。

いや、忌避してきた、という方が正確だ。

目的がなければ近付くことすらない。

私という存在が決して訪れるはずがなかった場所。

それがこの教会なのだ。

高く聳え立つ十字架を見上げ、嘆息する。

私ここに足を踏み入れる理由。

その存在に干渉する為に最適なのがここだった。

「ほんとにいいの?」

真澄さんが問い掛けてくる。

質問の糸を紐解こうと思考を巡らせ、その言葉の意味が『私は付き添わなくていいのか』という問いだと気付いた。

成程、決して小さいとは言えない罪を犯している彼女からすれば居心地悪い筈だ。

神は見ている、という言葉があるように罪の意識というのは決して無くならない。いつか咎められるのでは、という自覚出来ないほどの小さな意識が植え付けられているの

だから、尚更に近付くことも嫌だろう。

数瞬、どう答えようか悩み、それほど面白くもない回答を返す。

「必要ありません。此処で待つていてください」

彼女の表情を見ることも無く、私は歩き出した。向かう先は教会内部。

本当は彼女も連れて行こうと思っていた。警戒故にはなく、単なる意地悪のために。

けれども、それは大して面白くもない。それに、目的の彼と彼女を合わせるのはデメリットの方が大きいと思っている。

話を聞く限り、彼は善人だ。優秀だ。

天才に届かないとはしても、言葉を選ぶ能がある。私のクラスの人間も何人か世話になつていと聞く。

つまり、話を聞くことに優れている。言い換えれば、観察眼が鋭い。

相手が欲している言葉を与えられる。相手が話しやすいように誘導できる。何より、相手の罪を引き出すことが彼の仕事なのだ。

下手に接触させて、彼女の弱みを握られても困る。私は彼女を体のいい駒のように使つてはいるが、なくても困らない存在という訳でも無いのだ。

教会の扉に手をかける。

錠は掛かってないのか、少し力を込めるとゆっくりと軋みながら私を迎え入れた。かつ、かつ、と杖が床を鳴らす。

月夜が差し込む神秘的な濃霧。礼拝堂は深い霧のようなものに覆われていた。それが月光に照らされた埃なのか、本当に霧なのかは目視では判断できない。

ただ、祭壇の前に男が立っているのは確認出来た。

ああ、そうだ。その男こそが目的の彼、だ。

黒いキャソックに身を包み、片手に握られる分厚い聖書らしき書物。間違いない。

Dクラスきつての秀才、言峰士郎その人だ。

「ようこそ神のお膝元へ。神へのお祈りか？ 己の罪の懺悔か？ それとも——私個人に話があるのか？ 坂柳有栖」

穏やかな笑み。その優しげに投げかけられた言葉とは裏腹に、私には彼の瞳の中に黒く澱む何かを幻視した。

確かなものではない。ただ胸の奥から滲み出る感覚を、私は知っている。これは同族嫌悪に近い。それが何に對するものなのかは分からなかったが。

「最後者です。初めまして言峰士郎くん。自己紹介は不要でしょうが、改めて挨拶を。私はAクラスの坂柳有栖です。クラスこそ違いますが、個人的に仲良くしたい、と思つてます」

何故か不必要にAクラスであることを強調してしまう。

この私が彼を敵であると認識しているのだろうか。いや、話に聞く限り彼はSシステムを見抜けていなかった。Cクラスの龍園くんできえ見抜いていたのだから、それを為しえなかった彼は私の敵にはならない。

盤上の駒の一つでしかないのだ。

彼はそんな私の心境を知ってか知らずか、まるで幼子を諭すような苦笑を浮かべる。

「そうか。では私も改めて名乗ろう。Dクラスの言峰士郎だ。噂はかねがね聞いている」

「耳が聡いのですね」

「いや、こういう場所は自然と人の噂が溢れるものだ。意図せず誰かの秘密を握ってしまうのもよくある事なんだよ。私としては遠慮願いたいがね」

言峰くんは自然な足取りで私へと近付いてきた。

そして優雅な所作で手を差し伸べてくる。

「お手を拝借しても？」

「エスコートしてくれるのですね。嬉しい限りです」

「そう言って貰えるのは光栄だ」

私の手を取り、言峰くんはゆっくりとした足取りで歩き出した。祭壇の方へと向か

う。

私は胸の奥で滲む、ふつつつとした黒く澱んだものの正体を理解した。これは怒りだ。

彼の言葉を聞いて、彼の表情を見て、その心境を投影して、理解する。私は侮られている。

言峰士郎は坂柳有栖を侮っている。

まるで幼子のおいたを論すように微笑み、幼子の手を引くように歩く。

ああ、許されない。

これが、他のものだったのなら、敵意を向ける価値もない凡人だったのなら、侮ることを嘲笑っていただろう。

だが、彼は駄目だ。

言峰士郎というただの秀才が私を侮ることを許さない。

たった数秒、先の言動だけで私にとって言峰士郎が排除する存在だと確定した。

敵にはなり得ない、その能力の限界故に。

かと言って駒にもなり得ない、その言動の愚か故に。

彼は排除する障害だ。

私が天才であることを証明するための壁の一つ。いや、壁にすらなり得ない。

私の歩行を妨害する路傍の石、そのひとつだ。

「それで、話というのは？」

滲む怒りを抑え込み、私は微笑んだ。

敵意はない。害意もない。ただあるのは純然たる憤りのみ。

私が格上であることを示さない限り、その格差を理解させない限り、この怒りを忘却することはないだろう。

言峰くんには内心を悟らせないように、語る。

「私と手を組みませんか？ 言峰士郎くん」

「ほう、随分と急な話だな。理由を聞いても？」

「Dクラスはいま窮地に立たされていると聞いています。Cクラスの策略に嵌り、仲間の進退のために奔走してるとか」

「君こそ、随分と耳が聡いようだな」

己が情報戦のアドバンテージを奪われていることに気付いたのか言峰くんは小さく嘆息した。

DクラスとCクラスの諍いは既にその全容を理解できるほど聞いている。

策に嵌ったのは須藤くん。粗暴で短期、Dクラスの弱点と見るべき駒。

策を巡らせたのは龍園くん。これまた須藤くんに似たり寄ったりなところはありますが、

頭はキレる。何より暴力的思想を持つている。

龍園くんにとって須藤くんのような生徒は扱いやすいだろう。彼ら二人は相性が悪過ぎる。

今回はそこを突かれた。

問題なのは殴った殴られたではなく、そういう事件を意図して作れることにある。

学校側が用意したのであろう死角。その使い方。

そう考えると龍園くんの目的はラインの見極めと見るべきだ。

「手を組むと言ったが具体的には？」

「助け合いですよ。今回の事件、私はDクラスを救う一発逆転の手を知っています。勿論、私は貴方たちが探している目撃者ではありません。ただ、何もかもを台無しにできる一手を、私だけが打てる盤上をひっくり返す策を知っているのです」

「なるほど、つまり私はそのお返しとして何をすべきなんだ？」

「これ以上、葛城派に助力して欲しくありません。勿論、貴方が私に手を貸す、というのなら受け入れないこともありませんが——貴方は他と比べて優秀な方ですし——貴方の葛城派への助力は私にとって厄介なものなのです」

そう厄介なのだ。

彼は路傍の石だ。わざわざ避ける気にもならないし、そもそも避けることすら癪だ。

私自身が手を打つ程のものでもない。

それに——これは使える。彼は恐らく平等主義だ。公平的な考えを持っている人間だ。

そうでなければ、神父など務まらないし、聖職者の真似事なんぞしないはず。

まあ、つまるところ私は彼に反対のことをして欲しいのである。

「貴方は葛城派に助力しても、私たちに助力する気は無いですか？ それは肩入れを意味します。明確な宣戦布告として受け取ってもいいのですよ？」

ただでさえ、彼らは須藤くんの件で忙しい。

その上でAクラスと敵対するなど選択できるはずもない。

「怖いことを言う。まあ確かに葛城派に肩入れしすぎ、という意見は汲もう。事実、私にそのような意図はないとはいえ、体外的に見ればそう捉えられてもおかしくは無い。耳を傾ける者として、代理人としてそれでは立つ瀬が無いからな」

「では、これは私からの相談ということにしましょう。貴方はそちらの方が動きやすいでしょうから」

「随分と悪い相談だ。だが、俺としてはデメリットのない相談ではある。その話、もっと詳しく聞かせてもらおうことはできるか？」

「その返事を待っていました。では詳細を説明します——」

私は嬉々として語る。

まるで幼子が己の知識をひけらかすように自慢げに騙る。

これでいい。言峰士郎はこのまま誤解させたままでもいい。

教えてやるのだ。真の天才は誰か。

そして、己がどれほど未熟で、未発達で、世間を知らないのか。

この劣等遺伝子の塊に、真の優等遺伝子としての格を教えてやるのだ。

——言峰くん。

これは貴方が始めたんですから、決して後悔はなさらぬように——。

／ 3

「どうしてでしようか？」

ぼつり、と誰にかけるわけでもなく紡がれた問いは真澄さんに拾われた。

「何が？」

淡泊にそう返してくる彼女を見て笑みが深まる。

何処か焦っているような様子を見て加虐心が湧いてくる。きつと無人島試験で無断でリタイアした件だろうか。

彼女は恐らく言峰くんに期待していたのだ。私を倒してくれるかもしれない存在に、期待していた。故にそれが敗れたことで、私に思惑がバレたのではないかと不安に駆られている。

勿論、彼女が言峰くんと接触していないことは知っている。そして、そんなことをするほど頭の弱い人間でないことも。

ただ私の失墜を、彼女は見たかったのだ。

「言峰くんの話です」

その名前を出すと彼女の肩が僅かに震えた。

流石に動揺しすぎだ。隠し事をしているのが丸分かりすぎてもっと虐めたくなくなってしまう。

彼女は可愛すぎる。使える駒ではあるが、それはそれとして使えなくても傍に置いておきたくなるほどに。

「あのエセ神父がどうしたのよ」

ぶつきらばうに、内面を隠す為に、冷たく言い放つ。

今更遅いですけど。

「彼は、何故まだDクラスを引つ張っているのでしょうか」

「??そんな風には見えないけど」

「いいえ、私は勝利の代価として表舞台から降りることを提示した。彼はそれを受け入れた。なのにDクラスのリーダーのように振舞っている。これは明確な契約違反です」
「守ろうが背こうが、ペナルティを決めてなかったんだからあのエセ神父の勝手でしょ。アンタの落ち度だと思うけど」

「??私はこのような口約束でも、彼なら遵守すると思っていたんですよ。彼は公平で、平等主義ですから」

一瞬、真澄さんの口元が緩んだように見えた。

何か面白いことでも言っただろうか。流石にその意図を見抜くことはできない。私は心理学者ではないし、そこまで長けている訳でもない。

それでも言峰くんを上回る審美眼、観察眼を持つていると自負しているが。

「そ、なら直談判でもしたら?」

「なるほど、それもいいかもしれませんが」

言峰くんは利口な犬ではなかった。

ならば、利口になるまで躩れば良いのだ。

私との格差を徹底的に、その心が折れるまで示す。そうすることで、私は溜飲を下げられるし、何より優秀な駒がひとつ手に入る。

無人島試験において、龍園くんを裏で操った手腕からして参謀としてはそれなりに使

えるものである。

身体の不自由な私では綾小路くんととの戦いで不利な面がある。それを補うために身体能力が高く、頭もキレる駒は重要だ。

言峰くんをAクラスに引き抜いても面白いかもしれない。

当然、Dクラスは絶望するだろうし、そうなれば流石に綾小路くんも表舞台に足を踏み入れられるはず。

Aクラスを率いる私とDクラスを率いる綾小路くん。その戦いの果てで私は証明したいのだ。

「マジで行くの?」

「嫌ですか?」

「私、あいつ嫌いなよね。気持ち悪いし」

なるほど、真澄さんには彼の平等主義は気持ち悪く見えるらしい。

確かに彼女の嫌いそうな人間ではある。

「貴女は外で待っていてもいいですよ。代わりに橋本くんと鬼頭くんを呼んでおいてください」

「なんで?」

「示威行為です」

言峰くんは駒を持っていない。彼は支配者ではなくリーダーだ。盤上でのアドバンテージは私にある。

「そ、なら呼んどく。アイツらのことだからすぐ来るでしょ」

「ありがとうございます」

「で、肝心な言峰が何処にいるか知ってるの？」

「??連絡を取りましょうか」

「いいよ、私がしておく」

いつの間に連絡先を交換していたのだろうか。

私の見ていない所で彼女と言峰くんが接触している可能性でもあるのか。と、すれば一度考えを改めるべきかもしれない。

「言峰くんといつ連絡先を交換したのですか？」

「いや知らないけど。他のやつ経由で今聞いている」

「なるほど、そういう事でしたか」

嘘を言っている様子はない。

彼女は私に嘘を吐けない。というより、通用しないと身をもって知っている。

一応警戒しておくべきではあるが、かと言って言峰くんは裏で彼女を操るほどの接触はしてないはず。

「教会にいらつて」

「それは手間が省けました。橋本くんたちの合流を待つて、向かいますか」

「喉乾いた」

「そうですね、近くにカフェがありますし、そこで合流しましょう」

／4

扉が軋む。

ああ、ついにこの時が来たのだ。

待ちに待ったこの時が。

振り返った先、扉を開ける二人の男子生徒、そしてその僅か後ろで佇む白銀の少女。

待ちに待った来客だ。長かった。非常に長かった。

頭痛が止まない。

頭が割れそうで、気を抜けば叫び散らしたくなる。

吐き気が止まない。

すぐにでも水の中で溺れてしまいたい。

』

背後から声が聞こえた。

この声の主を俺はよく知っている。

あの忌まわしき男だ。俺が最も忌み嫌い、殺してやりたくて堪らなかつた自分自身。

知っている。

お前ならきつとそう言うだろう。

良心が求めるままに、誰かを救おうとしたお前なら。

見知らぬ他人に寄り添うことを厭わないお前なら、きつとそう言う。

そんなお前に心から憧れて、心から殺意を向けた。

『■■■ッ！』

だが、俺はお前じゃない。

お前はとうに捨てた。

元より、お前は俺が求めていた正義の味方三上士郎でしかない。

お前のせいで俺は苦しめられてきた。

お前が望むから。

お前が期待するから。

お前が為そうとするから。

俺は我慢ばかりしてきたんだ。

『■■だッ！』

俺が演じていた三上士郎はもう死んだ。

俺は我慢するのをやめたんだ。

俺に端から良心なぞなかった。

大衆が望む理想を体現していただけなのだ。

そしてそれが三上士郎だった。

『■■目だッ！』

三上士郎は存在しない。

お前はとつくの昔に死んだのだ。

あの日から、彼女が死んだ日から。

でなければ、何故俺はその死を目の当たりにして涙が出なかった？

彼女が死んで、忌々しい父が消えて、愛しかった母が消えた。

そして、自分の中の言峰士郎（悪）が微笑んだ。

『——駄目だッ！』

俺は——言峰士郎だ。

お前じゃない。三上士郎ではない。

付き纏う幻影が掻き消えた。

同時に俺を苛んでいた頭痛と吐き気が消えた。

生まれ変わった気分だ。

このときをずっと心待ちにしていた。

坂柳有栖。彼女を知った時から、極上の馳走だと思っていた。

俺は招かれてきた客へと笑みを向ける。

「ようこそ神のお膝元へ。神へのお祈りか？ 己の罪の懺悔か？ それとも——私個

人に話があるのか？ 坂柳有栖」

——愉快の時間だ。

坂柳有栖の ■■■ (3)

「こんにちは、言峰士郎くん。前回と同じく最後者です。もしかして、前と同じような質問がしたいのですか？」

「いや、そういう訳では無いよ坂柳有栖。教会を訪れる者には等しく同じ問いを投げかけている。例外はいるがな」

彼は苦笑しながらそう返してきた。

例外、と聞いて思い当たるのはDクラス、いやこの学校でも類を見ない変人と称される高円寺くんだ。

彼と高円寺くんは交友関係にあるという。それもただならぬものであり、私たちの想像の範疇を超えた関係だ。表現できるような言葉はなく、両者ともに尊重することも無く、妥協することも無く、無遠慮な関係にあるという。

散々彼のことを扱き下ろしてきたが、高円寺くんを御せるといふその手腕だけは認めてやってもいいかもしれない。

つまるところ、彼を駒に出来れば高円寺くんすらも制御できる存在となるわけだ。

おまけというにはあまりにも大きな利益。ますます彼を駒として手元に置きたくなる。

「だが、橋本はともかく、鬼頭の方は話したことは無いな。改めて名乗らせてくれたまえ。私は言峰士郎。この教会で神父の真似事をやらせてもらっている」

鴉を彷彿とさせる漆黒のキャソック。

シャンデリアの光を受けて輝く十字架のネックレス。

片手に添えられる分厚い聖書。

神秘的な雰囲気纏う柔和な笑みを浮かべた端正な顔立ち。

何故Dクラスなのか、何故不良品と呼ばれるのか。

その所以が最も知れない男、言峰士郎。

私に楯突いた哀れな劣等遺伝子。

今日は、彼の心をへし折る。

再起不能な程に、二度と私を侮れないように。

その為にこうして私自ら足を運んだ。

「早速ですが本題に入らせてもらいます。貴方の性根は十分に理解したつもりです。言

峰くん、構いませんよね？」

「君は迂遠な言い回しを好むと思っていたが、私の勘違いだったようだな」

わざと言葉を遮るように放った言葉は、更に嫌味を乗せて私に返ってくる。本当に口だけは達者な男だ。

私に負けた犬のくせに、未だに幼子のように扱ってくる。ここまでコケにしてくる相手は初めてだ。

「節穴ですね。??それでは簡潔に話すことにします。貴方は私との約束を守る気は無いのですか？」

「わざとわざとのような質問をしてくるといふことは君は私が約束を破るような人間だと言いたいのかな？」

「違うのですか？　今もこうして契約違反を犯しているのは貴方ではないですか」

私は彼に表舞台から降りることを命じた。

二度とDクラスを率いる真似はしないように伝えたはずだ。

でなければ、綾小路くんが私との勝負の土俵に立つことはない。彼とのチェスは退屈しないものではあったが、だからといって綾小路くんと勝負を捨てるわけにはいかない。

彼と決着をつけることで、ようやく私は証明できるのだ。

「そこまで言うのなら契約の内容を再確認しよう。君は私に勝者として『表舞台から降りること。また、優待者試験への参加を禁ずること』を命じたと思うが、異論は？」

「ええ、その通りです。しっかりと覚えては無いですか。尚更理解できませんね」
「そうは言われてもな。君の言った表舞台から降りることについて詳細に聞くことにしよう。『表舞台』というのはクラスを率いる行為、所謂リーダーとして試験に参加することと合ってるな?」

「はい。そうです」

「では言わせてもらおうが今のDクラスのリーダーは私ではない。そして、平田でも榎田でも軽井沢でも、君の愛しの綾小路でもない」

「ならば誰です?」

「堀北だ。Dクラスのリーダーは堀北鈴音だ。これはDクラス全員が周知する事実で、自他ともに堀北鈴音というリーダーを認めた結果だ。今の私はただのクラスメイトの一人に過ぎない」

堀北鈴音がリーダーとはどういうことか。

言峰くんの後任は平田くん、次点で榎田さんあたりだと考えていた。綾小路くんが自ら名乗り出ることはないことも、Dクラスを窮地に追いやってようやくステージに登ることも予想出来た。

だが、堀北鈴音がリーダーというのは理解してやれない。

「彼女は協調性も、リーダーとしての才も、ましてや支配者としてのカリスマも持ってい

ない。何故堀北さんをリーダーに？」

「確かにそうだ。リーダーに最も向いているのはやはり平田だろう。Bクラスを見ればわかるが一之瀬ほどリーダーに向いている人間はいない。つまり協調性があり、公平で、仲間思いな才能ある人間が適任だ。堀北は該当しないな」

「ええ、おっしゃる通りです。だからこそ貴方が彼女をリーダーに選んだ意図が読めません」

「選んだのは私ではない。Dクラスの総意なんだよ。お前にそれがどういう意味なのか理解することは出来ないよ。龍園ならまだしも完璧な支配者であるお前には」

結局、言峰士郎を表舞台から引きずり下ろしても、綾小路くんが代行することはなかったのだ。

ならばこそ、次の標的は堀北さんとなる訳だが。

「ともあれ、これで君の誤解は解けたようだな。私は契約違反なぞ起こしていないし、徹底的に遵守しているつもりだ」

「そうですね、今回は私に非があつたようです。謝罪します言峰くん」

「必要ない。代わりと言ってはなんだが、一つゲームをしないか？」

「ええ、いいですよ。何のゲームを？」

チェスで負けたことを根に持っているのか彼はそのような提案をしてくる。まあ構

わない。

前回と同じく私の勝利は揺るがない。彼の底は知れた。

私には言峰士郎の限界が見えている。

「これを使ったゲームだ」

彼が取り出したのは四つの賽子だった。

何をするつもりだろうか。

「そうだな、まずは橋本。君から振ってみたまえ」

言峰くんはそう言っただけで私の隣に立っていた橋本くんは四つの賽子を手渡す。

橋本くんは私の顔色を窺う。

「振ってください」

「はあ??仰せのままに」

橋本くんの掌から賽子が零れ落ちる。

赤いカーペットの上に音もなく散らばった賽子の目は全てバラバラ。規則性もないものだった。

「右から5665。いい出目ですね」

「そうだな。このゲームの意味を説明しようか。手段は賽子をただ振るだけ。たったそれだけで我々の格差を図るというものだ」

「なるほど、ギャンブルに近いものですね。残念ですが言峰くん、私はこの手のゲームで負けたことはありませんよ」

橋本くんが拾い集めた賽子を受け取り、今度は私が振る。

私は知っている。どんな数字が出るのかを。どのような結果が現れるのかを。

私は生まれついた勝者だ。良い出目以外を知らない。

「6666。最高の出目だな。君が語ってくれた天才の定義を思わず認めたくなくてしまっただけだ」

「すげえ?!」

そうだろう。

私たち生まれついた勝者はことギャンブルにおいて負けることなぞない。運命は私たちに味方している。

幸運。天才として生まれたという事実が、それを物語っているのだから。

言峰くんは落ちた賽子を拾うと意味深に笑った。

その瞳に宿る澱んだ何かを見て、私の身体が固まる。この感覚はあの時と同じものだ。

「生憎だが坂柳、俺は自分の意思でない限り、この手のゲームで負けることが出来ないんだ」

掌から四つの賽子が落ちる。

音もなく綺麗に着地したそれを見て、私の頬を冷たいものが伝った。

「9999。まあ俺から見れば6だが君たちから見れば全て9だろう?」

有り得ない。

どんな手を使った。どのような偶然でこうなる。

無造作に投げ出されたはずの賽子は位置こそバラバラであるが、転がることも無く全てが綺麗に平行だった。

「ところで、坂柳有栖。もう一度賽子を振ってみてくれないか?」

言峰くんは優雅な所作で賽子を一つ一つ広い、私の手に握らせる。

得体の知れない何かが私に忍び寄ってきている。

この感覚は、憤りなんかではなかった。

「俺が君の出す目を予言してやろう。君は右から4651の目を出すだろう」
言峰くんは祭壇の前まで戻ると高らかにそう宣言した。

／5

退屈そうに高円寺は溜め息を吐いた。

それを横目で見ながら端末から聞こえてくる音声に椎名は耳を傾ける。椎名の端末と言峰の端末は通話状態にある。こちらはミュートにしているが言峰側の会話は筒抜けだ。

椎名は無遠慮にソファに身を預ける高円寺へ問いかけた。

「高円寺くんはどうなると思いますか？」

高円寺はこの学校で最も言峰士郎を知っている。

その経歴から性格、本性までも知り得ている。つまるところ、最も言峰に近いのが傲岸不遜で自己愛の塊である高円寺だった。

「ふむ。まあ答えてやるのは容易だが、その前にシエロについて語るとしようか。退屈しのぎにもなるしねえ」

「是非聞きたいですね」

「私が初めて会った時は、なんとつまらない人間だと思ったよ。平等で公平な完璧主義者。自身が本気で見知らぬ他人の為に生まれてきたのだと信じて疑わない男だった。それが小学生だった時のシエロだ。話す価値すら無い退屈な凡人だと思ったものだよ」

「今もそうでは無いのですか？」

「在り方は変わらんよ。変わったのはシエロの内面の方さ。まあこれについては語るつもりは無い。語る意義を見いだせないからねえ」

高円寺は呑気に爪に鑢をかけながらニヤリと笑った。

器用に鼻歌交じりだ。

『本気で、そうなるんでも?』

『なるさ。俺は君の語る天才の定義を否定する材料を持っている。それを証明してやろう』

『誇大妄想もここまで来ると哀れなものですな?!!』

『これが妄想かどうかは君がその賽子を振ればわかる事だ』

端末から聞こえてくる会話は楽しげだ。いや実際愉しんでいるのは言峰の方だけだろう。坂柳の声音には焦りのようなものがある。

そうなるはずがない。そんなことが出来るはずがない。そう思考は導き出しているのに、彼女の第六感が警鐘を鳴らしているのだろう。

「シエロはリトルガールのいう定義に当てはまっている。優秀なDNAの下に生まれた天才。リトルガールが語る天才というのはシエロだ。その定義が本当に正しければだがねえ」

「つまり、士郎くんのご両親は天才だったと?」

「ノンノン。それは違うねえミステリーガール。その解釈は部分的にしかあっていない。シエロの家系そのものがリトルガールの言う天才の定義を立証する為のものさ」

「人工的に天才を作る家系ですか。三文小説みたいな話ですね」

「そう、酷くつまらない家系だった。だが、実験は成功したが、失敗でもあった」

「士郎くんは成功例だった。でも、あまりにも異常な才能故に遺伝子に関係がないと判断され、失敗となった。という解釈で合ってますか？」

「その通りさミステリーガール。君との会話は退屈しなくていい」

高円寺は今度は手鏡を覗き込みながら髪型を整え出した。

今は椎名しかいないし、視線を気にするような場所ではないと思うが。

内心そう思いながらも椎名はそれを口に出すことは無かった。

『どうした、何故渋る？』

『なんでもありません』

『ではどうして賽子を振ろうとしない。まさか、あそこまで赤裸々に自身の勝利を謳った君が逃げるようなことはしないだろう？』

『うるさいですね?! 黙っててくださいいっ』

声音から坂柳の肩が上下している様が脳裏に過ぎる。

小さくではあるが、坂柳を心配する声も聞こえてくる。

「シエロは失敗作だった。両親の。否、全ての血統を遙かに上回る才を生まれながらに授かっていた。天賦の才、天から与えられた贈り物。世界そのものに轟然と聳立していると

「言える」

高円寺の口角がみるみる上がっていくのがわかる。

「私はシエロとギャンブルはしない。あれに運勝負を挑むなぞ、負け戦に挑むようなものだ。私は勝てる勝負にしか手を出さないほど臆病ではないし、だからといって負けるとわかってる勝負に手を出すほど愚かではないつもりなのでねえ」

「高円寺くんなら対抗できると思いますが」

「確かに対抗は出来るさ。けれども私はシエロほど愛されていないからねえ」

「愛？ 誰にですか？」

「世界にさ」

端末から息を呑む音が聞こえた。

続いて、言峰の愉しそうな声が流れる。同時に高円寺は高らかに笑った。

『4651。これが君の語る天才の定義を否定する証拠だ』

「——言峰士郎は世界に愛されている」

「??有り得、ない」

橋本から悲鳴にも似た声が漏れる。

鬼頭も瞠目したまま動けずにいるし、坂柳の表情は青ざめ、その額からは目に見えて分かるほど、冷や汗が流れている。

対し、言峰は終始余裕そうな表情を崩すことは無い。

賽子の出目が示したのは4651。奇しくも言峰が予言したものと一致する。

きつと高円寺あたりは高笑いを浮かべているだろう。

「君の言う天才の定義。全ての人間はDNAで優劣が決まるという考え。それを否定するのがこれさ」

「こんな、ことが」

「俺は凡俗な父と優秀の域を出ない母から生まれた。勿論、俺から見ればどれほど家系図を遡っても君ほど天才と言える者はいなかった。そして、その中で俺は君を超える天才として生まれている。どうだ？ 否定するだけの証拠はあるだろう？」

「しかし、これが偶然でなければ何故コイントスの時に??ッ!!」

「言っただろ？ 俺は自分の意思でない限り、負けることが出来ない」

「貴方は！ 願っただけで望む結果を手に入れられると、そんな妄想を平然と語るのですね?!」

「君も言っていたじゃないか。天才とは勝利を定められた者だと。いや、君は義務付け

られた者、と言ったか」

有り得ない。

こんな結末なんて有り得ない。

坂柳の胸中を焦りが駆け巡る。

そして、一つの矛盾に辿り着いた。

「貴方は、私にチェスで敗北しています！」

「??君は理解力が無いな。さつきも言ったんだが。俺は自分の意思でない限り、負けることが出来ない。つまり、まあ負けようと思えば君に知覚されることなく負けることは出来る」

「嘘です！ 見え透いた嘘——」

いや、仮に言峰が坂柳を圧倒的に上回るチェスの腕を持っていたのなら不可能ではない。だが、そんなことは机上の空論のようなもの。それこそ、チェスの全てのパターンを記憶していない限りは、土台無理な話だ。

いや、引つかかるものがある。あれは確か、言峰とのチェスの最中に交えた会話で——

『必勝パターンがある。先手有利。将棋や囲碁に比べてパターンが少ない。詰め将棋のようなものだな』

『言つてくれますね。全てのパターンを把握している?』

瞬間、坂柳の脳裏を過ぎったのはその一言だった。

まさか、本当に言峰士郎は全てのパターンを記憶しているのか?!

「君に負けることは決定事項だった。目的のために必要だったからな。しかし、だからといって先手有利なゲームで先手で負けることは明らかかな実力差があるように思われしてしまう。そうなる、君からは遊び相手にすらならない、と見なされかねない。だから、後手で尚且つ僅差で負ける必要があった」

「その為に、コインをわざわざ教師に借りた?!!」

「ああ、君が綾小路にご執心なことを知っていれば、自ずと俺を潰す為に接触してくる。綾小路を表舞台に引きずり出すには俺が邪魔だろうからな。そして、勝者として俺が表舞台から降りることを命じてくるのも予想出来た。君は俺を自尊心を守るために潰したくてたまらなかつただろうからな。俺を正面から打ち負かすことは君の中で決定事項だつただろう」

そうだ。

言峰が語る通りだ。

坂柳は自らの自尊心を守るために、格差を見せつけるために真正面から言峰を倒し、その上で綾小路を引きずり出そうとした。それが最も効率的であり、支配者として相応

しい振る舞いだと考えた結果だ。

「前にも言ったが、この教会は様々な情報が入ってくる。当然、君たちAクラスの間も訪れるから、君の情報が入ることも当然だ。君が好戦的な性格をしていて、何より自尊心が高いことは容易に推測できた。何より、君は自身の感情よりも、支配者としての在り方を重視しているとすぐに分かった」

「しかし、それは貴方がチェスで私に勝てたことの証明になつていません!」

「まあそうだな。では五十七手目、c5ルークこれでどうだ?」

「??確かにその一手で私の敗北は決定していたかもしれませんが。今そこから勝敗を覆す手を私は思いつきませんから。ですがゲームの後からならいくらでも手を考えることは可能ですツ!」

「だろうな。それを証明するのはゲームの後だと難しい。ともあれ、話を戻すが君の自尊心を刺激する方法は簡単だった」

言峰は笑みを向ける。

それは手間のかかる幼子を諭すような柔らかい苦笑で――、

「君は子供扱いされることを嫌う。その容姿故に、そのように侮られることに寛容にならない。尚更、それがただ愚かな凡人ではなくただ秀才の域を出ない思い上がった俺となれば」

「そこまで見越して?!」

「ところで、君は自身を優等な遺伝子を持っていると捉えているらしいが、その先天性心疾患は劣等では無いのか？」

「——」
ずつと考えないようにしていたこと。

坂柳が自らの定義を、その天才だという事実を否定してしまう証拠を言峰は提示してきた。

不意をついたその言葉に思わず何も言い返せない。

「龍園が謳っているように暴力も才能のひとつだ。それが欠けてしまっている君は本当に優等なDNAを継いでいると言えるか？」

一歩、言峰が踏み出す。

「君が定義する天才とは生まれながらに決まるのだろうか？　ならば、生まれながらに疾患を持っている君は、運動能力のない君はどういう立場でそのようなことを宣っているんだ？」

更に距離が縮まる。

「なあ、坂柳。何故何も言わない——」

瞬間、鬼頭が駆け出していた。

これ以上の主への蛮行を認めないと言わんばかりに言峰へと殴り掛かる。

「——ガッ！」

その拳が届くよりも早く、言峰は内側に踏み込むように肉薄する。

その天与の恵体から放たれたのは八極拳の技のひとつ、代表的なまでに知られる鉄山靠。

鬼頭の意識外から迸る衝撃。凡そ人間から放たれたものとは思えないほどの一撃。

消え入る意識の中で、鬼頭の脳裏を過つたのは走行中の貨物トラックだった。

「——なにが」

一秒にも満たない攻防に坂柳は理解が追いつかなかつた。瞬きの間に鬼頭が壁に背を叩きつけられ倒れている。

一切の理解が及ばない範疇の出来事だった。

「意識を刈りとする程度の手加減はした。と言つても、力加減はしてないがね」

言峰は笑みを崩さずに言う。

全くもつて意味がわからない。

「言峰エッ！」

「待つ——」

坂柳の制止を届かぬまま、今度は橋本が言峰へと飛びかかった。

「——かはっ」

が、または次の瞬間には橋本の肉体が坂柳の隣にあつた会衆席に叩きつけられていた。衝撃で木片が散らばり、埃が舞う。

たつた数秒で坂柳が用意した護衛、暴力装置が機能を失つてしまった。

「さて、君が用意していた護衛は力尽きたが、次はどうする？」

「こんなこと、外には真澄さんもいます?! 貴方もただでは済まないはずですよ」

「ああ、神室か。残念だが彼女は君に不利な証言しかしないだろう」

哀れなものを見るように言峰が嗤う。

それを見て、または坂柳の胸の奥から澱んだ何かが滲み出る。

「なにを?!」

「彼女は鬼頭と橋本を除いて誰とも連絡をとっていない。勿論、俺ともな」

「まさか——」

坂柳の脳裏を過ぎるのは先の神室との会話だった。

神室は言峰の連絡先を知らないと言った。そして、別の生徒を経由して居場所を聞くとも言っていた。

連絡先を知らない、という言葉に嘘はなかった。神室に坂柳から嘘を隠し通すほどの厚顔はない。

つまり、前提が違ったのだ。

初めから神室は言峰が教会に知っていることを知っていた。

坂柳はこの監視カメラもない学校側から死角となる場所におびき出されていた！

「因みに俺は普段、日曜日の午前中は教会に居ない。そして、今日は俺の部屋で高円寺と椎名の二人を部屋に招き、寛いでいる、ということになっている。カメラにも俺が二人を招き入れている映像は写っているだろうな」

「監視カメラを掻い潜って教会まで来たというのですか?!」

「毎日寮から教会に行き来していれば、嫌でもカメラが目につく。つまりはまあ、そういうことだ」

「初めから、真澄さんは貴方側にいたと!? 接触は無かったはずですよ!」

「だが、いくらなんでも俺以外の交友関係まで見てはいなかっただろう?」

「別の人間を使って連絡を取り合って——」

有り得ない。

有り得ない有り得ない有り得ない。

ここまで用意周到に準備していたなんて、一体誰が見抜けるというのか。

一体どんな目的があれば、こんなに緻密に計画を練れるというのだ。

「さて、君が俺に頭脳で劣っていることを証明した。君が俺に判断力で劣っていること

を証明した。君が俺に身体能力で劣っている——これは君ではなく君の駒だが——ことを証明した。で、君は遺伝子上の天才ではない俺にもう一度、持論を語れるか？」

「——」

「君は龍園が秩序の内側にいると宣っていたが、どの面してそのようなことを言えるんだ？ 厚顔にも程があるだろう。俺がその気になればこの場で君を殺したとしても状況証拠から容疑者に俺が挙げられることも無い」

つまり、生死すら坂柳は言峰に握られている。

「格下と侮っていた相手に格差を見せつけられた気分はどうだ？」

男の人らしい大きな掌が、その指先が坂柳の頬を摘んだ。

「前にも言ったが君には欠点がある。故に支配者には程遠い」

その黒く澱んだ瞳が坂柳を覗き込む。

ああ、やっとこの胸の奥から滲む感情の正体がわかった。

これは——恐怖だ。

同族嫌悪ではない。言峰は同族ではなかった。

坂柳が加虐嗜好だとすれば、言峰はもつと深く澱んだ何か。他者の苦悶と絶望のみを尊ぶ悪魔だ。

身体の震えが止まらない。

視界が滲む。

頬を伝う感觸の正体が涙だと気付くまでにそう時間はかからなかった。

「利口だな。厄介な相手だと思っていたが？蓋を開けてみれば存外可愛いものだ」

大地を思わせるほど武骨な言峰の太い指が坂柳の髪を撫でた。まるで、利口な犬を相手にするように、嘲った言動。

坂柳にその敗北を刻み込むかのように言峰は頭を撫でる。

その光景は互いの立場を明確に表している。

勝者と敗者。揺るぐことの無い格差だった。

「それでは、しっかりと敗北を噛み締めることだ。敗者の坂柳有栖」

言峰は手をひらひらと振って立ち去っていった。

物音ひとつ無くなり、静寂の中、僅かに聞こえるのは坂柳の嗚咽だった。ここまで明確に敗北したのは初めてだった。格差を見せつけられたのは初めてだった。

こんな屈辱を味わったのは、初めてだった。

がくり、と膝が折れる。

もはやその胸中にあるのは自身への失望、そして言峰への恐怖だけだ。

泣き崩れる坂柳の姿を、教会のステンドグラスが映していた。

? √ ? A 支配の悪魔

晴天の下、坂柳有栖は緊張した面持ちで歩いていった。

静寂が支配するアスファルトで舗装された道のり。自らの肉体を支える一本の杖がただ唯一、音を響かせる。

目的の場所に近付くにつれ、その足取りはゆっくりと重たくなっている。

坂柳の脳裏に不安が過ぎる。

まさか、ここまでの重圧を感じる日が来るとは思わなかった。支配し、常に相手の上に立っていた自分が、自他ともに認める天才である坂柳自身が、たった一人の人間に怯えている。

ただ、その怯えは恐怖によるものではない。

敗北によるものでもなかった。

では、この異様な体の震えの正体はなんだというのか。

——坂柳はそれを知っている。

知り尽くしている。かつて支配する側にいた坂柳が見てきた弱者のそれと似た感情。有り得ないはずの正体。

それは期待なのだ。あの御方の期待だけは裏切れない。その期待を裏切った時、見限られた時、自分は天才ではなくなってしまう。

嘗てないほどに重い足で何とか辿り着いたのは目的の場所、生徒会室だった。

二度のノックの後、扉の向こう側から威厳ある声が聞こえる。

「入れ」

その声に呼応するように身体が小さく揺れた。

心臓の鼓動が早まり、まるで恋慕のような感情が高まる。

坂柳はドアノブに手を掛けると、扉を優雅な所作で開け放つ。

「失礼します」

お辞儀と共に足を踏み入れれば、眼前に広がる室内。そして既に各自が保有するデスクに向き合っている九人の役員がいた。

そのうちの一人が坂柳を視界に入れるなり悪態をつくかのように啜う。

「よお、お姫様。随分遅かったじゃねえか」

「そうでしょうか。規定の時間には間に合っていたと認識してますが」

「おいおい、会長サマより遅いのは失礼だろお？」

「止めないか龍園。誰彼出会う人に噛み付くな」

「黙れよハゲ」

「あなたたち全員うるさいわ。黙りなさい」

入るなり坂柳に噛み付いてきたのはCクラスの龍園翔。その隣に座り、諫めようとしたのがAクラス葛城康平。両者を蔑むかのように一括したのがDクラス堀北鈴音だ。

「まあまあ、皆仲良くやろーよ。士郎くんもそう言った運営方針を望んでるんだし」

「別にいいんじゃないか？ 士郎は運営に支障が出なければ多少の諍いは目を瞑ると思
うが」

「でも、綾小路くんも仲良くやった方がいいと思うでしょ？」

「まあ、友達は欲しい」

「ハッ、会長サマの腰巾着は友達が欲しかったのか？」

「まさか龍園、オレと友達になつてくれるのか？」

「ならねえよ！ なんなんだお前。どうやったら今の流れでそう思うんだよ」

快活な笑みを浮かべ、一致団結を志しているのはBクラスの一之瀬帆波。皆に珈琲を配つて回る無表情の暗そうな男がDクラスの綾小路清隆だ。

また場を収めようとDクラスの平田洋介が口を開いた。

「龍園くん、それ以上はやめてくれないかな？ 士郎にまた怒られちゃうよ？」

「言い方が弱々しいわ平田くん。この男にはもつと強く言いなさい」

「ええ!? む、無理だよ堀北さん」

「こちらこちら、ダメだよ堀北さん！ わざわざ争いの種を作ろうとしないのっ」

「ごめんなさい一之瀬さん、平田くんも反省してるわ」

「僕が悪いの!?!」

「静かにして、会長がお話になるわ」

Aクラス神室真澄の声にその場にいた全員が背筋を伸ばす。坂柳も茶番により冷めきっていた表情を取り繕った。

生徒会室の上座に位置する席に座るこの学校に置いての実質的トップ。Aクラスの王にして一年生にして生徒会長の座に着いた三上士郎は冷淡な表情で坂柳に視線を送った。

「来たか、坂柳」

「お遅れして申し訳ございません」

「構わん。時間内には間に合っている」

「はい」

「席に着け。定例会議を始める」

一度お辞儀をすると坂柳は己に与えられた席に座った。

それを見送っていた三上は神室へと手を伸ばす。

「(イ)こちらこそ」

視線すら送らずに行われた動作から意図を読み取った神室は手元にあつた資料を三上へと差し出した。

資料を受け取った三上は視線を落としながら一言零す。

「点呼」

その一言に役員六人が姿勢を正した。全員が三上へと身体を向ける。

「Aクラス所属、生徒会執行部副会長坂柳有栖。問題ありません」

「同じくAクラス所属、生徒会執行部副会長葛城康平。問題ない」

「Bクラス所属、生徒会執行部書記長一之瀬帆波。問題ないよっ」

「Cクラス所属、生徒会執行部会計長龍園翔。問題ねえ」

「Dクラス所属、生徒会執行部会計平田洋介。問題ないよ」

「同じくDクラス所属、生徒会執行部書記堀北鈴音。問題ないわ」

「同じくDクラス所属、生徒会執行部庶務綾小路清隆。問題ないな」

全員の恒例的な挨拶が終わると今度は神室が一步前に出て頭を下げた。

「Aクラス所属、生徒会執行部議長神室真澄。定例会議の議長を務めさせていただきます」

そう言い終わると神室は手元にあるファイルを開いた。背表紙と表紙には生徒会執行部定例会議と銘打たれている。

「まず、報告会を行います。各クラス代表よりAクラスから近状報告をお願いします」

「Aクラス、問題は特にありません。強いて言えば、放課後部活動に参加する生徒の数が先月より二人増えました」

「Bクラスも特にないかな。時々Cクラスがちよつかいかけてくるくらいだねっ」

「おいおい、クラス闘争だろ？ 甘つちよろいこと言うなよ。ああ、Cクラスは俺に反抗的な奴が増えた」

「Dクラスも同様に士気が下がりがりつつあるわ。やはり私も甘やかしすぎだと思う」
「ありがとうございます。では会長、お願いします」

神室の言葉に三上は資料から視線を離さず頷いた。そしてそのままの姿勢で各クラス代表へと言葉を送る。

「Aクラスはよくやっている。このまま生徒たちの質を上げる」

「はい。仰せのままに」

「Bクラスも現状維持で構わん。一之瀬、龍園の言うことは正当だ。相手してやれ」

「??わかったよ士郎くん」

「Cクラスは龍園の求心力が落ち過ぎだ。誰彼構わず勝負を仕掛けるのはいいが、お前が負けていては話にならん。少しは勝算の高い勝負をしろ」

「へいへい。言われずとも」

「Dクラスは我が強い輩が多いな。堀北、もう少し生徒に寄り添ってやれ。それでもダメなら切り捨てろ。実力も無く上昇志向のないやつは要らん。足でまといだ退学させろ。平田は優しすぎる。厳しい叱責も優しきだぞ。足りない部分を互いに補え」

各クラスへのアドバイス。

それを終わると三上は資料から視線を離し、坂柳たちの表情を一つ一つ確認している。

その瞳を見てしまうとまるで吸い込まれてしまいそうになる。三上士郎という男はまるで人の上に立つ為に生まれてきたような存在だ。

たった三ヶ月で全クラスを掌握した能力に、見るものを魅了する容姿。全てが支配する為に設計されたかのような男なのだ。

「神室」

「はい。仰せのままに」

三上の呼び声に即座に反応した神室が手元の資料に視線を落とす。

「現在、それぞれ各クラスのCPです。皆さん、手元の資料を確認してください」

その言葉に坂柳を始めとした生徒会長以外の役員が予め机に置かれていた資料を手にとった。

「一枚目の資料は現在の各クラスのCPで、ここ一ヶ月の変動値を計算しています。そ

れから初めての特別試験であった無人島試験以降の変移も表しているのでよく覚えておくようにお願いします」

資料には変移グラフと現在の各クラスのCP、そして特別試験毎の変動値、ここ一ヶ月での増減の有無を記録したものが記載していた。

現在の各クラスのCPは、

Aクラスが1350pt。

Bクラスが1220pt。

Cクラスが1100pt。

Dクラスが1060pt。

という風に記載されている。

ここ一ヶ月の変動値は、

Cクラスがマイナス10ptで、Dクラスがマイナス5pt。

プラス補正が掛かっているのはAクラスが3ptだけである。

「会長の予想では今回の特別試験が今学期最後のものとなるでしょう。つまり、今までの増減幅から考えてDクラスでもAクラスに移り代わられる可能性は有ります。他クラスも同様です。結果次第では最下位に転落する恐れがありますので慎重になるようにお願いします」

三上士郎の最も恐ろしい点は、実力で一年全体を掌握しただけではないということ。

三上は最終的に一学年全てをAクラスに統一しようとしている。これは周知の事実であり、だからこそ、一年生は三上を信奉し、彼をトップに置くことを厭わなかった。

「現在のCP合計は4730pt、一年生全員をAクラスに移動させる計画はかなり順調です。今後は他学年を積極的に攻撃していく方針となるでしょう。南雲前副会長が退学した今、二年生に抵抗する力はそれほど残されていません。出来るだけ多くのCPを奪うことに専念しましょう。我々が逆に奪われるなど、以ての外です」

そう、一年生だけの特別試験なら大抵がCPの取り合いになるだけ。しかし、他学年となると話は変わってくる。彼らにCPを持つていかれるのは計画に支障をきたすどころか、生徒会そのもの、引いては生徒会長である三上士郎への疑念に繋がる。

坂柳たちには失敗は許されていない。

「次に二枚目の資料をご覧下さい。これは——」

三上士郎をトップとした生徒会役員は一枚岩ではない。坂柳は今でも同じ役職である副会長の片割れ、葛城の失脚を虎視眈々と狙っているし、堀北は未だ自力でAクラスに上がることを諦めていない。龍園など暇潰しで不意に攻撃してくるので論外だ。

ただ、彼らは総じて敗北者たちである。故に、三上の方針には従うし、その実力を認められている。

龍園が安易に暴力に走らなくなったのもそれが原因だ。三上に完全敗北した彼は、最も反抗的だったが為十分に言い聞かせられている。

——三上の期待を裏切れることは、この学校に居られないことを意味している。

彼らは各クラスの代表ではあるが、あくまでクラス単位の話であり、1年生のトップは言うまでもなく三上だった。

最低限の成績さえ残し、努力を続けていればいずれAクラスになれる。そういう風に甘言に腐らされていった者たちはリーダーである龍園たちより三上の言葉に従うだろう。

しかし、その腐敗は決して悪いものではなかった。闘争心が無くなったが故に協調性が生まれたからだ。全員が全員、ひとつの目標の為に手を合わせている。

それに、あくまでも坂柳たちは敵対クラス同士だから過度でない限りはクラス同士で争うことも三上によって容認されている。

なにより、一年生全体の成績は、入学当初より遥かに良くなっている。平均値がどんどんと上昇しているのだ。最早、三上に逆らう理由なんてひとつとしてなかった。

——誰もが、その支配から逃れようとしなかった。

風を切る音が聞こえた。

目にも止まらぬ速さで駆け抜けた一条の軌跡。一切の揺るぎはなく、射線上に降り注ぐ雪を弾きながら的の中心へと矢が突き刺さる。

綾小路はそれを見届けて、短く息を吐いた三上へと視線を移す。白い吐息が後方へと流れていく。

「流石だな土郎」

「三年も続けていれば嫌でも技術は身に付いてくる。お前にも覚えはあるだろう清隆」
「ああ、そうだな」

続いて、綾小路が弓を引き絞った。ピンと張りつめた弦が、直後掻き消えた。遅れて的に矢が突き刺さる。

「当たるには当たるが、土郎のようにはいかないな」

「俺は趣味でやっている。そこに微塵も退屈はない。楽しめるといえるのは何よりも糧となる」

「オレは??それを知らない」

「なら、これから知っていけばいい」

三上と綾小路は弓を弓道部に預けると、そのまま制服へと着替えて弓道場を出た。

綾小路はフエンスへ背中を預ける。背後では弓道部員が矢を放っていた。

「コーヒーだが構わんだらう？」

「助かる。まさか恵んで貰えるとはな。オレから土郎を呼び出したのに」

「なに、俺の方からも話があった。それに個人的にお前には目を掛けているつもりだ」

三上が自販機から購入したホットコーヒーを綾小路へと手渡した。ボトルの熱が冷えきつた手指を溶かしていく。

「ホワイトルームから接触があつたか」

「ああ、かなり前の話だが、父親が自ら会いに来た」

「そうか??それは残念だな」

「ああ、オレが望む平穏とは程遠い展開になる。恐らくだが、来年の新生の中にホワイトルームからの刺客が紛れているはずだ」

三上は綾小路の素性を知っている。綾小路が自ら話した訳では無い。彼は元から知っていた。

三上家はホワイトルームと同系統の実験を行っている。どちらも完璧な人間を作る実験だ。その過程こそは違うが。

ホワイトルームが教育によって完璧な人間を作るというのなら、三上家は血統によって完璧な人間を作る機関だ。その違いは先天的なものか、後天的なものという違いしか

ない。

そして、三上士郎という三上家最高傑作にして最大の失敗作と、同じくホワイトルールの最高傑作にして最大の失敗作の綾小路。両者には面識があった。

彼ら二人は一度だけその実力を競ったことがある。ホワイトルールが一年間の機能を停止する前、クロス実験は行われた。

結果次第では綾小路をも三上家に取り込もうとする意思を、三上家は持っていた。そして、ホワイトルールはその方針に逆らうことが出来ない。三上は世界的プロジェクトのひとつにして世界機密のひとつだ。逆らうことなんて土台無理な話だったが、それ以待ったをかけたのが綾小路の父にして、ホワイトルールの創設者だった。

そこにあつたのが親心だったのなら、きつと綾小路に会いに来ることはなかっただろう。

「既に月城理事長代理がいる以上、どうしようもないな。坂柳理事長であれば多少の融通は効いただろうが」

「オレは表舞台に上がる必要があるか？」

「不要だ。俺たちはクラスで戦わないし、何より流石のお前の後輩と言えど学年そのものに喧嘩を売って勝てる見込みはなからう」

「??それもそうだな。仮に坂柳たち役員を倒せたとしても最後に待ち受けるのは士郎

だ。どう足掻いても負けることは無い、か」

「ああ、お前は三年間学校生活を楽しむことだけに専念しろ清隆。障害は全て俺の手で取り除く」

「——どうしてそこまでしてくれるんだ？」

無償の奉仕。三上がやっているのはそれだ。

綾小路に返せるものなんてないのに、三上はこうして何度も綾小路を助けている、友達を与えてもらって、生徒会という仕事も与えてもらって、こうして居心地のよい場所まで与えてもらっている。

「俺はお前個人に興味がある。清隆、お前がもしたただの天才だったのならこうして面倒を見ることも手を貸すこともしなかった」

だが、と三上は空を見上げ白い息を吐く。

「人間味のないお前に、機械じみたお前に人としての幸せを与えることで、証明したかったのかもな」

「それはどういう——」

「いたっ！ どこに油売ってるんですか会長！ 書類の決済が終わってません!!」

言葉の真意を問いただそうとするが、それは突然の来訪者によって遮られた。少し離れた位置から走り寄ってくるのは女子生徒、神室だ。

「む、見つかつてしまったか。仕方ない。またな綾小路。お前がずっと悩んでる答えが見つかった時、また俺に声を掛けてくれ。時間はいくらでも作る」

「いくらでも作るって、出来るわけじゃないですよっ！ 貴方一日睡眠時間をちゃんと取れてくれるんですか！」

「分かったからあまり声を荒らげるな神室」

神室に強引に連れ去られる三上を見ながら綾小路はコーヒーを飲む。

そして、これが青春か、と独り言るとその場を後にするのだった。

お詫びと今後について

まず初めに長い期間、更新しなかったことをお詫び申し上げます。

本当にすみませんでした。

何故、半年以上もの間更新が無かったか、というところとまあ俗に言うエタつてたせいですね。管理職になり忙しくなったという理由もありますが、一番の原因は行き詰まったことにあります。

当初のプロット通りであるならば、7巻で特にエタる要素もなく完結していたのですが、言峰士郎に善性を付与したのが良くなかったですね。

プロット通りであれば、言峰士郎に葛藤なんてものはなく、悪人に振り切れた生徒だったわけですが、何故か思いつきで今のキャラにしたのが今後の物語の展開に大きな歪みを産んでしまった形です。

それと同時に肉体系で強くし過ぎたのも良くなかったかな、と思います。流石にアルベルトをワンパンしてしまったのは良くなかった??。

あれのせいでフィジカルで勝てる生徒がいなくなり、プロット全崩壊からの作り直し

になりました。思いつきでプロットから設定を生やすのは、後で苦しむことになるので、皆さんも気をつけてください。

まあ一番要らない要素である三上家云々も良くなかったですね。あまりにオリ主最強にしすぎて書いてて楽しくなくなつたつてのもあります。

ということでも全話書き直します。

リメイク版として後日遠くない日に投稿すると思うので、良ければまたお付き合いです。さい。

変更点

- ・三上家云々の設定消失
- ・言峰士郎の善性消失
- ・フィジカルの下方修正
- ・中学からの言峰との接触↓幼少期からに変更
- ・言峰士郎の優男度の消失
- ・言峰士郎の性格の悪さup(表向き)
- ・コンセプト『会った瞬間黒幕とわかるやつ(読者視点)』
- ・綾小路と言峰以外の一人称視点の減少(単純に他キャラの一人称が難しいです。書ける人尊敬します)

リメイク版投稿次第、本作品は見れなくなるかもです。

また更新頻度につきましてはあまり期待しないようお願いします。

それと、リメイク版につきましては序盤まで大きく物語は変わりません。1巻以降から徐々にルートを変えていく予定です。

他クラスルートに関しては、続きを読みたいという声もあつたので、引き続き本編執筆の合間を縫って、書いていくつもりです。

Aクラス√全員Aクラス計画

Bクラス√クラス崩壊ルート

Cクラス√龍園との共謀（綾小路敵対ルート）

他クラスルートは内容変更の可能性はありますので、ご了承ください。

リメイク版も同じく7巻で一応完結するプロットを組んでいます。何かしら、番外編等で、このキャラとの絡みがみたい等のリクエストがあれば、作者の活動報告までお願いします。

それでは、長々と失礼いたしました。

拙作の更新を待つて頂いていた方に、お詫びと感謝申し上げます。

? $\sqrt{\quad}$? A 支配の悪魔 (2)

/ 3

——それは誰もが予期しない出来事だった。

入学式から一週間、次第に学校生活にも馴染み、それぞれのグループが出来上がりつつある。そして、Aクラスには二つの派閥が出来上がろうとしていた。

一つは葛城康平をリーダーとした葛城派、もう一つが坂柳有栖をリーダーとした坂柳派である。いずれクラスを二分するであろう派閥争いが起きることは、誰しも容易に想像し得た。

既にとある情報がAクラスには蔓延していた。

それは『この学校が実力主義で、生徒を四クラスで実力毎に分けている』といった内容だ。

何処から流れた噂なのか、それが真実なのか誰も知りえない。

ただ、それが本当たとすれば『Aクラスでなければ高校の恩恵を賜ることが出来ない』が指し示すのはクラス間での闘争だった。

デマか真実かも定かでないこの情報であるが、二人の生徒によつてAクラス内から外に漏れることは無かつた。

坂柳派は、今のAクラスという地位を守るのではなく、他をどんどん蹴り落としていこう、という過激な主張を。

葛城派は、今のAクラスという地位を守り、保守的に行こうという堅実な主張をした。二人のリーダーは互いに譲ることなく、放課後まで使つての話し合いは延長戦に足を踏み入れかけている。

この言い争いに、答えなんかはない。どちらかが折れるまで終わらない無為な物。

時計の針は18時を示そうとしている。

残り時間は一分程度といったところか。

「葛城くん、ここまでしておきませんか？ どのみち、平行線を辿るばかりでは無為な時間の浪費。後日、時間を改めてもう一度場を作りましょう」

坂柳はかれこれ二時間近く続いた論争に嫌気がやしていた。

二つの派閥があり、二人の支配者がいる。そして、その二人は互いに真逆の主張を行っている。

ならば、この論争で妥協案など出せる訳もなく、仮に坂柳の主張を通すというのなら、必ず葛城派の生徒たちは反抗するだろう。

どちらに付けば勝てる、という問題では無い。

彼ら、従う者にも思想がある。言うならば過激派と保守派だ。生来の平和主義者が、他人を貶めることを良しとするわけが無い。

これは根本的な問題だ。40人もの生徒がいる。彼らには彼らなりの考え方があろう。思想がある。主張がある。信念がある。

それを一人の支配者が変えてしまうなど、到底不可能に近い。

いずれ不満は溜まるものだ。そんな爆弾を抱えたままクラス間闘争を行うなど、悪手でしかない。かといって、二つの派閥に割れたままでは、それこそそのもの自体が弱点となる。

どうしたものか、と坂柳はため息を吐いた。

「確かにそうだ。俺たちは互いの主張のメリットデメリットを明確に提示できない。クラス間の争いがどういったものか、というのが把握出来ない以上、この論争は不毛だろう」

葛城も同様の考えを持っていたようだ。

二人のリーダーが同じ結論に至った以上、最早この場はお開きになる。

次の論争までに、明確なメリットを提示できる情報を用意しなければならぬと、両者の視線が交錯する。

そして、時計の針は18時を指し示した。

同時に、とある机の上に置かれた端末からアラームがけたたましく鳴り響いた。

「——なんだ？ 端末はマナーモードにしておくよう伝えた筈だが」

葛城が音の方向に視線を向けた。

坂柳は、葛城と同時にその端末の持ち主が誰であるのか理解した。

神室真澄だ。

「——時間です」

「何を?」

神室が席を立つと同時に、教室の扉が開いた。

「——は?」

「おい、なんだよ」

「何が起きて?」

教室に足を踏み入れたのは三人の生徒だった。

彼らはそのまま教壇まで歩くと、直立したまま動かなくなる。

その姿は、まるで従者のようで——、

「おい！　ここはAクラスだぞ！」

「他クラスの奴らが何しに来たんだ！」

Aクラスの生徒は一瞬何が起きているのか分からず呆然としていたが、一人二人と、三人の他クラスの生徒の糾弾を始めた。

最早、葛城と坂柳にも状況が理解出来ていなかった。

しかし、この状況を作り出した生徒が誰かは知っている。

「神室さん、一体何をしようと――」

二人が視線を向けると同時に神室も教壇へと歩み寄ると、他クラスの三人と同じく直立したまま動かなくなる。

この時、葛城は思い至ってはいなかったが、坂柳は一つの懸念を抱いていた。

それは自分は人の上に立つ人間である、つまり支配者であると自負する坂柳しか持たないシンパシーのようなものだ。

入学式の日、行われた自己紹介が脳裏に蘇る。

あの日、坂柳が目を付けた生徒は二人いたのだ。

一人は坂柳の対抗馬、葛城康平。そして彼女の予想は正しく、今は敵対派閥のリーダーとして君臨している。

もう一人は不可思議な存在だった。

喧騒に包まれた教室内で、もう一つ動きがあつた。

一人の生徒が、ゆっくりとした足取りで教壇に向かつていくのだ。

ああ、そうだこの生徒がそのもう一人だ。

あの日以来、特にその存在を主張することなく静かに佇んでいた男子生徒。ただ、その容姿の美麗さから度々話題に挙がっていた、曰くイケメン男子。

坂柳と同じ存在。同じ匂いを放つ者。

「——全員、席に着け」

教壇に立つとその男子生徒は静かに、そして威圧的な声音でそう言った。

席を立っていた葛城が、腰が抜けたように席に着く。その光景を見てしまった坂柳はようやく理解した。

葛城康平がリーダーというのなら、坂柳有栖は支配者だった。それは生来の気質からくるものだろう。

葛城は村長であるならば、坂柳はその土地の支配権を持つ領主だ。しかし、領主すらも支配してしまう者がいる。

葛城は理解してしまつたのだ。自分では到底及ばない存在がいることを。

そして、坂柳もまた——

「——二度言わせるな、席に着け」

誰が予期しただろうか。
この状況を。

——三上士郎という絶対君主の存在を。

／＼
4

「ようやく静かになったな。あまり手間を取らせてくれるな、お前たちにAクラスの自負があるのならば」

三上士郎はそう言い放つと、教室全体を一瞥する。

その視線はAクラスの生徒一人一人の顔を脳裏に焼きつけるように、ゆつくりと丁寧に移り変わる。

あまりの異様な光景に、視線を向けられた生徒は肩をびくつかせた。

「さて、質問があるだろうが、生憎全員の質問に答えるほど俺は暇では無い。代表して二人の生徒に質問を行ってもらおう。まずは葛城、お前からだ」

「——ああ、そう、だな。では一つ目の質問だ。??三上、お前の後ろの生徒たちは何だ？ 神室はまだしも、なぜ他クラスの生徒がここにいる？」

「答えよう。彼らは俺の、三上士郎の賛同者だ。紹介させてもらう。まずは左からBク

ラス、姫野ユキ。Cクラス、椎名ひより。Dクラス綾小路清隆だ。神室は全員知っているだろう。この場にいる理由は、各クラスの代表としてこの場にいる為だ。厳密に言えば、Aクラス以外の3クラスが俺に賛同しているという証明になるからだ。??安心しろ、彼らがこの教室内で言葉を発することは無い」

葛城の質問に対し、三上は厳格に答えた。

その一挙一動に、全ての者の視線が奪われる。

あれほど騒がしかったというのに、今は葛城と三上の声しか聞こえなくなっていた。誰しもが、言葉を発することすら出来ない程に三上士郎の存在に萎縮してしまっていたのだ。

不意に三上の視線が坂柳に向けられる。

その吸い込まれるような瞳に、坂柳の肩が揺れた。

「次は坂柳の番だ。葛城と坂柳の二人から交互に質問を受け付ける。他の生徒は言葉を発することを許さない。さて、質問はあるか坂柳有栖」

「——聞きたいことは、山ほどありますが??三上くん、Aクラス以外の3クラスが貴方に賛同しているとの事です、貴方は一体何をしようとしているのでしょうか?」

「答えよう。だが、その質問に答えるには、お前たちの疑問をひとつ解決しなければならぬ。お前たちが耳にしているCPについての噂は本当だ。そして、それを流したのは

俺だ」

三上の言葉一つ一つに重みがあった。

まるで上から押さえつけられているような、絶対君主が放つ重圧に全員が、坂柳さえもが、跪きたい衝動に駆られる。

「情報を流してから様子を見ていたが、お前たちは本当に愚かだな。他クラスが行動を移している中、内輪で揉めていた。だから、他クラスに目が向かない。既にBクラス、Cクラス、Dクラスは行動を完了したぞ。そして、結論も出した。彼らは俺に従い、全員がAクラスとしての特権を得ることに賛同した」

「ま、待つてください。一体何を言つて——」

「クラスの移動に必要なP tは2000万P t。3年後に全員がAクラスとして卒業する」

「現実的ではありません！ そんなこと、不可能ですつ」

「それを決めるのはお前では無い坂柳有栖。そして、質問以外の発言を許した記憶もない」

「——つもう、しわけありません。発言を慎みます」

坂柳は焦燥していた。

もし、三上の発言が真実であるのならば、クラス間闘争すら起きない可能性がある。

まず現実的な案とは到底思えないが、三上にはそれが可能だと思わせるカリスマ性があつた。

このままでは、坂柳は支配者として君臨することも、己を思想を証明することさえも、出来なくなってしまう。

本来なら坂柳は三上の発言を冷笑し、鼻で笑い飛ばしただろう。いや、この話を聞くことも無く教室を出ていたかもしれない。

ただ、それは出来ない。

何故なら、Aクラス以外の生徒、つまり120人いる生徒が全て敵に回るかもしれないからだ。

先程、三上が言い放ったクラス間の移動が2000万Ptで可能ならば、他者をDクラスに落とすこともPtで実現出来るということ、引いては退学すらも視野に入れなければならぬ。

ああ、彼が様子を見ていた理由がわかった。

直ぐにAクラスを支配しなかったのは、徹底的に坂柳という一個人を封じ込めるためだ。

葛城がこの案に賛同することは目に見えて分かる。と、すれば三上にとって敵対するであろう坂柳派だけを封じ込めてしまえばいいのだ。

クラスを二分するとはいったが、実際の所、全員がいずれかの派閥に入っている訳では無い。

そして、寧ろ現状では葛城派が16人、坂柳派が11人と葛城の支持者の方が多かった。そして中立である残りの三上を除いた12人は確実に三上を賛同する。

つまり、最早この場は三上とその賛同者である149人と、坂柳派11人の戦いになってしまっている。

ああ、初めから坂柳に対抗する手段は無かった。

彼は、三上士郎は既に勝っていた。

舞台に立つこともなく、坂柳に勝利していた。

支配者として坂柳有栖は、三上に勝てない。格が違ったのだ。

いや、まだだ。

支配者として坂柳は三上に到底及ばない。

だが、一人の天才としてはまだ不明瞭だ。

坂柳有栖が個人で三上に勝利すれば、なんの問題も無い。

坂柳こそが本物の天才であると証明するしか、残された道は無い。

「葛城、お前の番だ」

「あ、ああ。俺は全面的に三上の計画に賛同するつもりだ。だが、坂柳と同じで到底実現

可能なものとは思わない。単純計算で24億Ptが必要なはずだが、一体どうするつもりなのか教えて欲しい」

「答えよう。まず必要な前提が——」

退路は絶たれた。

最早、坂柳には進むしか方法は無い。

今に見ている絶対君主。

坂柳有栖こそが本物の天才であると証明してやろう。

／5

「流石ですつ士郎くん！ 見て下さい神室さん、あの綾小路くと互角に、いや互角以上に渡り合ってます！」

「はいはい。いつものことですよ」

坂柳が興奮した様子で神室の肩を揺らしていたが、軽く流されていた。出会ったばかりの坂柳とは思えない姿だな。

あの時はまだ士郎に対して敵対的で、何かと勝負を挑んでいたが負ける度に目が死んでいるのを見た時は流石に心配したぞ。

最後ら辺は泣きながら勝負を挑んでいたからな。

「て、てめえらいつも、こん、なことし、てんの、か？ 正気じゃ、ねえ」

龍園が途切れ途切れにそう零した。

その声音には恐れのようなものがある。失礼だな、オレたちをバケモノみたいに言うな。

オレ、士郎、龍園、アルベルトの4人は今、筋力トレーニングを行っていた。アルベルトも龍園もそれなりに身体能力に自信があったみたいだが、オレと士郎がやっているトレーニングを実際にやってみて、もうダウンしそうになっていた。

「嘆かわしいな龍園、もう音を上げたのか？」

士郎が余裕そうな表情でそう笑った。生徒会として職務を全うする時は厳格な態度をとってはいるが、士郎も高校生。こうしてプライベートな場面だとよく笑ったり、オレと共にふざけることもある。

因みにオレたちは今、逆立ちをして腕立てをしている。俗にいうところの逆立ち腕立て伏せだ。なかなか全身を効率よく鍛えることが出来るため、オレと士郎も重宝する筋トレである。

龍園は初めての試みである為、まずは逆立ちを維持し続ける。アルベルトはオレたち同様に逆立ち腕立て伏せを行っているが、オレと士郎は少し違う。オレたちは重りをつ

けた上でやっているのだ。

「このトレーニングはかなりキツイが、実に効率的なトレーニングだ。体重が重くなればなるほど、負荷がかかる。つまり筋肉をつけて重くなる分、更に負荷がかかるようになってる」

「——Crazy」

「あの、アルベルトが、こう言っただ、よ。イカれ、てるぜ、テメエ、ら二人はよ」
アルベルトはもう腕がプルプルと震え、全身の汗が水溜まりを作っていた。

「——時間です」

オレたちの傍でタイマーを持ったまま立っていたひよりがそう言うのと、途端に龍園とアルベルトが崩れ落ちた。

龍園は立ち上がれない様子だが、少し余裕そうだ。アルベルトの方はもう過呼吸を起こしかねないくらい大きく呼吸をしていた。何だか可哀想だな。

「さて、何回だった？」

「士郎くんが312回、清隆くんが298回です。二人とも一か月前より十回も増えています。凄いですね」

「そ、そりゃ、毎日こんな頭おかしいとやってたら増えるだろう、が」

肩で息をしている龍園に伊吹がタオルを投げ捨てていた。仰向けの龍園の顔面に白

いタオルが叩きつけられる。

「ぐつ、伊吹テメエ」

「日頃の行い」

因みにこの場には他にも石崎や佐藤がいる。石崎は二分前にぶつ倒れて起き上がれていない。流石に休憩無しでトレーニングをしたのは間違いだつたな。オレと士郎のペース配分じゃ、他の3人にはキツかつたようだ。

「す、凄いな綾小路くん！ かっこよかつたよ！」

「ああ、ありがとう佐藤」

駆け寄ってきた佐藤からタオルを受け取る。

ふと横を見ると、士郎に坂柳が駆け寄っていた。甲斐甲斐しく汗をタオルで吹いているが、士郎は少し鬱陶しそつだつた。

あ、神室に引き離された。

「清隆くん、お水です」

神室に抱えられて首根つこを掴まれた猫のようになつた坂柳を横目に、ひよりがトコトコと水の入つたボトルを両手に抱いて駆け寄つてくる。

「助かる」

「いえ、私は見ていることしか出来ないのです。友人として出来ることはこうして、補助的

なことだけですから」

「いや、ひよりはよくやってくれていると思うぞ」

「そうでしょうか？ 少しでも清隆くんと士郎くんの助けになれば、私としても嬉しいですね」

「そう言つて照れ臭そうに微笑むひよりを見て、オレも自然と口角を上げていた。
「むーずるいなあ」

隣で佐藤が頬を膨らませて不満げにオレとひよりを見ていた。

「何がだ？」

「わ、私も名前で呼んで？」

「別に構わないが、麻耶の方こそいいのか？」

「あ、おつ、あ」

名前で呼ぶと麻耶は顔を真っ赤にして俯いてしまった。

うーん、ダメだな。オレも随分と士郎に影響されているらしい。あの場所にいた頃は、こんなプレイボーイのようなセリフを言うことは無かつただろう。

「どうした？ 真っ赤だぞ？」

「ず、ずるいよっ！」

ポコスカと麻耶に殴られながら、オレは笑っていた。

こうして、自然に笑うことが出来るようになったのは、士郎のおかげだ。いや、士郎だけじゃないオレと関わってくれている友人たちのおかげだろう。

ホワイトルームでは教わる人がない人との関係性。

友人と過ごす時間は、勝ち負けなんかどうでもよくしてくれた。あと、2年ほどの猶予しかオレには残されてはいないが、この学校に来て本当に良かったと思える。

こんな高校生活も悪くは無い。

「よし、そろそろいいだろう」

士郎がそう言いながらオレに手を伸ばした。

「そうだな」

その差し伸べられた手を取ると、オレは立ち上がる。オレと士郎は視線を合わせ、笑った。

「龍園、アルベルトいつまで寝ている。石崎をたたき起こしたらもうワンセットだ」

「——バカかお前ら！ 死ぬぞ！ 見ろ、アルベルトが痙攣しだした！」

そんな龍園の悲痛な悲鳴がトレーニングルームに響いた。